

# 松崎地区内陸工業用地造成整備事業 埋蔵文化財調査報告書 3

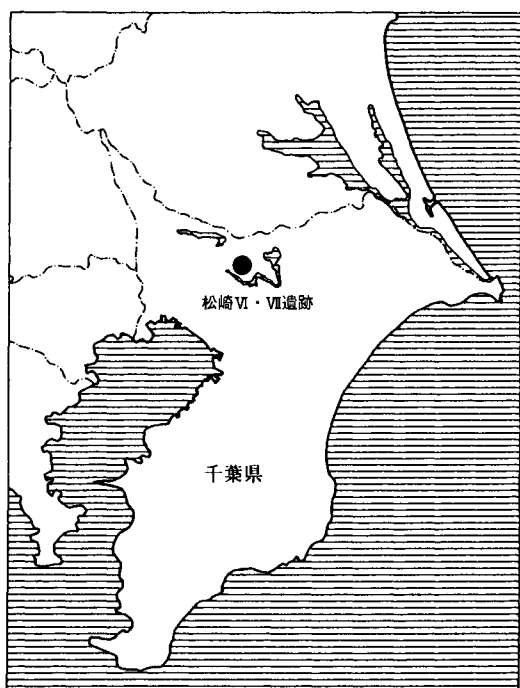
—印西市松崎VI遺跡・松崎VII遺跡—

平成16年3月

千葉県企業庁  
財団法人 千葉県文化財センター

# 松崎地区内陸工業用地造成整備事業 埋蔵文化財調査報告書 3

いんざい まつざき まつざき  
—印西市松崎VI遺跡・松崎VII遺跡—



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第487集として、千葉県企業庁の松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴って実施した印西市松崎Ⅵ・Ⅶ遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器、縄文時代の土器及び石器を初め、奈良・平安時代の集落が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

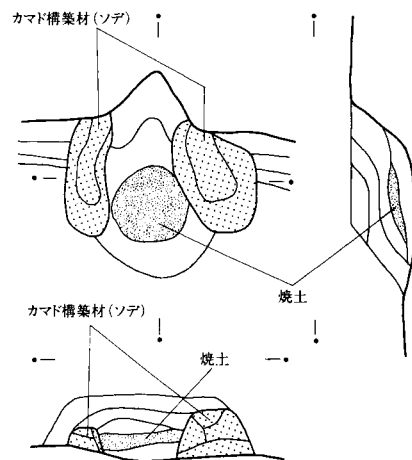
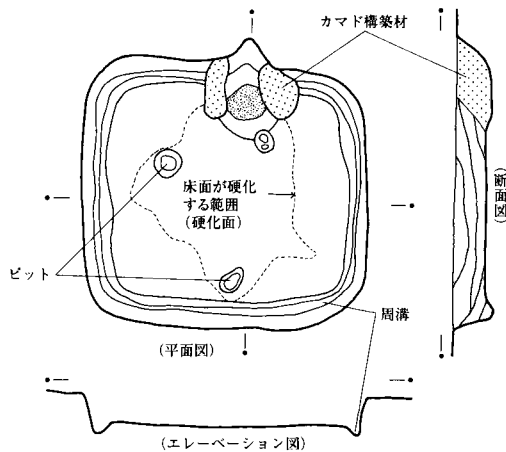
終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年3月25日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水新次

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県企業庁による松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第3集である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。  
松崎VI遺跡 千葉県印西市松崎字高野1 1 8 9 - 3ほか(遺跡コード327-004)  
松崎VII遺跡 千葉県印西市草深字松崎前3 3 1 - 2ほか(遺跡コード327-005)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、上席研究員矢本節朗が各章の石器に関する部分、研究員小笠原永隆がその他の部分及び編集を担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、印西市教育委員会、千葉県企業庁の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。  
第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「小林」(N1-54-19-14-1)、「白井」(N1-54-19-14-3)  
第1・6・7・67図 千葉県企業庁印西建設事務所作成 1/500 松崎地区地形図
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成元年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて、調査時の旧公共座標(国家標準直角座標第Ⅸ系)に基づく北である。
- 10 本書で使用した遺構番号は、調査時の番号を第1章第1節の第1表に示すように変更した。
- 11 遺物の色調及び松崎VII遺跡の土壌層位学的記載については、農林水産省・(財)日本色彩研究所監修、日本色研事業株式会社 2001『新版 標準土色帖』掲載の用語・記号を使用した。
- 12 挿図に使用したスクリーンパターン等の用例は、次のとおりである。なお、記号については本文中に記載した。





# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	4
1 遺跡の位置と環境	4
2 松崎遺跡群と周辺の遺跡	4
第2章 松崎VI遺跡	8
第1節 概要	8
第2節 旧石器時代	12
第3節 縄文時代	42
第4節 奈良・平安時代	73
第5節 中・近世	95
第3章 松崎VII遺跡	101
第1節 概要	101
第2節 遺構と出土遺物	103
第4章 まとめ	113
第1節 松崎VI遺跡	113
第2節 松崎VII遺跡	115
報告書抄録	巻末

# 挿図目次

第1図 松崎遺跡群全体図	2	第10図 第1ブロック母岩別分布	13
第2図 グリッド名称と分割方法	3	第11図 第1ブロック出土石器	14
第3図 松崎VI・VII遺跡の位置と周辺の遺跡 (松崎VI遺跡)	6	第12図 第2ブロック器種別分布	15
第4図 下層確認グリッド配置・本調査範囲	8	第13図 第2～4ブロック母岩別分布	16
第5図 上層確認トレンチ配置・本調査範囲	8	第14図 第2ブロック出土石器1	17
第6図 下層石器集中心地点分布	10	第15図 第2ブロック出土石器2	18
第7図 上層遺構配置	11	第16図 第2ブロック出土石器3	19
第8図 第I文化層ブロック分布	12	第17図 第3ブロック器種別分布	21
第9図 第1ブロック器種別分布	13	第18図 第3ブロック出土石器	22
		第19図 第4ブロック器種別分布	23

第20図	第4ブロック出土石器1	24	第49図	縄文時代石器(4)	72
第21図	第4ブロック出土石器2	25	第50図	奈良・平安時代竪穴住居跡(1)	73
第22図	第5ブロック器種別分布	27	第51図	奈良・平安時代竪穴住居跡(2)	75
第23図	第5ブロック母岩別分布	28	第52図	奈良・平安時代竪穴住居跡(3)	76
第24図	第5ブロック出土石器	29	第53図	奈良・平安時代竪穴住居跡(4)	78
第25図	第6ブロック器種別分布	30	第54図	奈良・平安時代竪穴住居跡(5)	79
第26図	第6ブロック出土石器	31	第55図	奈良・平安時代竪穴住居跡(6)	80
第27図	単独出土地点分布	33	第56図	奈良・平安時代竪穴住居跡(7)	82
第28図	単独出土石器	34	第57図	奈良・平安時代竪穴住居跡(8)	83
第29図	SX001	44	第58図	奈良・平安時代竪穴住居跡(9)	84
第30図	SK001・SK002	46	第59図	奈良・平安時代竪穴住居跡(10)	86
第31図	遺構外出土縄文土器(1)	48	第60図	奈良・平安時代竪穴住居跡(11)	87
第32図	遺構外出土縄文土器(2)	49	第61図	奈良・平安時代竪穴住居跡(12)	88
第33図	遺構外出土縄文土器(3)	50	第62図	奈良・平安時代竪穴住居跡(13)	89
第34図	遺構外出土縄文土器(4)	51	第63図	奈良・平安時代竪穴住居跡(14)	90
第35図	遺構外出土縄文土器(5)	53	第64図	中・近世の遺構(1)	96
第36図	遺構外出土縄文土器(6)	54	第65図	中・近世の遺構(2)	98
第37図	遺構外出土縄文土器(7)	56	第66図	その他の遺物	99
第38図	遺構外出土縄文土器(8)	57		(松崎VII遺跡)	
第39図	遺構外出土縄文土器(9)	58	第67図	松崎VII遺跡調査範囲及び確認調査状況	100
第40図	遺構外出土縄文土器(10)	60	第68図	平成13年度調査状況及び遺構配置図	102
第41図	遺構外出土縄文土器(11)	61	第69図	SK001A・B・C	105
第42図	遺構外出土縄文土器(12)	62	第70図	SK001(出土遺物), SK004	106
第43図	遺構外出土縄文土器(13)	63	第71図	SK002A・B, SK003, SK005	107
第44図	遺構外出土縄文土器(14)	64	第72図	遺構外出土縄文土器(1)	108
第45図	遺構外出土土製品	67	第73図	遺構外出土縄文土器(2)・土製品	110
第46図	縄文時代石器(1)	68	第74図	縄文時代石器(1)	111
第47図	縄文時代石器(2)	70	第75図	縄文時代石器(2)	112
第48図	縄文時代石器(3)	71			

## 表 目 次

第1表	遺構番号新旧対照表	3	第4表	第2ブロック石器属性表	35
	(松崎VI遺跡遺跡)		第5表	第2ブロック組成表	36
第2表	第1ブロック石器属性表	35	第6表	第3ブロック石器属性表	36
第3表	第1ブロック組成表	35	第7表	第3ブロック組成表	38

第8表	第4ブロック石器属性表	38	第15表	未掲載縄文土器集計表	65
第9表	第4ブロック組成表	39	第16表	縄文時代石器属性表	72
第10表	第5ブロック石器属性表	39	第17表	奈良・平安時代土器属性表	91
第11表	第5ブロック組成表	40		(松崎VII遺跡)	
第12表	第6ブロック石器属性表	40	第18表	未掲載縄文土器集計表	109
第13表	第6ブロック組成表	40	第19表	縄文時代石器属性表	112
第14表	単独出土石器属性表	41			

## 図版目次

図版1	遺跡周辺の空中写真 (松崎VI遺跡)	図版24	遺構外出土縄文土器(6)
図版2	調査前状況・下層調査状況・旧石器時代 石器出土状況	図版25	遺構外出土縄文土器(7)
図版3	S I 001・S I 002・S I 003	図版26	遺構外出土縄文土器(8)
図版4	S I 004・S I 005・S I 007	図版27	遺構外出土縄文土器(9-1)
図版5	S I 006・S I 008	図版28	遺構外出土縄文土器(9-2)
図版6	S I 009・S I 010・S I 011	図版29	遺構外出土縄文土器(10)
図版7	S X 001	図版30	遺構外出土縄文土器(11)
図版8	S K 003・S K 006・S K 005	図版31	遺構外出土縄文土器(8・10・12・13)
図版9	土坑等	図版32	遺構外出土縄文土器(14)
図版10	S K 005・S K 010・S K 006 ・近世溝・調査風景	図版33	遺構外出土土製品
図版11	第1ブロック・第2ブロック1	図版34	縄文時代石器(1)
図版12	第2ブロック2	図版35	縄文時代石器(2)・石製品
図版13	第3ブロック・第4ブロック1	図版36	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器(1)
図版14	第4ブロック2・第5ブロック1	図版37	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器(2)
図版15	第5ブロック2・第6ブロック1	図版38	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器(3)
図版16	第6ブロック2・単独出土石器	図版39	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器(4)
図版17	縄文時代遺構内出土遺物	図版40	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器(5)
図版18	遺構外出土縄文土器(1-1)	図版41	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器(6)
図版19	遺構外出土縄文土器(1-2)	図版42	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器(7)
図版20	遺構外出土縄文土器(2)	図版43	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器(8)
図版21	遺構外出土縄文土器(3)	図版44	奈良・平安時代墨書土器 (松崎VII遺跡)
図版22	遺構外出土縄文土器(4)	図版45	調査前状況・確認調査状況・確認トレン チ遺物出土状況
図版23	遺構外出土縄文土器(5)	図版46	上層拡張区状況・遺構分布状況・S K 001 A・B・C

図版47 S K002A・B・S K003・S K005

図版48 下層確認調査状況・下層断面・埋め戻し状況

図版49 縄文時代遺構内出土遺物（1）

図版50 縄文時代遺構内出土遺物（2）

図版51 遺構外出土縄文土器（1）

図版52 遺構外出土縄文土器（2）・土製品

図版53 縄文時代石器

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要（第1・2図）

### 1 調査に至る経緯（第1図）

松崎地区内陸工業団地（松崎工業団地）は、都心から約35km、成田空港から約20km、千葉市から約20kmの距離にある千葉ニュータウンの市街地に隣接している。千葉ニュータウンは、北総広域都市圏における中核都市として昭和44年から整備が進められている。船橋市・印西市・白井市・本埜村及び印旛村の3市2村にまたがり、各種機能の複合した総合的都市づくりを目指しており、近接地には工場や研究所等の関連施設用地の整備も計画されている。

事業主体となる千葉県企業庁が開発に先立ち、千葉県教育委員会に埋蔵文化財の有無を照会したところ、用地内に遺跡の存在が確認され、関係機関により慎重な協議が行われた。その結果、用地内の遺跡については記録保存し、発掘調査を財団法人千葉県文化財センターが実施することとなった。調査は平成5年度に開始され、現在に至るまで継続して発掘調査及び整理作業が行われている。

松崎遺跡群は、調査の便宜上7地点に分割し、それぞれをⅠ遺跡～Ⅶ遺跡と呼称している。本報告では、そのうちⅥ遺跡及びⅦ遺跡を取り扱うこととした。

### 2 調査概要

#### (1) 調査区の設定（第2図）

松崎遺跡群全体（Ⅰ～Ⅶ遺跡、第1図）を対象として、公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づく40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドは、北西を起点として西から東に向かってA・B・C…、北から南に向かって1・2・3…とした。ただし、数字と紛らわしいⅠ・Ⅱ・Ⅴは使用しないこととした。大グリッド内は4m方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…とした。したがって、各々の小グリッドは、2C-50、3G-99などと呼称する。

#### (2) 遺構番号（第1表）

調査時点では1号住・2号住（または001号住・002号住）という名称を使用した。整理作業の段階で遺構種を示す記号を付した番号に変更した。遺構種の一覧を下に示す。ただし、異なる調査年度の間で、一部番号の重複が存在したため、一部で番号自体を変更している。旧番号：新番号の対照は第1表に示した。資料は可能な限り新番号に修正したが、現場調査時の記録類及び遺物の注記番号は旧番号である。

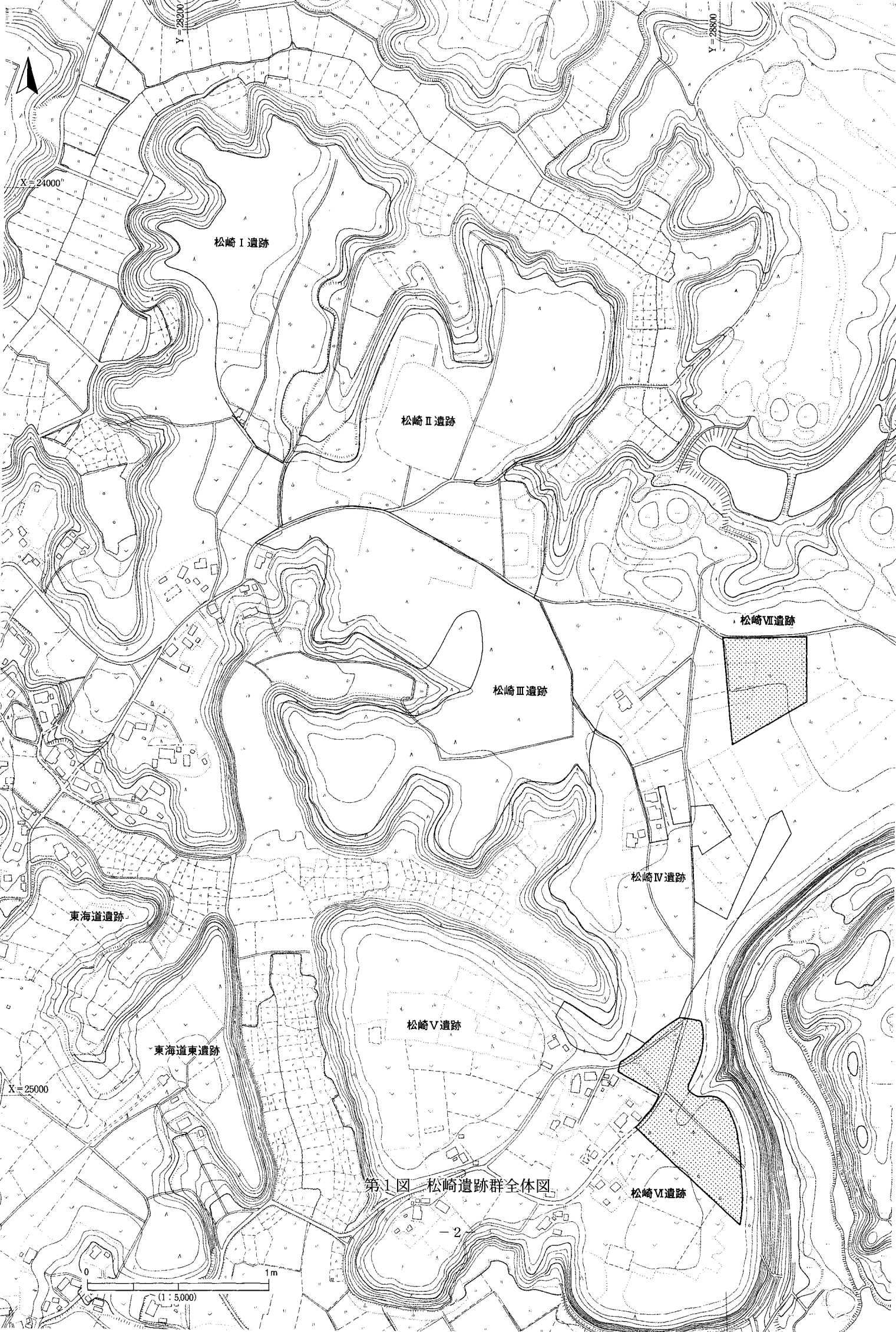
S I：竪穴住居跡    S K：土坑    S D：溝    S X：その他特殊遺構

#### (3) 発掘調査

上層確認調査は、調査対象範囲の10%を基本として確認トレンチを設定した。遺構や遺物集中の検出を目安として本調査の必要な範囲を確定し、本調査を実施した。

下層確認調査は、調査対象範囲に2m×2mの確認グリッドを調査対象面積の4%を基本として設定した。石器が出土した地点について周囲を拡張し、遺物集中の存否と広がりを確認した上で、本調査を要する範囲を確定し、本調査を実施した。

なお、今回報告するⅥ及びⅦ遺跡の発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当者及び作業内容は、第2章及び第3章に記した。



松崎I遺跡

松崎II遺跡

松崎VII遺跡

松崎III遺跡

松崎IV遺跡

東海道遺跡

東海道東遺跡

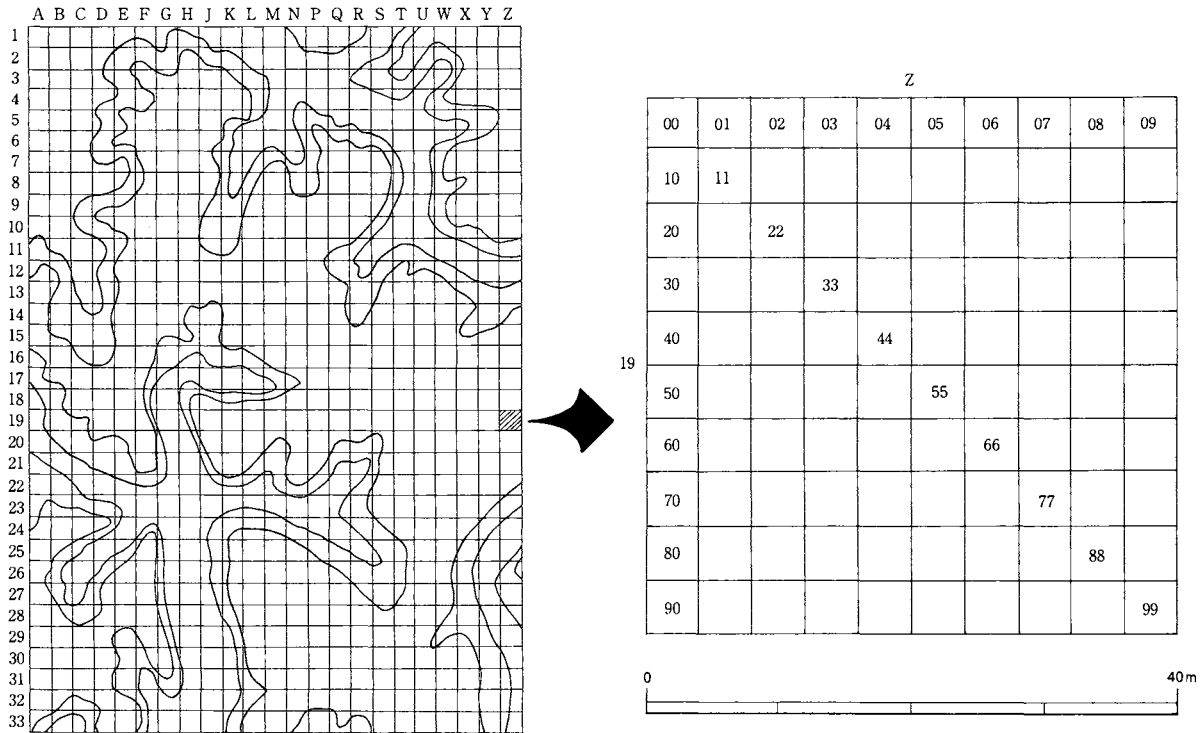
松崎V遺跡

松崎VI遺跡

第1図 松崎遺跡群全体図

-2-





第2図 グリッド名称と分割方法

第1表 遺構番号新旧対照表

松崎VI遺跡

新番号	旧番号	時期
SI 001	1号住	奈良・平安時代
SI 002	2号住	奈良・平安時代
SI 003	3号住	奈良・平安時代
SI 004	4号住	奈良・平安時代
SI 005	5号住	奈良・平安時代
SI 006	6号住	奈良・平安時代
SI 007	7号住	奈良・平安時代
SI 008	8号住	奈良・平安時代
SI 009	9号住	奈良・平安時代
SI 010	10号住	奈良・平安時代
SI 011	11号住	奈良・平安時代

新番号	旧番号	時期
SX 001	1号土坑	縄文時代中期
SK 001	SK021	縄文時代
SK 002	SK019	縄文時代中期
SK 003	1号土坑	中・近世
SK 004	7号土坑	中・近世
SK 005	4号土坑	中・近世
SK 006	3号土坑	中・近世
SK 007	2号土坑	中・近世
SK 008	5号土坑	中・近世
SK 009	8号土坑	中・近世
SK 010	10号土坑	中・近世

松崎VII遺跡

新番号	旧番号	時期
SK 001A	001A	縄文時代中期
SK 001B	001B	縄文時代中期
SK 001C	001C	縄文時代中期
SK 002A	002A	縄文時代中期

新番号	旧番号	時期
SK 002B	002B	縄文時代中期
SK 003	003	縄文時代中期
SK 004	004	縄文時代中期
SK 005	005	縄文時代中期

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と環境

松崎遺跡群の所在する印西市は、千葉県北部に広がる下総台地の北端に位置し、北側が利根川、東側～南側が印旛沼、西側が手賀沼にそれぞれ面している。松崎VI遺跡付近は印西市松崎字高野及び草深字南松崎前に、松崎VII遺跡付近は印西市草深字松崎前に、それぞれあたっている。

この付近の台地は、印旛沼の西端に繋がる新川から入り込んだ大字松崎付近の谷（松崎谷）によって開析されている。遺跡はこの谷の最奥部に面し、北側でもうひとつ西側の大字船尾付近の谷（船尾谷）の最奥部に面している。遺跡の付近は、印旛沼から小河川を若干遡った地点ということができる。台地上の標高は24m～26m、現水田面との比高差は13m～15mほどである。

### 2 松崎遺跡群と周辺の遺跡（第3図）

松崎VI・VII遺跡周辺では、旧石器時代から中・近世にかけての多くの遺跡が所在している。特に千葉ニュータウン開発関係の発掘調査が大規模に展開され、印西市及び周辺の遺跡の様相が徐々に解明されてきている。以下で、それらの成果をもとに、時代別に周辺の主な遺跡の状況を概観する。

旧石器時代の石器群は、松崎遺跡群の中では松崎I遺跡（1）の他に、II（2）・III（3）・IV（4）・VI（6）遺跡で検出され、複数の文化層が確認されている。特に、松崎II遺跡では、IX層の石器群が環状ブロックを呈する可能性があり、注目される。本遺跡に隣接する千葉ニュータウン内の調査でも多くの旧石器時代の遺跡が所在する。本遺跡と支谷を挟んで西側の台地上に所在する船尾白幡遺跡（12）では、II層からVII層にかけての石器群があり、II層の細石刃ブロックのまとまりがみられる。さらに西側に位置する向新田遺跡（17）では、第2黒色帯上部に属するブロックが検出されている。手賀沼水系と印旛沼水系の分水嶺には、木刈峠遺跡（30）や一本桜南遺跡（28）が位置する。木刈峠遺跡では、3枚の文化層に25ブロックに及ぶ石器群、一本桜南遺跡では、10層に及ぶ文化層に31ブロックの石器群が出土している。他に、泉北側第3遺跡（32）では環状ブロックが検出され、南西ヶ作遺跡（26）や六角遺跡（27）でも石器の出土が確認されている。新川を挟んだ八千代市おおびた遺跡（25）では、有舌尖頭器やナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると、比較的多くの遺跡が確認されている。松崎遺跡群の中では、早期の竪穴住居跡や炉穴とともに遺物包含層も比較的まとまって検出されている。周辺をみても、炉穴群と貝層が確認された船尾貝塚（11）をはじめ、早期の遺跡が多く確認されている。一本桜南遺跡では、竪穴住居跡3軒の他に炉穴16基などが調査され、特に撚糸文期から条痕文期にかけての竪穴住居跡は類例が少なく注目される。船尾白幡遺跡でも炉穴とともに撚糸文期から条痕文期にかけての遺物が多く出土している。他に宗甫北遺跡（34）で撚糸文期、船尾町田遺跡（13）で条痕文期の土器が認められる。八千代市側に目を向けると、栗谷遺跡（22）で炉穴22基、上谷遺跡（24）で炉穴31基が検出され、境堀遺跡（20）、向境遺跡（21）、役山東遺跡（23）等でやはり炉穴が確認されている。印旛村トヶ前遺跡（9）では、炉穴の他に条痕文土器を主体とした遺物を大量に含んだ包含層がみられる。前期の遺跡は少ないが、八千代仲ノ台遺跡で黒浜期の竪穴住居跡10軒、一本桜南遺跡で石器製作跡、宗甫北遺跡で関山期の炉が検出されている。中期以降についてもそれほど多くは見られない。阿玉台式期の土器を含む佐山貝塚（18）、加曾利E IからE IIの土器が検出された別所大山遺跡（33）、晩期と思われる土坑が確認された南西ヶ作遺跡などがある。他に戸神谷の低湿地から大量の加曾利B式土器が出土した西根遺跡（14）が注目される。





第3図 松崎VI・VII遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

八千代市

弥生時代から古墳時代前期では、弥生後期の遺跡が多く所在する。中期の遺跡としては田原窪遺跡(19)があげられる程度であるが、40数軒の竪穴住居跡を伴う環濠集落であり、注目される内容である。後期になると、松崎Ⅰ遺跡のように後期から古墳時代前期にかけて継続する集落が多くなるとともに、集落規模も大きくなる。向新田遺跡では竪穴住居跡83軒が検出され、北関東系や東海系の土器がみられる。船尾町田遺跡でも21軒の竪穴住居跡とともに、S字口縁や北陸系の土器が出土している。一本桜南遺跡では古墳時代前期のみ、60軒の竪穴住居跡が検出されている。なかでも砂鉄を保管したような状態で出土した壺の存在が注目される。他にも、鳴神山遺跡(15)、船尾白幡遺跡や八千代市栗谷遺跡、上谷遺跡、境堀遺跡など多くの遺跡でこの時期の遺構が確認されている。

古墳時代中期の遺跡はほとんど見る事ができない。後期になると集落や古墳などが点在するようになるが、発掘調査例は少ない。古墳の調査例としては、船尾町田遺跡がある。30m級の前方後円墳を含む3基の古墳が調査され、いずれも箱式石棺を埋葬施設とし、7世紀中頃の終末期古墳と想定されている。松山2号墳では、5体分の人骨が出土した切石積みの箱式石棺や、須恵器・鉄鏃などが確認され、6世紀後半から7世紀初頭までの年代が考えられている。

奈良・平安時代になると、大規模な集落が形成される例が多い。鳴神山遺跡では、竪穴住居跡202軒、掘立柱建物跡43棟などが調査されている。8世紀初頭に集落が形成され、10世紀前半に衰退するが、この中では、「弘仁九年…」の紀年銘墨書土器やムラの祭祀を示す長文墨書土器などを含む1,000点に及ぶ墨書・刻書土器が注目される。近くに所在する大規模な集落と多量の墨書土器が検出された船尾白幡遺跡や低地での祭祀を示すような遺構や墨書土器を出土した西根遺跡を含めて、この区域が古代船尾郷の中心的な集落を形成していると思われる。印旛沼低地を挟んだ南岸の台地上にも、上谷遺跡や栗谷遺跡など大規模な集落が所在する。

中・近世では、結縁寺塚群、大塚塚群、並塚塚群など塚の調査例がある。他に、白井谷奥遺跡(16)では墓域や地下式坑などが検出されている。船尾城跡(10)は白井城に付属する城あるいは砦とされ、中世陶磁器類が検出されている。

#### 参考文献

- 印旛郡市文化財センター 1992 『トヶ前遺跡発掘報告書』
- 印旛村教育委員会 1980 『吉田馬々台遺跡縄文早期炉穴址群の調査』
- 印旛村教育委員会 1988 『岩戸広台遺跡A地区・B地区発掘調査報告書』
- 大野康男 1991 『八千代市白幡前遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ—』千葉県文化財センター
- おおびた遺跡調査団 1975 『おおびた遺跡—八千代市少年自然の家建設地内遺跡』
- 小高春雄 1995 「千葉県における弥生時代後期土器の地域性について」『研究紀要16』千葉県文化財センター
- 加藤修司他 1984 『八千代市権現後遺跡』千葉県文化財センター
- 阪田正一・藤岡孝司 1986 『八千代市ヲサル山遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ—』千葉県文化財センター
- 佐藤克己 1978 『船尾城遺跡』八千代市遺跡調査会
- 佐藤克己他 1980 『阿蘇中学校東側遺跡』八千代市遺跡調査会
- 菰淳一 1998 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1—八千代市島田込ノ内遺跡—』千葉県文化財センター

- 鈴木道之助 1975 「木苜峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅲ』千葉県都市公社  
千葉県教育委員会 1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛・印旛地区(改訂版)－』  
千葉県教育委員会 1990 『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』  
千葉県文化財センター 1989 『房総考古学ライブラリー4 弥生時代』  
千葉県文化財センター 1992 『房総考古学ライブラリー6 古墳時代(2)』  
野村幸希・古内茂 1976 「船尾白幡遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅴ』千葉県文化財センター  
藤岡孝司 1986 『印旛沼南部地域における後期弥生時代集落の一形態―八千代市権現後・ヲサル山遺跡の分析―』『研究紀要10』千葉県文化財センター  
藤岡孝司 1986 『八千代市井戸向遺跡』千葉県文化財センター  
藤岡孝司 1987 『八千代市白幡前遺跡』千葉県文化財センター  
藤原 均他 1984 『阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』八千代市遺跡調査会  
古内 茂 1984 「船尾町田遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅷ』千葉県文化財センター  
八千代市史料編纂委員会 1974 「八千代の歴史」『八千代市史』  
八千代市教育委員会 1988 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和62年度』  
八千代市教育委員会 1995 『市内遺跡発掘調査報告 平成7年度』  
八千代市教育委員会 1987 『八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書』  
八千代市教育委員会 1994 『八千代市埋蔵文化財調査年報』  
藤 茂美 2001 『栗谷遺跡』八千代市遺跡調査会

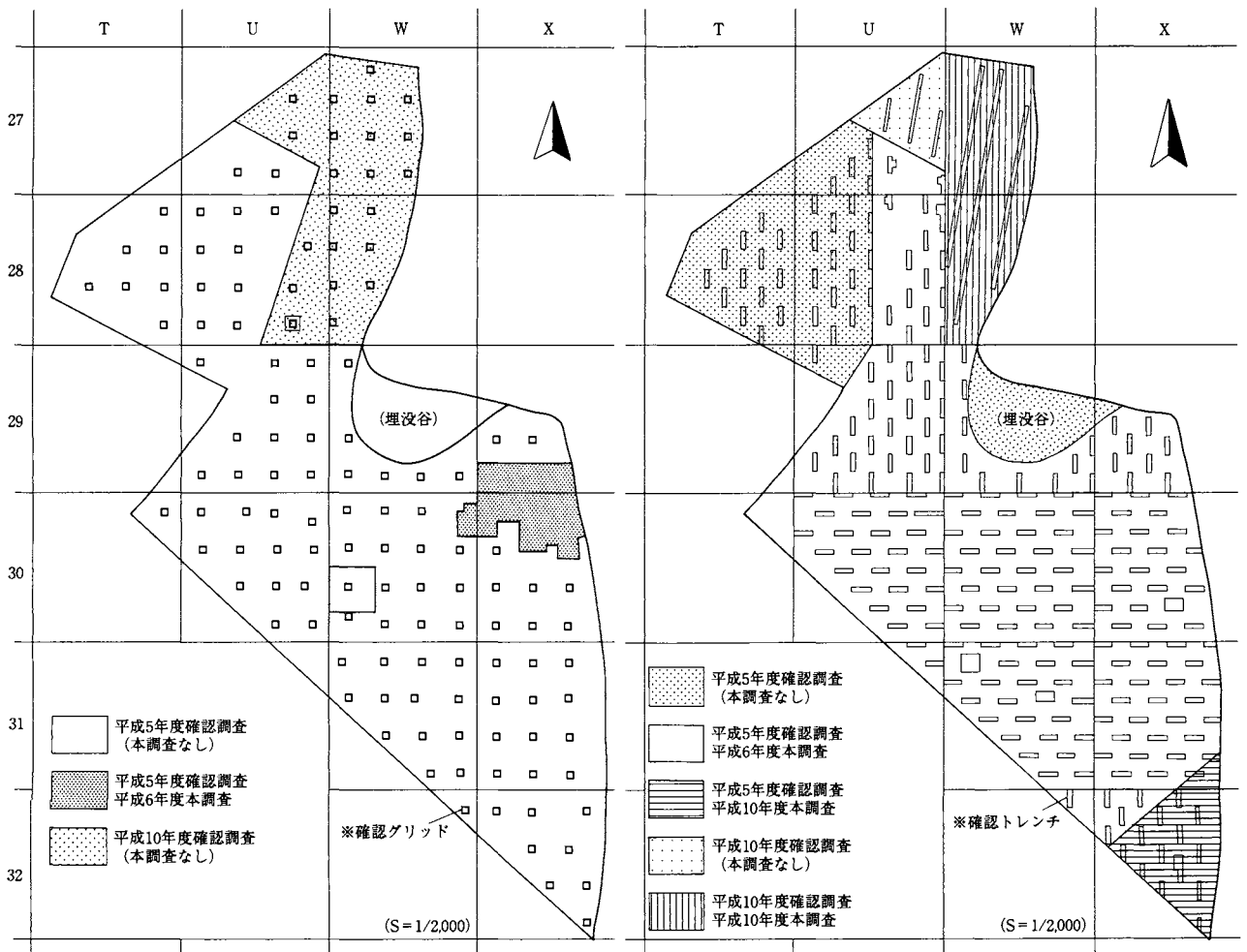
## 第2章 松崎VI遺跡

### 第1節 概要 (第4～7図)

松崎VI遺跡は、印西市松崎字高野1189-3ほかに所在し、松崎遺跡群のほぼ南端に位置している。東側が急斜面となって谷に面し、本遺跡の中央部付近から北東に向かって小支谷がのびている。この小支谷を除き、遺跡範囲内はほぼ平坦な台地となっている。

調査の結果、旧石器時代石器集中地点が6か所(第6図)、縄文時代中期の竪穴状遺構1基及び土坑2基、奈良・平安時代の竪穴住居跡11軒、中・近世の地下式坑2基、土坑5基、井戸跡1基が検出された(第7図)。また、遺跡のほぼ全域には縄文土器が散布し、少数ながら中・近世陶磁器の散布も認められた。また、29U～30Wグリッド付近に近世の所産と思われる溝状遺構が3条確認されている。

なお、調査は平成5年度、6年度及び10年度に(第4・5図)、整理作業は平成14年度及び15年度に行われた。発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当者及び作業内容は下記のとおりである。



第4図 下層確認グリッド配置・本調査範囲

第5図 上層確認トレンチ配置・本調査範囲

平成5年度

組 織：印西調査事務所（所長 田坂 浩）

（発掘調査）

期 間：平成5年7月19日～平成5年8月31日

内 容：確認調査 上層 13,300㎡のうち1,315㎡

下層 11,670㎡のうち464㎡

担当者：副所長 及川淳一

平成6年度

組 織：印西調査事務所（所長 谷 旬）

（発掘調査）

期 間：平成7年1月5日～平成7年3月29日

内 容：本調査 上層 9,470㎡

下層 930㎡

担当者：萱田分室長 蓼 淳一

平成10年度

組 織：北部調査事務所（所長 折原 繁）

（発掘調査）

期 間：平成10年10月1日～平成11年3月26日

内 容：確認調査 上層 3,700㎡のうち370㎡

下層 3,700㎡のうち180㎡

本調査 上層 3,250㎡

下層 0㎡

担当者：研究員 猪股昭喜・鈴木弘幸・竹田良男，主任技師 福田誠・落合章雄，技師 大内千年

平成14年度

組 織：北部調査事務所（所長 古内 茂）

（整理作業）

期 間：平成14年4月1日～平成15年3月31日

内 容：水洗・注記から原稿執筆の一部まで

担当者：上席研究員 矢本節朗，研究員 小笠原永隆

平成15年度

組 織：北部調査事務所（所長 古内 茂）

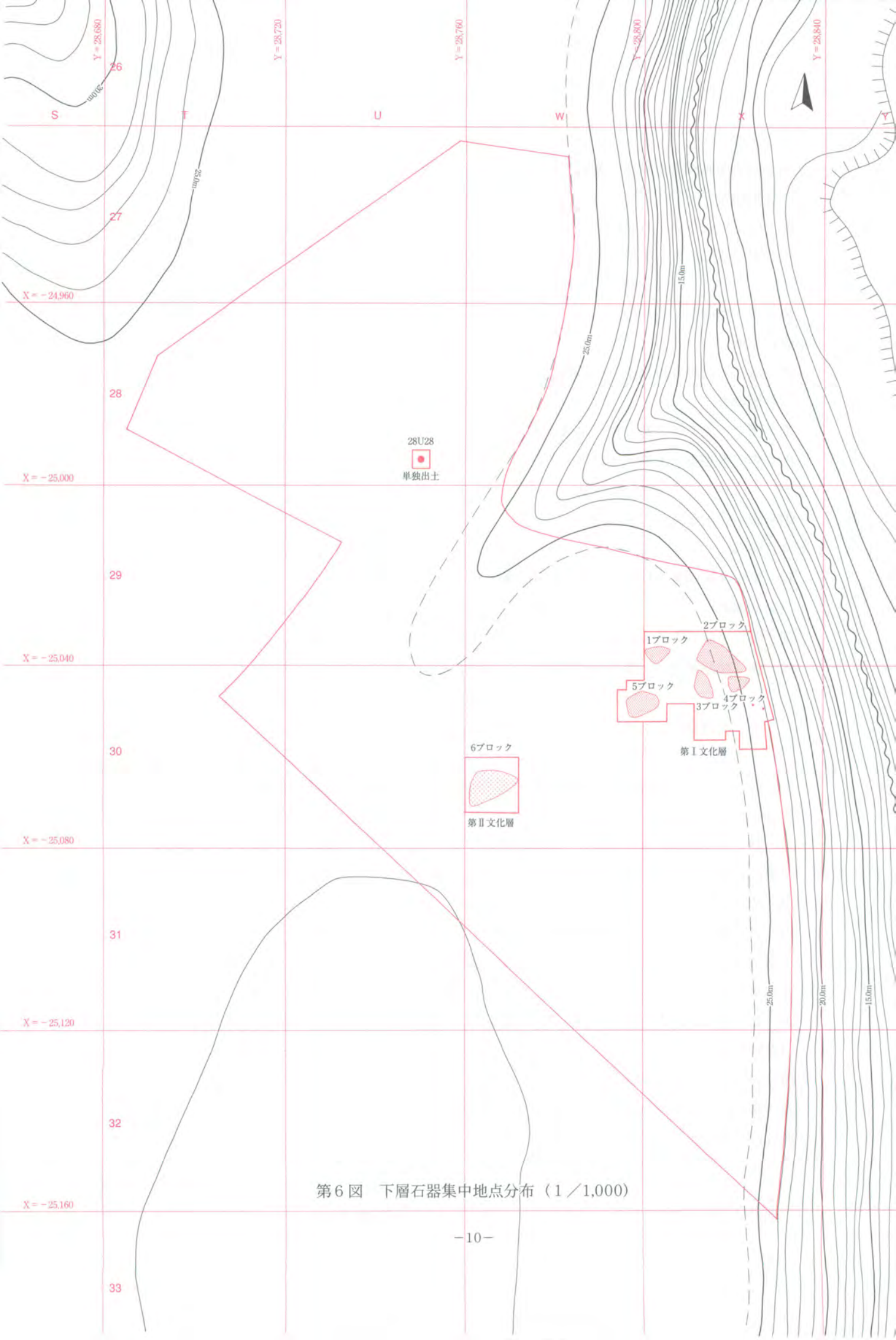
（整理作業）

期 間：平成15年4月1日～平成15年3月31日

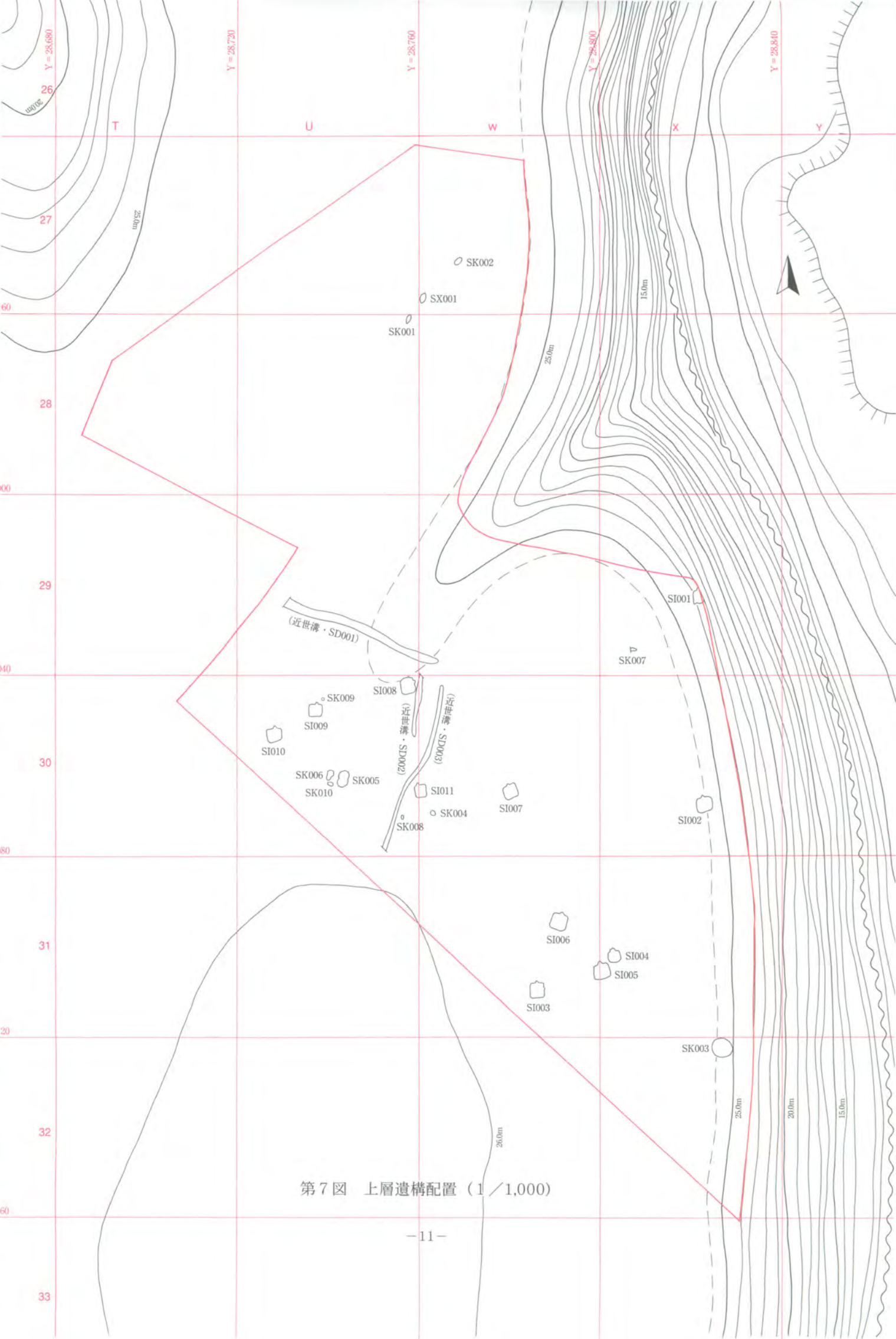
内 容：原稿執筆の一部から報告書刊行・移管整理

担当者：研究員 立和名明美・小笠原永隆





第6図 下層石器集中地点分布 (1/1,000)



第7図 上層遺構配置 (1/1,000)

## 第2節 旧石器時代

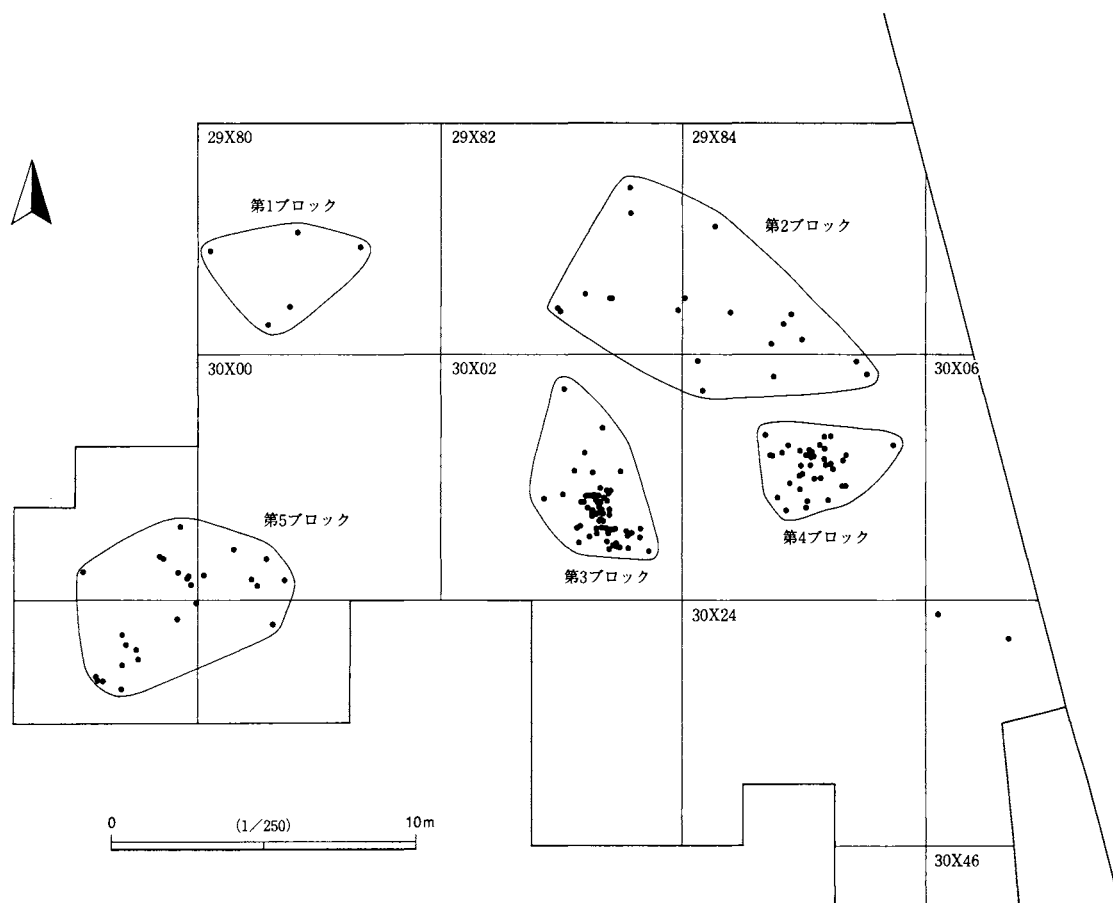
### 1 概要

松崎VI遺跡では、調査区東端の台地縁辺部で5か所の石器集中地点、中央やや南側で1か所の石器集中地点が検出された。東端の石器集中地点はまとめ、ブロック群を形成する（第6図）。東端のブロック群と中央南側の単独のブロックは出土層位が異なり2つの文化層を設定した。第I文化層は立川ローム層のIV・V層に産出層位があるもので東端のブロック群が該当し、第1ブロック～第5ブロックが帰属する。第II文化層はIIc層～III層上面に産出層位があるもので中央南側のブロックが該当し、第6ブロックが帰属する（第6図）。第II文化層は上層の調査に伴って検出され分布密度が薄く広域に分布している。第I文化層は黒色緻密質安山岩を主要石材として角錐状石器、幾何形小型ナイフ形石器等の器種が検出されている。第II文化層では珪質頁岩を主要石材として荒屋型彫器・石核等が検出されている。さらに、単独出土のものが2か所、その他に上層調査の過程で出土した旧石器時代石器が少数検出されている。

### 2 第I文化層

(1) 第1ブロック（第8～11図，第2・3表，図版11）

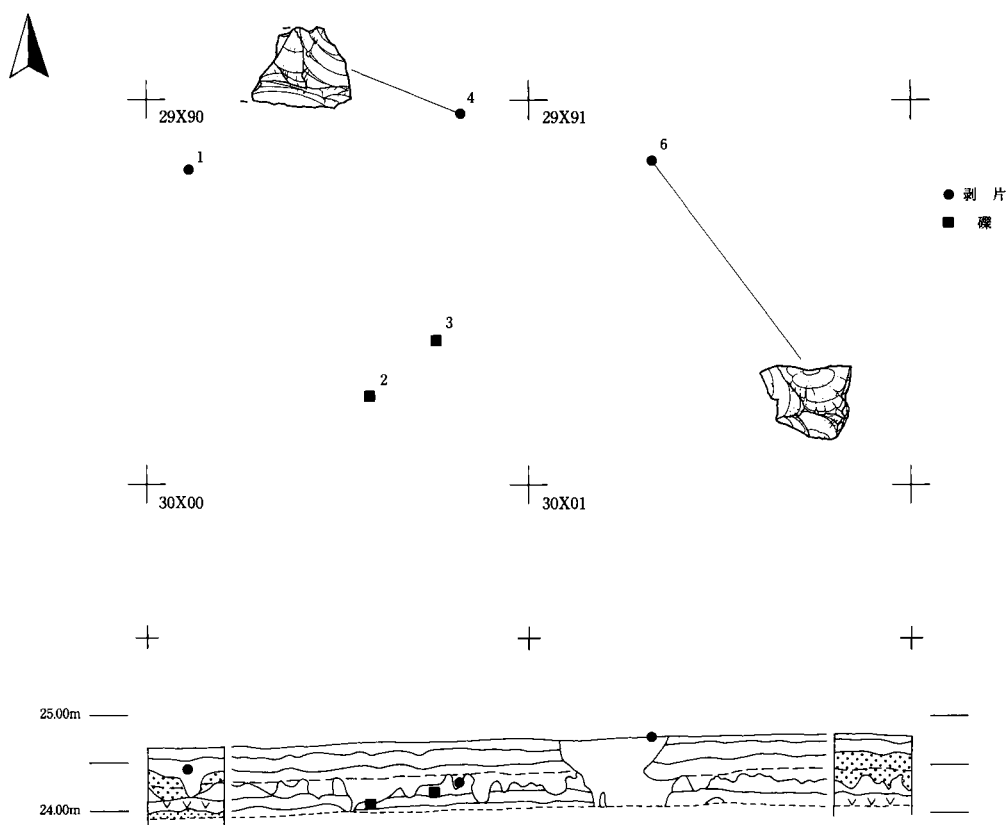
**分布状況** ブロック群の北西端に分布するブロックである。調査区の東側に南北に開析された支谷に面した台地肩部の東側縁辺部に当たる。現況では立川ローム層の堆積は東側に緩やかに傾斜する。東側に第2ブロック，南東側に第3ブロック，南側に第5ブロックがやや離れて分布する。



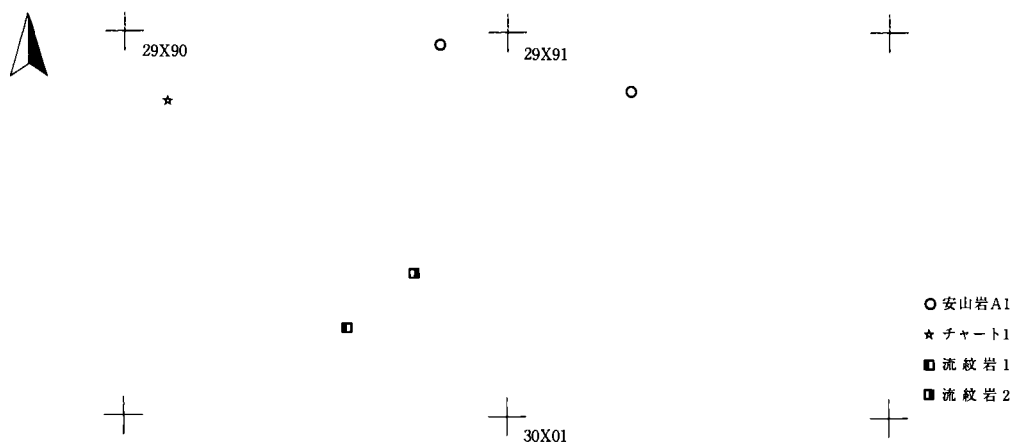
第8図 第I文化層ブロック分布



遺物総数は6点であり小規模のブロックとなっている。その分布は散漫に分布し、数10cm～約3mの間隔をおいて散在している。29X90・91区にかけて分布する。分布範囲は南北3.0m、東西4.9mを測る。垂直分布では約0.8mの高低差がある。土層断面の投影ではVI層からIIb層にかけて分布し、IV・V層に出土レベルがやや集中する。



第9図 第1ブロック器種別分布

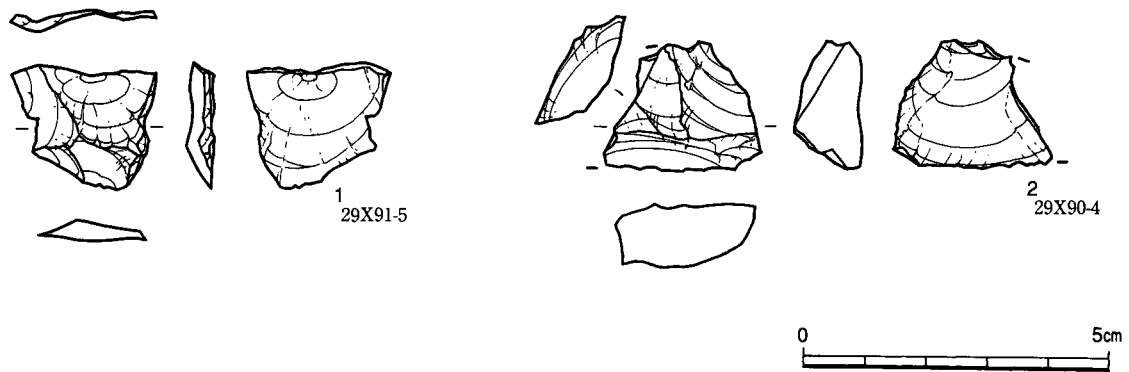


第10図 第1ブロック母岩別分布

**母岩別資料** 5母岩が認められる。流紋岩3母岩3点，黒色緻密質安山岩（以下，安山岩Aと略称する）1母岩2点，チャート1母岩1点である。流紋岩はそれぞれ焼成を受けた小礫の単独母岩であるが，礫群は構成しない。安山岩A1の母岩以外はブロック内で単独母岩となっており，安山岩A1はブロックの北東側に分布する。

**出土遺物** 少数で構成されるブロックであり特徴的な利器は出土しておらず，剥片3点，礫3点が出土している。

**剥片** 1・2は剥片である。2点とも安山岩A1の同一母岩である。1・2共に横長剥片であり，1は幅広の平坦打面を持ち端部が細くなる。2は打面を欠損し下端部が逆扇状に広がる。背面構成は1は多方向からの剥離痕が見られ，2は上下両端方向からの剥離痕が観察される。



第11図 第1ブロック出土石器

(2) 第2ブロック (第8・12~16図，第4・5表，図版11・12)

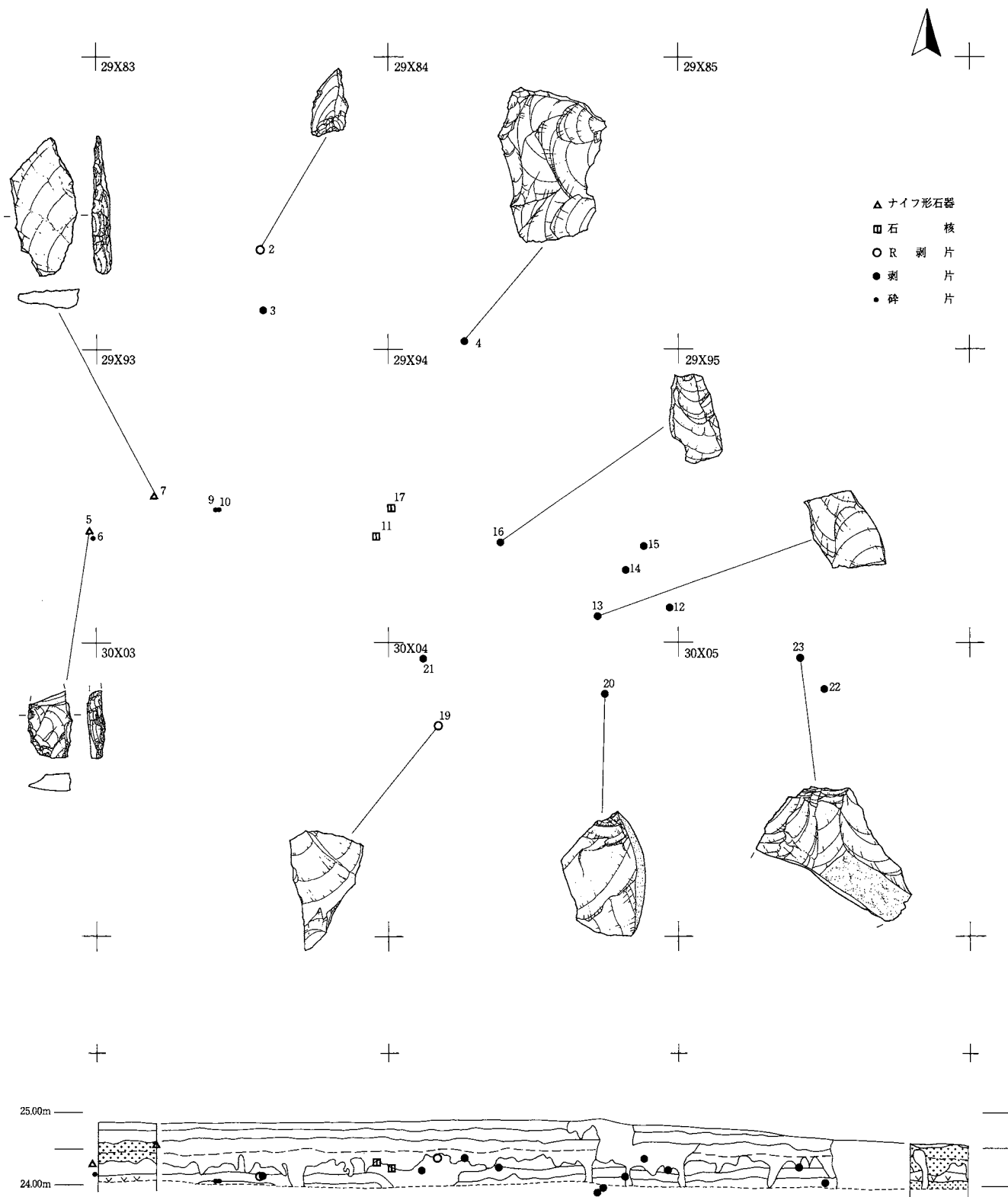
**分布状況** ブロック群の北東端に分布するブロックである。現況では，立川ローム層の堆積は東側に緩やかに傾斜する。西側にやや離れて第1ブロック，南側に近接して第3ブロック，第4ブロックが分布する。

遺物総数は23点であり中規模なブロックとなっており，その分布は散漫に広く分布している。29X83区から30X05区にかけて東西に長い楕円形状に分布し，分布範囲は南北6.6m，東西10.2mを測る。垂直分布ではおよそ0.5mの高低差があり，土層断面への投影ではⅦ層上部からⅢ層にかけて分布し，Ⅳ・Ⅴ層に垂直レベルが集中する。

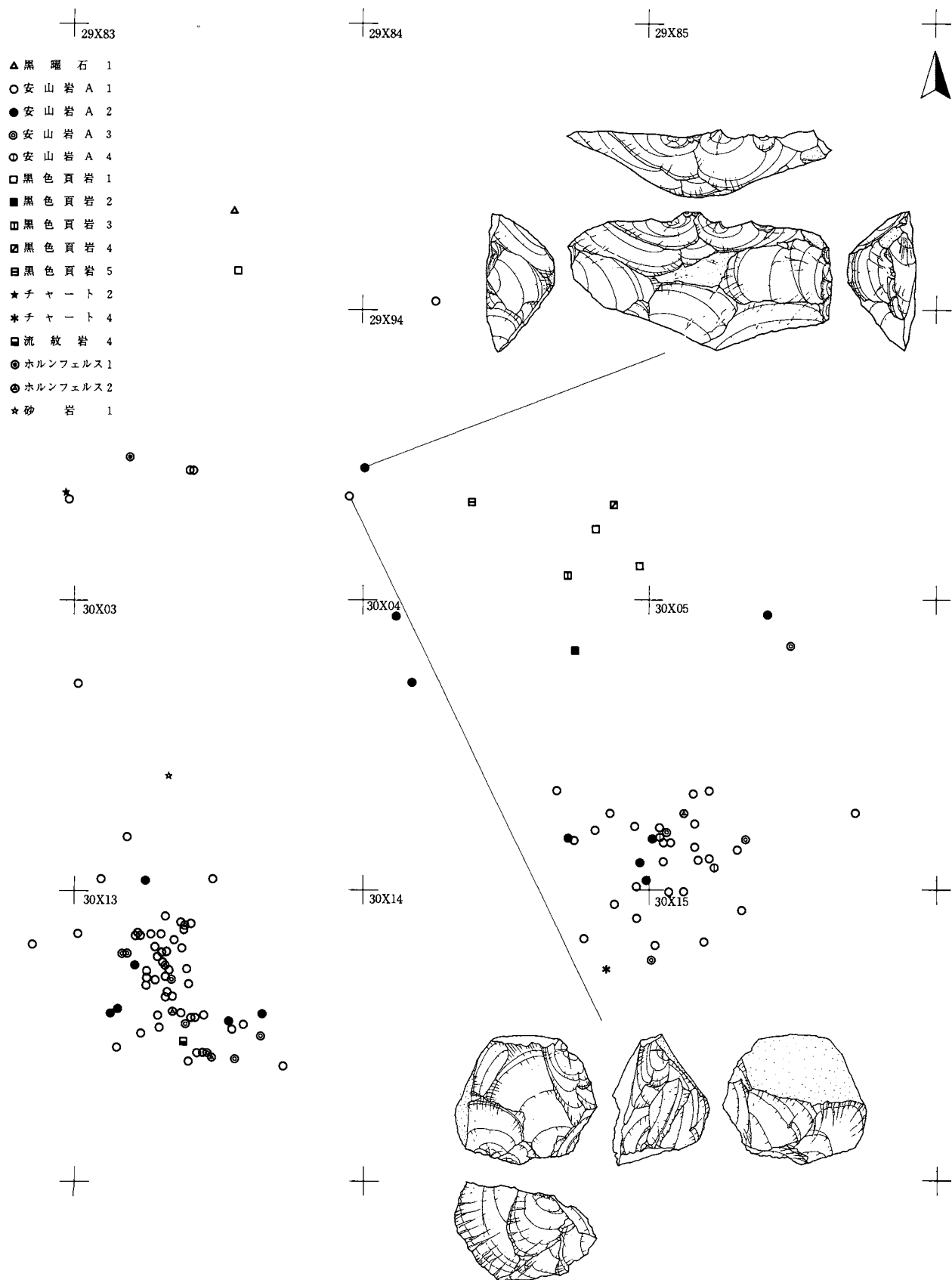
**母岩別資料** 11母岩が認められる。内訳は黒色頁岩5母岩8点，安山岩A3母岩12点，チャート1母岩1点，ホルンフェルス1母岩1点，黒曜石1母岩1点である。点数の多い母岩を挙げると，安山岩A1が7点，安山岩A2が4点，黒色頁岩1が4点であり，安山岩A母岩が母岩構成の主体を占めるが，他のブロックに比して黒色頁岩の占める割合も高い。母岩と器種の関係では，ナイフ形石器は単独母岩のチャート2，ホルンフェルス1を素材としている。石核はブロックの中心部に安山岩A1，安山岩A2の母岩のものが近接して出土している。

**出土遺物** 主要な器種ではナイフ形石器が2点検出されている。他はR剥片2点と石核2点であり，剥片の占める割合の高い器種構成となっている。

**ナイフ形石器** 1・2はナイフ形石器である。1はチャート2の母岩を用い縦長剥片素材の打面部を基



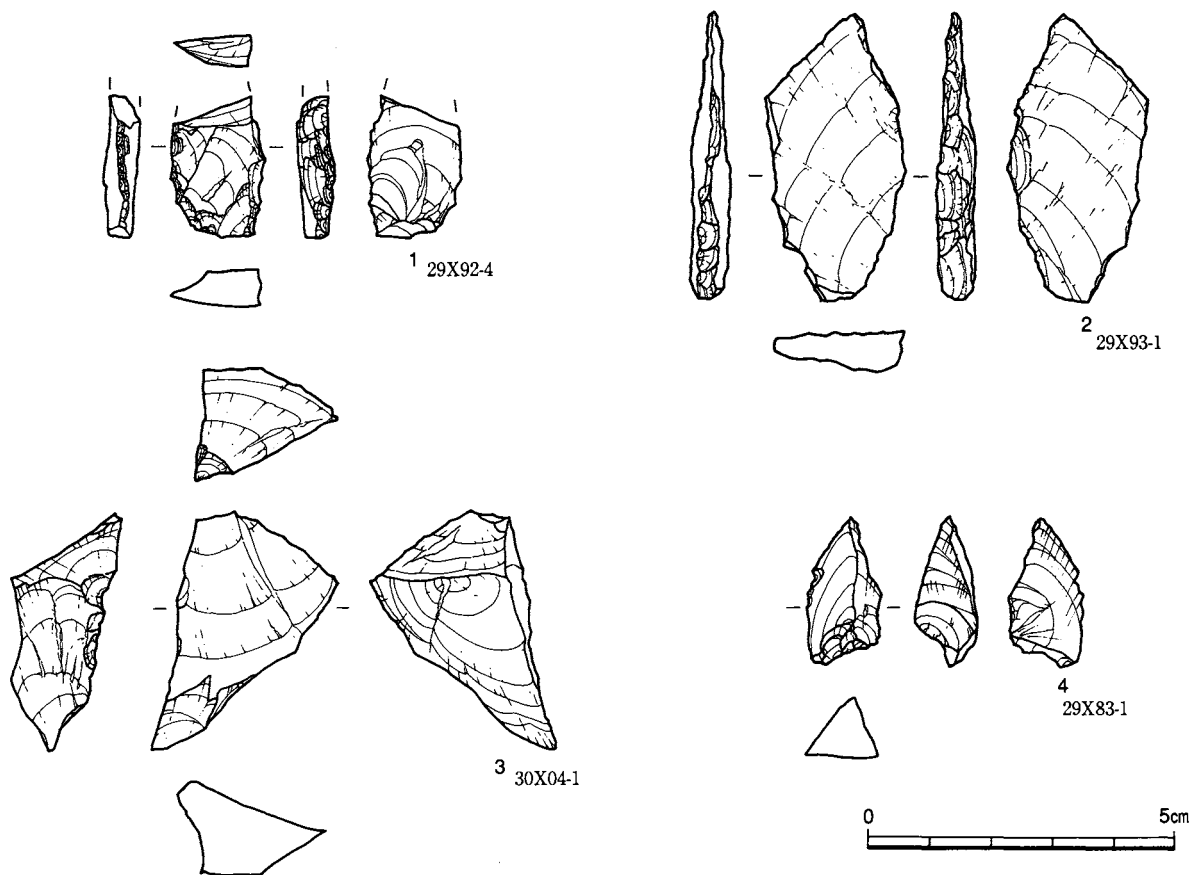
第12図 第2ブロック器種別分布



第13図 第2～4ブロック母岩別分布

部に設定し、両側縁を連続的に調整加工している。右側縁の調整は垂直に刃潰しが行われ、左側縁は細部加工となる。先端部を欠損する。2はホルンフェルス1を用い横長剥片を斜位に設定し、素材の打面を基部側に設定している。素材の末端部及び打面を斜めに調整加工し鈍角な刃部を作出する。平面形状は切出タイプのナイフ形石器となる。

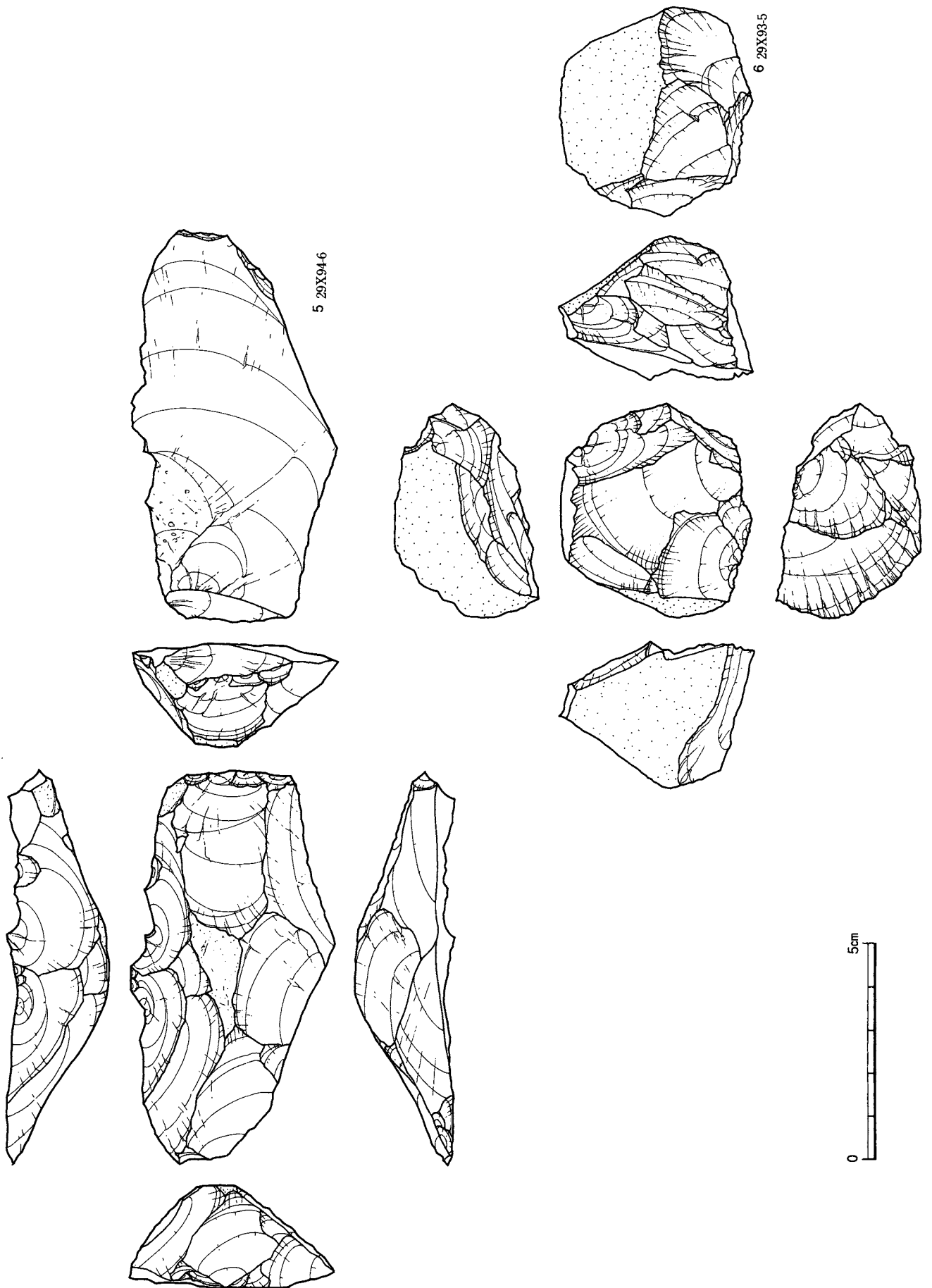
**R剥片** 3・4は二次加工を有する剥片（以下、R剥片と略称する）である。3は安山岩A2を母岩とし、厚味のある縦長剥片の左側面に疎らな細部加工が認められる。4は黒曜石1を用い扇状に広がる横長剥片の一端部を切断するように細かな調整加工が集中する。



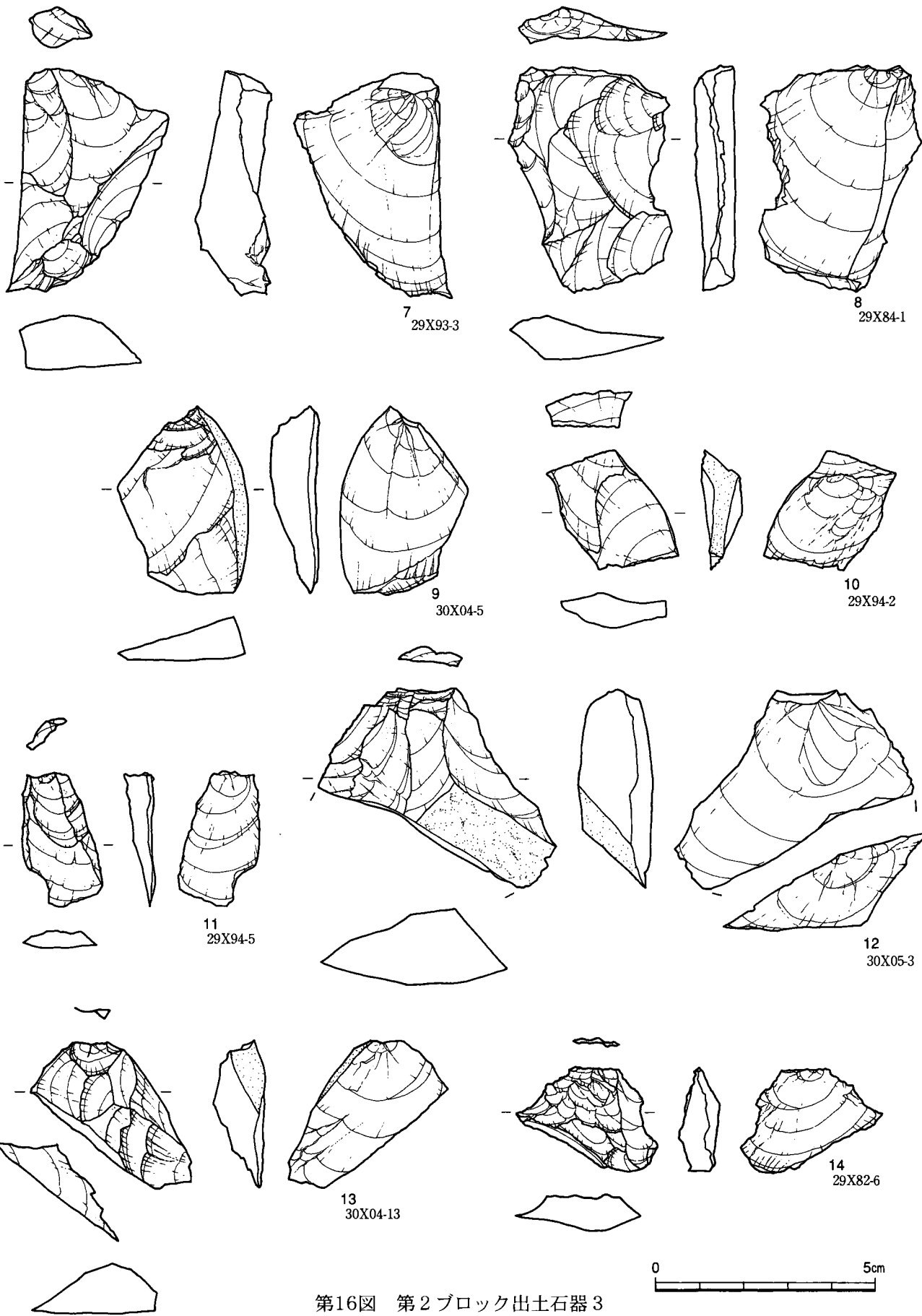
第14図 第2ブロック出土石器1

**石核** 5・6は石核である。5は安山岩A2を母岩としており、厚味のある大型の縦長剥片を石核の素材としている。素材の背面を作業面に限定し、まず素材の打面方向からやや縦長の剥片を削出し、その後上面（素材の背面左側）から数回の剥片剥離作業が認められる。6は安山岩A1を母岩としている。直径5～6cmほどの亜角礫を素材とし、1回の剥片剥離毎に90度の打面転移を繰り返して正面、下面、右側面、裏面を剥片剥離している。

**剥片** 7～14は剥片である。7～9・11が縦長剥片、10・12～14が横長剥片である。7は厚味があり稜上からの先行する剥離痕が観察される。8は幅広な打面をもち背面には横方向からの剥離面が顕著である。9は黒色頁岩2を母岩として右側面に自然面を残置する。10も黒色頁岩3を母岩とし、右側面に自然面を残置する。11は黒色頁岩5を母岩として、下端部がやや広いが石刃に近い形状を呈する。12・13



第15図 第2ブロック出土石器 2



第16図 第2ブロック出土石器3

は安山岩A2を母岩として下端部が扇状に広がる。14は黒色頁岩1を母岩として、背面で主要剥離面方向からの細かな剥離が集中し、末端がしの字状に屈曲する。

(3) 第3ブロック (第8・13・17・18図, 第6・7表, 図版13)

**分布状況** ブロック群の中央南側に分布するブロックである。現況では立川ローム層の堆積はほぼ水平に堆積している。南西側に離れて第5ブロック, 北西側にやや離れて第1ブロック, 北側に近接して第2ブロック, 東側にやや離れて第4ブロックが分布する。

遺物総数は69点であり中規模なブロックとなっており, その分布は中心部が密集して分布している。30X03区から30X12・13区にかけて南北にやや長い楕円形状に分布し, 南側に集中した分布がありそこから放射状に分布が希薄になる。分布範囲は南北5.2m, 東西3.6mを測る。垂直分布ではおよそ0.8mの高低差があり, 土層断面への投影ではⅦ層上部からⅡc層にかけて分布し, Ⅳ・Ⅴ層に垂直レベルが集中する。

**母岩別資料** 8母岩が認められる。内訳は安山岩A3母岩63点, ホルンフェルス1母岩2点, チャート1母岩1点, 黒曜石1母岩1点, 砂岩1母岩1点, 流紋岩1母岩1点である。点数の多い母岩は安山岩A1が48点, 安山岩A3が9点, 安山岩A2が6点であり, 安山岩Aの3母岩で母岩構成の大部分を占め, 他の母岩は単独或いはごく少数の母岩となっている。母岩と器種の関係では, 安山岩A2の母岩でナイフ形石器, 削器, R剥片が生産されており個体数に比して製品の占める割合が高い。他には黒曜石2の母岩で角錐状石器が生産されている。母岩の主体を占める安山岩A1では剥片, 碎片が多数生産され集中的な母岩消費が想定されるが, 製品はブロック内には存在しない。

**出土遺物** 主要な器種ではナイフ形石器, 角錐状石器, 削器がそれぞれ1点ずつ検出されている。他はR剥片1点であり, 剥片, 碎片の占める割合の高い器種構成となっている。

**角錐状石器** 1は角錐状石器とした。単独母岩の黒曜石2を母岩としている。厚味のある横断面台形の縦長剥片を素材とし, 素材の打面部を基部に設定して両側縁から先端部にかけて急角度の調整加工が施されている。先端部は背面で急角度の広い加工, 端部からの平坦加工が観察され破損後に再加工されている可能性がある。

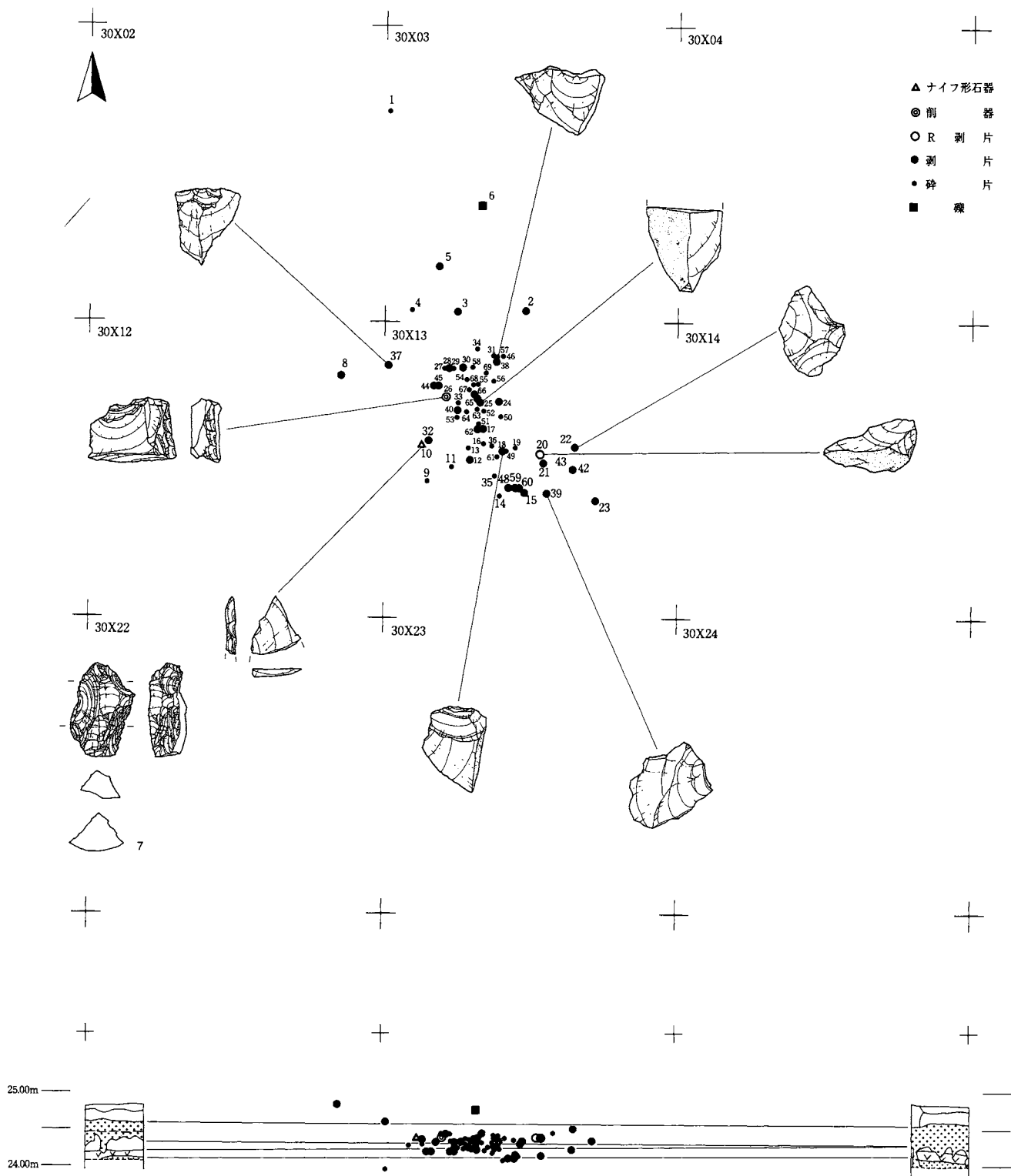
**ナイフ形石器** 2はナイフ形石器である。2は安山岩A2の母岩を用い横長剥片素材の一端部を器体の先端部に設定している。下半部分を欠損しているため形状は判然としない。打面側の側縁を切断するように素材の背面側から調整加工が認められる。

**削器** 3は削器である。底面をもつ横断面三角形の横長剥片を素材として, 背面右側縁に連続した急角度の調整加工, 裏面右側縁に平坦加工が施されている。

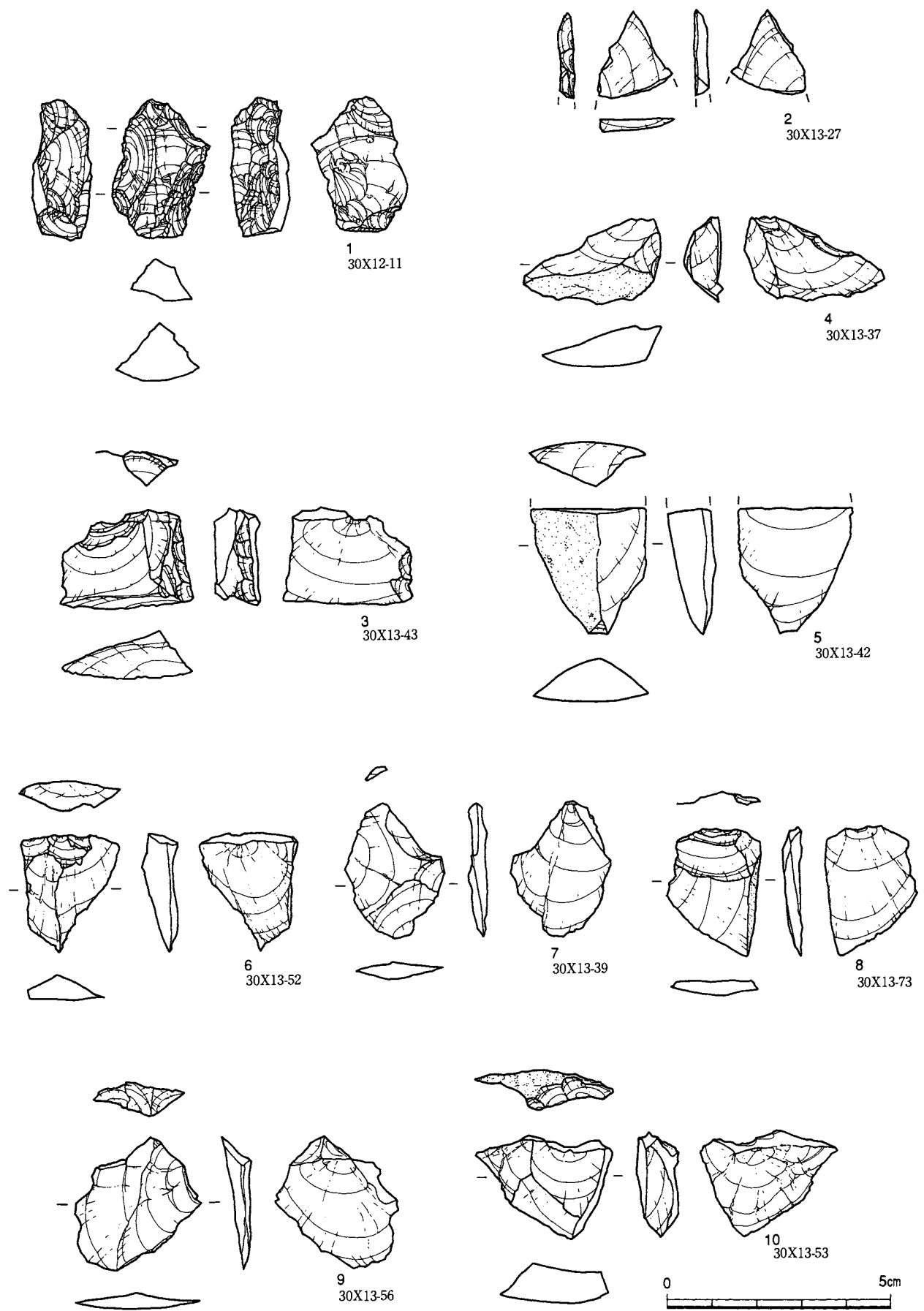
**R剥片** 4はR剥片である。下端部が広い横長剥片を素材として, 主要剥離面の打点部から端部にかけての縁辺にやや幅広な細部加工が看取される。

**剥片** 5~10は剥片である。5~9が縦長剥片, 10が横長剥片である。母岩は5・6・8・10が安山岩A1であり, 7が安山岩A2, 9が安山岩A3である。5は背面に自然面を残置し上半を欠損する。6は幅広な打面をもち末端部が尖る平面形状である。7は背面が多方向からの剥離面で構成される。8は打面が線状打面と平坦打面であり, 側縁に自然面が残る。9は複剥離打面であり背面構成からは末端を中心として弧状に打点を移動して剥片剥離していることが想定される。10は幅広な自然面打面をもち下端部が尖る。9・10の打面には背面方向からの打面調整が認められる。





第17図 第3ブロック器種別分布



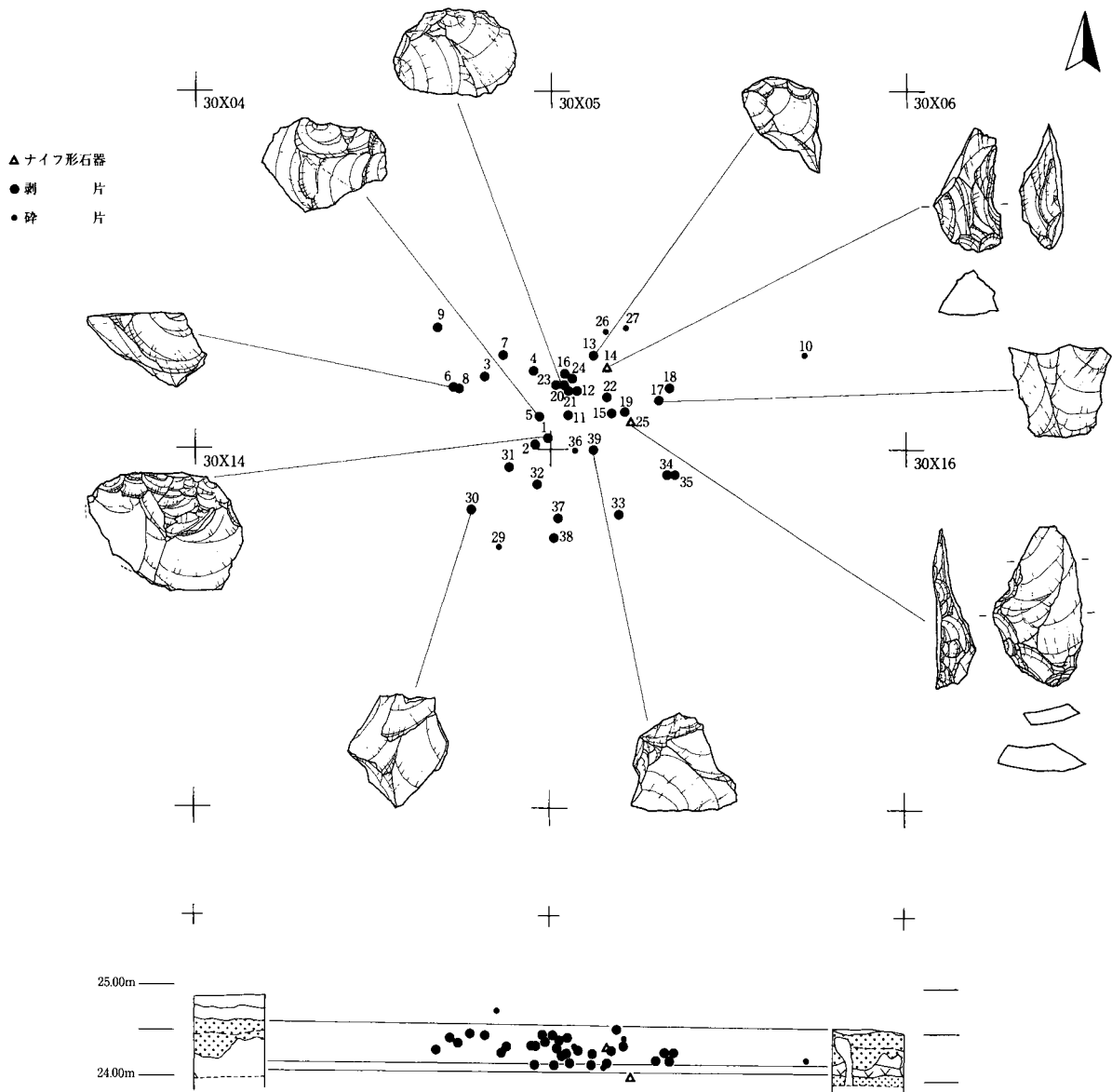
第18図 第3ブロック出土石器

(4) 第4ブロック (第8・13・19~21図, 第8・9表, 図版13・14)

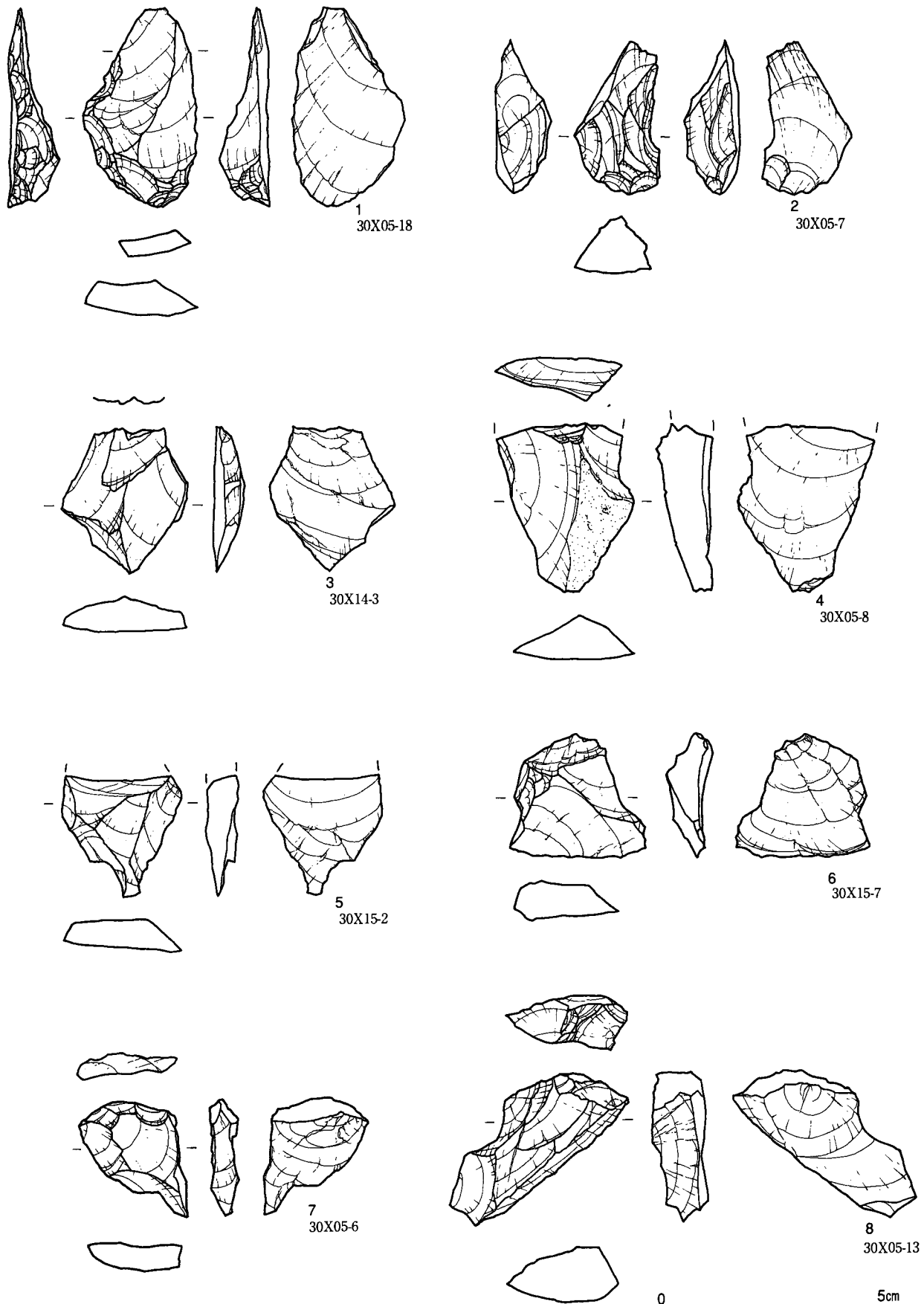
**分布状況** ブロック群の東端に分布するブロックである。現況では立川ローム層の堆積は東側に緩やかに傾斜している。北側に近接して第2ブロック, 西側にやや離れて第1ブロック, 西側にやや離れて第3ブロックが分布する。

遺物総数は39点であり中規模なブロックとなっており, その分布は中心部が密集して分布している。30X04・05区から30X14・15区にかけて東西にやや長い楕円形状に分布し, 中心から放射状に分布が希薄になるが1点が東側に離れて分布する。分布範囲は南北2.5m, 東西4.2mを測る。垂直分布ではおよそ0.5mの高低差があり, 土層断面への投影ではⅦ層上部からⅡc層にかけて分布し, Ⅳ・Ⅴ層~Ⅲ層下部に垂直レベルが集中する。

**母岩別資料** 6母岩が認められる。内訳は安山岩A 4母岩37点, チャート1母岩1点, ホルンフェルス



第19図 第4ブロック器種別分布

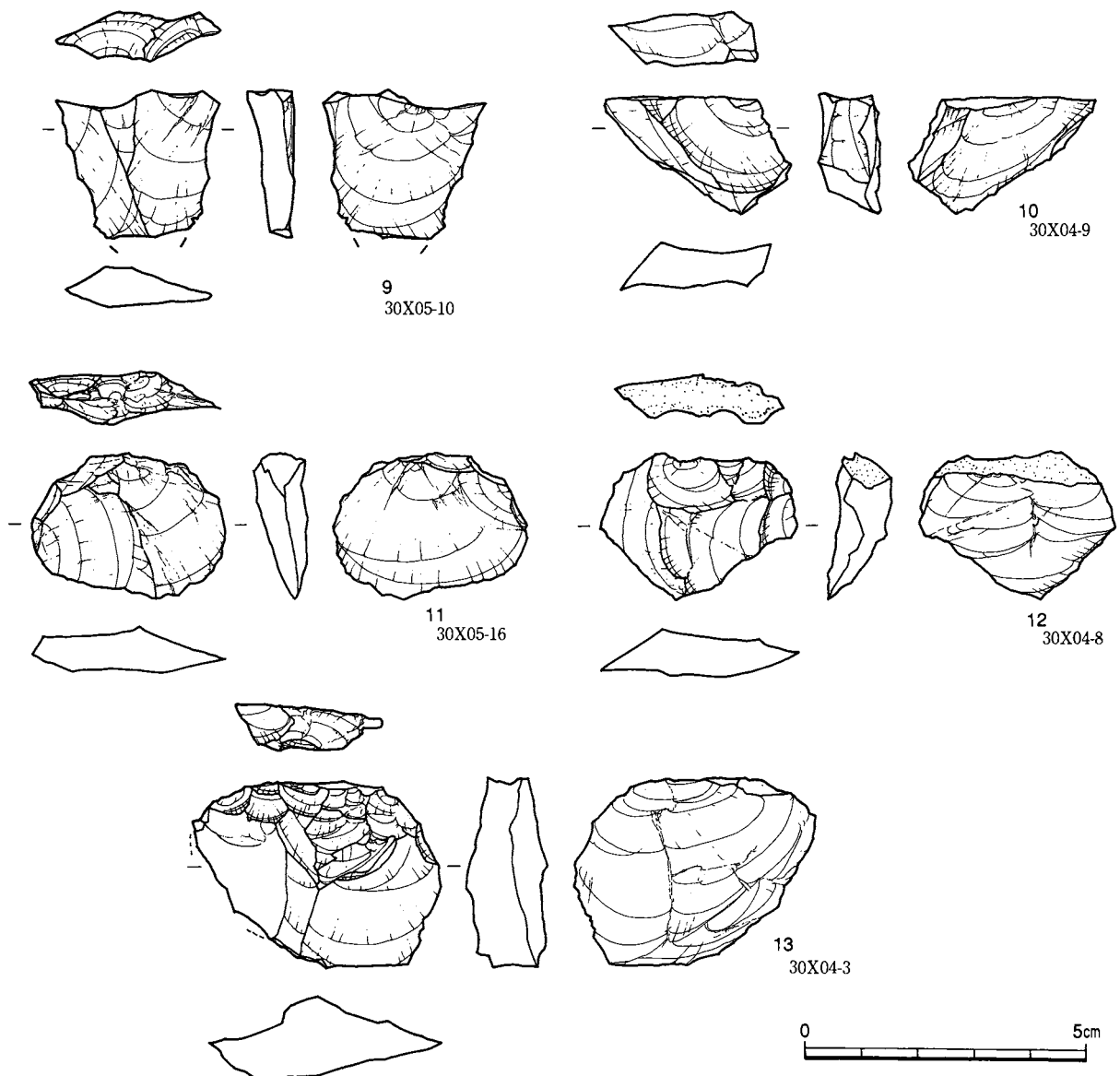


第20図 第4ブロック出土石器1

1 母岩 1 点である。点数の多い母岩は安山岩 A 1 が 28 点、安山岩 A 2 が 4 点、安山岩 A 3 が 3 点であり、安山岩 A の 4 母岩で母岩構成の大部分を占め、他の母岩は単独の母岩となり、第 3 ブロックの母岩構成と同様の状況を呈している。母岩と器種の関係では、安山岩 A 1、安山岩 A 4 の母岩でそれぞれナイフ形石器が 1 点ずつ生産されている。母岩の主体を占める安山岩 A 1 では剥片が多数生産され集中的な母岩消費が想定される。

**出土遺物** 主要な器種ではナイフ形石器が 2 点検出されるのみであり、剥片、碎片の占める割合の高い器種構成となっている。

**ナイフ形石器** 1・2 はナイフ形石器である。1 は安山岩 4 の母岩によるもので、縦長剥片素材を斜めに用い器体の先端側に素材の打面部を設定している。下半部が幅広となり厚味があり、この基部両側縁から背面左側縁にかけてブランディングが施されている。2 は安山岩 A 1 の母岩を用い、縦長剥片素材の打点部を基部に設定している。基部側の両側縁に幅広で深い調整加工が見られ、器体背面を覆うような調整



第21図 第4ブロック出土石器 2

加工が認められる。左側縁上半部を刃部と判断したが、この剥離面は調整加工後のもので或いは欠損面の可能性があり、その場合は形状は切外型になると推察される。

**剥片** 3～13は剥片である。3～7が縦長剥片、8～13が横長剥片である。母岩は3～6・9が安山岩A1であり、7がホルンフェルス2、8・10・12・13が安山岩A2、11が安山岩A4である。3は線状打面で器体中央が膨らみ末端が尖る。4は打面側が欠損し背面に自然面が残る。5も打面側が欠損し末端が尖る。6は点状打面で末端が扇状に広がる。7は幅広の打面をもち末端部が細くなる。8は複剥離打面のもので厚味があり、背面で左側縁方向からの剥離が顕著である。9は複剥離打面のもので背面で打面方向からの剥離痕が見られる。10は幅広な平坦打面のもので下端部に底面に近い先行する剥離面をもつ。11は背面にポジティブな面をもち盤状の石核から求心的に剥片剥離されたことが推定される。12は自然面打面のもので背面右方向からの剥離痕が顕著である。13は複剥離打面のもので頭部調整が顕著であり末端形状がしの字状に屈曲する。

(5) 第5ブロック(第8・22～24図、第10・11表、図版14・15)

**分布状況** ブロック群の南西端に分布するブロックである。現況では立川ローム層の堆積はほぼ水平に堆積している。北側に離れて第1ブロック、東側に離れて第3ブロック、北東側に離れて第2ブロックが分布する。

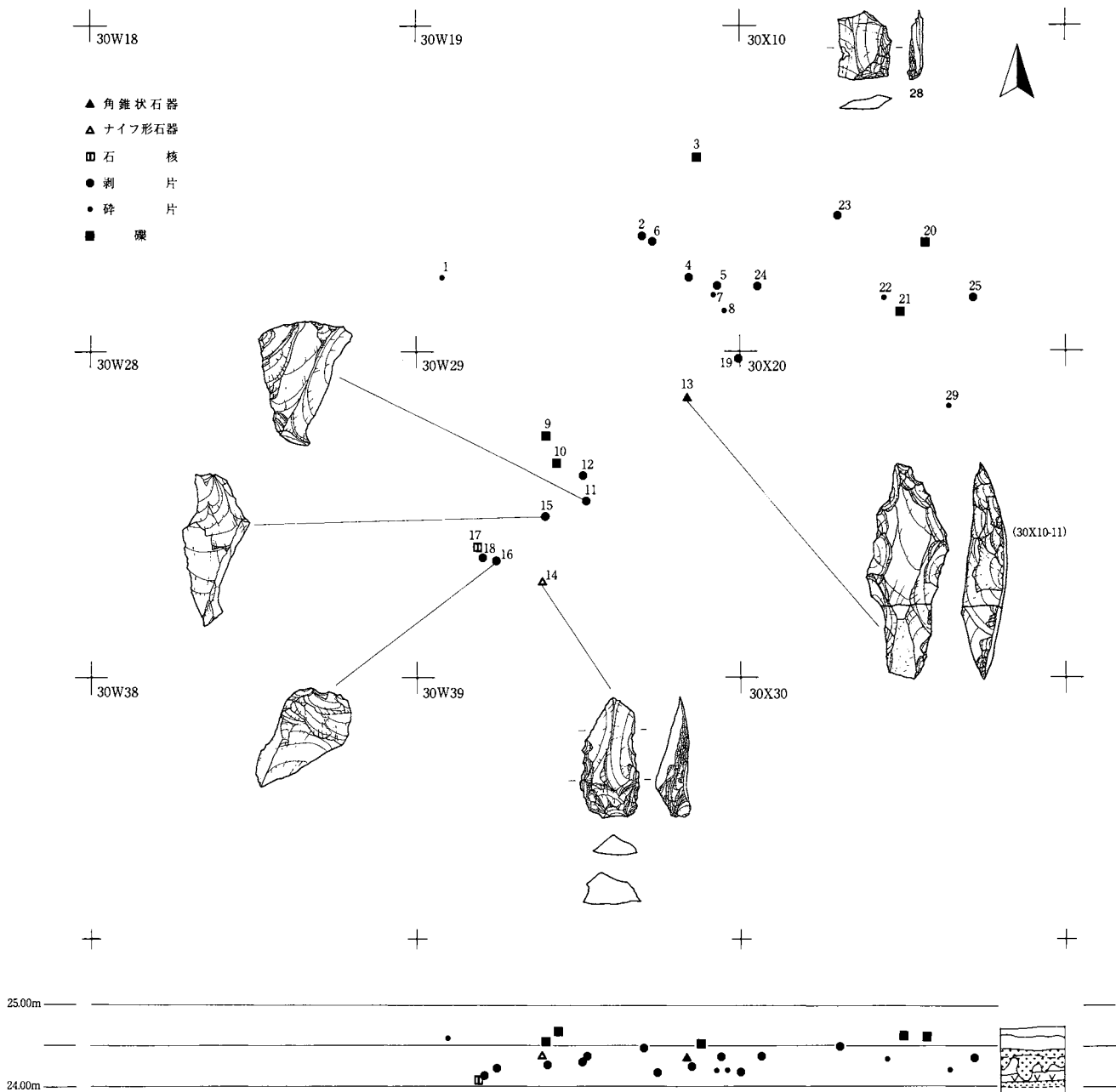
遺物総数は29点であり中規模なブロックとなっている。その分布は比較的散漫である。30W19・30X10区から30W29・30X20区にかけて北東-南西方向にやや長い楕円形状に分布する。中心部に空白部があり、そこから北東側と南西側に分かれてやや分布の集中する部分がある。分布範囲は南北5.2m、東西6.6mを測る。垂直分布ではおよそ0.6mの高低差があり、土層断面への投影ではVI層からIIc層にかけて分布し、IV・V層～III層下部に垂直レベルが集中する。

**母岩別資料** 11母岩が認められる。内訳は安山岩A2母岩20点、流紋岩3母岩3点、チャート1母岩1点、安山岩B1母岩1点、安山岩C1母岩1点、珪質頁岩1母岩1点、黒曜石1母岩1点、砂岩1母岩1点である。点数の多い母岩は安山岩A2が11点、安山岩A1が9点であり、安山岩Aの2母岩で母岩構成の大部分を占め他の母岩は単独或いはの母岩となり、第3ブロック、第4ブロックの母岩構成と同様の状況を呈している。母岩と器種の関係では、安山岩A1で角錐状石器が2点、安山岩A2でナイフ形石器が2点生産されている。主要な母岩である安山岩A2では剥片が多く生産され石核も存在することから本ブロックでの母岩消費が想定される。母岩の分布では、安山岩A2の母岩が南西側の分布域に多く分布し、一方、安山岩A1の母岩は北西側の分布域に多く分布する状況を呈している。

**出土遺物** 主要な器種ではナイフ形石器が2点、角錐状石器が2点(接合し1個体となる)検出されるのみであり、剥片、碎片の占める割合の高い器種構成となっている。また、礫も6点出土し器種構成に占める割合が高いことも特徴的である。

**角錐状石器** 1a+bは角錐状石器の接合資料である。器体の基部側で2つに折れたものが接合した。厚味のある横断面台形の横長剥片を素材とし、素材を横位にして素材の打面部を背面右側縁上部に設定して、素材の打面部側と末端側の両側縁に急角度調整加工が施され鋸歯状の両側縁に整形されている。器体先端は尖り下半部は抉入し基部が茎状になっている。この部分で背面側からの力により割れている。

**ナイフ形石器** 2・3はナイフ形石器である。2は横断面三角形状の縦長剥片を素材として、素材の打面部を基部に設定している。基部及び基部両側縁に階段状の急角度調整と細部加工が連続する。平面形状

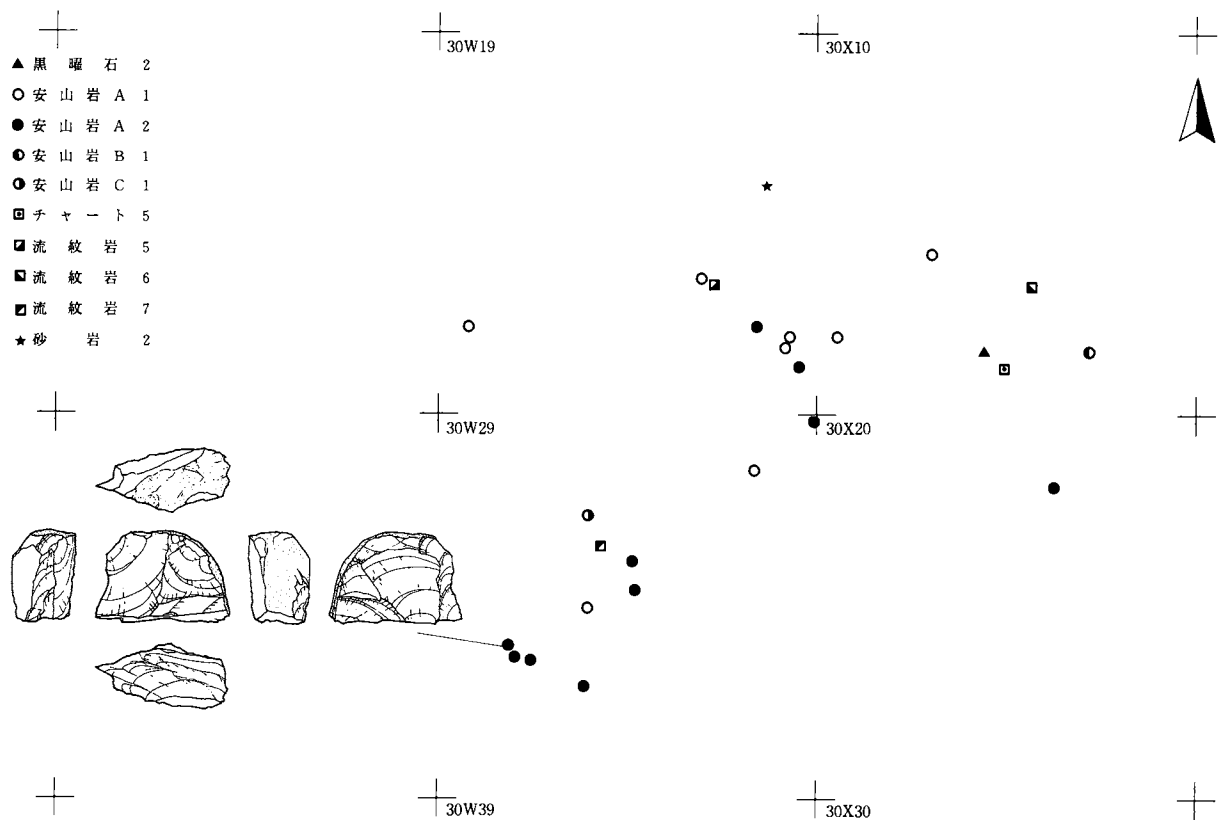


第22図 第5ブロック器種別分布

は尖頭形となり先端部両側縁が刃部となる。3は縦長剥片を素材として素材打面部側を基部に設定している。背面右側縁の基部側に細部加工が顕著である。左側縁を刃部とした幾何形のナイフ形石器である。

**石核** 4は石核である。原礫は楕円礫と思われ、短軸方向で2分割して石核素材としている。その半円形素材の長軸方向の自然面（上面）と分割面（下面）から剥片剥離が行われる。正面で上面方向から裏面で分割面方向からの幅広な剥離痕が観察される。

**剥片** 5～7は剥片である。5・6が縦長剥片、7が横長剥片である。母岩は5が安山岩A1であり、6・7が安山岩A2である。5は甲高細身のもので右側面を保持している。6は幅広な自然面打面をもち平面形状が逆三角形に末端部が細くなる。7は平坦打面をもち背面で左側縁側に自然面が残置しており



第23図 第5ブロック母岩別分布

下端部が尖る。

### 3 第Ⅱ文化層

(1) 第6ブロック (第25・26図, 第12・13表, 図版15・16)

**分布状況** 遺跡中央やや南側に分布する単独のブロックであり, 台地中央の平坦な面に当たる。上層のグリッド調査の過程で検出され, 整理時において抽出されたため調査はⅢ層以下には及んでいない。そのため立川ローム層の堆積状況については不明である。

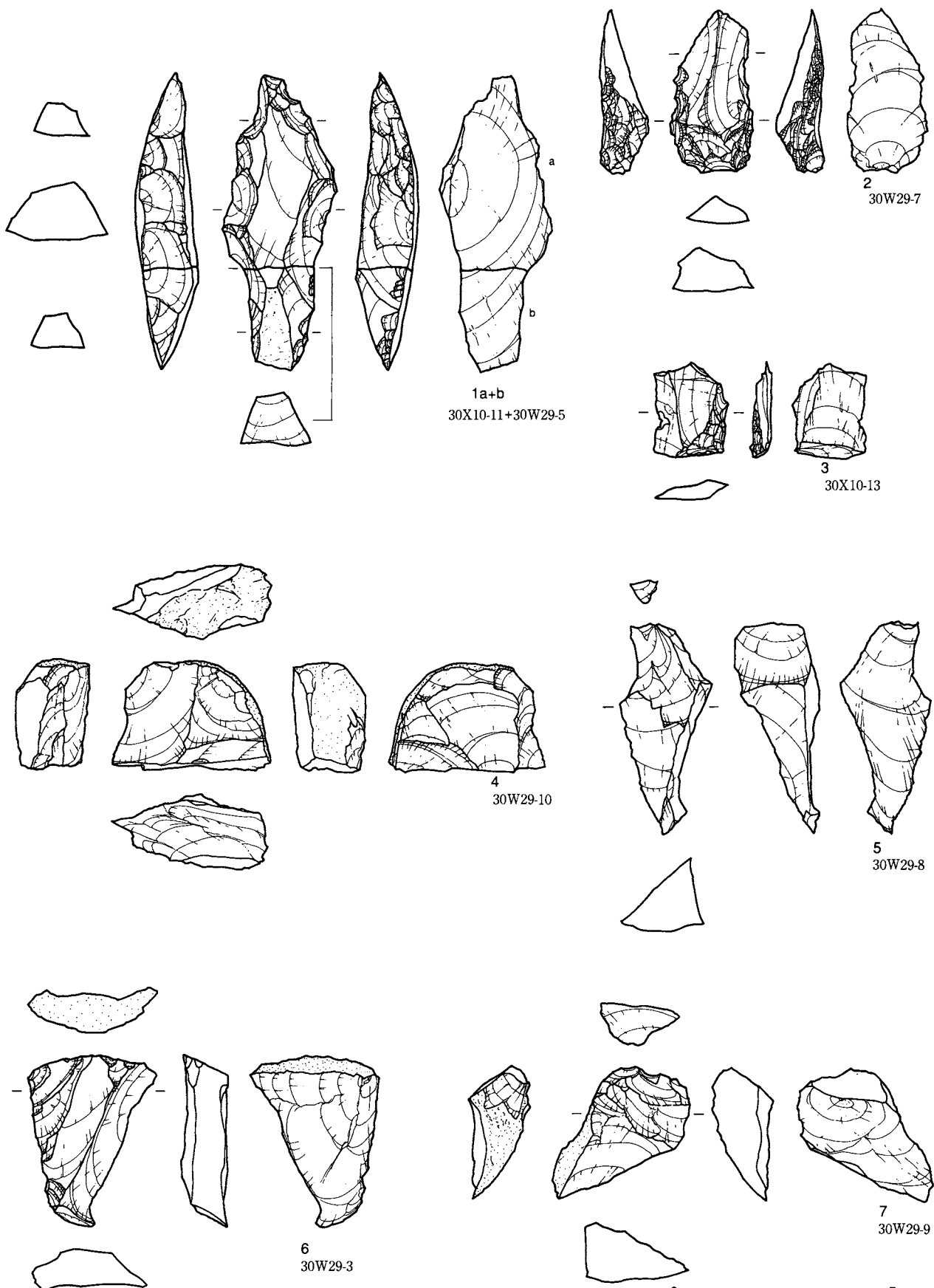
遺物総数は6点であり小規模のブロックとなっている。その分布は広範囲に分布し, 数10cm~数mの間隔において散在している。30X51区から30X60・61・62・70区にかけて分布する。分布範囲は南北6.2m, 東西10.0mを測る。垂直分布では約0.2mの高低差がある。出土層位は明確ではないが, 上層調査で調査されていることを推察するとⅢ層上面からⅡc層下部での出土層位であると考えられる。

**母岩別資料** 3母岩が認められる。いずれも珪質頁岩であり珪質頁岩3母岩6点である。点数の多い母岩は珪質頁岩2の母岩の4点であり, 他の母岩は単独の母岩となっている。珪質頁岩2はブロックの中央北側に3点がまとまって分布する。

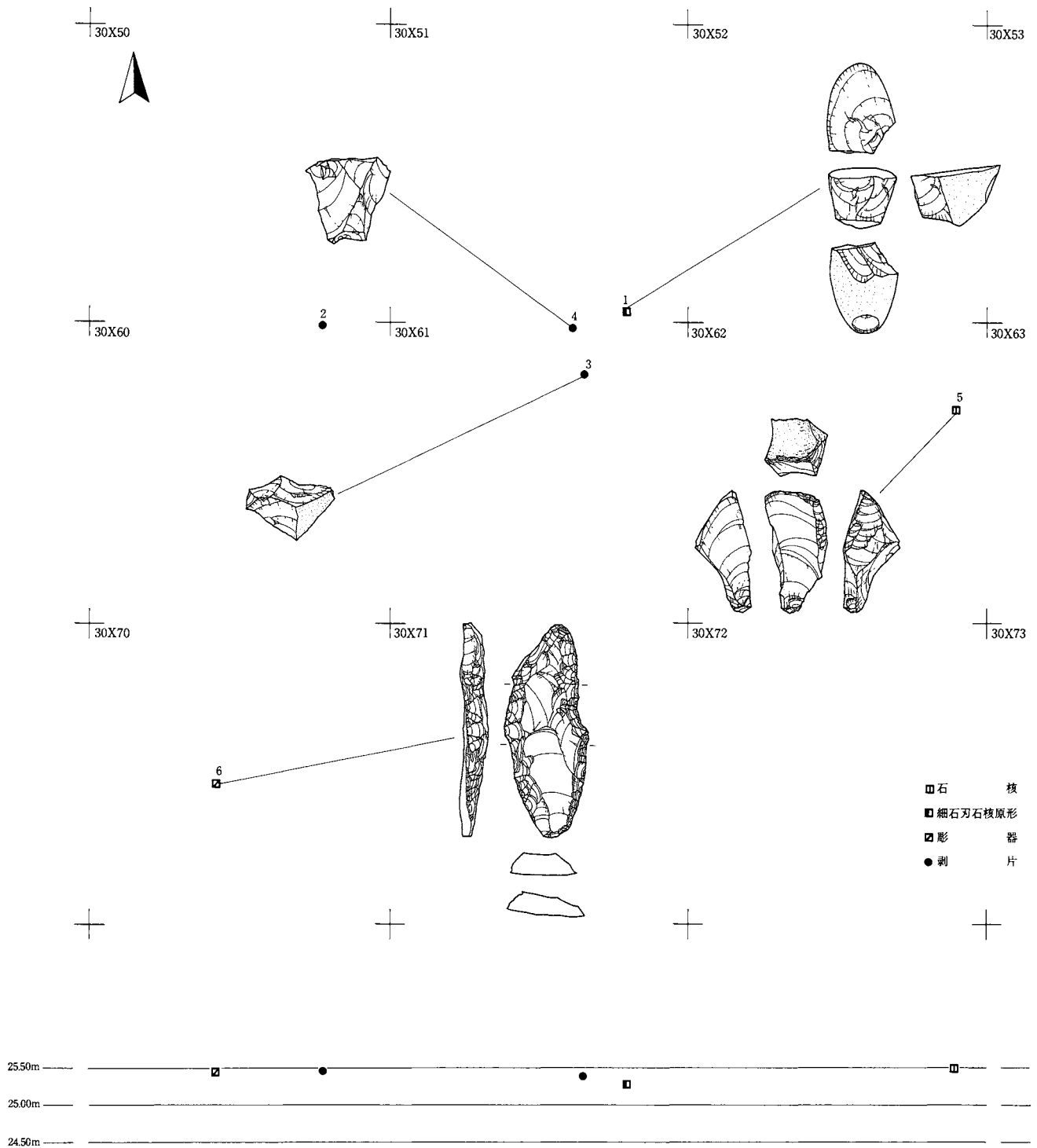
**出土遺物** 少数で構成されるブロックであるが特徴的な器種が出土している。荒屋型彫器1点, 石核1点, 細石刃石核原形1点が出土している。

**彫器** 1は彫器である。珪質頁岩4を母岩とする。珪質頁岩4は乳灰白色の色調をした珪化度の高い良質な母岩であり, 灰白色でもグレー味の強いものである。長身な石刃状剥片素材の打面部を器体の基部に



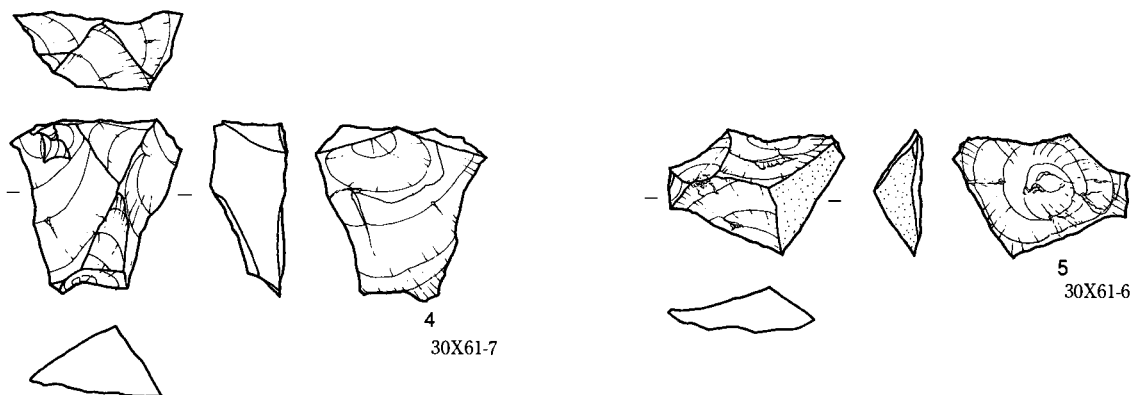
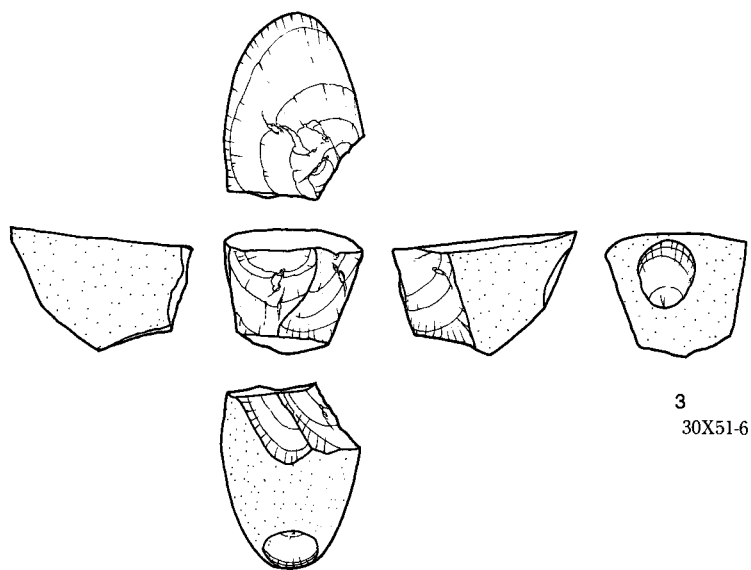
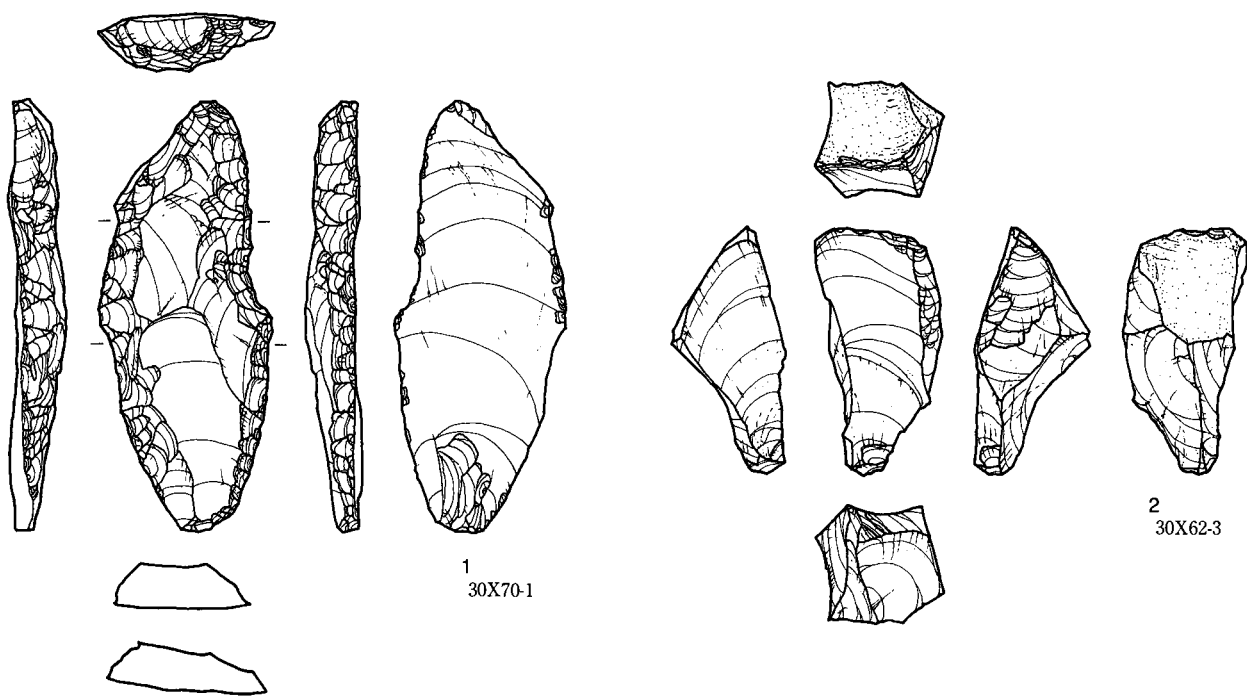


第24図 第5ブロック出土石器



第25図 第6ブロック器種別分布

設定している。両側縁に連続的な刃潰し加工を行い先端は鋭角に尖らせ半月形に近い形状に仕上げている。先端部には微細な調整が集中し、先端部から背面に向かって3回ほどの細長な細部調整が施された後、右先端の主要剥離面から左側縁に向かって槌状剥離が施されて刃部が設けられている。刃部形成後の刃部には、先端部に微細な調整と刃部側縁上部に微細な刃こぼれ状の使用痕が看取される。いわゆる「荒屋型」の範疇に入るものであるが長身であり彫刀面と器体のなす先端角が鋭角であることが特徴である。



第26図 第6ブロック出土石器



**石核** 2は石核とした。珪質頁岩3を母岩とする。珪質頁岩3は風化して黄白色を呈したもので礫皮面はやや黄色味が強くなる母岩である。石核素材は垂角礫を分割調整した剥片素材であり、正面がこの石核素材の主要剥離面となっている。右側面で2, 3回の剥離の後、この石核素材が作出され右側面の細石刃の剥離としてはやや幅広な剥片剥離が行われている。その後、上面の礫皮面からこの剥離面と正面に微細な調整加工が施されている。右側面の剥片剥離を素材作出後の剥離と観察し石核と解釈したが、正面との剥離の前後関係は判然としないところもあり或いは細石刃石核原形と解釈できる可能性もある。

**細石刃石核原形** 3は細石刃石核原形とした。珪質頁岩2を母岩としている。珪質頁岩2は全て焼成されており、礫皮面は赤色となり剥離面は黄白色が赤味を帯びたような色調を呈する。珪化度は弱くやや粗粒である。原礫は小楕円礫であり、長軸方向で2分割した後、長軸の一端を正面として下面に1回の剥離、正面と正面から右側面にかけて分割面からの剥片剥離が行われており、この剥片剥離は細石刃石核の作業面形成の剥離と考えられる。この細石刃石核原形の作出に際しては素材の焼成を利用して分割した可能性が高い。

**剥片** 4・5は剥片である。2点とも珪質頁岩2である。4は縦長剥片、5は横長剥片とした。4は剥離面打面のもので背面には多方向からの剥離痕が観察される。主要剥離面側は打瘤部が凹面となり、素材加熱のハジケを利用して剥離した可能性がある。5は背面に礫面を残すもので、主要剥離方向は器体中央に収束し加熱のハジケにより作出された剥片である。

#### 4 単独出土石器

旧石器時代の調査で石器集中の広がりがなく単独或いはごく少数で検出された資料、或いは縄文時代以降の調査に伴って検出された旧石器時代石器をここで一括する。

##### (1) 28U87区 (第27・28図, 第14表, 図版16)

旧石器時代の確認調査で遺跡北側の28U87区で尖頭器が検出され、周囲を拡張したが1点のみの出土に止まったものである。明確な出土層位は不明であるが、出土標高からおそらくⅢ層出土であろう。

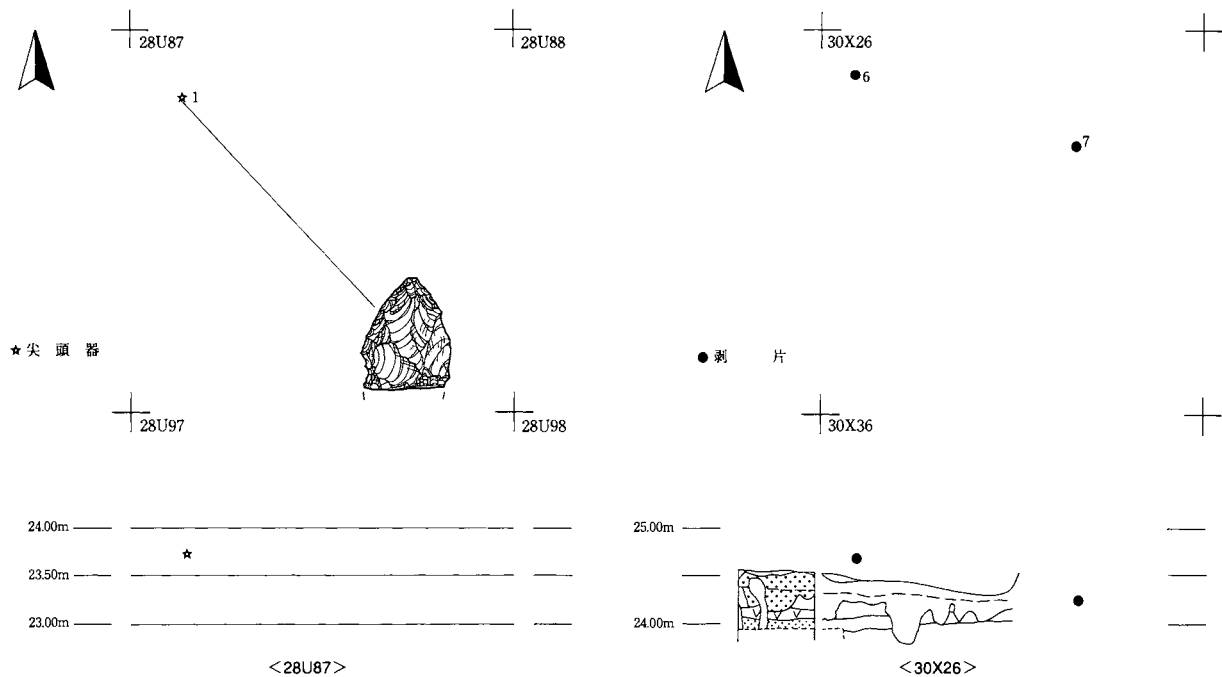
**出土遺物** 2は尖頭器である。2は下半部を欠損し形状が明確ではないがおそらく木葉形を呈するものと思われる。裏面に素材の主要剥離面を残置しており縦長剥片素材により製作されている。石材は透明度の強い黒曜石を用いており原産地は信州産の可能性が高い。

##### (2) 30X26区 (第27・28図, 第14表, 図版16)

旧石器時代の本調査で第Ⅰ文化層のブロック群の南東側に離れて30X26区で剥片2点が検出されている。2点とも小片のため実測図は提示していない。出土層位はⅢ層、Ⅱc層であり出土層位から第Ⅰ文化層に属する資料と推定される。

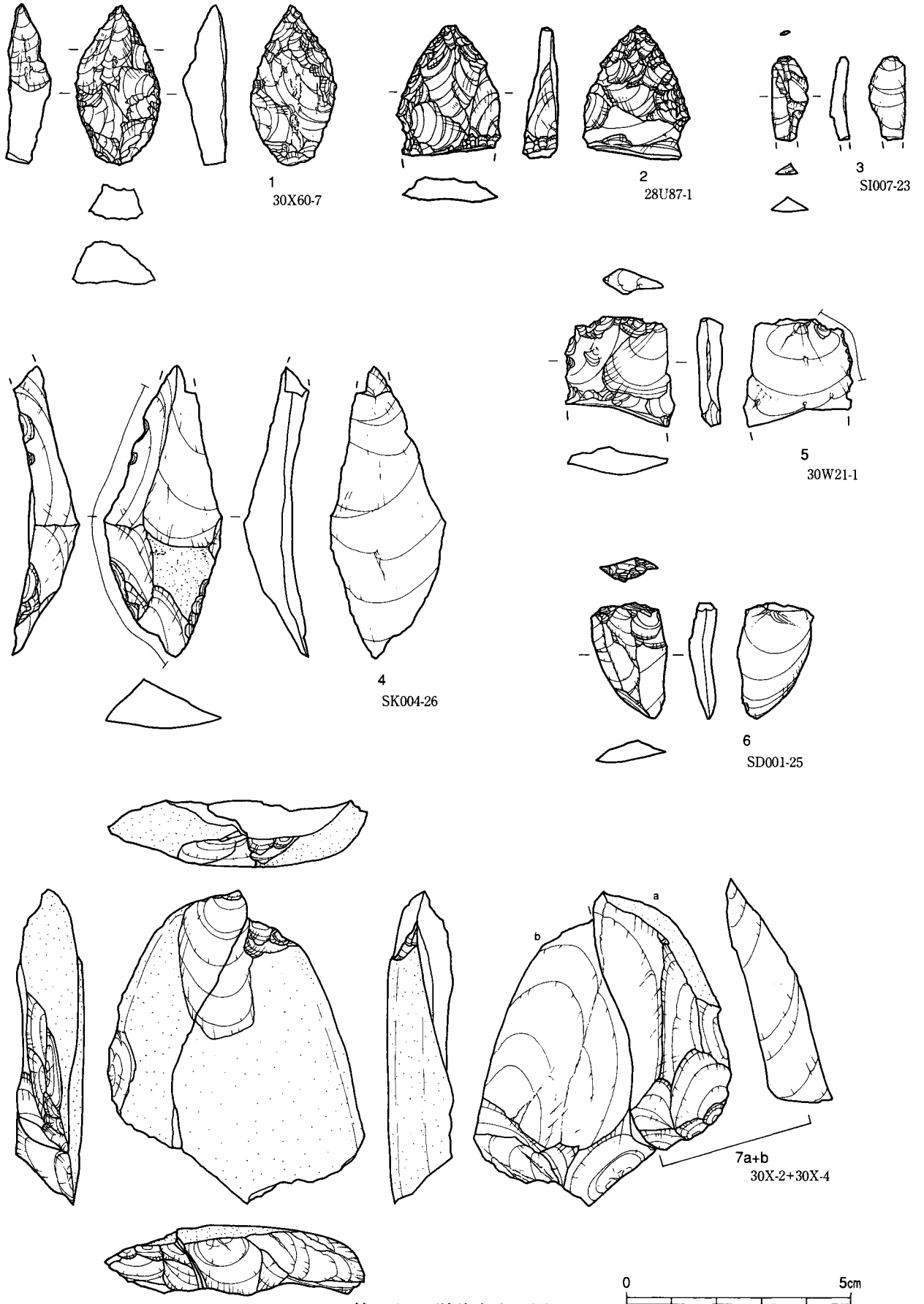
##### (3) 上層出土旧石器時代石器 (第27・28図, 第14表, 図版16)

**出土遺物** 1は尖頭器である。東内野型尖頭器の範疇に入るもので、裏面に素材の主要剥離面を残しており横長剥片を素材としている。背面では先端から左側縁に槌状剥離が施された後、さらに先端から器体中心軸方向に槌状剥離が施される。背面右側縁の調整は上部の平坦剥離は中央の槌状剥離の前に、中央から下部にかけての平坦調整はこの中央の槌状剥離の後に調整されている。左側縁の槌状剥離面の上部には微細な刃こぼれ状の使用痕が看取される。3・6は同一母岩の珪質頁岩5を母岩とする。珪質頁岩5は乳灰白色の色調をした珪化度の高い良質な母岩であり、灰白色でもやや黄色がかったものである。3は細石刃とした。微小な平坦打面をもち下端部を欠損する。背面は稜左側は先行する細石刃作出の剥離面が見ら



第27図 単独出土地点分布

れ稜右側は稜上方向からの剥離痕が認められる。6は剥片である。打面は複剥離面打面であり、背面（表面）からの幅狭な剥離痕2面とその剥離面に挟まれた平坦な面で構成され、その後に打面調整のためか微細な剥離痕が見られる。背面は中央の細長い剥離痕は細石刃作出の剥離痕であり、両側縁の平坦な面より新しく剥がされた面である。このことからこの剥片は細石刃石核の作業面更新をした剥片か、或いは細石刃作出に失敗して作業面を広く剥がしてしまった剥片と想定される。末端がヒンジフラクチャーになっていることも失敗を裏づけている。3は第6ブロックから東方向に約7m離れて、6は北北西方向に約33m離れて検出されているが、石器群の内容から同一の文化層と考えられる。4はS K 004（地下式坑）から出土したR剥片である。右側縁に刃こぼれ状の微細剥離痕が疎らに認められ、両側縁下半部には平坦な細部加工が看取される。5はU剥片とした。透明度の高い黒曜石を素材にしている。下半部を欠損し主要剥離面の右側縁上部に微細剥離痕が集中する。7 a・bは剥片と石核の接合資料である。ホルンフェルス（Hornfels）を石材としている。接合面は上端方向からの加撃により分割されている。7 aの主要剥離面下端部や7 bの背面上端部には分割後の階段状剥離痕が観察され、両極剥離技法により分割された可能性が高い。



第28图 单独出土石器

第2表 第1ブロック石器属性表

№	遺物番号	器種	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図 番号	打面 °	打角 °	打面 調整	頭部 調整	背面構成								調整角 °	先端角 °	調整 部位	折面 部位	末端 部位		
													C	S	H	T	R	L	D	V							
1	29X90-0001	剥片	チャート1	1.57	2.54	1.59	7.1										1	3									O
2	29X90-0002	礫	流紋岩1	4.39	2.41	1.98	25.6																				
3	29X90-0003	礫	流紋岩2	3.52	2.20	0.90	7.3																				
4	29X90-0004	剥片	安山岩A1	2.09	2.67	1.14	6.0	2	—						2	2									L	F	
5	29X90-0007	礫	流紋岩3	5.57	2.84	1.24	23.0																				
6	29X91-0005	剥片	安山岩A1	2.03	2.38	0.48	1.8	1	1	122					1	1	2	1									F

第3表 第1ブロック組成表

	剥片	礫	合計	組成比
チャート1	1		1	4.76%
	7.11		7.11	10.06%
安山岩A1	2		2	47.62%
	7.73		7.73	10.94%
流紋岩1		1	1	9.52%
		25.60	25.60	36.21%
流紋岩2		1	1	14.29%
		7.30	7.30	10.33%
流紋岩3		1	1	23.81%
		22.95	22.95	32.47%
合計(点数)	3	3	6	100.00%
合計(重量)	14.84	55.85	70.69	100.00%
組成比(点数)	52.38%	47.62%	100.00%	
組成比(重量)	20.99%	79.01%	100.00%	

第4表 第2ブロック石器属性表

№	遺物番号	器種	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図 番号	打面 °	打角 °	打面 調整	頭部 調整	背面構成								調整角 °	先端角 °	調整 部位	折面 部位	末端 部位		
													C	S	H	T	R	L	D	V							
1	29X82-0006	剥片	黒色頁岩1	2.39	3.27	0.91	4.6	14	1	105		○			6	1											F
2	29X83-0001	R剥片	黒曜石1	2.42	1.23	1.04	1.9	4	1			○		2										R		F	
3	29X83-0002	剥片	黒色頁岩1	1.62	1.47	0.43	0.6		2					2			1									F	
4	29X84-0001	剥片	安山岩A1	5.16	3.70	0.96	18.0	8	2	82				4	6	1										H	
5	29X92-0004	ナイフ形石器	チャート2	2.30	1.59	0.62	2.4	1		110				2	1								L,R	M		—	
6	29X92-0005	砕片	安山岩A1	1.08	1.22	0.23	0.3																				
7	29X93-0001	ナイフ形石器	ホルンフェルス1	4.73	2.35	0.69	6.9	2						1							65						
8	29X93-0003	剥片	安山岩A1	5.14	3.69	1.70	22.2	7	1	107				2	1	1		2									F
9	29X93-0004a	砕片	安山岩A1	0.91	0.94	0.42	0.4																				
10	29X93-0004b	砕片	安山岩A1	0.87	0.86	0.18	0.1																				
11	29X93-0005	石核	安山岩A1	4.53	5.00	3.36	69.9	6																			
12	29X94-0001	剥片	黒色頁岩1	1.18	1.38	0.26	0.3		—						1		1								M	F	
13	29X94-0002	剥片	黒色頁岩3	2.70	3.03	0.88	5.8	10	1	68		○		1	1												F
14	29X94-0003	剥片	黒色頁岩1	1.86	0.75	0.56	0.6		—				○				2								H	F	
15	29X94-0004	剥片	黒色頁岩4	2.20	1.87	0.51	1.3		1					2			1										F
16	29X94-0005	剥片	黒色頁岩5	3.03	1.87	0.69	2.2	11	2	89				5	1												F
17	29X94-0006	石核	安山岩A2	9.10	4.76	2.38	88.3	5																			
18	29X95-0001	剥片	安山岩A1	2.19	1.79	0.60	1.3						○		1	1									M	F	
19	30X04-0001	R剥片	安山岩A2	3.91	3.01	3.10	10.8	3	1	112	○			1	2		1							L		H	
20	30X04-0005	剥片	黒色頁岩2	4.20	2.95	1.11	10.5	9	P			○	○	2			2										F
21	30X04-0013	剥片	安山岩A2	3.31	3.65	1.16	9.4	13	C	95		○		1	6	1											F
22	30X05-0002	剥片	安山岩A3	2.75	3.54	0.82	6.1		3					1	1												H
23	30X05-0003	剥片	安山岩A2	4.44	5.41	1.74	30.5	12	1	119		○	○	3		2									T		—

第5表 第2ブロック組成表

	ナイフ形石器	R剥片	剥片	砕片	石核	合計	組成比
チャート2	1 2.43					1 2.43	4.35% 0.83%
ホルンフェルス1	1 6.89					1 6.89	4.35% 2.34%
安山岩A1			3 41.42	3 0.74	1 69.9	7 112.06	30.43% 38.11%
安山岩A2		1 10.76	2 39.85		1 88.26	4 138.87	17.39% 47.23%
安山岩A3			1 6.13			1 6.13	4.35% 2.08%
黒色頁岩1			4 6.06			4 6.06	17.39% 2.06%
黒色頁岩2			1 10.49			1 10.49	4.35% 3.57%
黒色頁岩3			1 5.77			1 5.77	4.35% 1.96%
黒色頁岩4			1 1.33			1 1.33	4.35% 0.45%
黒色頁岩5			1 2.17			1 2.17	4.35% 0.74%
黒曜石1		1 1.85				1 1.85	4.35% 0.63%
合計(点数)	2	2	14	3	2	23	100.00%
合計(重量)	9.32	12.61	113.22	0.74	158.16	294.05	100.00%
組成比(点数)	8.70%	8.70%	60.87%	13.04%	8.70%	100.00%	
組成比(重量)	3.17%	4.29%	38.50%	0.25%	53.79%	100.00%	

第6表 第3ブロック石器属性表

№	遺物番号	器種	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿回 番号	打面 °	打角 °	打面 調整	頭部 調整	背面構成								調整角 °	先端角 °	調整 部位	折面 部位	末端 部位		
													C	S	H	T	R	L	D	V							
1	30X03-0006	砕片	安山岩A1	1.14	1.08	0.17	0.2																				
2	30X03-0007	剥片	安山岩A1	0.66	1.52	0.23	0.3		-						1										M	H	
3	30X03-0008	剥片	安山岩A2	1.36	1.69	0.44	0.9		1								1								M	-	
4	30X03-0009	砕片	安山岩A1	1.04	1.10	0.33	0.3										1	1									H
5	30X03-0010	剥片	安山岩A1	1.35	1.76	0.68	1.7		C						1												
6	30X03-0011	礫	砂岩1	2.48	2.06	1.35	6.2																				
7	30X12-0011	角錐状石器	黒曜石2	3.16	2.18	1.33	6.9	1		97																	
8	30X12-0012	剥片	安山岩A1	1.08	1.14	0.26	0.5		-							2		1							H	F	
9	30X13-0026	砕片	安山岩A1	0.98	1.01	0.37	0.3																				
10	30X13-0027	ナイフ形石器	安山岩A2	1.96	1.70	0.34	0.9	2													58		L	M			
11	30X13-0028	砕片	安山岩A1	0.41	0.53	0.08	0.0																				
12	30X13-0029	剥片	安山岩A1	2.25	1.86	0.68	2.3		C							1	2	2									F
13	30X13-0030	砕片	安山岩A1	1.36	1.24	0.42	0.4																				
14	30X13-0031	砕片	安山岩A1	1.37	1.19	0.39	0.5																				
15	30X13-0032	剥片	ホルンフェルス2	1.14	1.95	0.34	0.6		1								1	1									F
16	30X13-0033	砕片	ホルンフェルス2	0.48	0.97	0.22	0.1																				
17	30X13-0034	剥片	安山岩A1	1.40	1.86	0.42	1.1		1			○				1		2									H
18	30X13-0035	砕片	安山岩A1	1.08	1.07	0.26	0.3																				
19	30X13-0036	砕片	安山岩A1	0.51	0.36	0.09	0.0																				
20	30X13-0037	R剥片	安山岩A2	1.88	3.13	0.89	3.5	4	P				○		2		1								L		F
21	30X13-0038	剥片	安山岩A1	0.94	3.13	0.88	2.3									1	1	2									O
22	30X13-0039	剥片	安山岩A2	3.03	2.29	0.46	2.4	7	1	114						1	1	1	1								F
23	30X13-0040	剥片	安山岩A1	1.33	3.34	0.69	1.4		-								1								M,T		-
24	30X13-0041	剥片	安山岩A1	1.03	2.38	0.36	0.7		L							1		1									O
25	30X13-0042	剥片	安山岩A1	2.83	2.61	1.10	6.4	5	-				○				1								M		F
26	30X13-0043	削器	安山岩A2	2.19	2.95	1.08	6.4	3	2	116						1		3		1					R,L		O



第6表 続き

№	遺物番号	器種	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重畳 g	挿区 番号	打面 °	打角 °	打面 調整	頭部 調整	背面構成								調整角 °	先端角 °	調整 部位	折面 部位	末端 部位			
													C	S	H	T	R	L	D	V								
27	30X13-0044a	剥片	安山岩A1	2.49	1.72	1.01	3.5		-																	M	F	
28	30X13-0044b	碎片	安山岩A1	1.35	1.18	0.22	0.4																					
29	30X13-0044c	碎片	安山岩A1	0.35	1.11	0.20	0.1																					
30	30X13-0045	剥片	安山岩A1	2.09	2.44	0.37	2.6		-																	H,T	-	
31	30X13-0046	碎片	安山岩A1	0.70	0.85	0.21	0.1																					
32	30X13-0047	剥片	安山岩A2	2.16	1.07	0.34	0.8		1							1										R	H	
33	30X13-0048	碎片	安山岩A1	0.31	0.24	0.08	0.0																					
34	30X13-0049	碎片	安山岩A1	1.38	1.23	0.46	0.4																					
35	30X13-0050	碎片	流紋岩4	0.88	1.02	0.46	0.3																					
36	30X13-0051	碎片	安山岩A1	0.66	0.47	0.12	0.0																					
37	30X13-0052	剥片	安山岩A1	2.61	2.20	0.79	3.1		6	1	110		○				2										F	
38	30X13-0053	剥片	安山岩A1	2.33	3.14	0.97	5.9		10	C	122		○				2										F	
39	30X13-0056	剥片	安山岩A3	2.91	2.82	0.71	2.9		9	2	128		○														F	
40	30X13-0057	剥片	安山岩A1	2.55	2.24	0.61	2.1			1			○				3										F	
41	30X13-0058	碎片	チャート3	0.65	0.94	0.46	0.3																					
42	30X13-0059	剥片	安山岩A3	0.93	2.63	0.75	1.2			1				○													F	
43	30X13-0061	碎片	安山岩A1	0.71	1.03	0.33	0.2																					
44	30X13-0062a	剥片	安山岩A3	1.81	1.14	0.45	0.8			P				○				2									F	
45	30X13-0062b	剥片	安山岩A3	1.80	1.12	0.28	0.4			P							1									T	-	
46	30X13-0063	碎片	安山岩A1	0.68	1.11	0.28	0.2																					
47	30X13-0064	碎片	安山岩A1	0.58	0.73	0.09	0.1																					
48	30X13-0072	剥片	安山岩A1	1.91	2.07	0.63	2.2		-								1										H	
49	30X13-0073	剥片	安山岩A1	2.85	2.09	0.47	2.5		8	1				○			2										F	
50	30X13-0074	碎片	安山岩A1	0.84	1.42	0.24	0.3																					
51	30X13-0075	碎片	安山岩A1	0.62	0.46	0.26	0.1																					
52	30X13-0076	碎片	安山岩A3	0.63	0.92	0.17	0.1																					
53	30X13-0077	碎片	安山岩A1	0.94	1.07	0.43	0.2																					
54	30X13-0078	碎片	安山岩A1	0.48	0.73	0.12	0.1																					
55	30X13-0079	碎片	安山岩A1	0.94	0.95	0.44	0.3																					
56	30X13-0080	碎片	安山岩A1	1.22	1.04	0.28	0.3																					
57	30X13-0081	碎片	安山岩A3	0.52	1.07	0.21	0.1																					
58	30X13-0082	碎片	安山岩A1	0.67	0.70	0.33	0.1																					
59	30X13-0083a	剥片	安山岩A1	1.77	2.56	0.64	3.3			2,C																	H	
60	30X13-0083b	剥片	安山岩A3	1.82	0.92	0.39	0.7			1				○													F	
61	30X13-0084	碎片	安山岩A3	1.14	0.80	0.20	0.2																					
62	30X13-0085	剥片	安山岩A1	0.47	1.82	0.20	0.2																				M	H
63	30X13-0086	碎片	安山岩A1	0.70	1.05	0.19	0.1																					
64	30X13-0087	碎片	安山岩A1	0.32	1.07	0.26	0.1																					
65	30X13-0088	剥片	安山岩A3	0.77	1.79	0.37	0.6			L							2										F	
66	30X13-0089	剥片	安山岩A1	1.51	2.55	0.46	1.4			C							1										F	
67	30X13-0090	碎片	安山岩A1	0.91	1.48	0.33	0.4																					
68	30X13-0091	碎片	安山岩A1	0.49	0.54	0.13	0.0																					
69	30X13-0092	碎片	安山岩A1	0.29	0.67	0.18	0.0																					

第7表 第3ブロック組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	削器	R剥片	剥片	碎片	礫	総計	組成比
チャート3						1 0.30		1 0.3	1.45% 0.35%
ホルンフェルス2					1 0.6	1 0.11		2 0.71	2.90% 0.83%
安山岩A1					19 43.62	29 5.41		48 49.03	69.57% 57.47%
安山岩A2	1 0.90		1 6.39	1 3.54	3 4.12			6 14.95	8.70% 17.52%
安山岩A3					6 6.54	3 0.39		9 6.93	13.04% 8.12%
黒曜石2		1 6.91						1 6.91	1.45% 8.10%
砂岩1							1 6.16	1 6.16	1.45% 7.22%
流紋岩4						1 0.32		1 0.32	1.45% 0.38%
合計(点数)	1	1	1	1	29	35	1	69	100.00%
合計(重量)	0.90	6.91	6.39	3.54	54.88	6.53	6.16	85.31	100.00%
組成比(点数)	1.45%	1.45%	1.45%	1.45%	42.03%	50.72%	1.45%	100.00%	
組成比(重量)	1.05%	8.10%	7.49%	4.15%	64.33%	7.65%	7.22%	100.00%	

第8表 第4ブロック石器属性表

№	遺物番号	器種	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿固 番号	打面 °	打角 °	打面 調整	頭部 調整	背面構成								調整角 °	先端角 °	調整 部位	折面 部位	末端 部位	
													C	S	H	T	R	L	D	V						
1	30x04-0003	剥片	安山岩A2	3.28	4.43	1.48	16.6	13	3	96		○			6											H
2	30x04-0004	剥片	安山岩A1	3.00	2.23	0.54	3.4		2				○				1									F
3	30x04-0006	剥片	安山岩A1	0.73	2.44	0.51	0.9		3						1										H	—
4	30x04-0007	剥片	安山岩A1	1.67	2.10	0.15	0.5		L								1									F
5	30x04-0008	剥片	安山岩A2	2.58	3.53	1.16	7.1	12	C	107					3		5									F
6	30x04-0009	剥片	安山岩A2	2.12	3.36	1.10	6.8	10	1	103					2		2				1					F
7	30x04-0010	剥片	安山岩A1	0.87	2.10	0.22	0.4		P						2											H
8	30x04-0011	剥片	安山岩A1	2.00	0.85	0.47	0.6		P				○		1											F
9	30x04-0012	剥片	安山岩A1	2.82	1.43	0.97	3.3		1						2										T	—
10	30X05-0001	碎片	安山岩A1	0.68	0.61	0.21	0.1																			
11	30X05-0004	剥片	安山岩A1	3.08	2.41	0.82	6.5		—			○			2		2								L	H
12	30X05-0005	剥片	安山岩A1	2.18	1.68	0.31	0.8		P						1						1					F
13	30X05-0006	剥片	ホルンフェルス2	2.55	2.38	0.65	3.1	7	1						5	1				1						F
14	30X05-0007	ナイフ形石器	安山岩A1	3.47	1.92	1.22	6.8	2																		
15	30X05-0008	剥片	安山岩A1	3.73	3.09	1.27	10.4	4	—				○		2					2					M	F
16	30X05-0009	剥片	安山岩A1	1.66	3.27	0.45	2.3		C				○													F
17	30X05-0010	剥片	安山岩A1	2.60	2.90	0.85	4.9	9	3						2					1					T	—
18	30X05-0011	剥片	安山岩A3	2.78	1.95	0.74	3.0		P							1	1				1					F
19	30X05-0012	剥片	安山岩A1	1.05	1.98	0.63	1.0		1							3										F
20	30X05-0013	剥片	安山岩A2	3.25	4.07	1.21	10.5	20	5			○			3	1				2	1					O
21	30X05-0014	剥片	安山岩A1	3.33	1.05	0.88	2.1		—							1				2					H	O
22	30X05-0015	剥片	安山岩A1	1.41	2.08	0.23	0.7		3						2											F
23	30X05-0016	剥片	安山岩A4	2.58	3.44	0.96	7.1	11	7	112					2		3									F
24	30X05-0017	剥片	安山岩A3	1.07	1.58	0.45	0.6		2						2						1					F
25	30X05-0018	ナイフ形石器	安山岩A4	4.50	2.51	1.10	9.6	1														57		L,T		
26	30X05-0020	碎片	安山岩A1	0.83	1.27	0.41	0.4																			
27	30X05-0021	碎片	安山岩A1	1.18	0.65	0.30	0.2																			
28	30X05-0022	剥片	安山岩A1	2.35	2.70	1.20	4.7		1				○		1					2	1					H
29	30X14-0002	碎片	チャート4	1.33	1.09	0.77	1.1																			
30	30X14-0003	剥片	安山岩A1	3.13	2.84	0.75	6.1	3	L							2	2	1	1							F
31	30X14-0004	剥片	安山岩A1	1.60	2.71	0.51	2.0		L							2				1		2				O
32	30X14-0005	剥片	安山岩A1	2.42	1.65	0.49	1.7		—				○		1										M	F
33	30X15-0002	剥片	安山岩A1	2.67	2.59	0.71	4.2	5	—							3	2								M	F
34	30X15-0003a	剥片	安山岩A1	1.21	1.72	0.34	0.8		L						2		2	1							L	F
35	30X15-0003b	剥片	安山岩A1	1.49	1.91	0.36	0.6		1						4											F
36	30X15-0004	碎片	安山岩A1	0.96	1.29	0.19	0.2																			
37	30X15-0005	剥片	安山岩A1	2.13	1.53	0.54	1.7		1						2			1								F
38	30X15-0006	剥片	安山岩A3	1.68	2.78	0.84	2.7		C						1			1								F
39	30X15-0007	剥片	安山岩A1	3.01	2.70	1.02	5.5	6	P						2	1	4									

第9表 第4ブロック組成表

	ナイフ形石器	剥片	碎片	合計	組成比
チャート4			1 1.1	1 1.1	2.56% 0.78%
ホルンフェルス2		1 3.1		1 3.1	2.56% 2.20%
安山岩A1	1 6.78	23 62.25	4 0.87	28 72.90	71.79% 51.70%
安山岩A2		4 41.03		4 41.03	10.26% 29.10%
安山岩A3		3 6.25		3 6.25	7.69% 4.43%
安山岩A4	1 9.56	1 7.06		2 16.62	5.13% 11.79%
合計(点数)	2	32	5	39	100.00%
合計(重量)	16.34	122.69	1.97	141.00	100.00%
組成比(点数)	5.13%	82.05%	12.82%	100.00%	
組成比(重量)	11.59%	87.01%	1.40%	100.00%	

第10表 第5ブロック石器属性表

№	遺物番号	器種	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿込 番号	打面 °	打角 °	打面 調整	頭部 調整	背面構成								調整角 °	先端角 °	調整 部位	折面 部位	末端 部位		
													C	S	H	T	R	L	D	V							
1	30W19-0002	碎片	安山岩A1	1.02	1.49	0.19	0.4																				
2	30W19-0004	剥片	安山岩A1	1.94	0.73	0.45	0.7		P				○				1		1								F
3	30W19-0005	礫	砂岩2	4.77	5.14	3.52	122.3																		M		
4	30W19-0006	剥片	安山岩A2	1.13	2.64	0.74	1.8		C				○					1	1							F	
5	30W19-0007	剥片	安山岩A1	1.21	1.65	1.37	0.6		-							1								H	H		
6	30W19-0008	剥片	流紋岩5	1.83	1.68	0.43	1.2		1				○			1											
7	30W19-0009	碎片	安山岩A1	0.80	0.71	0.17	0.1																				
8	30W19-0010	碎片	安山岩A2	1.17	0.99	0.39	0.4																				
9	30W29-0001	礫	安山岩C1	5.04	3.54	3.13	47.0																				
10	30W29-0002	礫	流紋岩7	6.63	2.24	2.64	56.1																				
11	30W29-0003	剥片	安山岩A2	3.82	2.89	1.09	8.4	6	C	65							3	3	1							F	
12	30W29-0004	剥片	安山岩A2	2.05	1.04	0.52	1.0		C								1			1		1				F	
13	30W29-0005	角錐状石器	安山岩A1	2.48	1.69	1.15	4.4	1b																		R,L	
14	30W29-0007	ナイフ形石器	安山岩A2	3.70	1.87	1.10	6.1	2													78		L,R,T				
15	30W29-0008	剥片	安山岩A1	4.69	2.05	1.91	9.2	5	1	92							4					1				F	
16	30W29-0009	剥片	安山岩A2	2.96	3.12	1.41	7.3	7	1	122			○	○			6	1								F	
17	30W29-0010	石核	安山岩A2	2.46	3.51	1.69	16.1	4																			
18	30W29-0011	剥片	安山岩A2	1.79	1.33	0.40	0.6		-								1		2	2					M	F	
19	30W29-0012	剥片	安山岩A2	1.91	2.40	0.34	0.9		2				○				2		1							F	
20	30X10-0005	礫	流紋岩6	3.73	3.03	1.65	23.1																				
21	30X10-0006	礫	チャート5	4.22	2.62	0.77	8.5																				
22	30X10-0007	碎片	黒曜石2	0.70	0.65	0.33	0.1																				
23	30X10-0008	剥片	安山岩A1	2.46	1.34	0.37	0.8		1				○				1		1	1						F	
24	30X10-0009	剥片	安山岩A1	3.00	2.27	1.51	2.9		-										1	1					M	F	
25	30X10-0010	剥片	安山岩B1	1.70	1.44	0.58	0.9		1								1			1	1					F	
26	30X10-0011	角錐状石器	安山岩A1	4.30	2.49	1.35	14.7	1a																			
27	30X10-0012	碎片	珪質頁岩1	0.85	0.95	0.27	0.2																				
28	30X10-0013	ナイフ形石器	安山岩A2	2.14	1.67	0.46	1.5	3																			
29	30X20-0038	碎片	安山岩A2	1.18	1.21	0.22	0.4																		R		

第11表 第5ブロック組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	剥片	砕片	石核	礫	合計	組成比
チャート5						1	1	3.45%
						8.51	8.51	2.52%
安山岩A1		2	5	2			9	31.03%
		19.13	14.14	0.5			33.77	10.00%
安山岩A2	2		6	2	1		11	37.93%
	7.54		20.04	0.78	16.06		44.42	13.16%
安山岩B1			1				1	3.45%
			0.88				0.88	0.26%
安山岩C1						1	1	3.45%
						47.02	47.02	13.93%
珪質頁岩1				1			1	3.45%
				0.19			0.19	0.06%
黒曜石2				1			1	3.45%
				0.1			0.1	0.03%
砂岩2						1	1	3.45%
						122.33	122.33	36.23%
流紋岩5			1				1	3.45%
			1.2				1.2	0.36%
流紋岩6						1	1	3.45%
						23.14	23.14	6.85%
流紋岩7						1	1	3.45%
						56.05	56.05	16.60%
合計(点数)	2	2	13	6	1	5	29	100.00%
合計(重量)	7.54	19.13	36.26	1.57	16.06	257.05	337.61	100.00%
組成比(点数)	6.90%	6.90%	44.83%	20.69%	3.45%	17.24%	100.00%	
組成比(重量)	2.23%	5.67%	10.74%	0.47%	4.76%	76.14%	100.00%	

第12表 第6ブロック石器属性表

№	遺物番号	器種	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図 番号	打面 °	打角 °	打面 調整	頭部 調整	背面構成								調整角 °	先端角 °	調整 部位	折面 部位	末端 部位		
													C	S	H	T	R	L	D	V							
1	30X51-0006	細石刃石核原形	珪質頁岩2	2.01	2.30	2.97	13.8	3																			
2	30X60-0001	剥片	珪質頁岩2	1.62	1.38	0.77	1.1		P						1		2										O
3	30X61-0006	剥片	珪質頁岩2	2.05	2.88	0.81	2.5	5	—				○		1	2		1									F
4	30X61-0007	剥片	珪質頁岩2	2.83	2.79	1.27	7.2	4	4	106					2	2	1										F
5	30X62-0003	石核	珪質頁岩3	4.00	2.11	1.89	12.4	2																			
6	30X70-0001	彫器	珪質頁岩4	7.03	2.90	0.97	16.6	1																			L,R

第13表 第6ブロック組成表

	彫器	剥片	細石刃石核原形	石核	合計	組成比
珪質頁岩2		3	1		4	66.67%
		10.75	13.77		24.52	45.85%
珪質頁岩3				1	1	16.67%
				12.36	12.36	23.11%
珪質頁岩4	1				1	16.67%
	16.6				16.6	31.04%
合計(点数)	1	3	1	1	6	100.00%
合計(重量)	16.6	10.75	13.77	12.36	53.48	100.00%
組成比(点数)	16.67%	50.00%	16.67%	16.67%	100.00%	
組成比(重量)	31.04%	20.10%	25.75%	23.11%	100.00%	

第14表 単独出土石器属性表

№	遺物番号	器種	母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図 番号	打面 °	打角 °	打面 調整	頭部 調整	背面構成								調整角 °	先端角 °	調整 部位	折面 部位	末端 部位				
													C	S	H	T	R	L	D	V									
1	28U87-0001	尖頭器	黒曜石4	2.38	2.96	0.78	4.8	2																					
2	30W21-0001	U剥片	黒曜石5	2.50	2.47	0.58	3.0	5	1	108		○			1		1	1									R	M	—
3	30X-0002	剥片	ホルンフェルス4	5.74	3.37	1.32	20.2	7a	—			○				1		1										M	O
4	30X-0003	剥片	安山岩A1	2.41	2.41	0.47	2.7		1							3		1										R	H
5	30X-0004	石核	ホルンフェルス4	6.42	3.73	1.49	40.7	7b																					
6	30X26-0001	剥片	ホルンフェルス3	1.83	1.74	0.59	2.2		C							1		1											F
7	30X26-0003	剥片	安山岩B2	1.10	0.50	0.32	0.4		1									1											F
8	30X60-0007	尖頭器	黒曜石3	3.63	1.87	1.02	5.2	1																					F
9	SI007-0023	細石刃	珪質頁岩5	1.91	0.81	0.42	0.4	3	1			○			1	4												T	—
10	SD001-0025	剥片	珪質頁岩5	2.57	1.73	0.60	1.8	6	2			○	○			7													H
11	SK004-0026	R剥片	安山岩A5	6.40	2.65	1.45	12.8	4	—				○		1	2		1										L	F

### 第3節 縄文時代

#### 1 概要

本遺跡における縄文時代の遺構として、竪穴状遺構1基、土坑2基が検出された（第7図）。遺構外においては、ほぼ調査区の全域から早期・前期・中期・後期の土器が検出され、土製品として土器片錘（中期）及び土製円盤（後期）も確認されている。出土した縄文土器については、本報告書では以下のように分類した。なお、図化しなかった土器片については、第15表にこの分類に従った出土状況を示した。

##### 第Ⅰ群土器 早期の土器

第1類 いわゆる燃糸文系統の土器

第2類 田戸下層式・田戸上層式土器

第3類 子母口式・野島式土器・茅山下層式土器

##### 第Ⅱ群土器 前期の土器

##### 第Ⅲ群土器 中期の土器

第1類 中期前半の土器

a種 勝坂式系統の土器      b種 阿玉台式土器

第2類 中期後半の加曾利E式土器

##### 第Ⅳ群土器 後期の土器

第1類 堀之内式土器

a種 有文のもの      b種 無文・縄文のみのもの

第2類 加曾利B式土器

a種 精製土器      b種 粗製土器

#### 2 遺構と出土遺物

##### (1) 竪穴状遺構

##### SX001（第29図，図版7）

調査区の北側，27W-90付近に検出された。平面形はゆがんだ楕円形で，規模は長軸2.4m，短軸1.3m，深さ0.3mほどである。なお，底面はあまり平坦ではなく，凹凸が見られる。長軸方向はN-17°-Eである。南側には床面からの深さが18cm程度の落ち込みがあり，北側には直径18cm程度のピットが2基検出されている。

遺物は中央部やや南寄りの所に，1の土器が床面から6cmほど上から正位の状態で検出された。そして，この土器の口縁部付近を取り囲むように，2・3・6の破片が立てて並べられているような状態で検出されている。これらの遺物は，被熱硬化した灰褐色土（覆土16層）の上層から焼土を主体にした層（覆土3・4層）と焼土を少量含む層（覆土1・2層）から検出されている。これらの遺物及び焼土を含む覆土は本遺構の中・上層より検出されており下層からは焼土層は検出されておらず浮いたような状態で検出されている。このことから，遺物は下層の落ち込みに「炉」のように埋設されたか，或いは下層の落ち込みの埋没過程で遺棄されたことが考えられる。焼土ブロックを含む柱穴状の層（覆土14層）が周囲から検出されていることから前者の方が可能性が高い。いずれにしても，この出土状況からは「炉」として使用されていたとしても，存続期間は短かったものと推定される。遺構全体を見ても，遺物の出土状況以外，遺構の機能を推定する情報に乏しい。本報告では，便宜上「竪穴状遺構」と呼称することとした。本遺構

の時期は、以下に記す出土土器から中期中葉の加曾利E1式期と考えられる。

遺物は第Ⅲ群第2類に該当する土器のみが検出された。本報告では6点を図示した。図示しなかった土器片は、12点(139g)である。1は比較的小形の深鉢である。緩いキャリパー形の器形で、完形復元することができたが、全体的に片側に傾くように歪みが大きい作りである。計測値は、口径約16cm～17cm、底径7cm、高さ21cmほどである。地文に撚糸文が縦方向で密に施文される。さらに、交互刺突が施される縦方向の隆線が口縁部から底部付近にまで垂下している。この隆線は6本貼り付けられているが、このうち一对の2本は緩やかに波打つ口縁部の波長部から垂下している。この際、口縁部の内面から貼り付けられ、折り返されるように底部へ向かっている。折り返しがある部分は剥落せずに残っているが、そうでないほかの二対4本は、1本を除き口縁部付近の部分が剥落してしまっている。外面のほぼ全面が赤褐色であり、被熱していたと推察される。内面は、底面から5cmほどまでが黒色、12cmほどまでが暗赤褐色、口縁部までが灰褐色となっている。中央の暗赤褐色部分は、被熱の影響と思われる器面の荒れが観察される。製作が全体的に粗く、明確な推定は避けるが、製作技法面では在地の伝統であるが、文様面では中部地方の曾利式土器の影響を受けていると考えられる。2も推定口径が17cmほどでの比較的小形の深鉢である。上半部破片2点のみであり、全体の2割程度の遺存である。他に破片が検出されていないことと上記の出土状況を考えると、外部から意図的に持ち込んだものと推定される。胴上部にくびれを持つ器形で、口縁部は大きく開き、胴中央部も膨らみを持つ。器面に単節縄文LRが施された後、口縁部の横位沈線、そこから垂下する縦位沈線の順序で施文される。3は口縁部に隆線と幅広の凹線によって、渦巻き文を基調とした文様が描出されている。地文には、複節縄文LRLが施文されている。加曾利E3式に比定できる。6は頸部が「く」の字状に屈曲する深鉢である。破片数は多いものの上半部のみで、しかも小片が多い。口縁部は無文となり、屈曲部に交互刺突が巡っている。頸部以下には縦位の撚糸文を施した後、沈線を窓枠状に施文している。不整形の沈線区画間の空白部は沈線施文後に撚糸文を磨り消した痕跡は見いだせないことから、器面調整→区画(細沈線か?)→撚糸文→沈線の順序で施文を行っていると考えられる。4・5は加曾利E3式の胴部片と考えられる。4は単節縄文RL、5は単節縄文LRがそれぞれ施文されている。

## (2) 陥穴状土坑

### SK001 (第30図, 第48図20, 図版9)

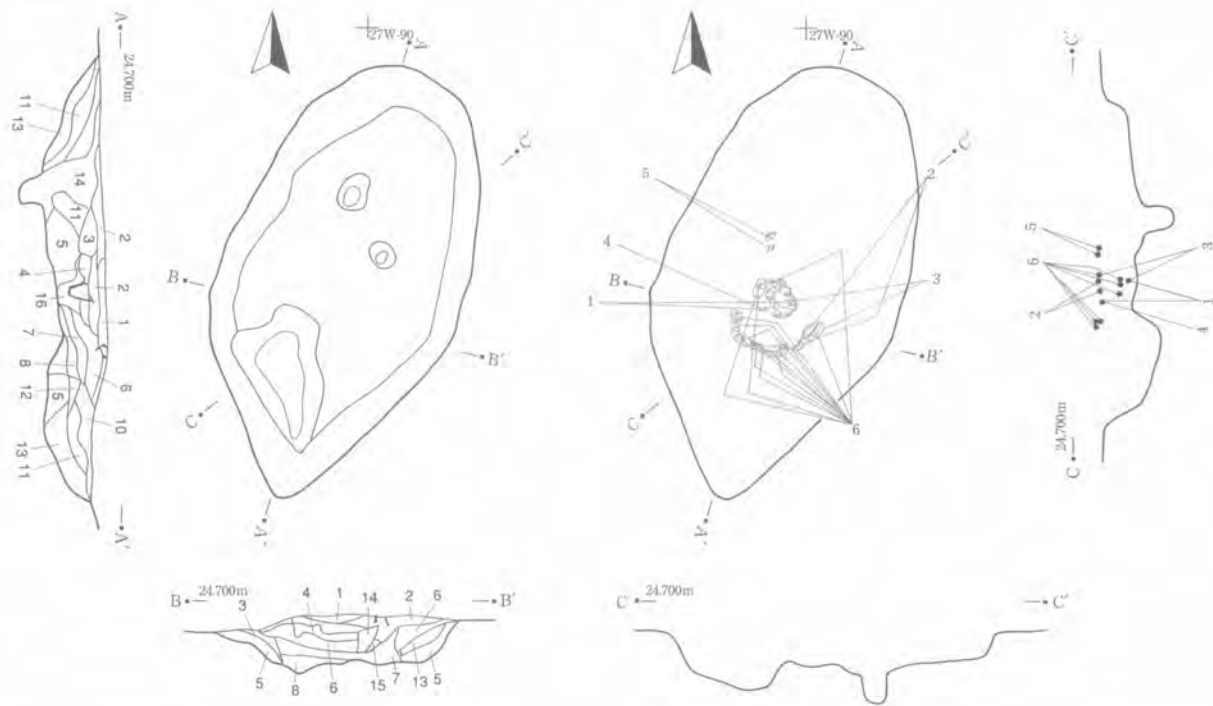
調査区の北側、28U-09付近に検出された。平面形はゆがんだ楕円形で、規模は長軸1.9m、短軸0.9m、深さ0.6mほどである。長軸方向は、N-12°-Eである。横断面を見ると、皿状であるのが中央部付近で急激に落ち込んでいる。縦断面は、比較的緩やかに中央部に向かって下降している。遺物は敲石(第48図20)の1点のみ検出された。機能は、形態から陥穴と推察される。しかし、一般的なものに比べ深さが浅いことから、上部がかなり削平されてしまったと考えられる。

### SK002 (遺構: 第30図, 図版9・17)

調査区の北側、27W-72付近に検出された。平面形は隅丸長方形に近い形であり、長軸1.7m、短軸1.1m、深さ1.8mほどである。長軸方向は、N-40°-Eである。横断面、縦断面ともに逆台形である。機能は、形態から陥穴と推察される。

覆土中から遺物は、土製円盤、土器片錘および第Ⅲ群第2類土器が主に検出された。本報告では18点を図示した。図示しなかった土器片は、第Ⅲ群1類b種が3点(41g)、第Ⅲ群2類土器が21点(392g)、第Ⅳ群1類a種が4点(34g)、第Ⅳ群1類b種4点(58g)、第Ⅳ群2類b種2点(20g)である。

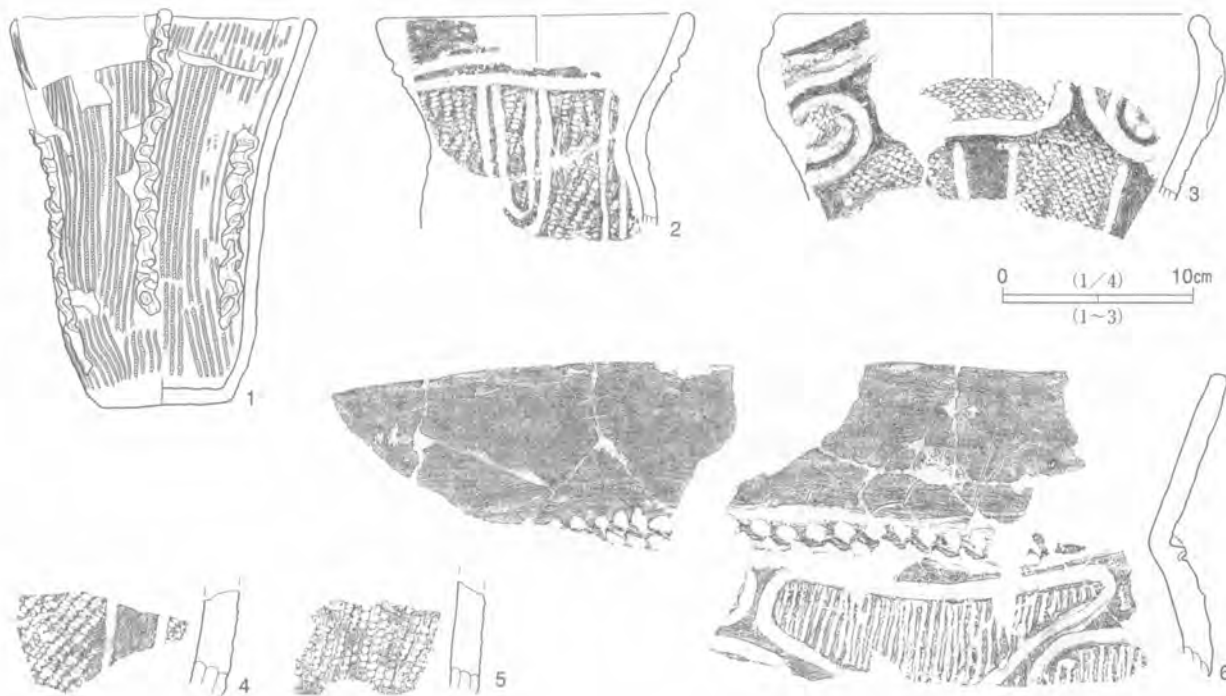
SX001



1. 焼土及びローム粒を少量含む黒褐色土
2. ローム粒を少量、焼土粒をわずかに含む暗褐色土
3. 焼土を主体として黒褐色土を少量含む
4. 焼土を主体として黒褐色土を少量含む
5. ローム粒及びロームブロックを主体として黒褐色土を少量含む
6. 極暗褐色土を主体としてローム粒及びロームブロックを少量含む
7. 極暗褐色土を主体としてローム粒及びロームブロックをわずかに含む
8. ローム粒及びロームブロックを少量含む暗褐色土
9. ローム粒及びロームブロックを多く含む暗褐色土 (IIよりもやや明色)

10. 9層とはほぼ同一であるが、層としてのしまりが弱い部分
  11. 10層よりもやや明色で、層としてのしまりが強い部分
  12. ローム粒及びロームブロックを少量含む極暗褐色土
  13. ローム粒及びロームブロックを多く含む暗褐色土
  14. 焼土ブロックを多く含む赤褐色土
  15. 焼土ブロックを少量含む赤褐色土
  16. 砂粒を少量含む、被熱により硬化した灰褐色土
- ※16層の下面のローム層上面は被熱により硬化している。

0 (1/40) 1m



第29図 SX001

0 (1/3) 5cm  
(4~6)



1～5は土製品であり、いずれも第Ⅲ群第2類に相当する土器片を加工している。1・2は土製円盤、3～5は土器片錘である。いずれの周縁も打ち欠きされたままであり、研磨等を行われていないが、使用によりややすり減った様に観察される。2・3は片側を欠損している。3は打ち欠きにより、広く凹部(切れ込み)を形成している。4は図右側のみ、幅1mm、深さ0.5mm程度の切れ込みを入れている。5は両側の角部を斜めに削るように切れ込みを作っている。6～18は第Ⅲ群第2類に該当する土器である。6は口縁部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部から緩やかに膨らみ、胴上部に最大径を有する器形となる。口縁部は、いわゆる折り返し口縁のように製作されるが、折り返した下端の継ぎ目をそのまま残している。屈曲部には、一条の沈線が巡り、その下には荒い交互刺突が施文される。さらにこの下には単節縄文が施文されている。7は胴上部に向かって大きく開き、胴上部の施文帯からは緩やかに開く器形である。施文帯は隆帯で区画され、隆帯に沿って沈線が施文され、区画内部には単節縄文RLが施文されている。また、施文帯の下は1.5cm程度の無文帯を経て単節縄文RLが縦位方向に施文される。8は口縁部が内湾し、口縁端部には横位の沈線が巡らされている。9は口縁部下に縦位の細条線が観察される。10は無文の口縁部である。11については破片上部に横位沈線が3条認められ、その下部には縦位方向の撚糸文(|)が施文されている。これらの施文後に、破片中央部を垂下するように、指頭による強いナデを加え、沈線及び撚糸文を磨り消している。この磨り消しは、丁寧なものではなく沈線を押しつぶすような粗いものである。12は沈線施文後に単節縄文RLを、17は単節縄文LR施文後に沈線をそれぞれ施している。14～16は櫛歯状工具による垂下する条痕のみが見られる土器片である。18は無文で平底の底部である。

### 3 遺構外出土遺物(第31～49図、図版18～35)

#### (1) 土器

#### 第Ⅰ群土器 早期の土器(第31図・第32図1～8、図版18～20)

第1類(第31図1～3、図版18) いわゆる撚糸文土器を一括した。1は口縁部が肥厚し、その直下から縦位でまばらな撚糸文rが施文されている。口唇部には丁寧なケズリ調整が施される。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰褐色である。2は器表面があげられているため判然としないが、口縁部付近から単節縄文LRが施文されていると観察される。胎土は細砂粒に富み、焼成は良好である。色調は灰褐色である。3は口縁部付近がやや強く外反し、外面全体に無節縄文Rが施文されている。胎土には砂粒が有り、焼成は良好である。色調は暗赤褐色である。

第2類(第31図4～6、図版18) 田戸下層式土器及び田戸上層式土器を一括した。4は胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。外面には丁寧なナデ調整が行われ、内面はナデ調整にケズリが加えられ、それぞれ器表面は平滑である。口唇部内面端部には、縦位の刻みがへら状工具で抉るようにして施文されている。5は、口縁部付近に斜位の低位隆帯が貼り付けされている。さらに、低位隆帯上は刻みが施されている。6は田戸下層式土器の尖底部である。

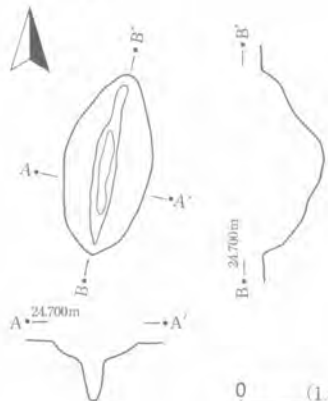
#### 第3類(第31図7～34・第32図1～8、図版18～20)

子母口式以降の早期後半である、いわゆる条痕文土器を一括した。基本的に無文のものが多。特記以外のものは、いずれも胎土中の繊維は比較的少量であり、器面調整には擦痕及び条痕が施されている。

第31図7～9は同一個体である。内削ぎ状の口唇部形態をなす。器面調整は幅7mmほどのへら状工具を用い、横方向で抉るように行われるため、器表面は凹凸に富む。第31図10～12・14～17は口唇部に刻みが施される。このうち、12・14～17は内削ぎ状の口縁部で、刻みは口唇の外端に施される。11の口縁

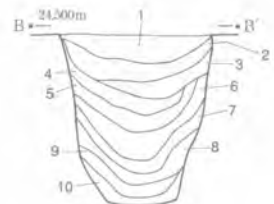
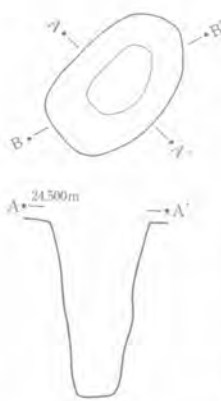
SK001

28U.00

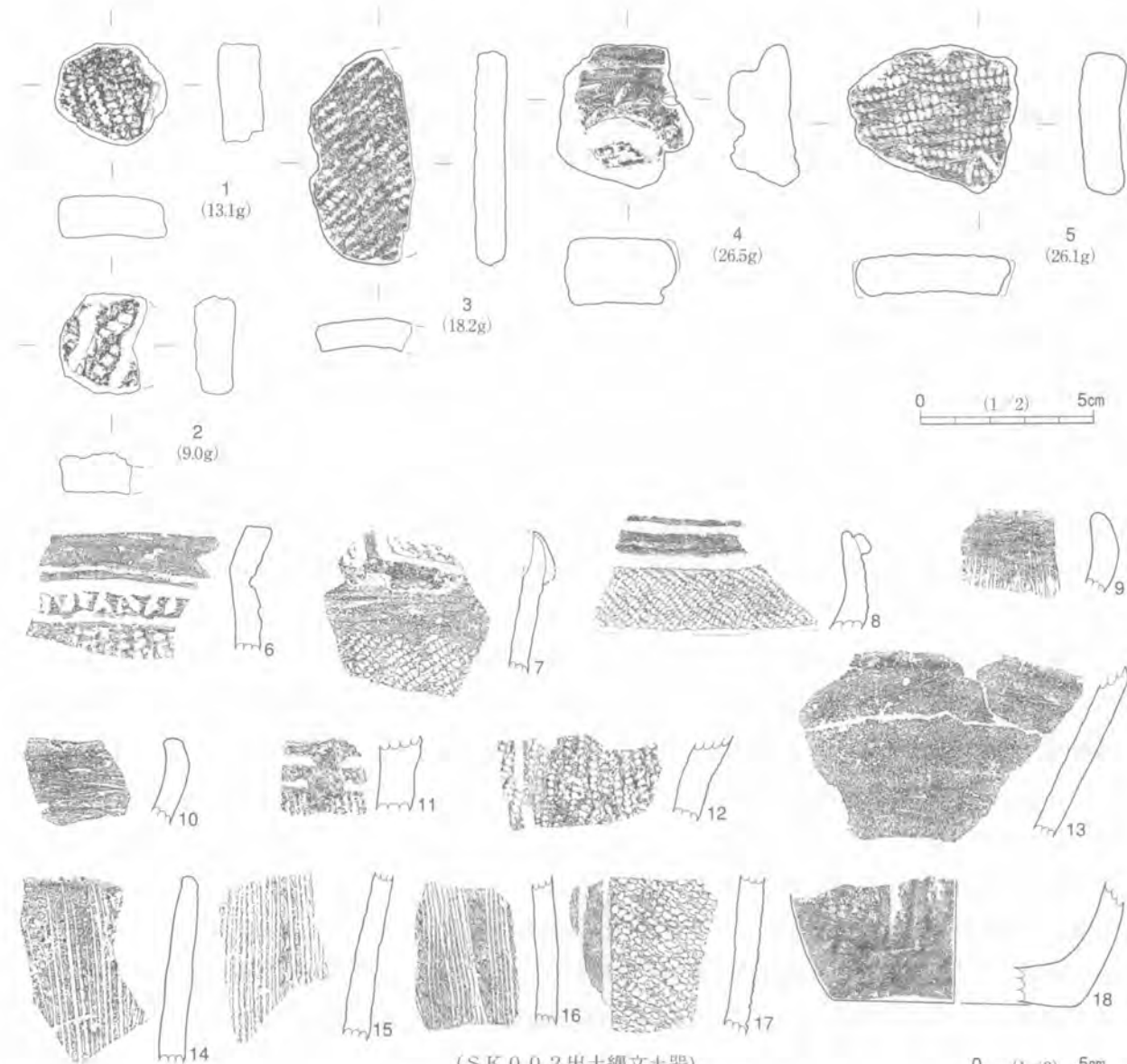


SK002

27W.72



1. ローム粒を少量含む黒褐色土
2. ローム粒を多量含む暗褐色土
3. ローム粒を微量含む黒褐色土
4. ローム粒及びロームブロックを多量含む暗褐色土
5. ローム粒及びロームブロックを少量含む黒褐色土
6. ローム粒及びロームブロックを多量含む暗褐色土  
(堆積のしまりが弱く、ぼろぼろしている)
7. ローム粒及びロームブロックが少量含む黒褐色土  
(堆積のしまりが弱く、ぼろぼろしている)
8. ローム粒及び大型のロームブロックを多量含む暗褐色土
9. 大型のロームブロックを多量含む暗褐色土  
(堆積のしまりが弱く、ぼろぼろしている)
10. 崩落したロームブロックの堆積層



(SK002出土縄文土器)

第30図 SK001・SK002

部内面には、1 cm～1.5cmほどでの幅で斜位の条痕が施文されている。

第31図22～34・第32図1～7は胴部破片である。19～21・23・27～29は内外面ともに擦痕及びナデによる調整が施されている。20・21は比較的胎土中の繊維量が多い。29は砂粒を多く含み、雲母細粒及び石英粒（径1 mm～3 mm）も見られる。24・25は同一個体である。底部近い破片であり、外面のみに条痕が認められる。外面の条痕もナデが加えられ、判然としない部分がある。胎土中には繊維が比較的多い。22・26・30～34・第32図1～7は内外面に条痕が施される。31の内面には横位方向の浅い条痕の後に、幅8 mmほどのヘラ状工具による縦方向のまばらな条痕が施されている。23～29の胎土には砂粒が比較的多く混入されており、器表面がざらつく。22・30・32～34・第32図1～7は堅致な焼成で、内外面ともに明瞭な条痕が施される。

第32図8は上半部を復元し得た資料である。口径は40cmほどである。口唇はつまみ上げられるように成形され、内削ぎ状となっている。内外面とも、横位方向を基調とする明瞭な条痕が施されている。胎土中の繊維量は少なく、堅致な焼成である。

第31図18～21は同一個体である。胎土中の繊維量が多く、器表面は荒れている。18は胴部にある屈曲部分に巡る横位隆線が貼り付けられている。隆線上には刺突による刻みが加えられ、隆線直下には断面三角形の沈線が施文される。19～21は無文の胴部片である。19をみると、まばらながら内外面に条痕が認められる。文様及び胎土の繊維量から、茅山下層式土器に比定されると考えられる。

## 第Ⅱ群土器 前期の土器（第32図9～13、図版20）

前期の土器を一括した。9～12は前期後半に、13は前期前半に、それぞれ帰属する資料と考えられる。9は薄手の器壁であり、口縁部付近で大きく外反する器形である。破片下部の屈曲部付近には、幅3 mmほどの横位沈線が施文されている。10は3条の沈線が波状口縁に沿って、施文されている。沈線間には円形刺突文、下には単節縄文LRが認められる。11・12は同一個体である。縦位の平行線文が施文されている。13は底部片である。外面及び底面には単節縄文RLが施文されている。胎土には砂粒及び繊維が多く混入されている。

## 第Ⅲ群土器 中期前半の土器（第32図14～18・第33～35図、図版20～24）

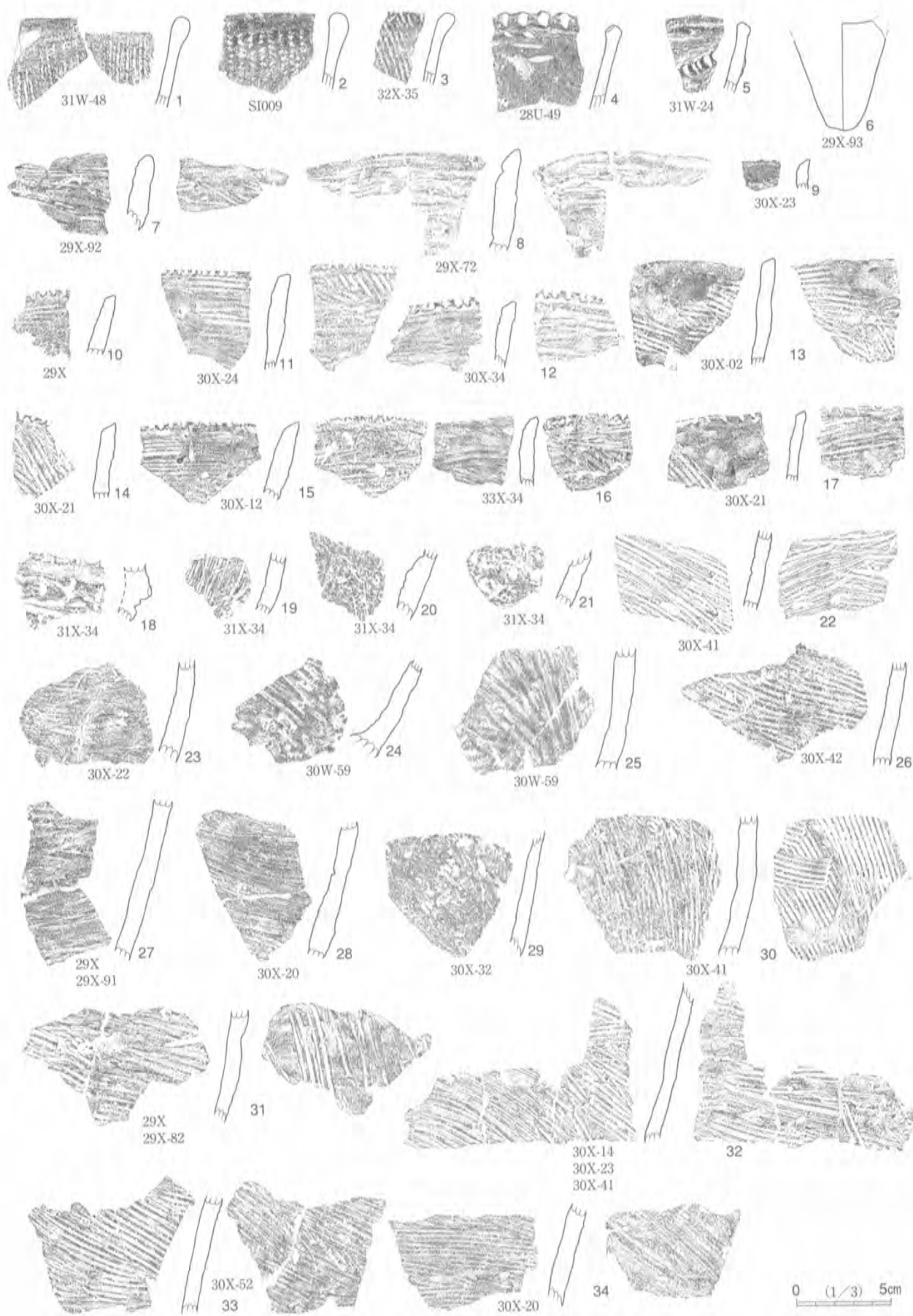
中期前半の阿玉台式及び併行型式資料を一括した。なお、従前「中峠式」とされていた資料も、本群に含めて分類した。

### 第1類（第32図14～18）

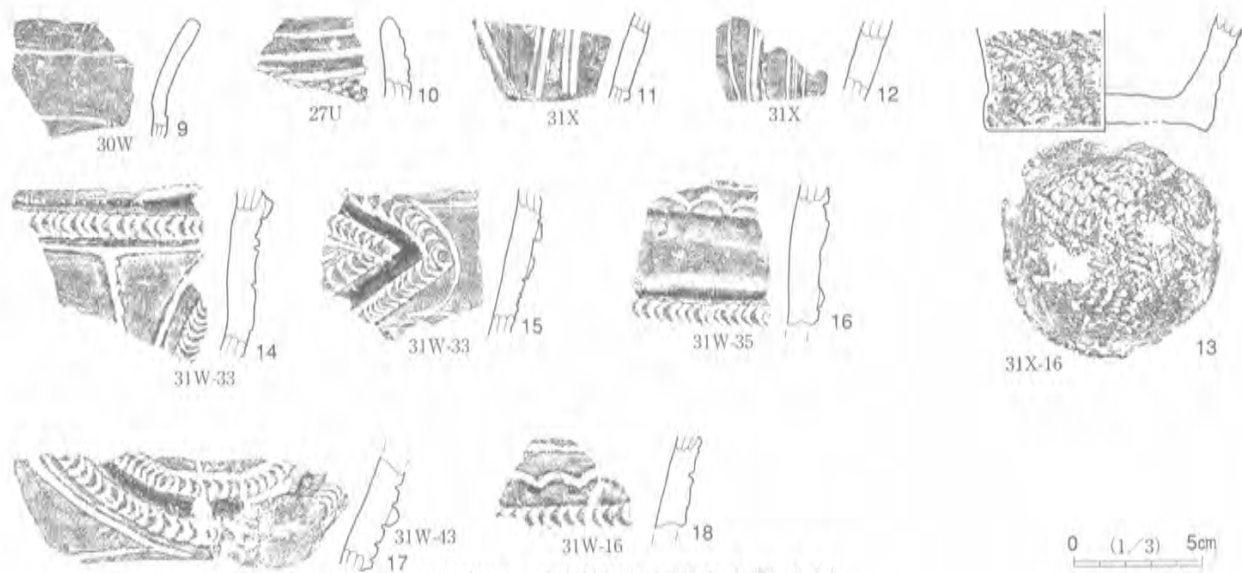
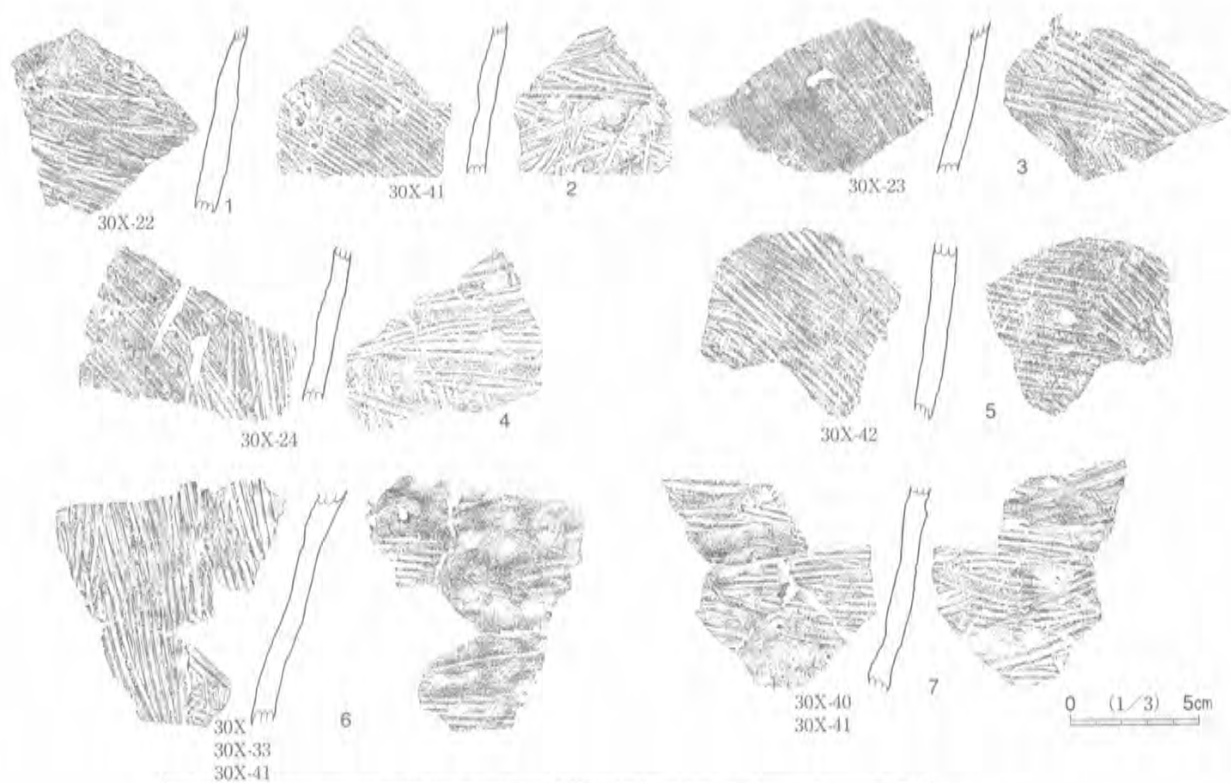
勝坂式土器を一括した。14・16・17・18は同一個体である。胎土には砂粒が多く混入されるため、器表面はざらついている。内面は横方向のケズリによって器面調整がなされている。半截竹管を用いた押引文、先尖状工具による沈線文、幅6 mm前後の隆線文によって、波状や曲線の文様が構成されている。15もほぼ同様の外面的特徴を持つが、色調は赤みを帯び、器壁もやや薄いことから別個体と判断した。

### 第2類（第33・34図）

阿玉台I a式・I b式・II式土器を一括したが、特記しない大半の資料は、I b式に比定できると考えられる。1・2は薄手の器壁であり、区画が未発達な角押文によって文様が構成されている。2の口縁部内面にはわずかながら稜が形成されている。胎土は細砂粒をやや多く含んでいるが、雲母粒は微量である。以上の特徴から、本資料は阿玉台I a式に比定される可能性が強い。第33図3～28、第34図1～35は、基本的に隆起線と角押文が組み合わさって、文様を構成する資料及びその個体の破片である。胎土には砂



第31图 遺構外出土縄文土器 (1)

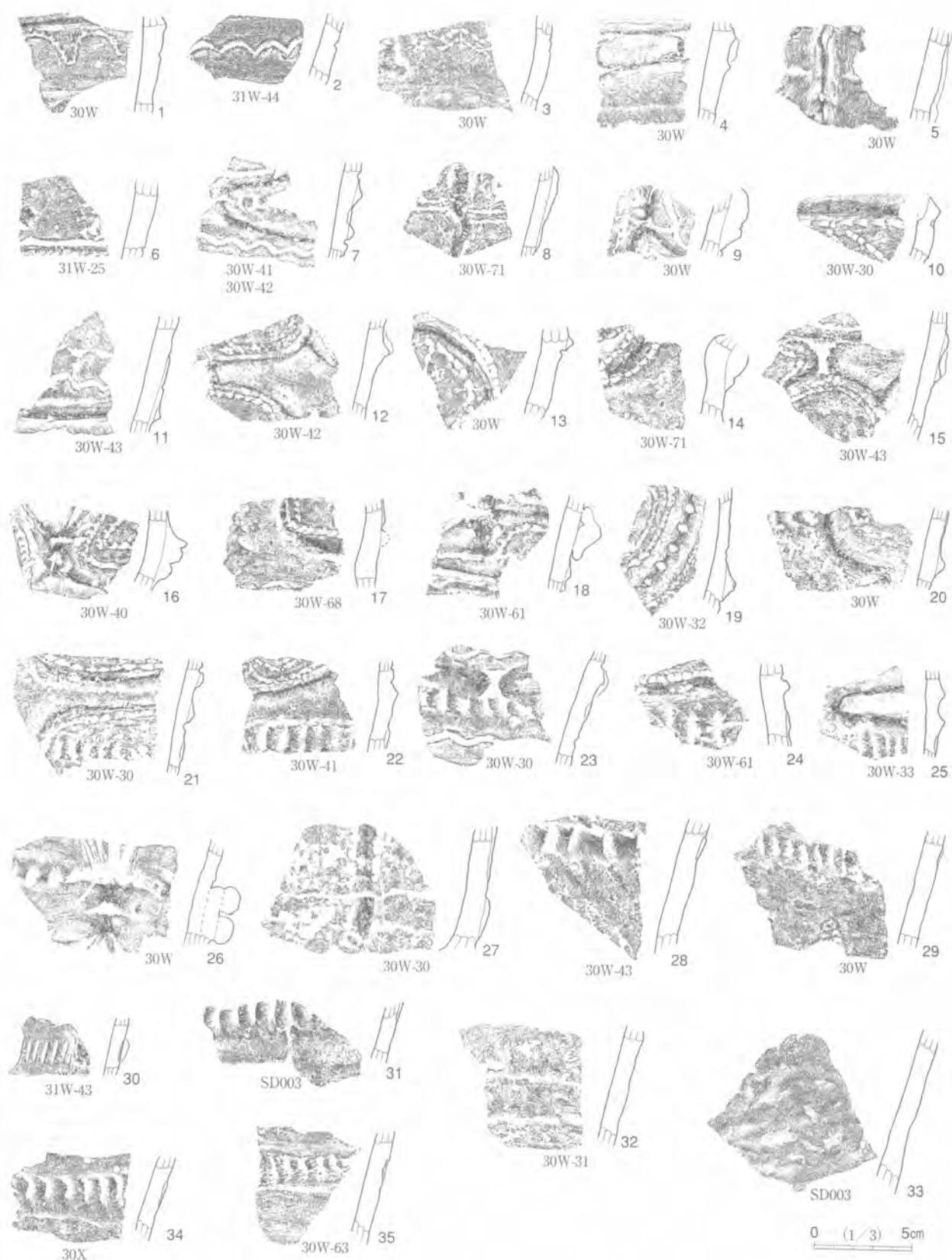


第32図 遺構外出土縄文土器 (2)



第33図 遺構外出土縄文土器 (3)





第34図 遺構外出土縄文土器 (4)

粒が多く混入され、雲母粒も多く見られる。第33図7～10は口縁部の上下が隆起線によって区画され、その内部を角押文による幾何学状及び波状の文様が施文されている。第33図11～16・20・25・26は隆起線により口縁部を楕円状に区画し、その内部に角押文が施文されるものである。13・14・16は隆起線に沿って2条の角押文が施文されていることから、阿玉台Ⅱ式に比定できる。第33図17・18は扇状把手がつく口縁部である。把手部分には一列の押引文が施文されている。第33図21～23は扇状把手の頂点部分である。押引文は複数列施文されていることから、阿玉台Ⅱ式に比定できよう。27・28は阿玉台Ⅰb式ないしⅡ式土器の隆起帯による装飾の一部分である。第34図1～35は胴部片である。19・22は明確に阿玉台Ⅱ式に比定できるが、他のものは阿玉台Ⅰb式の可能性が高い。21～31・34・35は胴部を横位に巡る刻文が特徴的である。

### 第3類 (第35図)

阿玉台Ⅲ式～Ⅳ式土器及びその近辺に位置づけられるものを一括した。いわゆる「中峠式」や「大木8b式」も本類に含めた。第35図1～4は同一個体である。隆起帯に沿って沈線が付随する特徴から、阿玉台Ⅳ式に比定できる。胎土には大量の長石粒(径2mm～5mm)及び細砂粒が混入され、雲母粒もかなり目立っている。1・2の幅広の隆起帯上には無節縄文Lが施文されている。また、1の沈線区画内部には縦位の、3は屈曲部横位にそれぞれ鋸歯状沈線が認められる。6は無文で幅狭の口縁部下部に隆線が貼り付けられ、口唇部外端とともに刻みが付される。また、これらの文様の後に縄文が施文される。7は胎土中に細砂粒および雲母粒が大量に含まれている。8～10は同一個体である。色調はにぶい黄橙色であり、他の資料と比して異質である。胎土には中粒砂が多く含まれ、赤色スコリア粒が特徴的に含まれている。11・12は同一個体である。キャリパー状の器形になると思われ、幅広の口縁部には単節縄文RLを地文として隆線を基調とする文様が展開している。13は胴部中央に巡る隆帯の突起部分が欠損している。15～17は同一個体の可能性がある。15は口縁部に、16・17は屈曲部に貼り付けた粘土帯に、それぞれ先丸の丸棒状工具による刺突列が施文されている。18は幅広の口縁部に、隆起帯を用いた入組状の文様が描出されている。豚鼻状の突帯も観察される。19は円形刺突文、20・21は隆起線による文様が見られる。22・23は同一個体であり、櫛歯状工具により波状文様が施文される。24・25は半截竹管による連続刺突文が見られる。26は波頂部の突起であり、27は半円状の突帯であり、それぞれ円形の刺突文が全面に施文されている。28・29も突帯部の破片である。29は左側面に曲線状文様が、右側面には付け根付近に鋸歯状の沈線文が細かく施文されている。

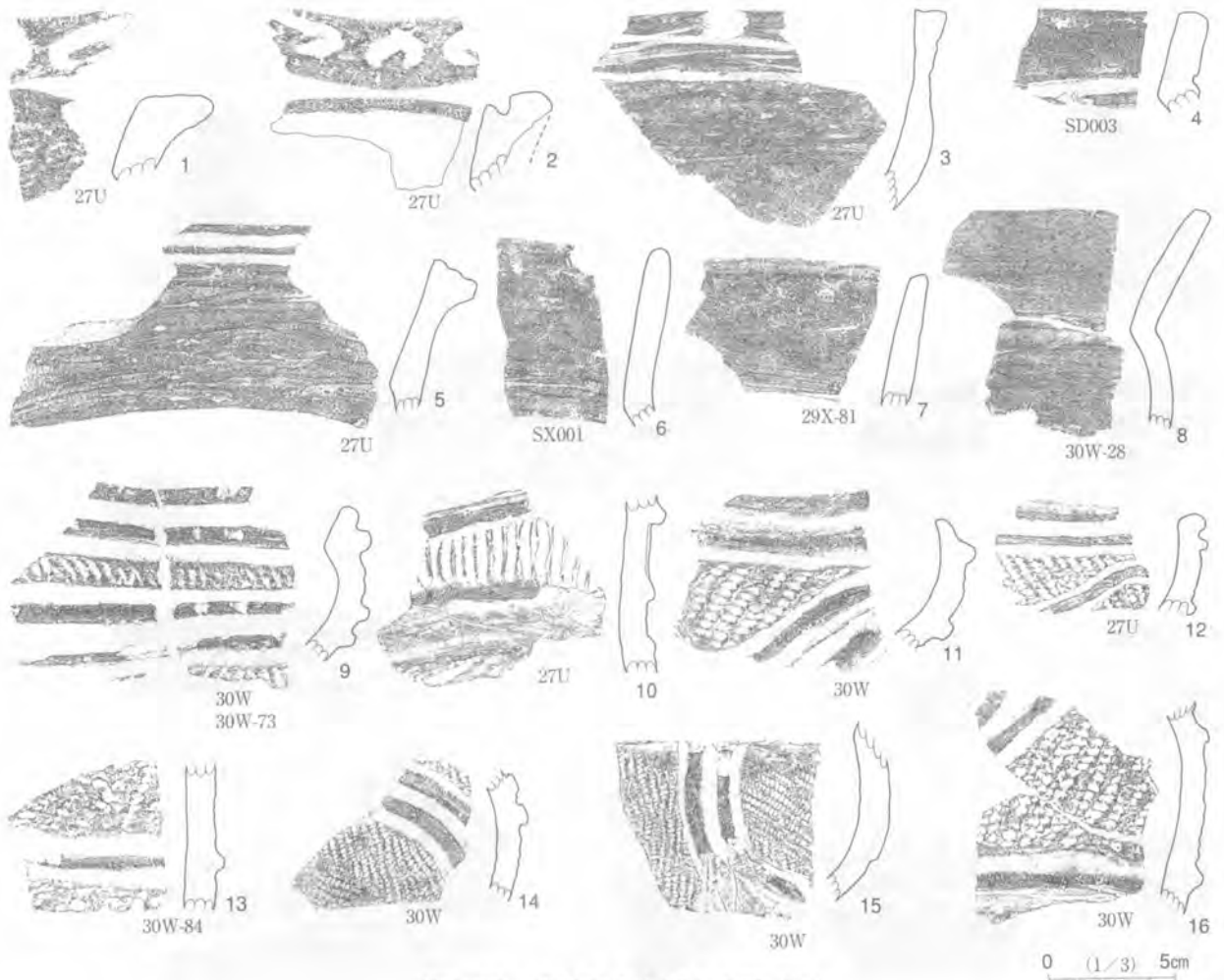
### 第4類 (第36図1～8)

文様が希薄な浅鉢形の土器を一括する。阿玉台式後半から加曾利E式初頭にかけて位置づけられると思われるが、便宜上本群に含めて分類した。従前「中峠式」とされていたものも多いが、「中峠式」自体の存在が白紙に戻っている現在、明確な時期認定は避けておくこととする。1・2は同一個体である。口唇部の外端に向かって大きく肥厚している。口唇部には沈線による曲線文が施文されている。3は口唇部に1条及び口縁部に2条、浅く粗い沈線が施文されている。口縁部にはこれらの沈線以外にも、ごく浅く、概ね横方向の不規則な沈線を見ることができるが、文様を意識したものかどうか不明である。4は口縁部下端に横位沈線が入り、その部分で大きく屈曲している。5は口縁部が大きく外反し、外端が肥厚する口唇部上には2条の浅い沈線が施文されている。6・7は同一個体である。8も同様の器形をしているが、口縁部付近で大きく「く」の字状に屈曲している。





第35図 遺構外出土縄文土器 (5)



第36図 遺構外出土縄文土器 (6)

第IV群 中期後半の土器 (第36図 9~16・第37~39図, 図版24~28)

中期後半の加曾利E式土器を一括した。

第1類 (第36図10)

10は隆線間に縦位の集合沈線が施文されている。器形が大きく外反する部分の胴部破片である。加曾利E 1式土器に比定される。

第2類 (第36図 9・11~16)

いずれも縄文を地文とし、口縁部の施文帯に、太い隆線を基調とした曲線文ないし波状文を構成するものである。14・15は同一個体と考えられる。本類資料は、加曾利E 1式に比定される。

第3類 (第37図 1~12)

口縁部の施文帯に隆線 (貼付及び削り出し) による曲線文等を描出しているものである。隆線には沈線が付随し、その区画内には縄文が施文されている。1は口径が14.4cmほどの小形土器である。口縁部の施文帯は、抉るような太沈線で渦巻状及び曲線状の意匠文が施文されている。口縁部下には沈線が垂下する。口縁部区画内及び沈線間には複節縄文LRLが施文されている。2~8は貼り付けによる隆線で、曲線文等を描出し、沈線を付随させることで、その盛り上がりが一層強調されている。6・8の区画内部には単節縄文LRが施文されている。9~12は基本的に沈線と縄文のみで施文されている、沈線の深さも上記の

資料に比べると浅い。本類資料は、加曾利E 2式に比定される。

#### 第4類 (第37図15・16・19・20, 第39図1)

胴部の施文帯に連弧文が施文されているものである。第37図15・16・20は同一個体である。複節縄文RLRを地文として、幅広の平行沈線を2本1組にして口縁部に、その下に連弧状に施文されている。第37図20は、3本1組の集合沈線により、横位区画文及び連弧文が施文される。第39図1はキャリパー形で、口径が約17.2cmの小形土器である。口縁部に交互刺突文が巡り、以下底部付近まで少なくとも3段の施文帯が形成され、燃糸文Rを地文として2本の沈線が連弧状に展開する。なお、沈線間の燃糸文は完全に磨り消されている。口縁～胴上部は黒褐色であるが、胴下部は被熱により赤化し、器表面も荒れている。本類資料は、概ね加曾利E 2式に比定されようか。

#### 第5類 (第37図13・21・24～34, 第38図22, 第39図2・5・9)

縄文を地文として、沈線により懸垂文が施文されるものである。第37図13・21・24・32・33第39図9は縄文の地文上に沈線が施文され、磨り消などが行われていない。なお、33・34は同一個体の可能性がある。13は口縁部から4本の沈線が垂下する。21は垂下する沈線間に端沈線が加えられる。24は口縁部区画と3本の懸垂文のほかに横方向へ展開する複数の沈線が確認できる。第39図9は単節縄文RL地文上に2本1組の直線的な懸垂文の他に、鋸歯状の懸垂文が施文されている。大木式の影響であろうか。第37図25～32, 第38図22, 第39図2・5はいわゆる磨消懸垂文である。地文は概ね単節縄文であるが、20は複節縄文LRL, 32は無節縄文Lが密接に施文され、第39図2は複節縄文RLRである。本類資料は、概ね加曾利E 2式に比定されようか。

#### 第6類 (第37図14)

14はキャリパー形の器形をなす。口縁端部付近に刺突列が巡り、一条の沈線で区画され、そこから大きな振幅の波状沈線が縄文地上を垂下する。破片下部に、貼付隆線が巡り、両脇に浅い沈線が施されたと思われるが、剥落しており詳細は不明である。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。

#### 第7類 (第37図23・第39図6)

口縁部と胴部の境で、器形のくびれ部分に、沈線及び刺突が施されるものである。23の地文は単節縄文LR, 6の地文は燃糸文Lである。

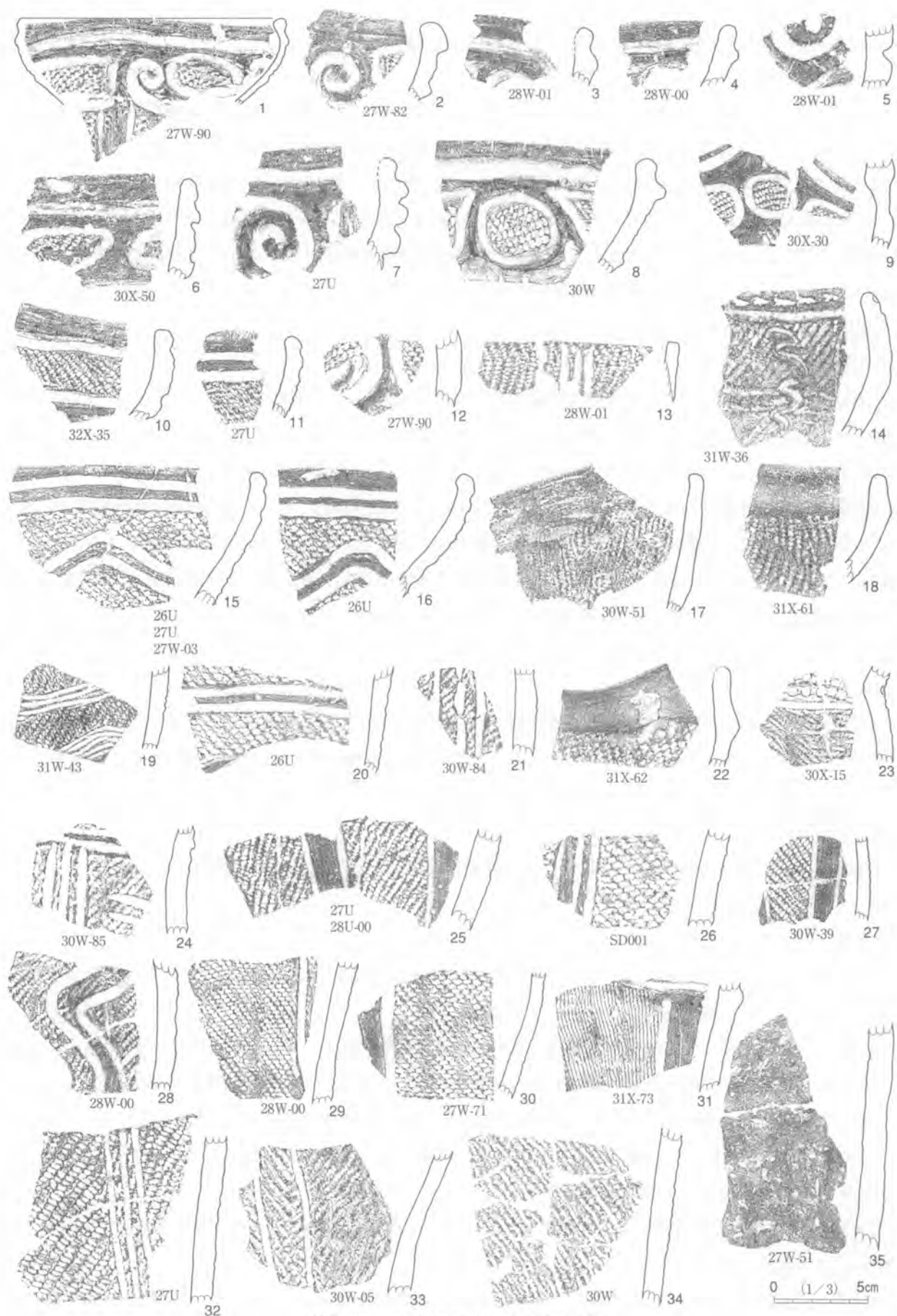
#### 第8類 (第38図1～21)

条線が施文されるものである。1・2・6はキャリパー形の器形となる。3・4もわずかに口縁部が内傾し、キャリパーの片鱗が伺われる。

7～9は同一個体である。幅狭で折り返し状の口縁部は無文であり、その下3cmほど、胴上部とはコンパス文で区画され、その間に波状の条線が粗く施文される。区画文の下には縦方向の条線が施文され、もう一段コンパス文による区画が行われるようである。胎土には砂粒を大量に含み、雲母粒も目立っている。13・14は半截竹管によって条線が描出されている。隆線による懸垂文も観察される。いずれも曾利2式に併行するいわゆる籠目文土器の資料であろう。

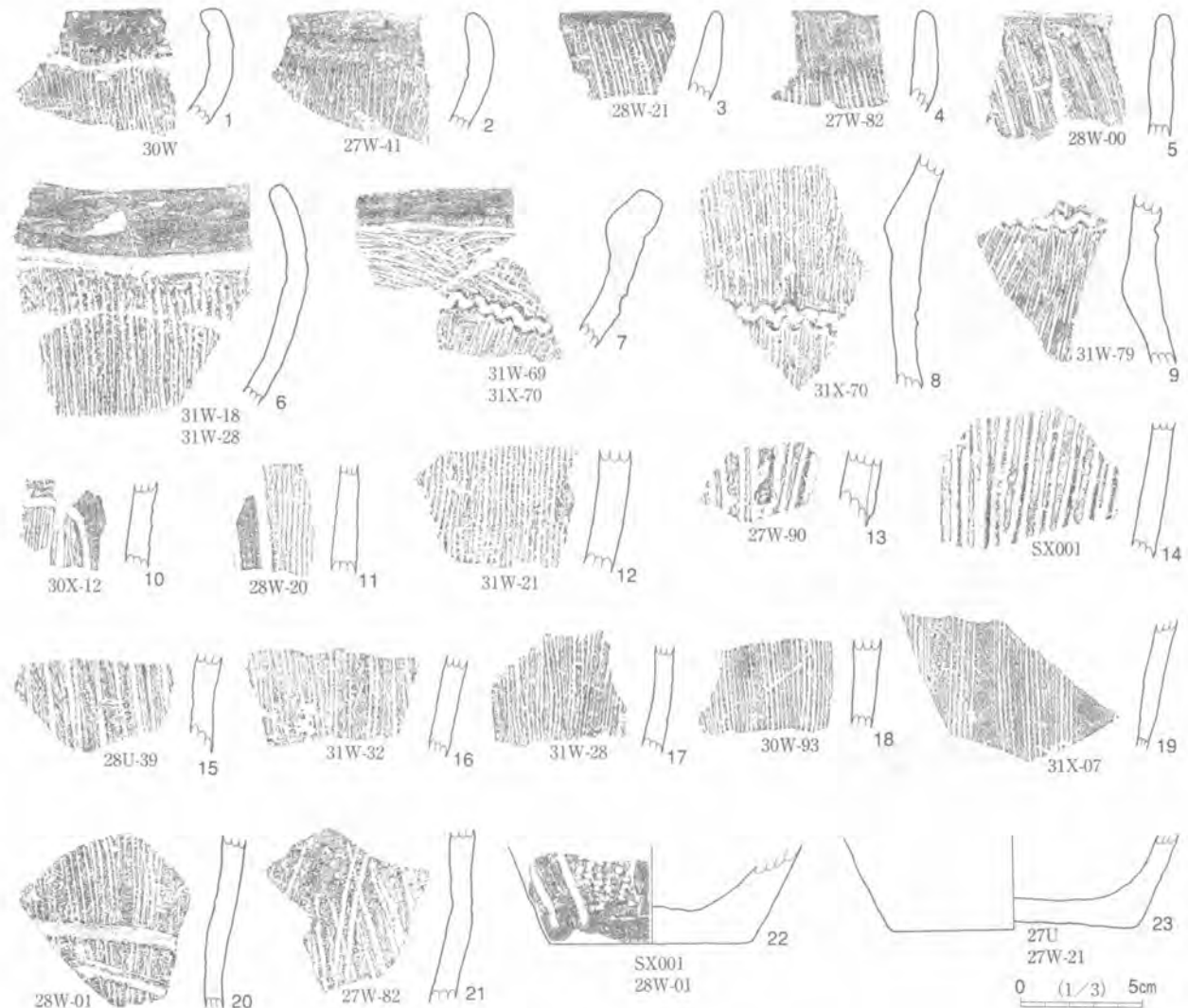
10・11は、縦方向の条線地文上を沈線によって区画し、磨り消しを加え、無文部を形成している。加曾利E 3式に比定される。

12・17・18は密に条線が施文される。15・16も比較的密に施文されているが、先尖状の工具を束ねたのではなく、先割れ状のような工具を用いて施文している点で異なっている。19～21は胴部下半の破片と



第37図 遺構外出土縄文土器 (7)

思われる。19は条線束がやや疎らになっている。20は条線地に、ヘラ状工具による横方向の浅沈線が加えられている。21は条線がランダムに施文されている。底部の直上と思われ、外面は被熱により明褐色になり、内面は焦げ等により黒褐色となっている。これらは特定地への比定は困難であり、加曾利E 2式～E 4式にかけての資料とするにとどめたい。



第38図 遺構外出土縄文土器 (8)

第9類 (第37図18・22)

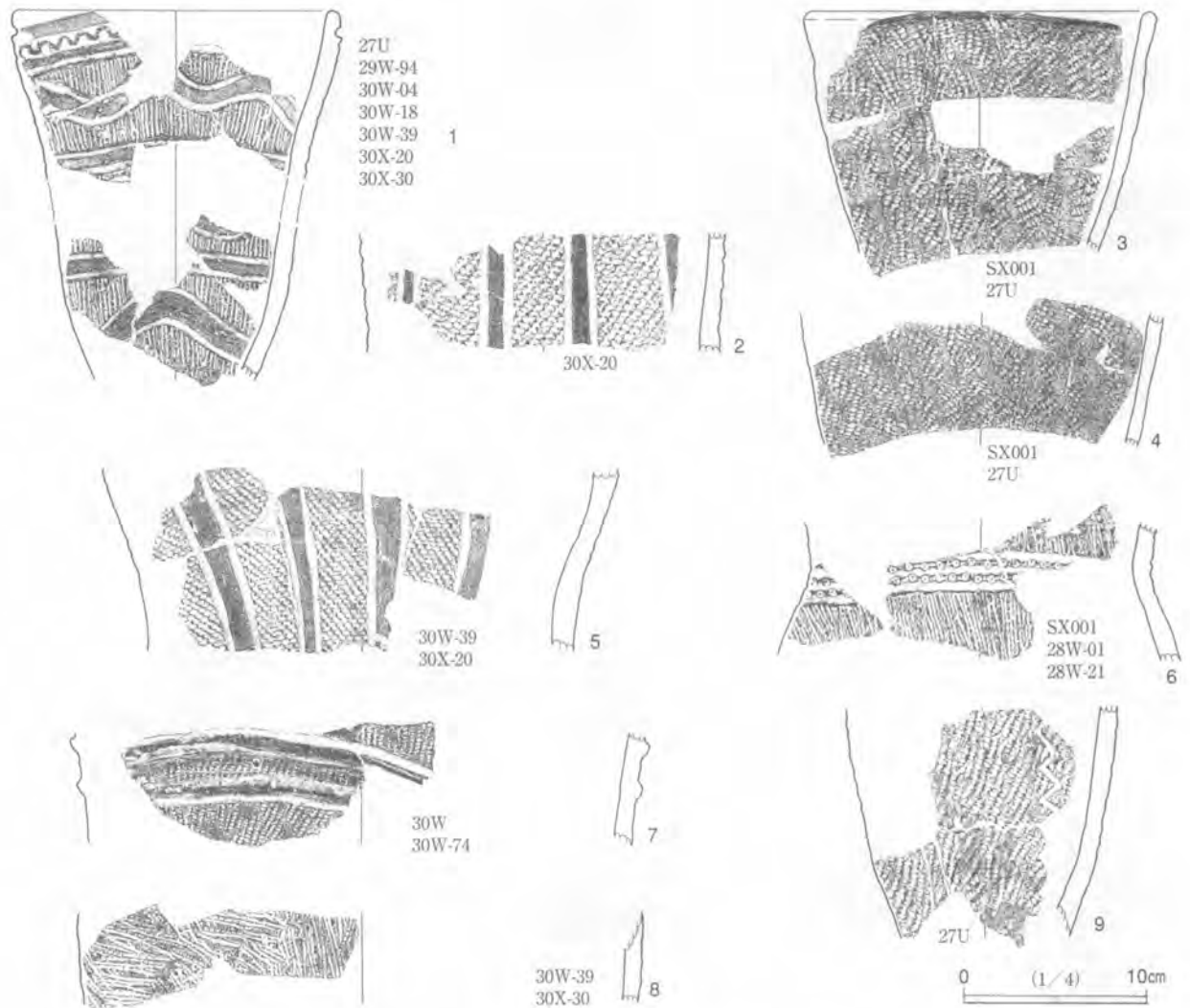
18・22は器形が変化する口縁部下端が細隆線状になっている。22の口縁部および内面は横方向のミガキにより丁寧に調整され、平滑で光沢を持つ。本類は加曾利E 4式に比定される。

第10類 (第37図17・35, 第38図23, 第39図3・4・8)

縄文のみ、ないし無文の資料である。第37図17は口縁部の縄文がナデにより磨り消されている。胎土には粗砂粒を多く含み、中でも白色スコリア粒が目立っている。35は底部直上の破片と思われる。器壁は厚手であり、胎土にはスコリア粒 (径3mm程度) を多く含んでいる。第38図23は平底の底部である。破片の上端に縄文の痕跡がある。第39図3は復元口径18.8cmほどの深鉢である。口唇部は丸みを帯び、緩やかに外反しながら立ち上がる比較的単純な器形である。単節縄文RLが全面に施文される。4も単節



縄文RLが全面に施文される。内面は、縦方向の削りが丁寧に行われ、器面は平滑で光沢を帯びている。8は撚糸文Lがランダムに施文されている。本類については、明確な時期認定は困難であり、本群（加曾利E式）全体に伴出する可能性がある。



第39図 遺構外出土縄文土器（9）

第V群 後期前半の土器（第40～43図，図版29～31）

後期後半の堀之内1式土器を一括した。

第1類（第40図1～41，第43図1・2）

堀之内1式に通有な意匠文が、沈線を主体として施文されるものである。1・2は隆線による懸垂文が施文されている。また、38は隆線による懸垂文とともに胴部文様の下端区画が観察される。区画の内部は、縄文を地文として沈線による意匠文が描出されている。1は波頂部の突起部分の破片である。2は頸部を区画する隆線が巡り、そこから大きく外反するようである。3～5，7・8，12～33・37は縄文を地文として、沈線による意匠文を主体としてが施文されている。6・9～11・35・36・39は無文地上に沈線文のみよって意匠文が施文される。40は縄文のみの破片である。41は把手を持つ個体の破片である。

断面形態は緩やかな「く」の字状であり、胴部へ向かって大きく膨らむようである。口縁部にはやや幅広の無文部を挟んだ隆線が巡り、下の隆線は把手と結びついている。把手は扁平で幅広な形態である。胴部には単節縄文RLが施文されている。第43図1は推定口径が32.6cmの深鉢である。胴部下半以下を欠き、それ以外も1/4程度の残存である。4単位の突起を持つ波状口縁で、比較的寸胴な器形であり、胴中央部付近からはほぼ垂直ないし胴上部でやや凹みながら立ち上がっている。単節縄文LRを地文として、沈線文による意匠文が施文される。口縁部には2本の沈線が巡り、波頂部に3点の刺突文が施され、ここから「J」字状の沈線文が展開する。内面はナデにより調整されるが、口縁部以下は被熱のためか、器面の大半が荒れている。また、一部に煤の付着が見られ、破片の下端部は赤化している。2は外削ぎ状の口唇部に一条の沈線が巡り、口縁部には幅広の無文帯が形成される。口縁部の下端は沈線によって区画され、単節縄文RLを地文とし、沈線による蕨手状の文様が展開している。器形は、口縁部と胴部の区画線付近にくびれを持ち、口縁部がやや外反するものの、最大径は胴上部にある。胴下部から外面は赤褐色に、内面は黒褐色に変化しており、被熱の影響が激しいものと思われる

#### 第2類 (第41図1～23)

条線を主体とした文様を持つものである。1～3・10・11は同一個体である。緩やかな波状口縁を無し、口縁部にやや幅広の無文帯を形成し、その下端は単沈線によって区画される。その区画線から、先尖状工具を5本束ねたものを用いて、垂下する条線を1cm程度の間隔を開けながら施文している。外面口縁部及び内面には、やや粗いながらもミガキ調整が施され、器面は光沢を持つ。4～9・16には波状に垂下する条線が施文されている。12～15・19～21の条線は直線状となり、異方向に施文することで、幾何学状のモチーフを描出している。20は非常に浅い条線をかなり雑に施文している。21は口縁部の上下を横位条線で粗く区画し、内部に鋸歯状の条線を施文している。17・18・22・23は同一個体である。口縁部に3本1組の条線を横方向に、それ以下は縦方向に5本1組の条線を施文するのが基本であるが、粗く施文しているため方向がややランダムになっている。また、器面を抉るように工具をかなり強く押し引き、それが重なる部分も多いため、かなり粗い仕上がりとなっている。

#### 第3類 (第41図24～32)

無文地に沈線文で曲線文などが施文されるものである。いずれも施文は疎らな傾向にあり、無文部を多く残している。24～26・30は同一個体である。半截竹管による平行沈線で、曲線状の文様などが施文される。28・29・31・32は同一個体である。先尖状工具による単沈線で、同様の文様が施文されている。27は単沈線を施文後、器面にナデが加えられ、一部磨り消されている。

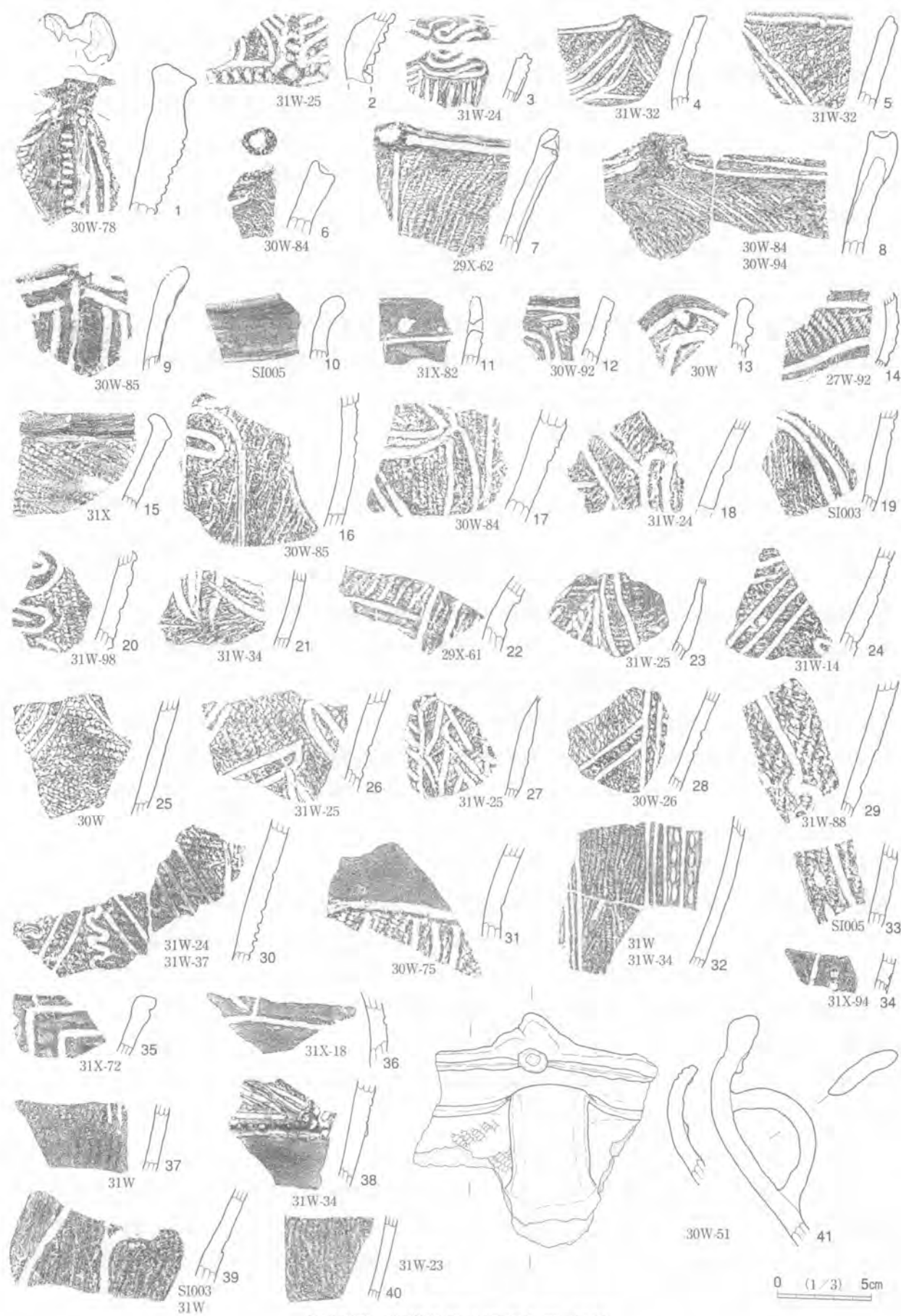
#### 第4類 (第41図37)

単節縄文LRを地文として垂下する複数の沈線が観察される。内面には縦方向のケズリが施されている。器壁は薄手であるが、堅致な焼成である。

#### 第5類 (第41図33～36・38～40, 第43図3)

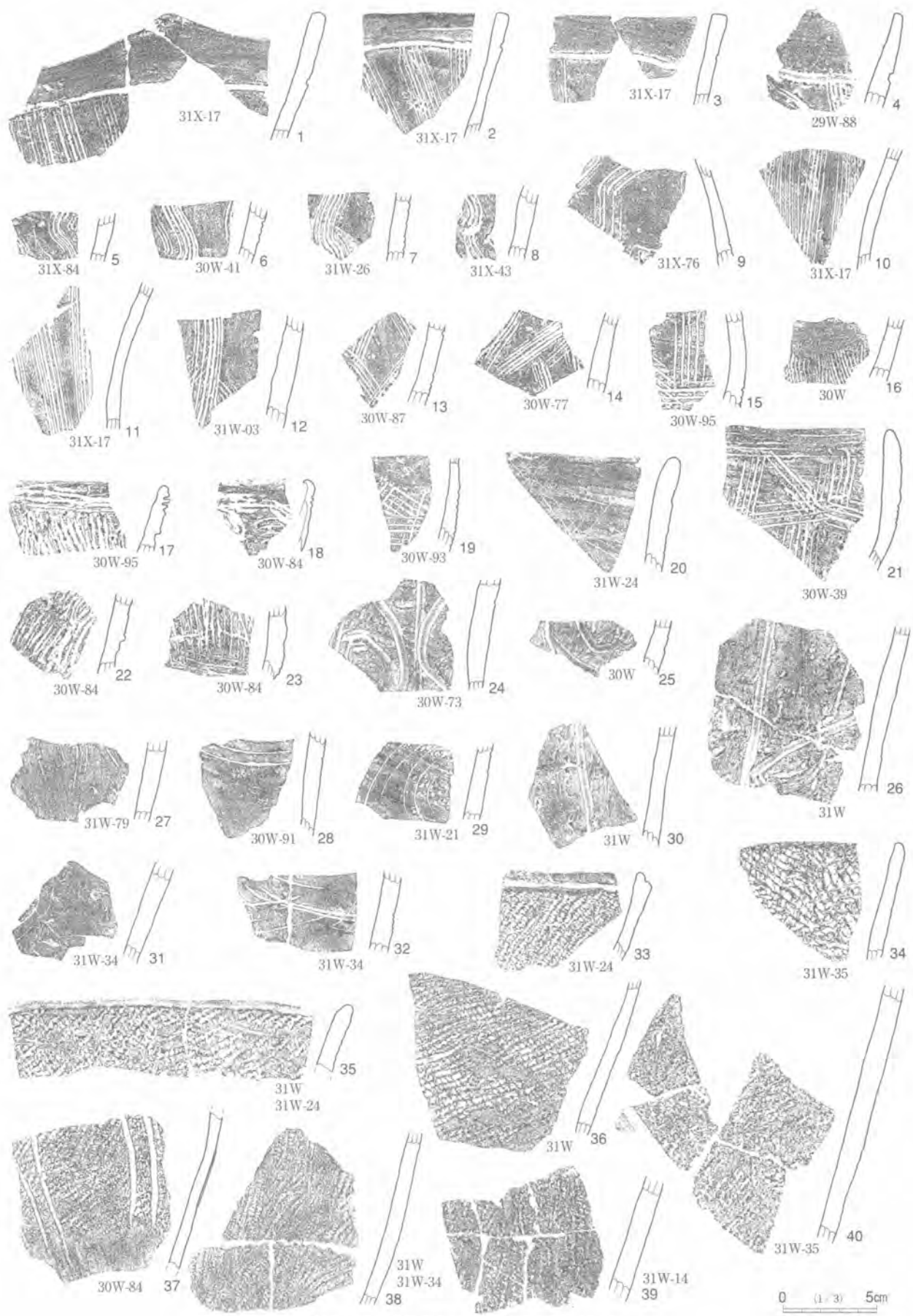
第43図33の口縁部には一条の沈線が加えられ、以下全面に単節縄文LRが施文されている。第43図3は単節縄文RLが胴下部まで施文されている。底部付近には、やや幅広のヘラ状工具による縦方向のケズリが施され、一部縄文を磨り消している。この付近から色調は赤褐色に変化し、内面も黒褐色になっており、被熱の影響を示していると考えられる。

#### 第6類 (第42図1～7)



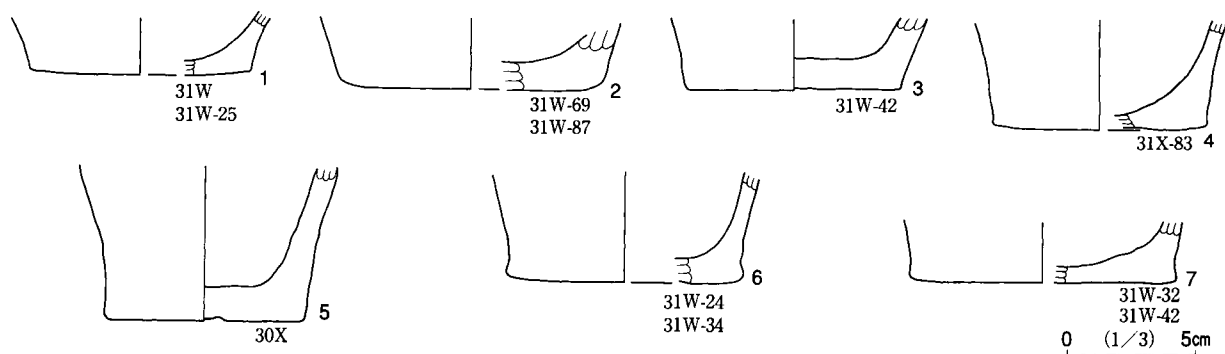
第40図 遺構外出土縄文土器 (10)





第41図 遺構外出土縄文土器 (11)

本群の底部資料を一括した。



第42図 遺構外出土縄文土器 (12)

### 第VI群 後期後半の土器 (第44図, 図版32)

加曾利B式土器を一括した

#### 第1類 (第44図1~21・25)

精製土器を一括した。器面調整はいずれも良好であり、丁寧なケズリやミガキによって器面が光沢を持つものもある。1~3・6~9・12~14・18は、磨消縄文による横帯文が施文され、区切り文を見ることがもできる。8・9・14の内面には集合沈線が巡っている。4は波状口縁となる個体である。単節縄文LRを地文として、沈線を施文している。内面にはミガキが施され、器面は平滑で光沢を持つ。5は無文の口縁部破片である。器面全面に丁寧なケズリが施され、器面は光沢を持つ。18は無文帯を挟んで、上下に横帯文が形成されていると思われる。10・11・25は体部に斜線文帯を持つ個体である。10は口縁部が無文となり、体部との境が「く」の字状に屈曲し、体部に斜線文帯が形成されている。25は急角度に屈曲していることから、いわゆる「ソロバン玉状」の器形となる個体と思われる。内面調整はミガキが施されているが、抉るように強く磨くため、ミガキ1単位ごとに形成される稜が顕著である。15~17・19~21は磨消縄文が曲線状に展開するものである。15は波状口縁をの個体である。20・21は同一個体である。19は、内傾する頸部に弧線状の文様が展開する「ソロバン玉状」の器形となる個体と考えられる。口縁部との境は「く」の字状に屈曲するが、沈線などによる確かな分帯は見られない。22・23は同一個体の可能性がある。内削ぎ状の口縁部断面形態をなし、口唇部外端には丸棒状工具の腹面を横圧することで形成する刻みが施される。単節縄文LRを地文として、沈線が加えられている。24は縦位方向の磨消縄文が確認される。

#### 第2類 (第44図22~24・26~37)

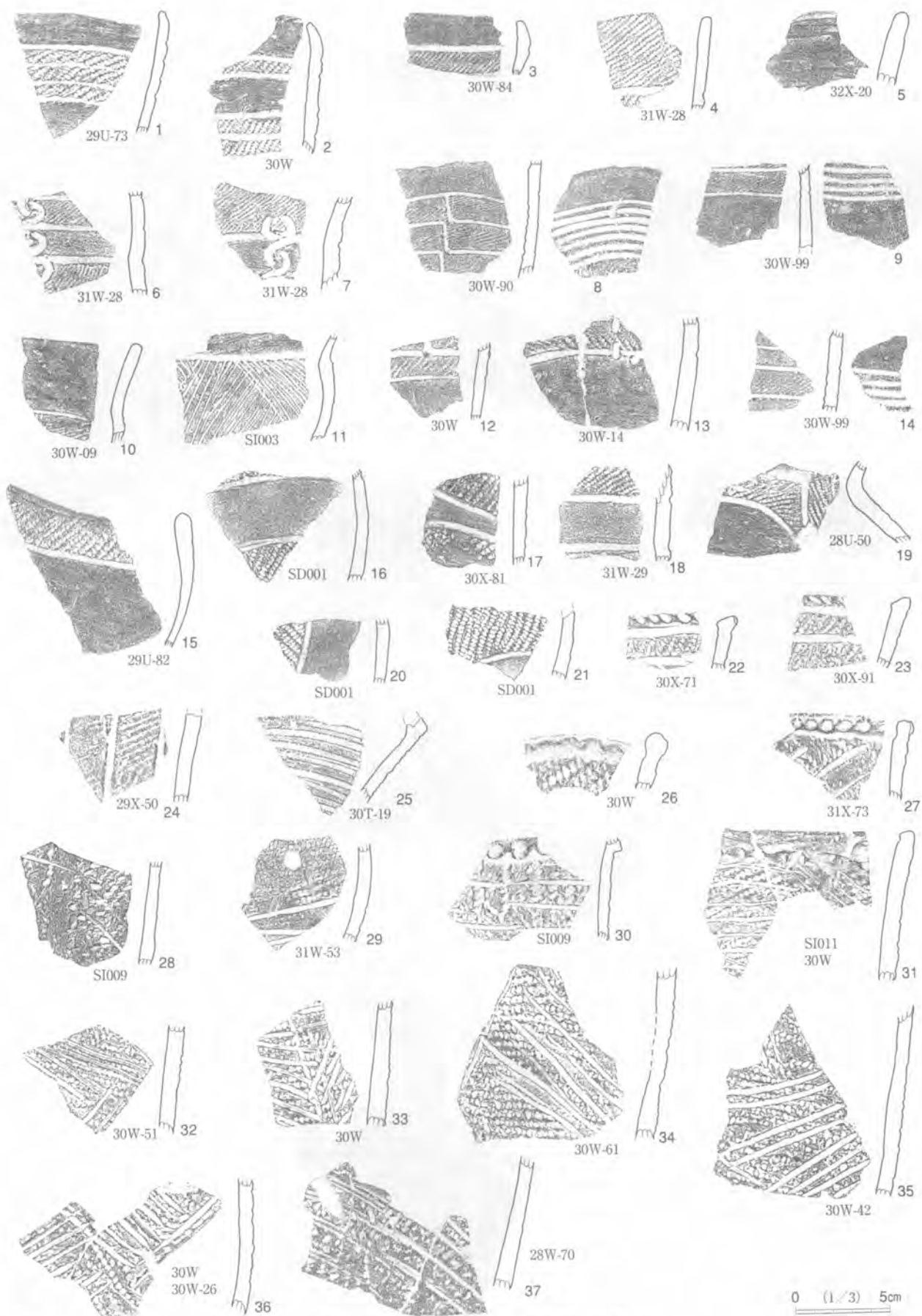
粗製土器一括した。26・27・30・31は口縁部破片である。隆帯を貼り付け、丸棒状工具の腹面などで横圧を加えている。いずれも器面に粗い単節縄文を施文し、沈線による斜線文や弧線文が施されている。

#### (2) 土製品 (第45図, 図版33)

**土器片錘 (1~17)** 本遺跡では、17点の土器片錘が検出された。製作は粗雑で、周縁は基本的に打欠のままである。8は1/4ほどを欠損している。五領ヶ台1式土器の破片が用いられており、他遺跡の事例を見ても数少ない例である。本遺跡内では他に五領ヶ台式土器は検出されておらず、隣接遺跡など周辺からの持ち込みの可能性もある。溝は比較的明瞭に形成されている。周縁は打欠のままであるが、わず



第43図 遺構外出土縄文土器 (13)



0 (1/3) 5cm

第44図 遺構外出土縄文土器 (14)

第15表 未掲載縄文土器集計表

第I群土器

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
26 U	1	16	大グリッド一括
29 W - 79	1	9	
29 W - 92	1	18	
29 X - 55	1	28	SI 001
29 X - 60	1	30	
29 X - 62	3	45	
29 X - 71	2	17	
29 X - 72	15	192	
29 X - 73	2	16	
29 X - 82	4	75	
29 X - 92	2	42	
29 X	26	292	大グリッド一括
30 U	1	10	大グリッド一括
30 W - 19	2	32	
30 W - 59	4	59	
30 W - 64	1	47	
30 W - 68	1	5	
30 W - 76	1	41	SI 003
30 W - 79	5	75	
30 W	1	30	大グリッド一括
30 X - 00	5	91	
30 X - 01	2	40	
30 X - 02	5	46	
30 X - 03	1	18	
30 X - 04	1	4	
30 X - 05	1	16	
30 X - 10	4	61	
30 X - 11	5	65	
30 X - 12	11	143	
30 X - 13	31	399	
30 X - 20	14	162	
30 X - 21	18	340	
30 X - 22	14	265	
30 X - 23	20	240	
30 X - 24	10	166	
30 X - 25	3	18	
30 X - 26	1	4	
30 X - 30	5	66	
30 X - 31	18	290	
30 X - 32	19	286	
30 X - 33	11	94	
30 X - 34	10	112	
30 X - 40	5	72	
30 X - 41	31	305	
30 X - 42	9	170	
30 X - 43	3	23	
30 X - 45	1	8	
30 X - 50	4	18	
30 X - 51	2	24	
30 X - 52	3	41	
30 X - 53	3	17	
30 X - 54	1	10	
30 X - 56	2	57	
30 X - 60	8	53	
30 X - 61	9	130	
30 X - 62	4	64	
30 X - 63	1	19	
30 X - 64	1	35	
30 X - 70	1	5	
30 X - 71	15	132	
30 X - 80	4	34	
30 X - 81	1	12	
30 X - 83	1	20	
30 X - 90	3	20	
30 X - 91	1	20	
30 X - 93	2	8	
30 X - 94	1	6	
30 X - 95	2	18	
30 X	11	172	大グリッド一括
31 W - 24	1	22	
31 W - 26	1	7	
31 W - 29	5	32	
31 X - 01	1	4	
31 X - 02	1	4	
31 X - 04	1	5	
31 X - 05	4	37	
31 X - 07	1	10	
31 X - 25	1	12	
31 X - 34	49	285	
31 X	4	72	大グリッド一括
	4	28	表採
合計	486 (個)	6,016 (g)	

第III群 第1類土器

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
27 W - 51	1	38	
28 U - 49	2	44	
29 W - 91	1	22	
30 U - 09	2	13	SI 008
30 U - 39	4	44	
30 U - 54	1	12	
30 U - 57	1	10	
30 W - 01	1	7	
30 W - 02	8	108	
30 W - 03	2	28	
30 W - 10	1	10	
30 W - 12	6	102	
30 W - 13	11	174	
30 W - 15	1	9	
30 W - 20	4	36	
30 W - 21	3	44	
30 W - 22	4	26	
30 W - 23	3	72	
30 W - 25	3	42	
30 W - 30	21	334	
30 W - 32	4	42	
30 W - 40	1	16	
30 W - 41	2	22	
30 W - 42	8	106	
30 W - 43	21	319	
30 W - 44	2	30	
30 W - 45	1	6	
30 W - 46	7	42	
30 W - 49	1	16	
30 W - 50	3	24	
30 W - 51	1	14	
30 W - 52	3	28	
30 W - 53	9	200	
30 W - 54	6	82	
30 W - 61	1	10	
30 W - 62	3	37	
30 W - 63	2	18	
30 W - 64	2	20	
30 W - 70	2	16	
30 W - 71	2	22	
30 W - 79	1	6	
30 W - 95	1	20	
30 W	46	711	大グリッド一括
30 X - 31	1	8	
30 X - 32	7	58	
31 W - 23	1	12	
31 W - 31	1	18	
31 W - 43	1	17	
31 X - 23	2	14	
32 X - 35	1	54	
	3	34	近世溝内(29U付近)
	1	24	近世溝内(30U付近)
	67	810	近世溝内(30U・30W付近)
合計	294 (個)	4,031 (g)	

第III群 第2類土器

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
30 W - 76	8	54	SI 003
31 X - 50	3	49	SI 004
31 W - 69	9	140	SI 005
30 W - 64	1	22	SI 007
30 U - 09	1	14	SI 008
30 U - 69	1	12	SI 011
	6	90	近世溝内(29U付近)
26 U	3	68	大グリッド一括
26 U - 62	1	92	
27 U -	193	5,352	
27 U - 90	1	39	
28 U	8	354	大グリッド一括
28 U - 00	1	36	
28 U - 01	2	31	
28 U - 20	7	128	
28 U - 70	2	6	
28 T	2	16	大グリッド一括
29 U - 81	3	38	
30 U - 57	1	10	
30 U - 67	3	44	
30 U - 99	1	6	
31 U - 09	2	23	
31 U - 19	1	22	
26 W - 62	1	56	
27 W - 11	7	120	
27 W - 12	2	72	

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
27 W - 21	8	88	
27 W - 22	5	143	
27 W - 32	10	240	
27 W - 41	3	55	
27 W - 42	5	116	
27 W - 51	18	365	
27 W - 71	6	146	
27 W - 82	29	826	
27 W - 90	19	281	
27 W - 92	19	262	
28 W - 00	6	143	
28 W - 01	40	918	
28 W - 20	1	30	
28 W - 21	8	180	
28 W - 40	1	14	
29 W - 89	2	31	
29 X	3	104	大グリッド一括
29 X - 62	1	16	
29 X - 63	1	44	
29 X - 80	7	106	
29 X - 90	1	10	
30 U - 14	1	10	
30 X	2	42	大グリッド一括
30 X - 03	3	75	
30 X - 12	1	8	
30 X - 15	1	22	
30 X - 20	12	182	
30 X - 30	3	13	
30 X - 32	1	14	
30 X - 33	1	2	
30 X - 40	5	104	
30 X - 42	4	40	
30 X - 52	3	22	
30 X - 56	2	21	
30 X - 60	1	13	
30 X - 61	3	36	
30 X - 64	2	31	
30 X - 70	1	16	
30 X - 71	1	37	
30 X - 81	2	21	
30 X - 82	2	28	
30 W	89	1,658	大グリッド一括
30 W - 02	2	51	
30 W - 03	1	27	
30 W - 04	2	58	
30 W - 05	2	48	
30 W - 09	2	50	
30 W - 13	1	12	
30 W - 14	1	8	
30 W - 15	1	22	
30 W - 20	4	24	
30 W - 22	2	42	
30 W - 24	2	41	
30 W - 26	1	13	
30 W - 28	3	50	
30 W - 29	1	16	
30 W - 31	1	34	
30 W - 35	2	46	
30 W - 36	1	22	
30 W - 39	3	73	
30 W - 41	2	49	
30 W - 42	(5)7	106	
30 W - 43	1	5	
30 W - 44	5	171	
30 W - 45	1	3	
30 W - 47	1	10	
30 W - 49	12	222	
30 W - 50	1	18	
30 W - 51	2	10	
30 W - 52	2	30	
30 W - 54	1	5	
30 W - 55	1	38	
30 W - 57	1	19	
30 W - 58	1	10	
30 W - 59	2	44	
30 W - 63	4	89	
30 W - 64	3	52	
30 W - 65	2	9	
30 W - 66	1	100	
30 W - 67	2	18	
30 W - 69	1	22	
30 W - 72	4	108	
30 W - 73	2	50	
30 W - 74	15	390	
30 W - 75	7	197	
30 W - 77	1	10	
30 W - 78	3	62	
30 W - 82	4	94	
30 W - 83	5	208	

(第Ⅲ群土器 第2類土器)

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
30 W - 84	11	254	
30 W - 85	5	192	
30 W - 86	3	76	
30 W - 87	1	28	
30 W - 89	1	20	
30 W - 91	2	49	
30 W - 92	9	237	
30 W - 93	14	406	
30 W - 94	5	197	
30 W - 95	6	110	
30 W - 96	4	41	
30 W - 97	2	60	
30 W - 98	2	54	
31 X	19	226	大グリッド一括
31 X - 02	1	20	
31 X - 03	1	44	
31 X - 11	1	4	
31 X - 12	1	13	
31 X - 13	2	22	
31 X - 14	3	52	
31 X - 15	4	22	
31 X - 24	3	14	
31 X - 33	5	20	
31 X - 35	1	6	
31 X - 36	1	60	
31 X - 51	5	128	
31 X - 52	3	102	
31 X - 53	4	70	
31 X - 61	3	40	
31 X - 62	5	76	
31 X - 63	4	36	
31 X - 64	2	40	
31 X - 67	1	24	
31 X - 70	3	39	
31 X - 71	6	52	
31 X - 72	8	148	
31 X - 73	2	12	
31 X - 93	3	57	
32 X	1	5	大グリッド一括
32 X - 01	2	66	
32 X - 02	1	11	
32 X - 35	2	56	
31 W - 02	2	46	
31 W - 03	11	134	
31 W - 04	7	138	
31 W - 05	2	31	
31 W - 07	1	14	
31 W - 13	2	20	
31 W - 14	6	98	
31 W - 15	13	326	
31 W - 16	5	96	
31 W - 17	2	49	
31 W - 18	2	14	
31 W - 19	1	31	
31 W - 22	1	36	
31 W - 23	9	230	
31 W - 24	27	552	
31 W - 25	36	552	
31 W - 26	7	92	
31 W - 28	4	66	
31 W - 31	1	28	
31 W - 32	18	272	
31 W - 33	5	116	
31 W - 34	1	14	
31 W - 35	3	45	
31 W - 36	5	140	
31 W - 37	4	60	
31 W - 42	8	194	
31 W - 43	11	258	
31 W - 44	4	108	
31 W - 45	1	15	
31 W - 53	2	29	
31 W - 69	4	80	
31 W - 77	3	58	
31 W - 78	1	13	
31 W - 79	2	30	
31 W - 86	1	7	
31 W - 87	4	152	
31 W - 88	3	71	
31 W - 89	5	183	
31 W - 97	3	50	
31 W - 99	9	138	
31 W - 08	4	55	
31 W - 09	3	64	
合計	1,127 (個)	24,087 (g)	

第Ⅳ群 第1類a種土器

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
27 W - 21	1	12	
27 W - 90	1	14	
28 U	1	21	大グリッド一括
29 X - 73	1	4	
30 U - 88	1	7	
30 U	1	8	大グリッド一括
30 W - 62	1	18	
30 W - 76	1	7	
30 W - 82	1	10	
30 W - 84	1	14	
30 W - 85	1	20	
30 W - 86	1	38	
30 W - 92	2	16	
30 W - 93	3	38	
30 W - 94	1	10	
30 W - 99	1	14	
30 W -	11	164	
31 W - 00	1	12	
31 W - 02	1	30	
31 W - 05	3	40	
31 W - 14	1	14	
31 W - 21	2	40	
31 W - 23	1	16	
31 W - 24	9	124	
31 W - 26	2	38	
31 W - 32	4	72	
31 W - 42	1	16	
31 W - 43	1	8	
31 W - 44	1	9	
31 W - 46	1	20	
31 W - 53	1	22	
31 W - 67	1	29	
31 W - 69	2	62	
31 W - 88	8	134	
31 W - 98	1	48	
31 W	3	64	大グリッド一括
31 X - 15	1	3	
31 X - 17	2	25	
31 X - 18	1	7	
31 X - 20	1	7	
31 X - 34	4	54	
31 X - 35	3	56	
31 X - 53	1	8	
31 X - 73	2	28	
31 X - 80	4	64	
31 X - 81	1	6	
31 X - 82	4	98	
31 X - 83	2	22	
31 X - 90	4	90	
31 X - 91	1	14	
31 X - 95	1	16	
32 X - 20	1	20	
	1	26	表探
合計	108 (個)	1,757 (g)	

第Ⅳ群 第1類b種土器

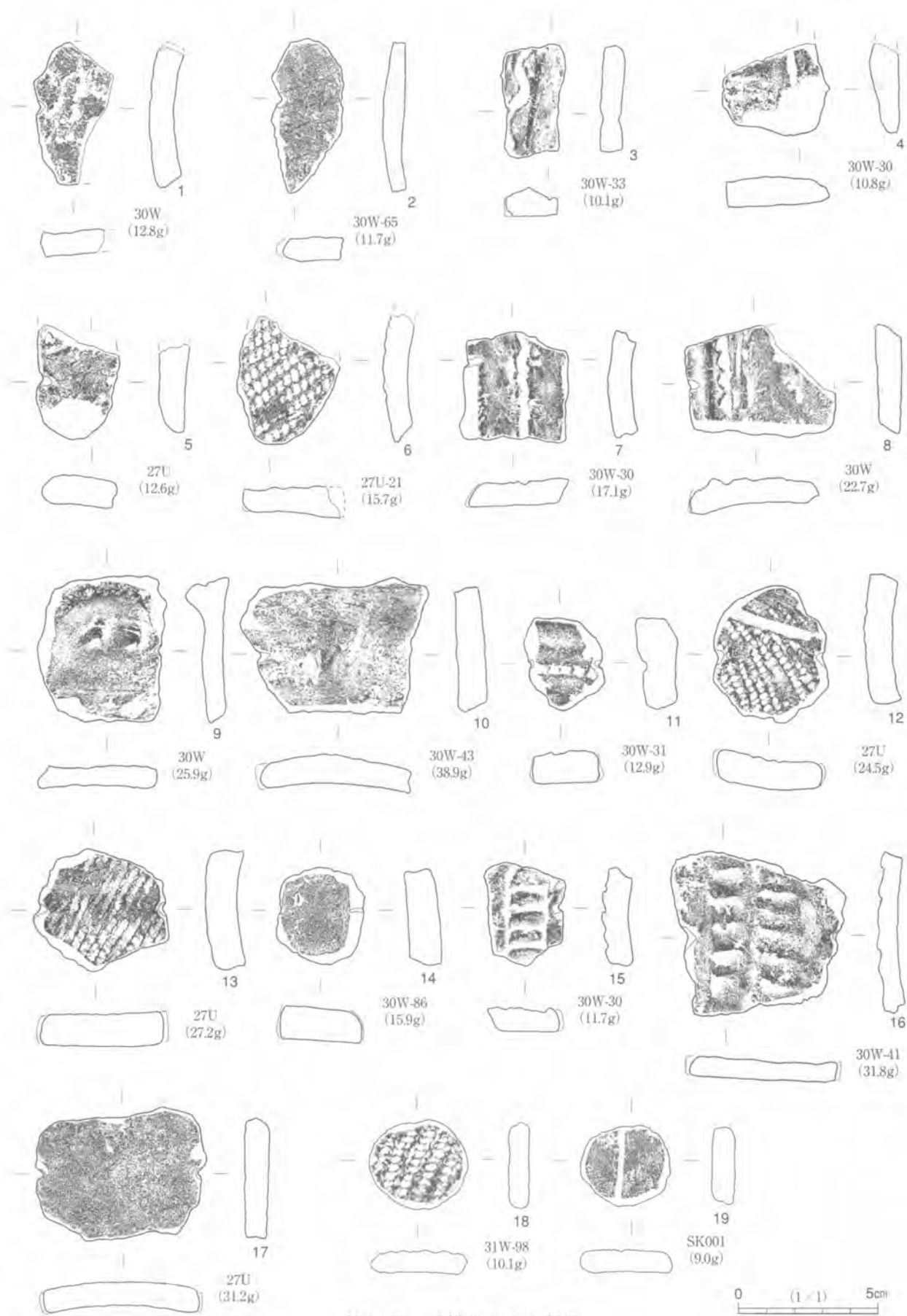
グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
31 W - 69	2	20	SI 005
28 U - 49	3	38	
29 W - 92	1	8	
29 W - 94	1	9	
29 X - 70	1	4	
29 X - 90	2	8	
30 W	30	262	大グリッド一括
30 W - 04	1	7	
30 W - 05	1	5	
30 W - 15	1	16	
30 W - 18	1	6	
30 W - 25	1	6	
30 W - 33	1	22	
30 W - 39	1	8	
30 W - 74	1	28	
30 W - 75	2	89	
30 W - 85	2	31	
30 W - 94	1	17	
30 X	2	10	大グリッド一括
30 X - 40	1	7	
30 X - 91	1	16	
30 U	1	4	大グリッド一括
30 U - 87	3	14	
31 W	28	370	大グリッド一括
31 W - 03	1	20	
31 W - 06	2	22	

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
31 W - 14	3	92	
31 W - 15	1	27	
31 W - 21	6	130	
31 W - 24	17	193	
31 W - 25	2	94	
31 W - 26	3	52	
31 W - 29	1	34	
31 W - 34	17	357	
31 W - 35	6	84	
31 W - 43	3	27	
31 W - 44	1	9	
31 W - 88	29	306	
31 W - 97	1	30	
31 W - 98	3	30	
31 X	2	22	大グリッド一括
31 X - 08	5	106	
31 X - 11	1	18	
31 X - 43	1	10	
31 X - 73	2	32	
31 X - 79	2	28	
31 X - 80	4	50	
31 X - 81	3	30	
31 X - 82	22	262	
31 X - 83	2	24	
31 X - 90	2	34	
31 X - 92	5	70	
33 X - 34	1	8	
-	1	6	表探
合計	238 (個)	3,212 (g)	

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
29 U - 84	1	14	
29 X - 71	1	16	
30 U - 23	2	21	SI 009
30 W - 24	1	6	
30 W - 25	1	14	
30 W - 51	1	18	
30 W - 76	3	19	SI 003
30 W - 92	1	11	
30 W - 98	3	72	
30 W - 99	3	32	
30 W	7	64	大グリッド一括
30 X - 44	3	19	
30 X - 81	1	5	
30 X	1	5	大グリッド一括
31 W - 15	2	63	
31 W - 17	1	12	
31 W - 18	1	10	
31 W - 26	1	20	
31 W - 27	1	19	
31 W - 28	2	29	
31 W - 33	2	20	
31 W - 35	2	16	
31 W - 78	4	20	
31 W - 79	1	6	
31 W - 86	1	30	
31 W - 99	4	50	
31 X - 51	1	22	
31 X - 84	1	9	
32 X - 20	1	25	
	3	19	近世溝内(29U付近)
合計	57 (個)	686 (g)	

第Ⅳ群 第2類b種土器

グリッド名	数量 (個)	質量 (g)	備考
28 U - 49	2	39	
30 U - 14	7	64	SI 009
30 W - 09	1	4	
30 X	1	9	大グリッド一括
31 X - 50	1	7	SI 004
31 X - 73	1	12	
合計	13 (個)	135 (g)	



第45図 遺構外出土土製品

0 (1×) 5cm

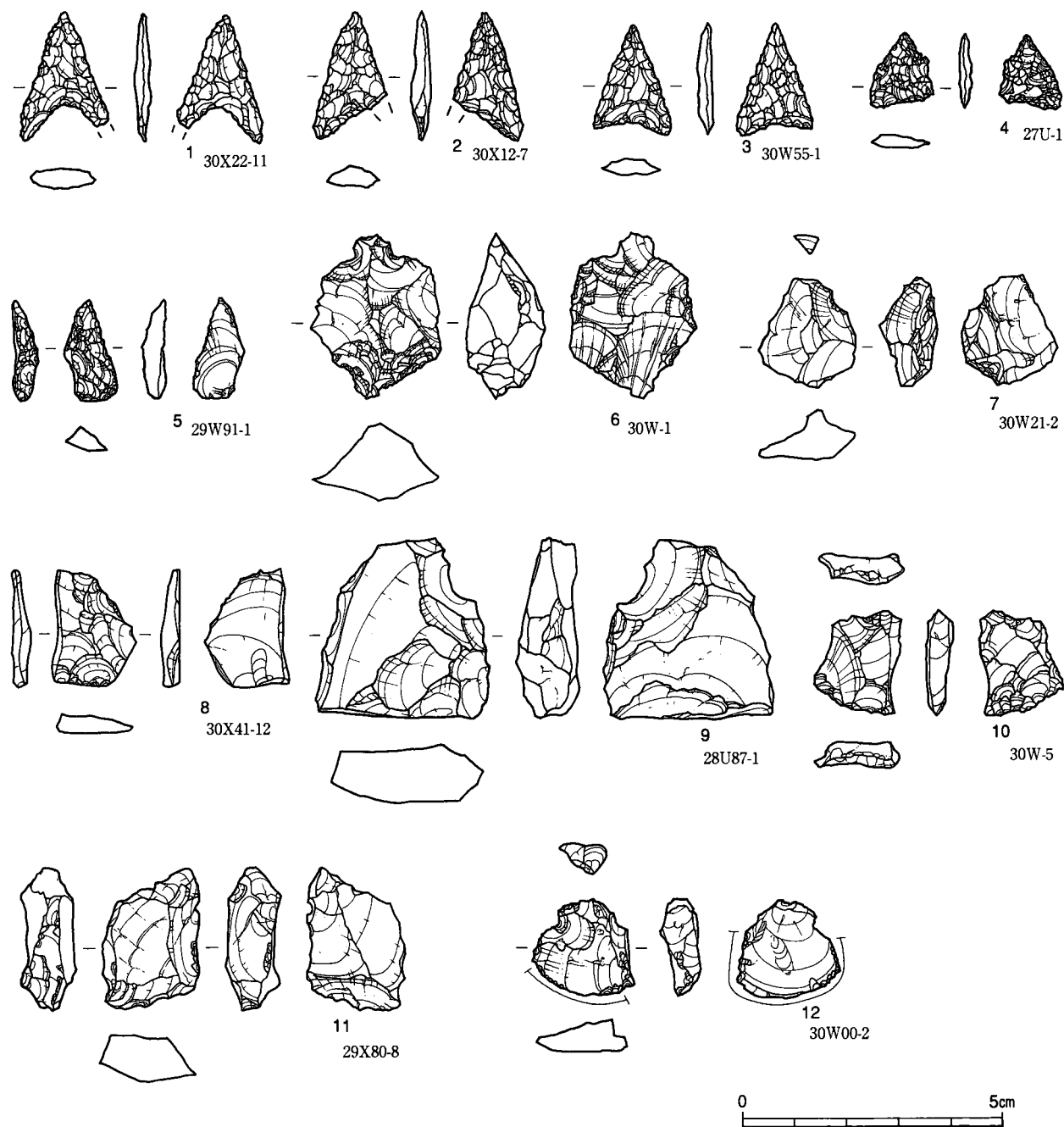


かながら磨り減りが見られる。1～4・7・9・10・11・15・16は阿玉台Ib式～II式土器を，5・6・12・13・14・17は加曾利E式土器を，それぞれ用いて製作されたと思われる。

**土製円盤** (18・19) 2点を検出した。周縁を細かく調整し，円盤としている。周縁の研磨は施されておらず，使用等によって多少の摩滅が見られる程度である。ともに後期称名寺式ないし堀之内式の土器片が用いられている。

(3) 石器 (第46～49図， 図版34・35)

**概要** 松崎VI遺跡では調査区全域で散漫に石器が検出されている。ほとんどが遺構に伴わないでグリッ



第46図 縄文時代石器 (1)



ト出土石器として検出している。これらの石器は本遺跡で出土している縄文時代早期～後期の土器群，特に本遺跡の主体となる縄文中期の土器群に伴う蓋然性が高いが，特徴的な分布状態を示さないため明確な共伴関係については不明である。便宜的にここで縄文時代の所産と考えられる石器をまとめて掲載する。

**石鏃** 1～9は石鏃及び石鏃未成品である。1～5が石鏃，6～9が石鏃未成品である。すべて無茎石鏃の範疇にはいる。1・2は明確な脚部を有するものであり，1は焼成を受けており，基部が逆U字状に近くなり脚部が膨らむ。2は直線的な両側縁をもち基部は逆V字状となる。3も直線的な両側縁をもつが，基部は浅く挟られ片脚が突出する。4は小形のもので両側縁が外湾し円味をもち，基部は浅く挟られ片脚部が膨らむ。5は平基に近い形態であるが，片脚部が折れたためかさらにその部分を細部加工して左右非対称形のものとなっている。6は多方向から剥離痕の見られる不定形剥片を素材にして，両端部を尖らせるような調整加工が認められる。上端部の調整は挟入するような調整加工が見られ或いはこちら側が基部になるものかもしれない。7は素材中央部が厚くなる不定三角形の横長剥片素材を表面で器体を整形するような幅広調整加工，裏面下端部で細長い平坦加工が認められる。8は薄い縦長剥片を素材として背面の周縁から幅広な平坦加工が見られる。左側縁が欠損したためか加工途中で放棄されたものであろう。9は板状の石核から剥片剥離された表裏が凸面となる素材である。素材の打面方向を基部側に設定して背面で右側縁，裏面で左側縁を中心に幅広平坦加工が施され器体を整形している。

**楔形石器** 10・11は楔形石器とした。10は黒曜石製のもので上下両端が線状打面となり，細長い剥離痕と端部に細かな階段状剥離痕が集中する。11はチャート製のもので上端が点状打面となり下端が線状打面となる。表裏面の節理状剥離面の厚味を減ずるような両極技法が行われているが，この面は剥ぎ取れなかったようである。

**U剥片** 12は使用痕を有する剥片（U剥片と略称する）である。横長剥片の扇状になる端部の表裏面に刃こぼれ状の微細剥離痕が観察される。

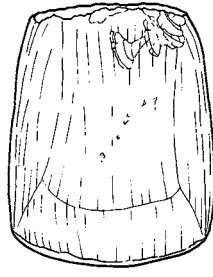
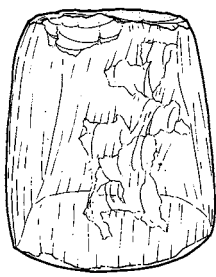
**磨製石斧** 13は磨製石斧である。蛇紋岩製で基部以外全面に研磨されて形態は定角式に近くなるが，器体は短く刃部端は刃が鈍角になっておりその部分が摩耗している。

**打製石斧** 14は打製石斧である。礫面の緩やかな屈曲を利用して素材を作出している。いわゆる分銅型の石斧である。下端部の刃部は円味をもつがもう一端の刃部は調整が疎らであり斜めに欠損している。

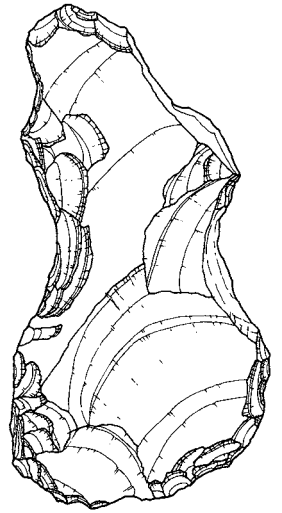
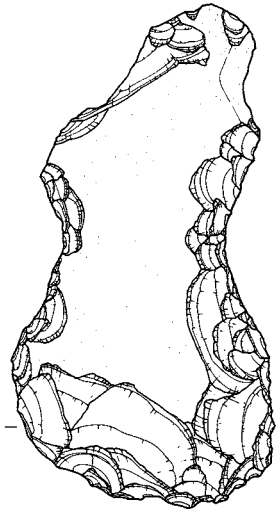
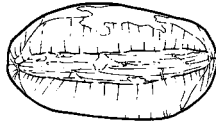
**磨石類** 擦り面の観察される石器を総括して磨石類とした。15～19が磨石類である。15は凹石を転用したした特異な形態をしたもので，表裏面に擦り面と器体長軸に沿った細長い窪み部が見られる。16は表裏面，両側縁全面が擦られており横断面が長方形に近くなる。裏面中央部には浅い円形の窪み部が観察される。17は上半部を欠損するが，擦りは顕著である。表裏面中央にやや深い窪み部がある。18・19はいずれも欠損しているが，擦り面のみで構成されるものである。18は表面，側面で擦り面が変り多面体となるものである。19は横断面が三角形状になり各面が平坦な擦り面となる。

**敲石** 20・21は敲石である。20は不整楕円形の礫面の表面にやや長い敲打痕が集中する。21は器体の上下端部に敲打痕が集中し端部が平坦面となっている。

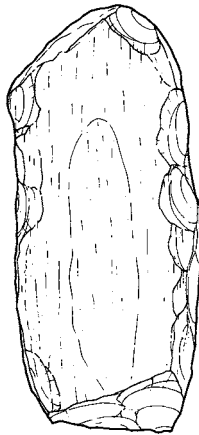
**石核** 22は石核である。ホルンフェルス製であり，拳大の転石を石核の素材としている。素材を分割し分割面を打面として周縁の礫面を剥ぐように打面を廻って剥片剥離を行っている。剥離された剥片はやや幅広な剥片となるようである。



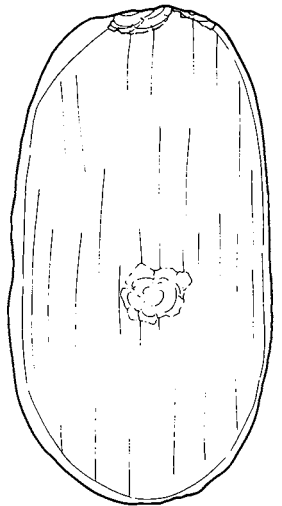
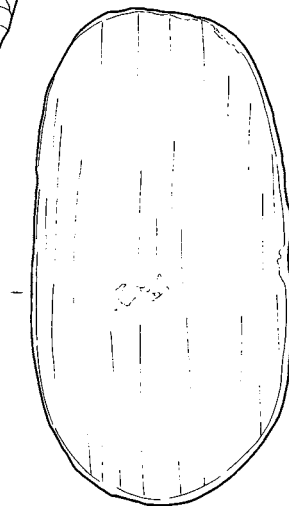
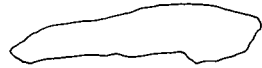
13 29X92-3



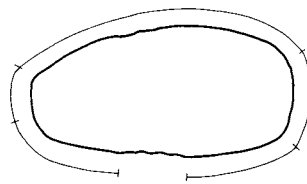
14 31W25-2



15 31W25-3

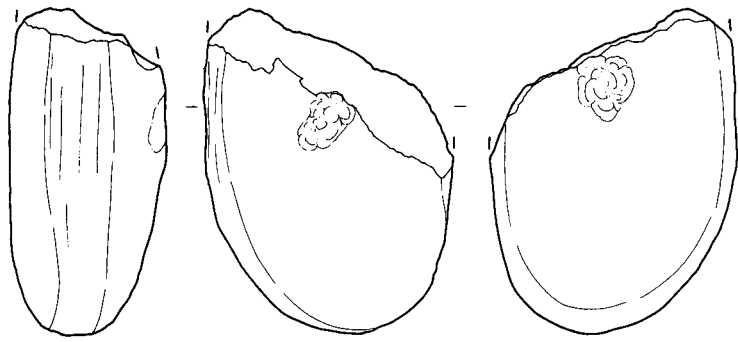


16 29W94-1

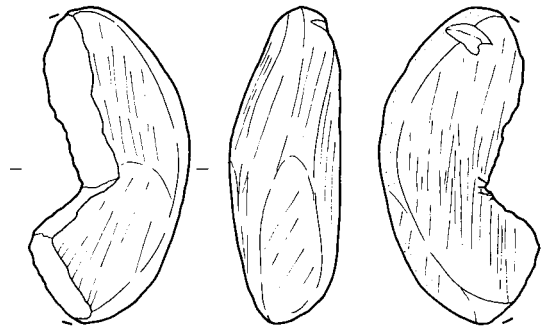
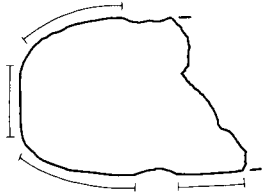


0 5cm

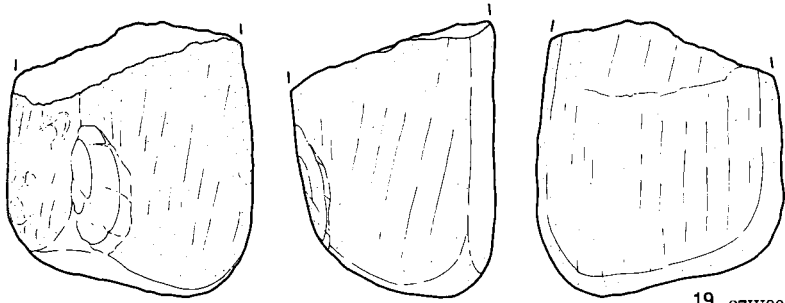
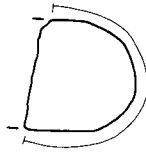
第47図 縄文時代石器 (2)



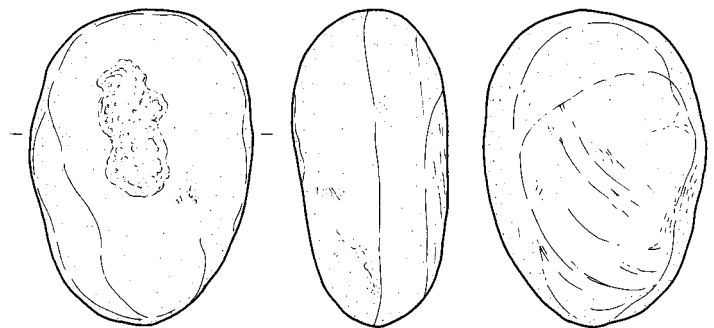
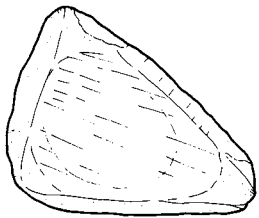
17 31W22-2



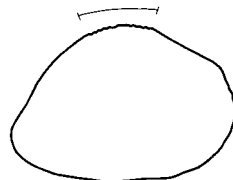
18 27W21-1



19 27W90-1

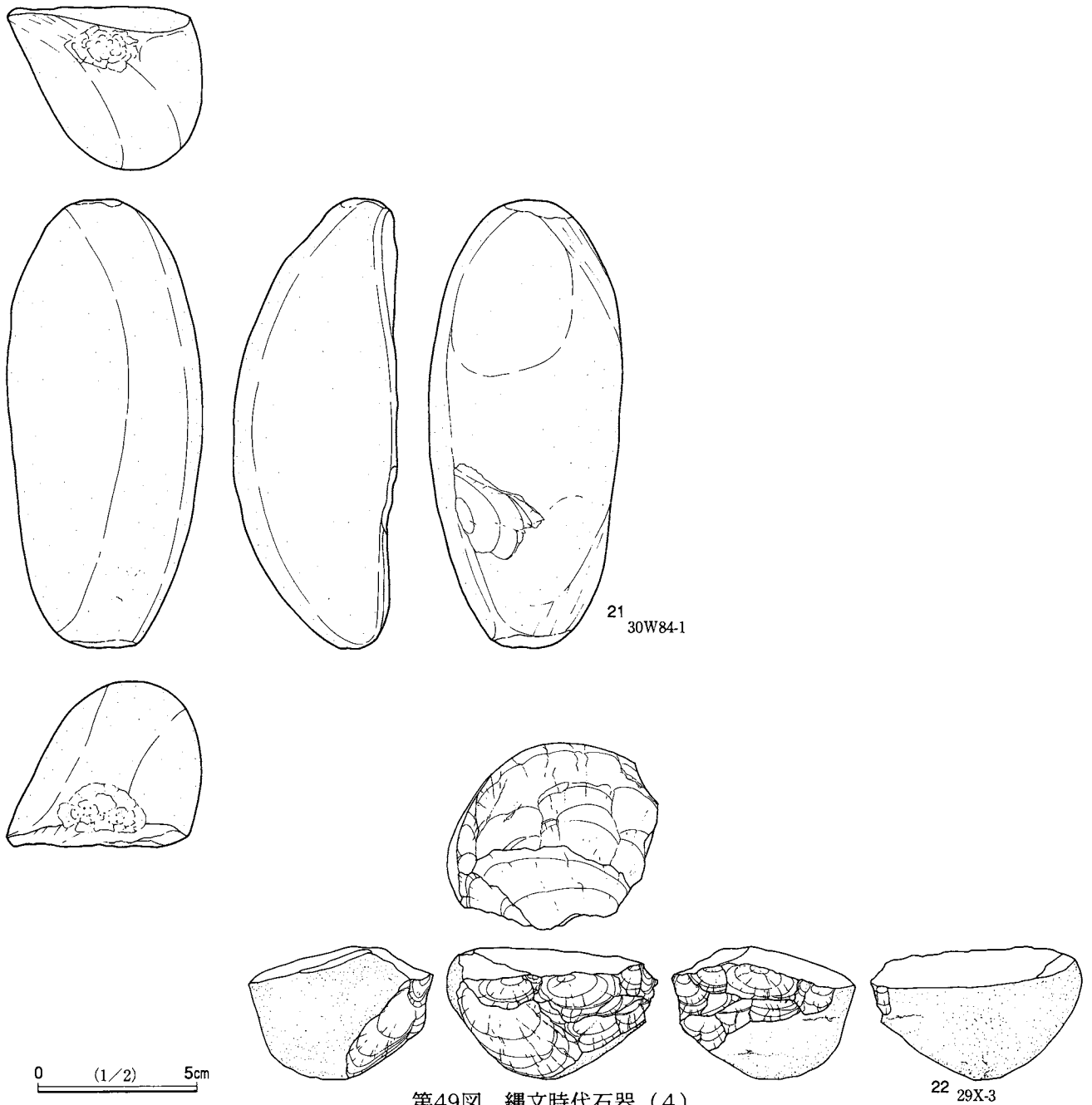


20 SK021-1



0 5cm

第48図 縄文時代石器 (3)



第49図 縄文時代石器 (4)

第16表 縄文時代石器属性表

挿図 番号	遺物番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	挿図 番号	遺物番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g
1	30X22-11	石鏃	石英斑岩?	2.47	1.69	0.34	0.9	12	30W00-2	U剥片	黒曜石	1.87	2.00	0.77	2.2
2	30X12-7	石鏃	チャート	2.54	1.31	0.41	0.8	13	29X92-3	磨製石斧	蛇紋岩	7.01	5.50	3.01	214.5
3	30W55-1	石鏃	チャート	2.19	1.52	0.26	0.7	14	31W25-2	打製石斧	砂岩	6.85	2.55	2.35	39.7
4	27U-1	石鏃	黒曜石	1.44	1.20	0.25	0.4	15	31W25-3	磨石類	砂岩	11.20	5.15	2.25	223.8
5	29W91-1	石鏃	黒曜石	1.93	1.01	0.51	0.7	16	29W94-1	磨石類	安山岩	12.96	6.97	3.55	489.3
6	30W-1	石鏃未成品	黒曜石	3.17	2.50	1.59	7.2	17	31W22-2	磨石類	安山岩	8.63	6.49	4.10	303.9
7	30W21-2	石鏃未成品	黒曜石	2.11	1.88	10.90	3.1	18	27W21-1	磨石類	安山岩	8.27	4.22	2.91	94.6
8	30X41-12	石鏃未成品	チャート	2.22	1.56	0.38	1.3	19	27W90-1	磨石類	安山岩	7.20	6.50	5.43	313.9
9	23U87-1	石鏃未成品	チャート	3.48	3.35	1.20	15.9	20	SK021-1	敲石	結晶片岩	8.18	5.90	4.14	270.7
10	30W-5	楔形石器	黒曜石	2.02	1.69	0.51	1.4	21	30W84-1	敲石	砂岩	14.20	6.11	5.16	558.7
11	29X80-8	楔形石器	チャート	2.66	1.85	1.09	6.6	22	29X-3	石核	ホルンフェルス	4.26	6.73	5.82	189.8

## 第4節 奈良・平安時代

### 1 概要

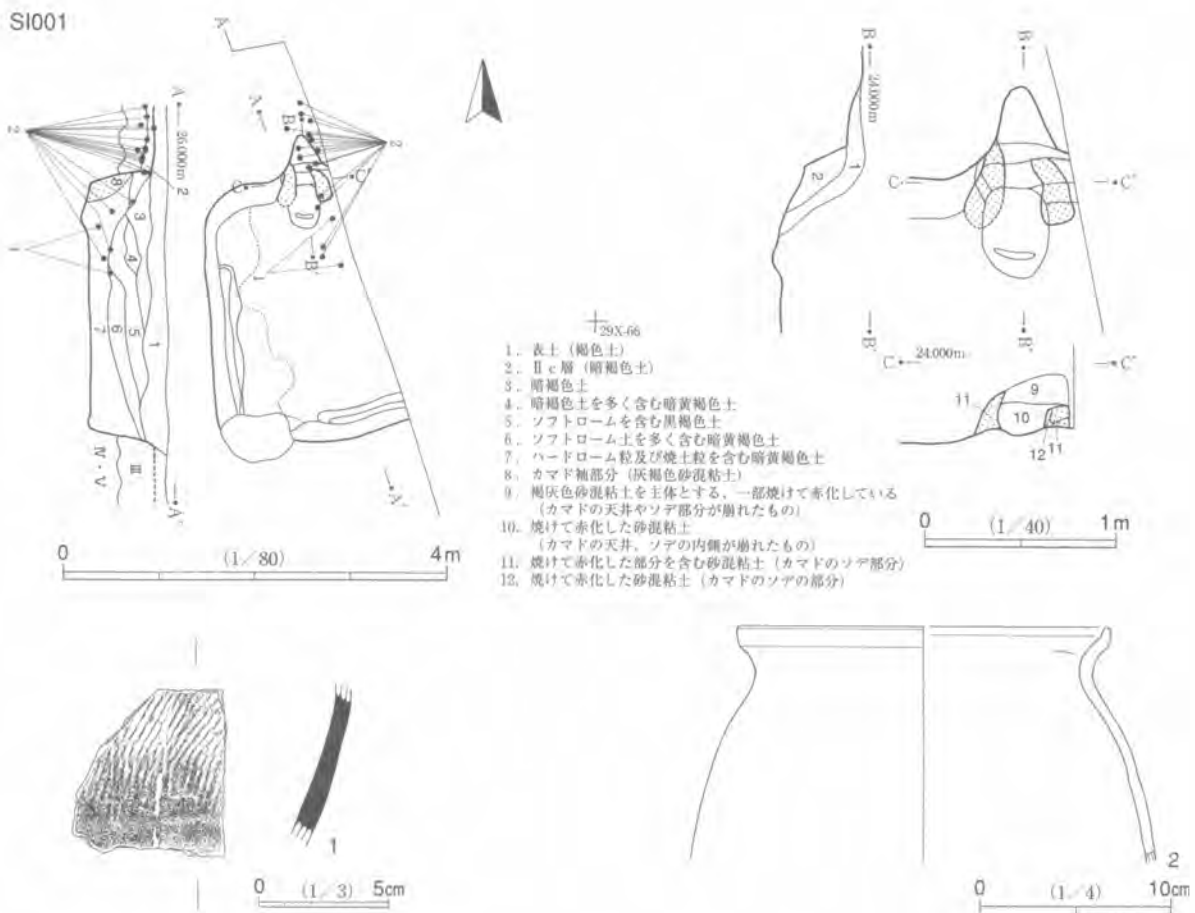
奈良・平安時代以降に関しては、調査区中央部から南部にかけて、竪穴住居跡を11軒を検出した。竪穴住居跡は8世紀終末から9世紀前半にかけての所産と考えられる。

### 2 竪穴住居跡

#### S1001 (第50図, 図版3・36)

調査区北東部の東側境界でほぼ西側半分が検出された。主軸方向は、 $N-7^{\circ}-W$ でほぼ南北方向である。カマドは北壁に位置し、方位は $N-15^{\circ}-W$ である。規模は長軸2.7m、短軸の北辺1.4m、南辺2.0mが残存している。深さ50cm~60cmの壁は傾斜しており、床は長軸2.2mで面積は約2.9㎡である。壁溝は、床面壁際に深さ2cm~6cmで西側に1.6m、南側に0.9mほど残存している。柱穴などのピットは検出されなかった。硬化面は西壁側を除き、ほぼ全面に広がっている。カマドは左側袖部のみが残存し、砂混り粘土で造られている。煙道部は幅20cm、長さ40cmである。住居跡の覆土は、自然埋没と考えられる。

覆土中から検出された遺物について、本報告では2点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器及び須恵器片2点(4g)である。1は須恵器甕の胴部破片である。外面にはタタキ目が顕著に残る。2は土



第50図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (1)

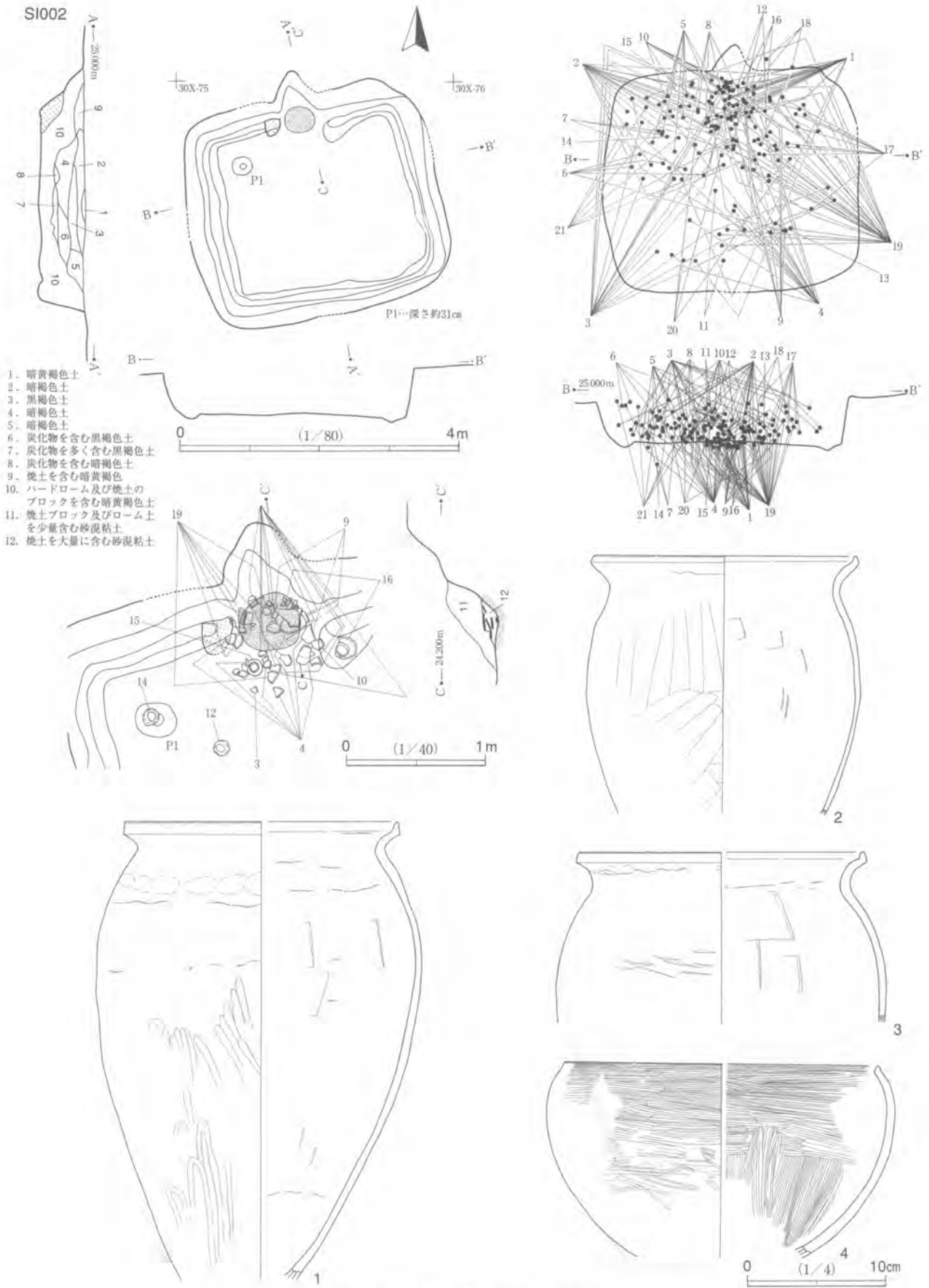
師器甕である。カマド周辺に破片が集中し、胴上半をかりうじて復元することができた。胎土の特徴から常総型甕と判断される。

#### S I 0 0 2 (第51・52図, 図版36・37)

調査区東部で検出された。主軸方向は、N-13°-Wでほぼ南北方向である。カマドは北壁中央部に位置し、方位はN-12°-Wである。規模は長軸3.7m、短軸3.2mの方形である。床は長軸2.7m、短軸2.4mで面積は約5.4㎡である。床面壁際には深さ1cm~6cmの壁溝が巡っている。北西部に深さ31cmほどのピットが検出されたが、その他のピットは検出されなかった。壁高は54cm~68cmである。カマドは、左袖部分に砂混り粘土のブロックが残存する程度で、右袖部分は検出されなかった。住居跡の覆土は、自然埋没と考えられる。

覆土中から検出された遺物について、本報告では21点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器及び須恵器片147点(1,370g)、管状土錘1点(4g)、土製支脚片57g、石片7点(31g)であり、本遺跡の中でも特に量が多い。遺物はカマド周辺にやや多く分布するものの、覆土全体に広がっている。平面分布及び垂直分布における接合状況を見ても、同一個体の破片が広く分散していることがわかる。つまり、カマド付近にいくつかの遺物を意図的に廃棄(残置)した後、集中的に遺物を投棄したと考えられる。このような廃棄行為の意図は明らかでないが、後述する遺物の中に鉄鉢形土師器(4)、意図的に打ち欠いた痕跡のある墨書及び刻書土器(12・15~18)が存在することは、何らかの祭祀的な行動があったことを示唆すると考えられる。なお、カマド周辺から出土した図示資料は、須恵器甕(19)、土師器甕(1・3)、土師器仏鉢(4)、土師器杯(9・10・12・15・16)である。15・16はカマド両側の床面に伏せたと考えられる出土状況で出土している。なお、14はピット(P1)内から正位で出土した。

1~3は土師器甕である。1・3は胴下半部の器面調整及び胎土から常総型甕と判断される。4は土師器仏鉢である。非常に丁寧に整形され、調整も内外面ともに細密なミガキが施される。被熱のため判然としないが、黒色処理(漆塗布か)の痕跡も見いだせる。体部中央付近には、外面からハンマーのようなもので打撃を加えた痕跡が見いだせ、意図的に打ち欠いたと考えられる。5~10は土師器杯である。いずれもロクロ成形である。7・10は内面に、9は内外面ともに器面調整にミガキが施される。さらに、7は調整後、内面に黒色処理が施されている。11は土師器短頸壺である。推定口径は8.8cmとかなり小形のものである。12~18は墨書及び刻書が認められる土師器杯である。12は外面体上部に正位の「七万」の墨書がある。図左側体上部付近は、意図的に打ち欠きされたと思われる。13は口縁部付近の小破片であるが、「万」の墨書が認められた。14は「大」の墨書があり、完形である。外面には黒斑がある。15は「□万」の墨書がある。図左側体上部付近の破損は、意図的なものと考えられる。内面には煤状の汚れが付着していることから、灯明皿として転用されていたものであろう。16は高台付杯である。内外面のミガキ調整の後、内面に黒色処理を施している。墨書を含む部分は意図的に打ち欠きされ、破片は火床部に投げられ、内外面ともに赤褐色を呈している。本体部分はカマド焚き口右側付近に逆位で置かれたようであるが、内面は被熱の影響を強く受けており、黒色処理(炭素吸着)された部分の大半が剥げてしまっている。17は内面にミガキ調整をした後、黒色処理を施している。内面の口縁部付近の一部は、器表面が著しく剥落している。剥落の状況から見て、被熱の可能性もある。破損については、意図的なものかどうか不明である。18は内面体部から底面にかけて線刻が認められる。線刻は浅く、判読は困難である。体部下半の線刻が「万」となる可能性もあるが、ほかの部分が記号的であることから、ここでの結論は留保



第51図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (2)



第52図 奈良・平安時代竪穴住居跡（3）



したい。またこの線刻付近の割れ口は、まっすぐに整えてから磨った痕跡が認められる。用途・目的については不明である。19・20は須恵器甕である。20は外底面を除き、全体に炭素が吸着して黒色を呈している。

#### S I 0 0 3 (第53図, 図版3・36・38)

調査区南部で検出された。主軸方向はN-3°-Wでほぼ南北方向である。カマドは北壁と東壁に検出された。東カマドの廃絶後、北カマドが構築されたと考えられる。方位は北カマドがN-5°-Wで北壁中央部に位置し、東カマドはE-11°-Nの方形である。床は長軸2.8m, 短軸2.5mで面積は約6.4㎡である。床面壁際には、深さ2.5cm~13cmの壁溝が巡っている。南部に出入り口施設と思われる深さ14cmのピットが検出されたが、その他のピットは検出されなかった。硬化面は中央部を中心に広がっており、床面全体に貼床が施されている。カマドは、北カマドと東カマドの袖部が砂混り粘土で造られている。住居跡の覆土は、自然埋没と考えられる。

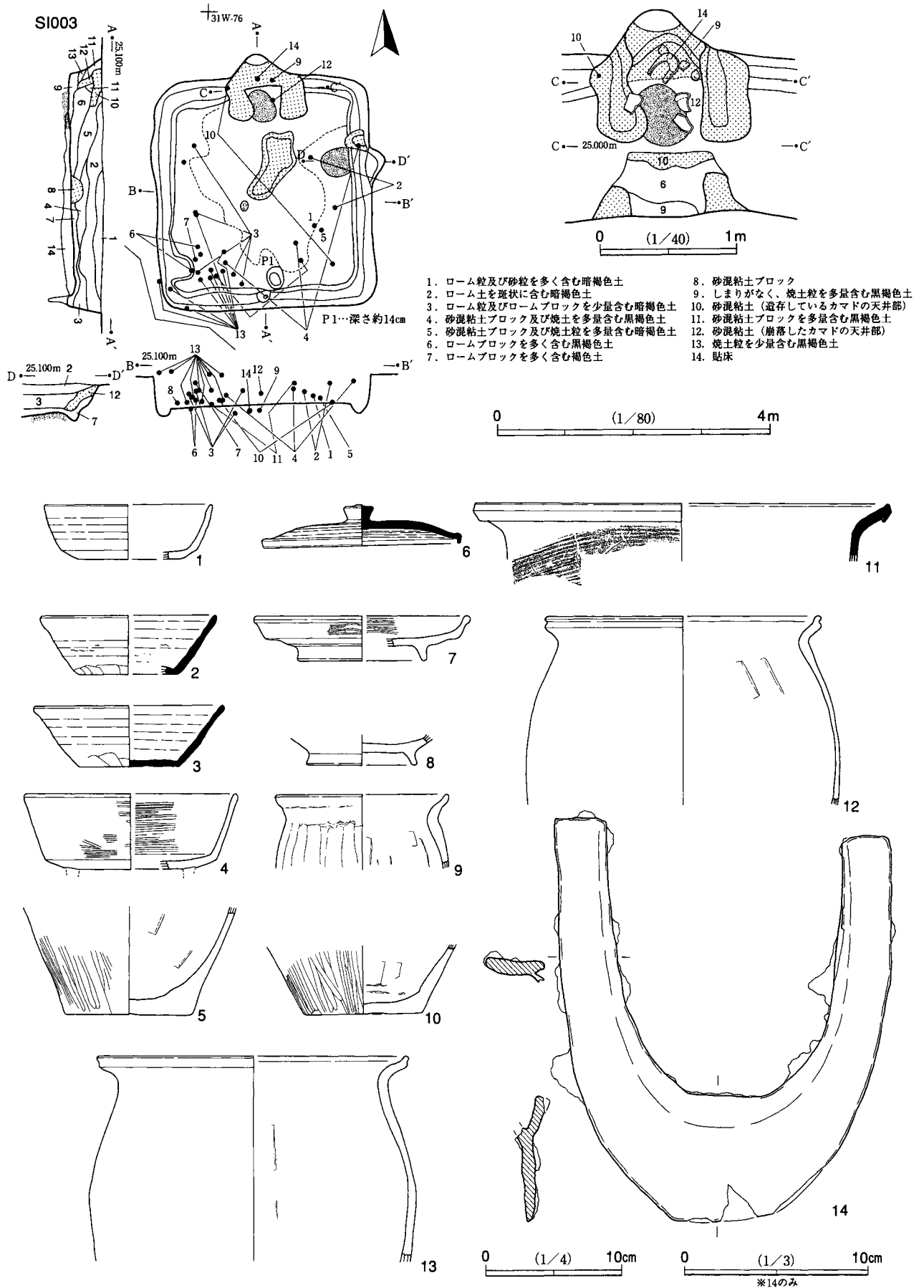
覆土中から検出された遺物について、本報告では14点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器及び須恵器片389点(4,162g), 土製支脚片246g, 石片8点(35g)である。これら本住居跡の遺物量は、特に量が多いといえよう。1は土師器杯である。2・3は須恵器杯である。胎土の特徴から常陸・新治窯産と考えられる。4・8は土師器高台付杯である。ともに内面には黒色処理が施されている。6は須恵器蓋である。胎土の特徴から常陸・新治窯産と考えられる。7は土師器皿である。外面体部から内面全体に丁寧なミガキが施されている。5・9・10・12・13は土師器甕である。9は小形甕, 5・10・13はいわゆる常総型甕である11は須恵器甕である。雲母を多く含むなど胎土の特徴から常陸・新治窯産と考えられる。14は鉄製鋏先である。遺存状況はかなり悪いが、ほぼ全体の形状が推定できる。

#### S I 0 0 4 (第54図, 図版4・38)

調査区南東部で検出された。主軸方向はN-9°-Wでほぼ南北方向である。カマドは北壁中央部に位置し、方位はN-13°-Wである。規模は長軸2.9m, 短軸2.1mの方形である。床は長軸2.0m, 短軸1.7mで面積約3.7㎡である。床面壁際には南西部を除いて深さ1cm~8cmの壁溝が巡っている。柱穴等のピットは検出されなかった。壁高は40cm前後である。床面は全面が硬化している。カマドはほぼ全体が、壁外へ80cmほど半円状に張り出すように構築されている。また、天井部がつぶされたように崩落しているほかは、構築材は比較的原形に近い状態で残存していた。袖については、ハードロームを削り残した部分(10層)を利用している。

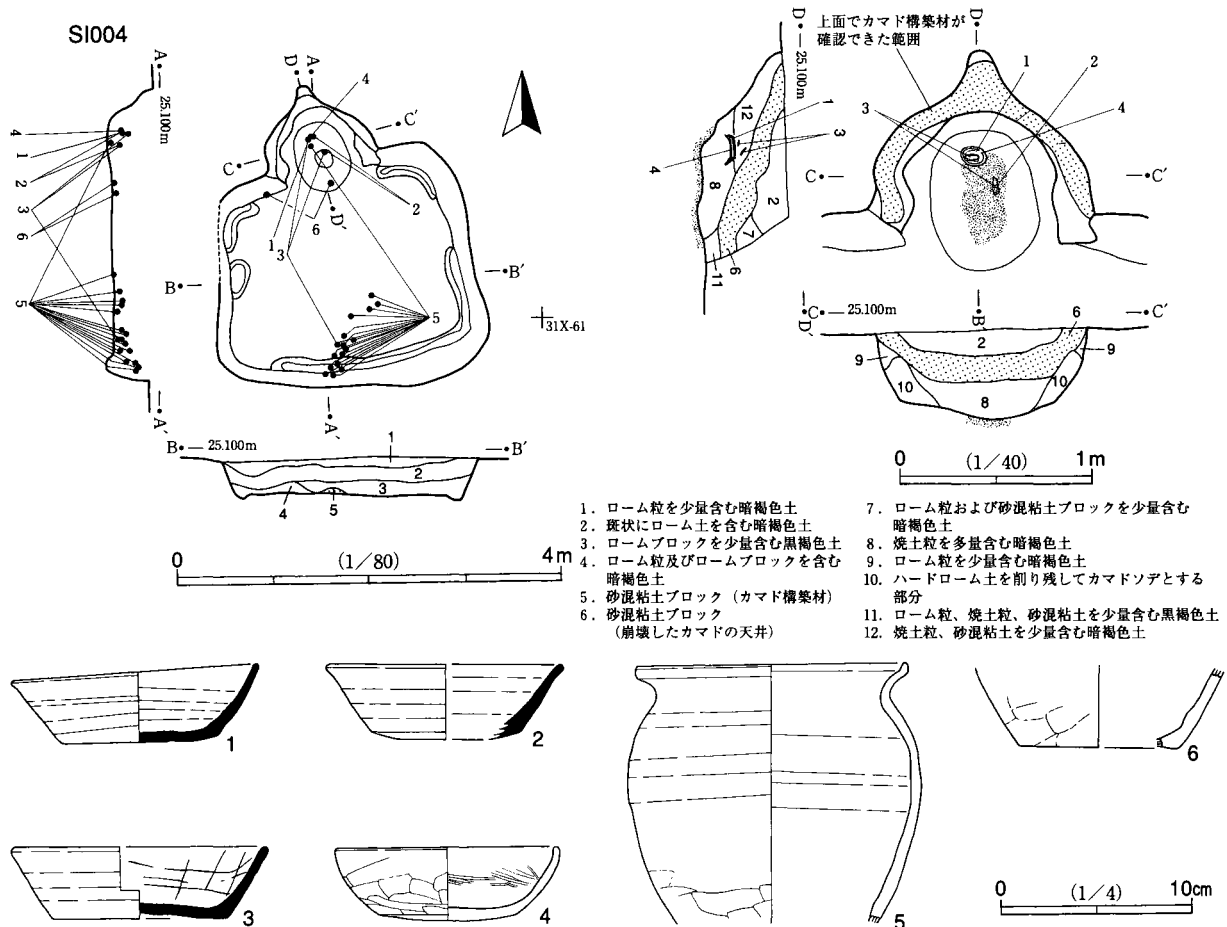
覆土中から検出された遺物について、本報告では6点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器片及び須恵器片6点(38g)である。1~3は須恵器杯である。切り離し技法は、基本的に回転ヘラ切りと思われる。1・3は褐灰色だが、2は還元焼成不十分なため、にぶい褐色~灰黄褐色である。3の内面には、浅く乱雑な格子状の線刻が施されている。4は土師器杯である。体部と底面の境に稜を持つものの、底面はやや丸みを帯びる形状となっている。5・6は土師器甕である。5は体部が最大径(15.3cm)となる小形甕である。口端部はつまみ上げたような形状である。

上記のように遺物点数は多いとは言えないが、その出土状況については特記すべき点が多い。カマド内では、8層の上面に完形の1と4を逆位に重ねた状態で検出された。3は破片になった状態でカマド内にあり、口縁部の小破片1点のみが南壁中央部付近で検出された。5は壁際にいわゆる「三角状堆積」が始まった頃に、南壁中央部付近から流れ込んだような状態でほとんどの破片が出土しているが、体下部の小



第53図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (4)

破片1点のみカマド内から出土している。つまり、3と5は対極の状態になっていることがわかる。遺物廃棄の時期については、以上のようにカマド内も南壁際も「三角状堆積」の上にいるように出土していることから、住居跡全体がレンズ状にある程度埋没した状況下であったことが予想される。また、出土状況から、遺物の廃棄に際し、かなり意図的な操作があったと考えられよう。



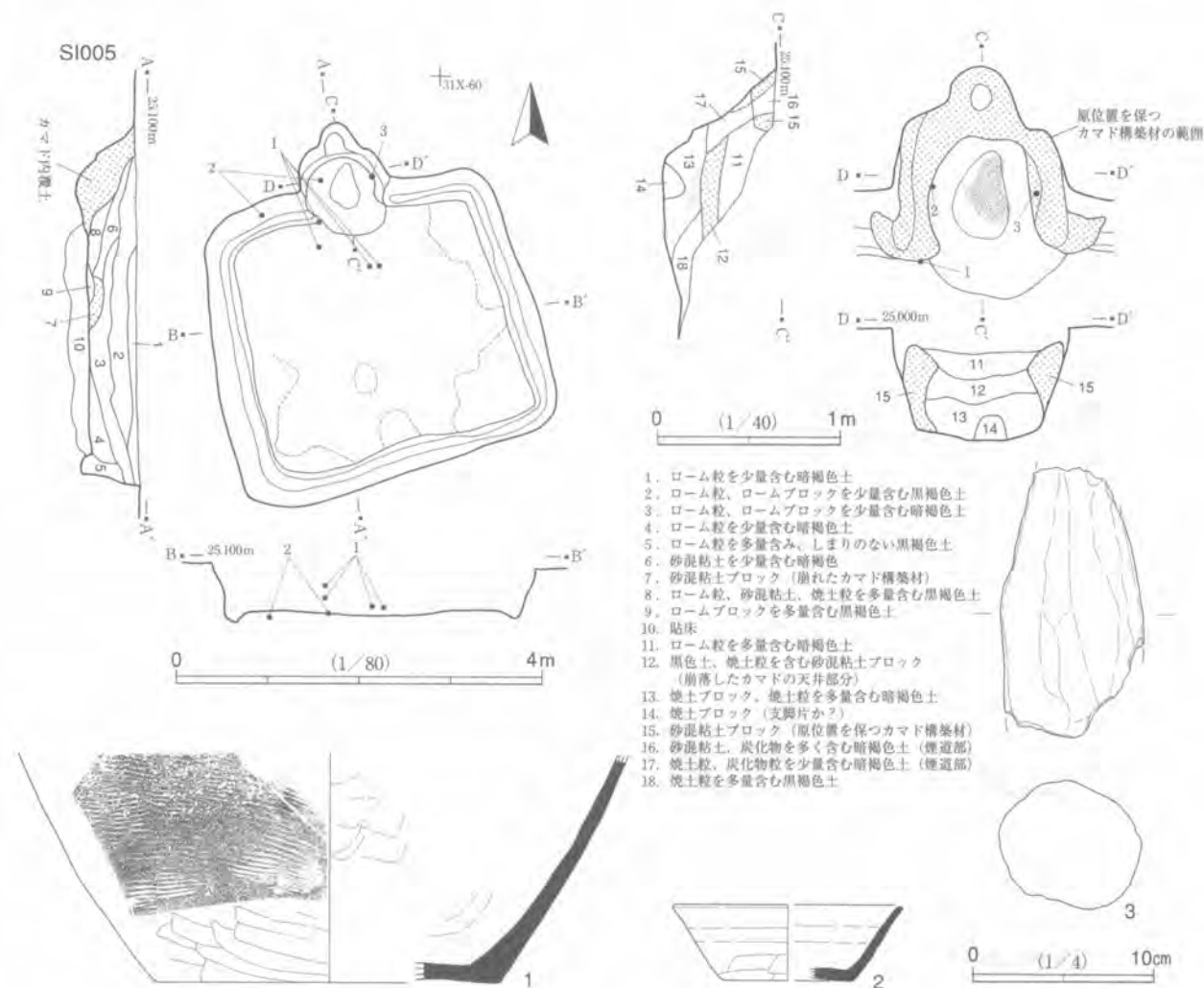
第54図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (5)

SI005 (第55図, 図版4・38)

調査区南東部SI004の西隣で検出された。主軸方向はN-11°-Wでほぼ南北方向である。カマドは北壁のほぼ中央部に位置し、方位はN-9°-Wである。規模は長軸3.6m、短軸3.0mの方形である。床は長軸2.8m、短軸2.6mで面積約6.6㎡である。床面壁際には深さ5cm~15cmの壁溝が巡っている。柱穴等のピットは検出されなかった。壁高は50cm前後である。硬化面が中央部を中心に四方に広がっており、床全体に貼床が施されている。貼床下の掘方は深さ30cm程度まで及んでいる。カマドは袖部及び煙道部が比較的良好に残存し、天井部も崩落したままの形で検出された。全体の半分程度(約70cm)が壁外にせり出すように構築されている。住居跡の覆土は基本的に自然埋没と考えられる。

覆土中から検出された遺物について、本報告では3点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器片及び須恵器片93点(1,279g)、石片1点(3g)である。1は須恵器甕の底部、2は須恵器杯である。両方とも胎土の特徴から常陸・新治窯産と考えられる。3は土製支脚である。かなり被熱し脆くなっている。

遺物の大半は、カマドおよび周辺で検出されている。カマドの遺存が良いのにもかかわらず、遺物が少ないのは、住居の廃絶後速やかに道具を運び出し、埋没にもさほど多くの時間がかからなかったことを示していると思われる。



第55図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (6)

SI006 (第56図, 図版5・39・40)

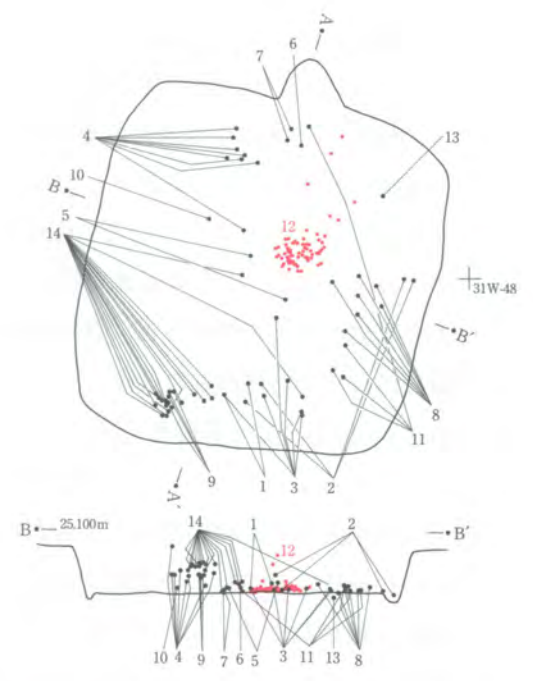
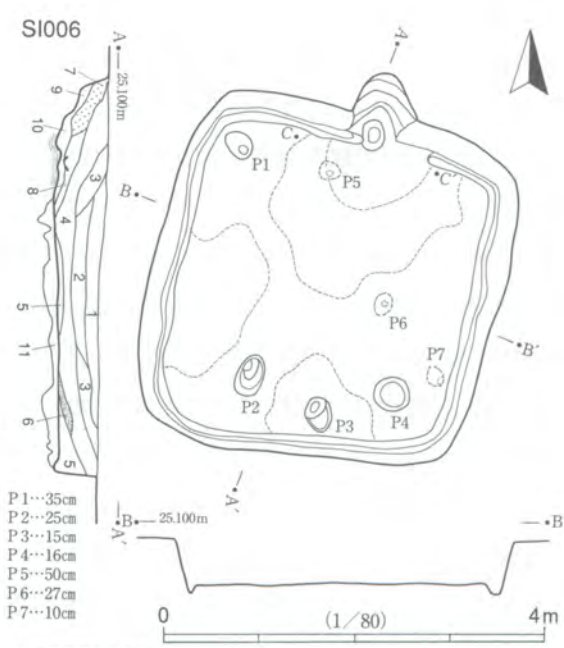
調査区南東部中央寄りで検出された。主軸方向はN-17°-Eでほぼ南北方向である。カマドは北壁中央部に位置し、方位はN-13°-Eである。規模は長軸3.8m、短軸3.4mで方形である。床は長軸3.2m、短軸3.0mで面積約9.1m<sup>2</sup>である。床面壁際には深さ3cm~10cmの壁溝が巡っている。床全体に貼床が施され、硬化面は西壁付近、カマド付近及び出入口付近の3か所に点在する。ピットは、当初4か所検出された(P1~4)が、貼床除去後、新たに3か所のピット(P5~7)が検出された。柱穴と考えられるピット(P1・2・4)の深さは順に30cm, 20cm, 15cmで、出入口施設と伴うピットと考えられるP3は10cm, P5~7は順に50cm, 26cm, 19cmである。カマドは袖部が砂混り粘土で造られ、煙道部は40cmである。壁高は32cm~60cmである。住居跡の覆土は自然埋没と考えられる。

覆土中から検出された遺物について、本報告では14点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器及び須恵器片21点(223g)、石片3点(181g)である1~3は須恵器杯である。いずれも還元が不十分な

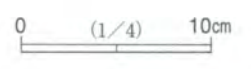
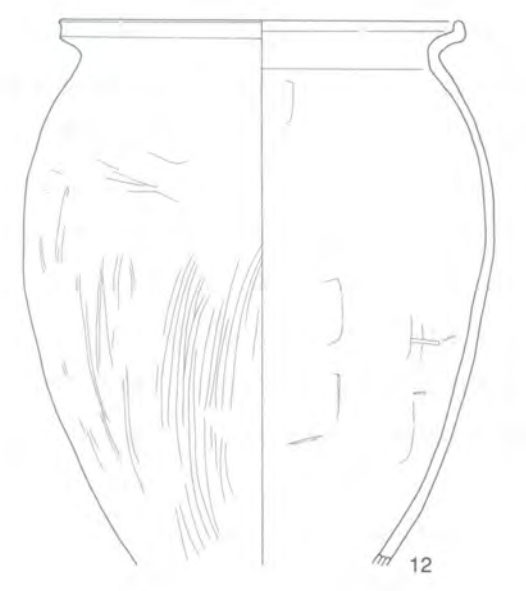
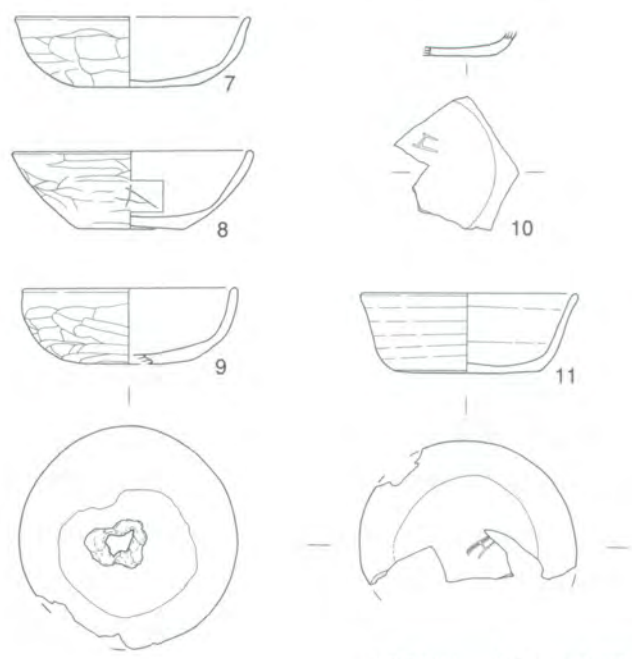
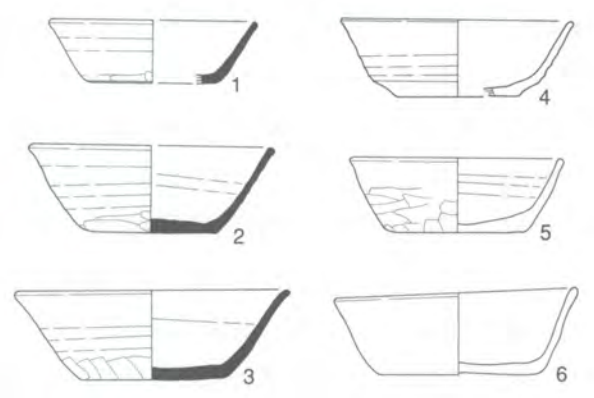
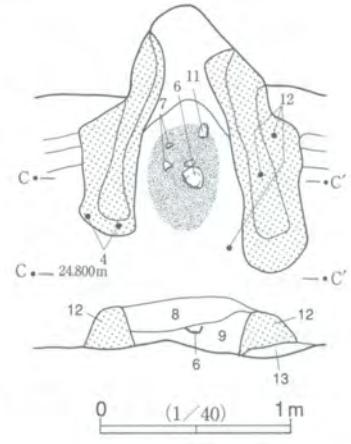
焼成であるが、特に1の色調は赤みを帯びる。2・3は胎土に雲母粒と長石粒を多く含むことから、新治窯産と考えられる。出土状況を見ると、いずれも住居南側、覆土下層～床面付近で検出されている。ただし、2の破片の一部はやや離れて東壁付近から検出されている。4～11は土師器杯である。4はカマド近くの覆土上層から破片がまとまって検出されている。5は内外面の煤の付着状況から灯明皿として使用された可能性がある。中央部付近の床面付近から検出された。6・7・11はカマド内から検出されている。6はカマド内から正位の状態で検出された。破損は片側の口縁部から体部に限られ、カマド内に安置したような出土状況を併せると、意図的に打ち欠いたとも考えられる。なお、打ち欠いた部分は大きく3個の破片になったと観察されるが、その内の1点が未検出である。7はカマド内から出土している。細かく割れているが、50%程度復元することができた。接合した破片はいずれも2次焼成を受けているが、破片ごとに状況が異なっている。破損後に2次焼成を受けたものと考えられる。11はカマド内及び住居内東南側床面付近で検出された。前者は1破片で、全体の約1/3を占め、二次焼成を受けている。後者は5つの小破片に分かれ、2次焼成は認められない。底面には「H」字状の線刻が施されている。8は細かく割れ、破片数も多いが、約80%を復元することができた。住居の南東部に集中し、覆土最下層～床面付近で検出されている。2次焼成等は認められない。体部外面に幾何学状の線刻が施されている。9は、比較的大きめの、4個の破片が接合し、全体の約80%を復元することができた。住居の南西隅付近、いわゆる三角状堆積の上層付近にいずれの破片も集中して検出された。底面には内側から打ち欠いて形成された穿孔があり、片側の口縁部～体部の破片が未検出である。後者の欠損部で、底面側の割れ口を見る限り、外面から内面に向かってはがれるように割れていることから、外面側からの打撃によって破損したと考えられる（写真参照）。10は住居中央部からやや北西側、覆土下層付近から検出された。底面の3個の小破片が接合したのみで、底面の約1/4が確認できるにすぎない。11と同様に2次焼成を受けた破片と受けない破片が接合している。底面には「H」字状の線刻が施されている。12・13は土師器甕である。調整及び胎土の特徴から常陸産と考えられる。12は非常に細かく割れている個体であった。大半の破片がいわゆる小片であるが、口縁部～体部にかけて全体の約60%程度が接合・復元された。しかし、底部付近の破片はほとんど検出されていない。なお、破片は住居中央部床面付近に集中しており、意図的にこの場で粉碎した可能性が強い。13は住居北東隅側に倒れた形で検出され、全ての破片が接合し、ほぼ完形に復元することができた。14は須恵器甕である。多くの破片が北壁付近、いわゆる三角堆積の上層から検出されたが、1点のみがその付近より、1m東側の床面付近から検出された。胴部付近の破片で未検出部分が多く、全体を接合することができなかった。口縁部内面に「井」の字状の線刻が、体部外面に墨書「□」がそれぞれ施されている。

#### S1007 (第58図, 図版4・38)

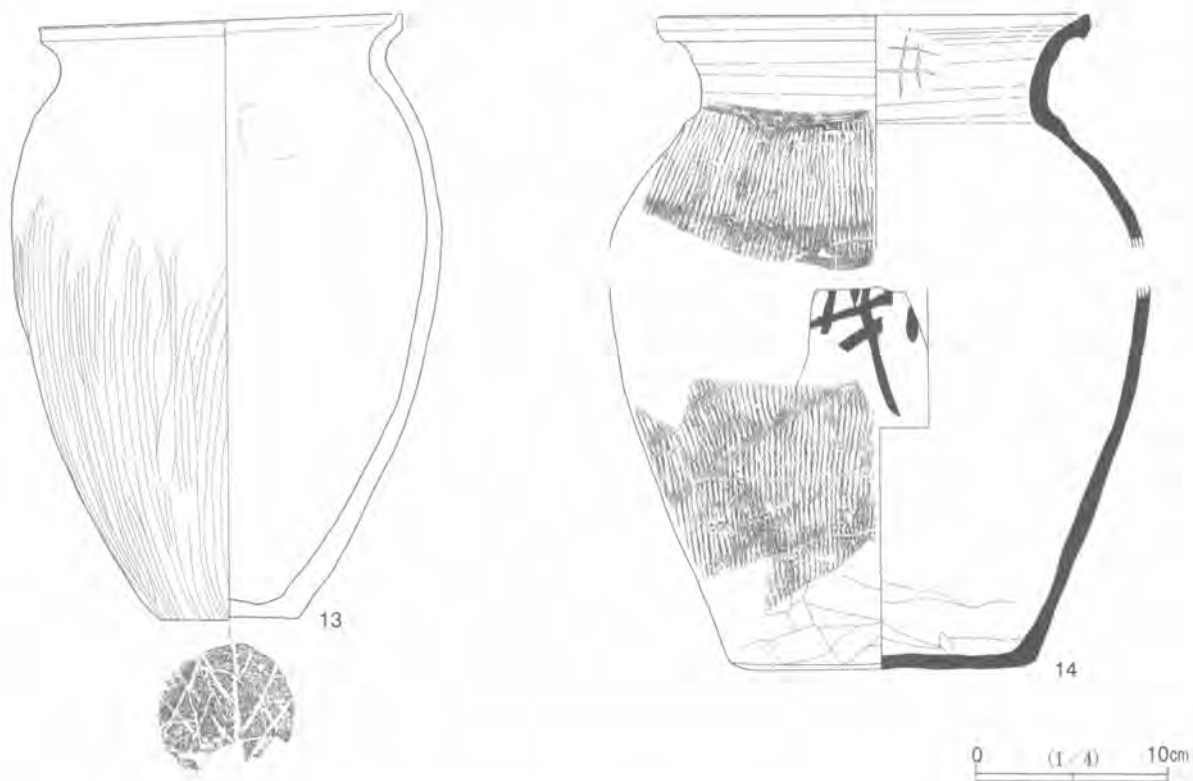
調査区中央部で検出された。主軸方向はN-20°-Wでほぼ南北方向である。カマドは北壁中央部と北東隅の2か所から検出された。北壁カマドの廃絶後、北東隅に移築したと考えられる。方位は北カマドがN-25°-W、北東カマドがN-17°-Wである。住居の規模は長軸3.1m、短軸2.8m、形状は方形である。床面は長軸2.6m、短軸2.5m、面積は約5.6㎡である。床面壁際には北東カマド部分を除いて深さ1.5cm～8cmの壁溝が巡っている。壁溝が北カマドの焼土などを切って構築されていることから、北東カマドへの移設の際に、新たに掘られたものと判断される。ピットは4か所検出された。P1は北カマド付近、P2・P3は西壁中央部付近、P4は南壁中央部付近にある。P1～P4の深さは順に9cm、23cm、25cm、17cm



1. ローム粒を少量含む黒褐色土
2. 褐色土暗ブロックを多く含む黒褐色土
3. 褐色土暗及びローム粒を多量含む黒褐色土
4. ローム粒を少量含む暗褐色土
5. ローム粒及びロームブロックを少量含む極暗褐色土
6. 焼土粒を多量、炭化物及び焼土粒を少量含む暗褐色土
7. 黒色土ブロックを少量含む砂混粘土  
(崩落したカマド天井構築材)
8. 砂混粘土、焼土粒及び炭化物粒を多く含む暗褐色土
9. 黄褐色土  
(カマドの掘方に貼付けたソフトローム土)
10. 焼土粒を多量、砂混粘土を少量含む
11. ロームブロックを多量含む暗褐色土 (貼床)
12. 砂混粘土  
(カマドのソデ部分の構築材)
13. ロームブロックを多量含む黒褐色土



第56図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (7)



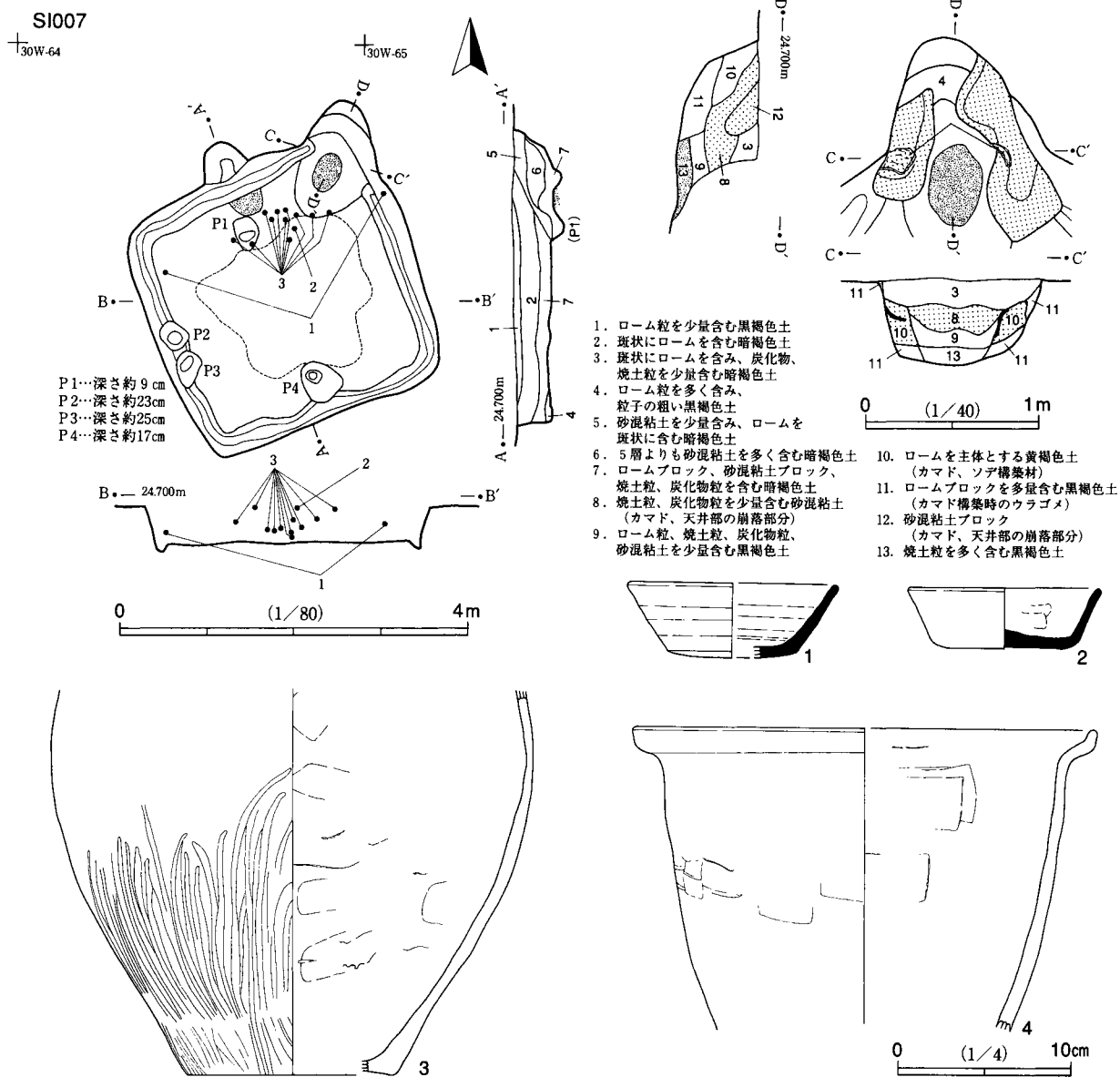
第57図 奈良・平安時代竪穴住居跡（8）

である。P4は構築場所及び形状から、出入り口施設と考えられる。壁高は37cm～46cmである。床面は全面に渡って硬化しているが、特に中央部付近が顕著である。なお、貼床は掘方の凹凸を埋める程度に施されていた。床面からは、焼土の小ブロックと炭化材小片が北側と南側を中心に検出された。北東カマドは比較的良好に構築材（砂混り粘土）が認められ、天井部もやや崩落しているが残存している。

覆土中から検出された遺物について、本報告では4点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器片及び須恵器片19点（370g）である。また、鉄製刃子と思われる破片も検出されたが、遺存状態が極めて悪くここに記載するのみとする。全体的に遺物は散漫な出土状態であり、床面からの出土も認められなかった。唯一、4が北東カマド両袖の補強材として使用されている以外は、住居廃絶後の投棄と考えられる。

1・2は須恵器杯である。1は暗青灰色を呈し、胎土は中砂粒を比較的多く含んでいる。2破片のみの接合で全体の20%ほどにしかならないうえ、それぞれ東壁付近と西壁付近から検出されたものであるなど、その状況には注意を要する。2は全体が明赤褐色であり、胎土は細砂粒を多く含む。ほぼ完形である。3・4は土師器甕である。3は胎土及び調整技法から常総型甕と判断される。カマド近くの覆土下層～中層にかけて比較的まとまって検出されたが、全体の20%ほどの破片しか認められなかった。4は上記の通り、北東隅カマドの袖補強材として利用されていたものである。色調は赤みを帯び、胎土は雲母粒を多く含んでいることから、常陸産と判断される。





第58図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (9)

SI008 (第59・60図, 図版5・40・41)

調査区北西部で検出された。主軸方向はN-12°-Wでほぼ南北方向である。カマドは、北壁中央付近と東壁の北側寄り付近の2か所から検出された。東カマドの廃絶後、北カマドを構築したと考えられる。方位は北カマドがN-11°-W、北東カマドがE-12°-Nである。規模は長軸3.3m、短軸3.2mで方形である。床は長軸2.5m、短軸2.3mで面積約5.3㎡である。床面壁際には、北カマド部分を除いて深さ約1cm~9cmの壁溝が巡っている。これはカマドを北に移設する際に構築されたものと考えられる。ピットは3か所 (P1~P3) 検出され、深さは順に30cm, 7cm, 13cmである。P3は出入り口施設と考えられる。壁高は約29cm~44cmである。床面は、中央部から北カマドにかけて硬化している。東カマドは、東壁に煙道の張り出しとともに袖の一部が残存している。北カマドは、両袖下にローム土を主体にして基壇状に段を形成している。



覆土中から検出された遺物について、本報告では23点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器及び須恵器片112点(1,787g)、土製支脚片130g、石片20点(80g)である。本遺跡の中でも、比較的多い出土量と言える。遺物の出土状況を見ると、床面に集中することなく覆土上層～中層からも多くの資料が検出された。また、離れた地点の遺物が接合、覆土上層と下層が接合など、複雑な様相を見出せる。

1～4は土師器杯である。1・2は非ロクロ土師器である。1はほぼ完形で、大部分が赤褐色を呈しており、赤彩の可能性もある。住居中央部からやや北西よりの地点で、床面に正位の状態で置いたようなかたちで検出された。3・4はロクロ土師器である。3は口縁部付近の片側を内側から、意図的に打ち欠いている。打ち欠きは1回ではなく、割れ口を調整するように細かな剥離を数回にわたり加えている。墨書および刻書は認められなかった。住居中央部付近の床面直上から、正位の状態で置いたように出土した。4は深形の杯である。大半の破片は、北カマドの南側付近の床面から10cm程度上の所から検出されているが、1点のみが東壁中央部近くにあった。内面に被熱による荒れが認められ、外面にも不自然な焼成痕があるが、2次焼成によるものか判然としない。5～9・17は須恵器杯である。5～8・17は箱形の器形であり、褐色系の強い色調となる。9は上方へ大きく開く器形であり、やや灰色系が強い色調となる。胎土にも雲母粒を多く含むなど新治窯産の特徴が見出され、5～8とは大きく異なる様相である。出土状況は、6が床面付近から出土している以外は、いずれも覆土上層からの出土である。7は全体の80%ほどが接合し、大変の破片が西壁より検出されたが、口縁部～底部にかけての比較的大きな破片1点のみが北東隅付近から出土している。5は全体が破損し、接合した個体であるが、口縁部の片側のみ破片が検出されなかった。割れ口を見ると内側から打ち欠いた様相であり、ほかの場所で意図的に打ち欠いたものを投棄したと考えられる。17も同様に口縁部～体部の片側が打ち欠かれ、その部分の破片は検出されていない。また、17には打ち欠いた口縁部～体部の反対側内面に「井」形の線刻が施されている。10は須恵器杯蓋である。天井部に回転ヘラケズリが施され、平坦面が形成されている。11～16・18・19・23は土師器甕である。14・15は小形甕を除き、胎土・調整技法の特徴から、いずれも常総型甕と判断される。20～22は須恵器甕である。22は胎土に白色粒(径1mm～3mm)を多く含んでいる。

#### S1009 (第61図, 図版6・42)

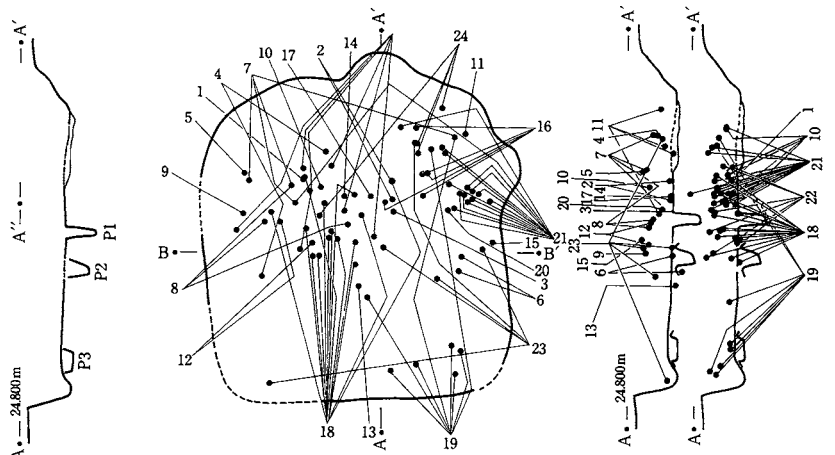
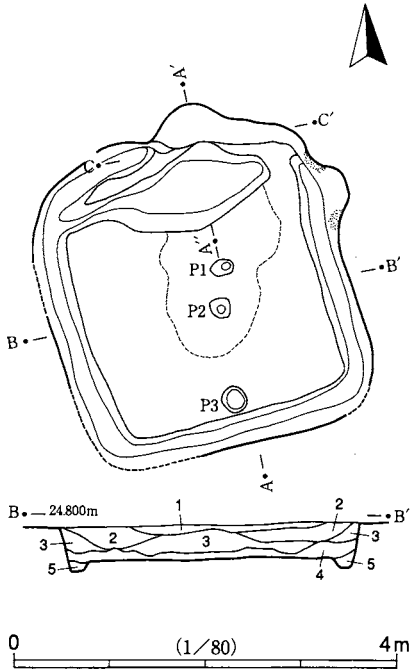
調査区北西部で検出された。主軸方向はN-3°-Eでほぼ南北方向である。カマドは北壁中央に位置し、方位はN-6°-Eである。規模は長軸3.0m、短軸2.5mで隅丸方形である。床は長軸2.5m、短軸2.3mで、面積は約4.6㎡である。壁際には深さ4cm～9cmの壁溝が巡っている。ピットは3か所検出された(P1～P3)。深さはP1から順に15cm、7cm、16cmである。P2は出入口施設と考えられる。その他のピットは検出されなかった。壁高は約30cm～38cmである。カマドは袖部の砂混り粘土が良好に残存し、中に補強材と思われる土器片が含まれている。

覆土中から検出された遺物について、本報告では7点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器及び須恵器片35点(400g)、石片1点(2g)である。床面出土の遺物が多いものの、全体的に散漫な出土状況であった。なお、図示した遺物のうち1・3・4はカマド内から検出された。2もカマド近くの出土である。

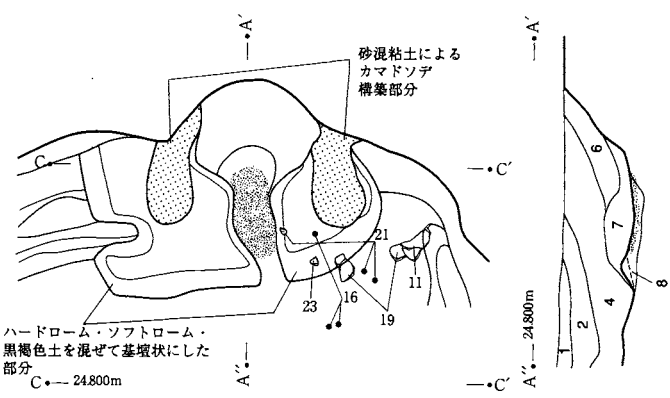
1～4は須恵器杯である。1・3は還元不十分な焼成で、赤褐色系の色調である。2・4は還元焼成で、褐灰色～灰色である。いずれも胎土に雲母粒は見られず、細砂粒がやや多く確認できる程度である。5・7は土師器小形甕である。6は須恵器高台付皿である。胎土には雲母粒をはじめとして、白色粒(径1mm

SI008

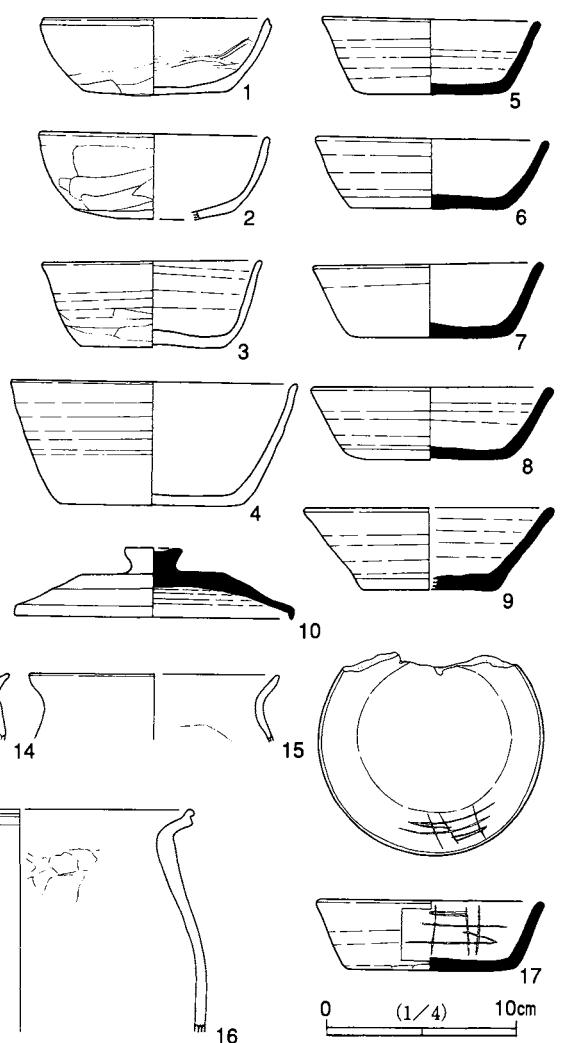
30u-09



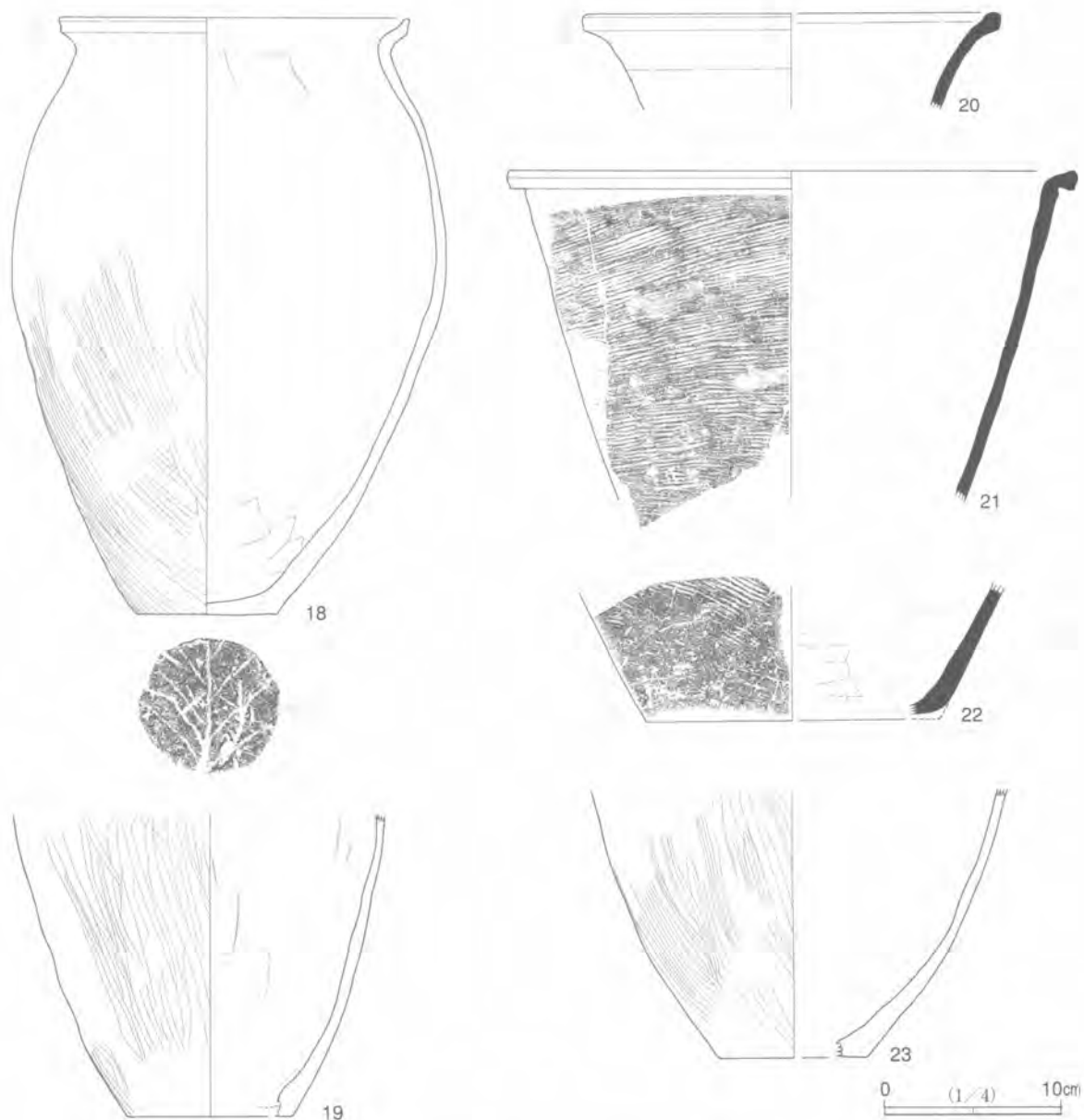
1. ロームブロックやや多く、焼土粒、砂粒、炭化物粒を少量含む黒褐色土
2. 斑状に似るが、やや暗色で焼土粒、炭化物粒、ロームブロックを多量に含む暗褐色土
3. 2層に似るが、やや暗色で焼土粒の含有量が多い部分
4. 砂混粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒、ロームブロックを多量含む暗褐色土
5. ローム粒を少量含む黒褐色土
6. 焼土及び焼土ブロックを主体とする部分
7. 焼土粒を多く含む暗褐色土
8. ハードローム、ソフトローム、黒褐色土を混ぜて基壇状にした部分であるが一部貼床としても使われている



ハードローム・ソフトローム・黒褐色土を混ぜて基壇状にした部分



第59図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (10)



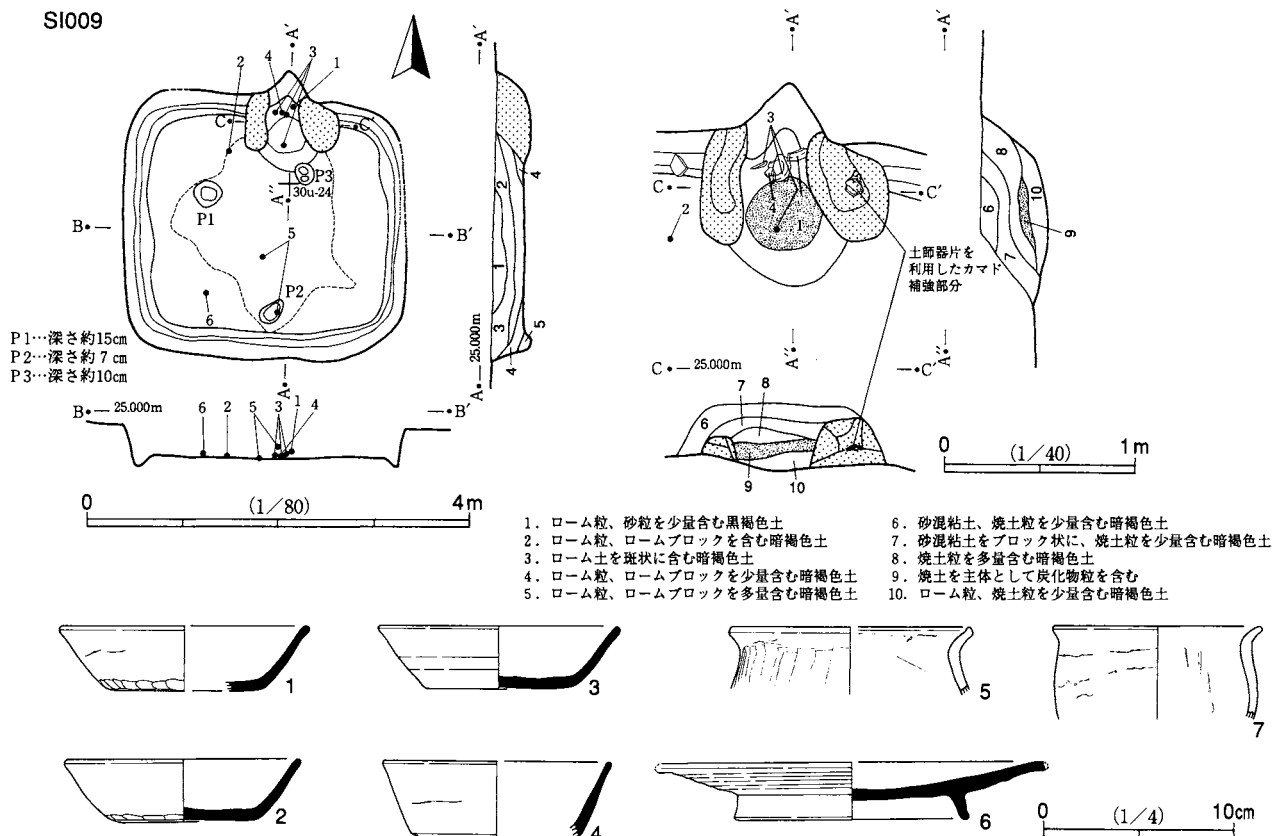
第60図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (11)

～2mm) 及び中粒砂を多く混入している。

**S1010** (第62図, 図版6・42)

調査区西部で検出された。主軸方向はN-9°-Wでほぼ南北方向である。カマドは北壁中央に位置し方位はN-18°-Wである。規模は長軸3.4m, 短軸2.5mで方形である。床は長軸2.8m, 短軸2.4mで面積約6.1㎡である。深さ約2cm～8cmの壁溝が北東隅と南東隅を除いて巡っている。ピットは2か所から検出された。P1は南西隅にあり, 深さは約8cmである。P2は南壁中央部付近にあり, 深さは約15cmで, 出入口施設と考えられる。硬化面はP2付近からカマド付近へ, 住居中央部を南北の帯状に広がっている。カマドは天井部が崩落し, 東側袖の一部に攪乱が見られるものの, 比較的良好に残存している。煙道部は長さ50cm, 幅20cmほどである。

SI009



第61図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (12)

覆土中から検出された遺物について、本報告では9点を図示した。図示しなかった遺物は、土師器及び須恵器片36点(698g)である。遺物は、全体的に散漫な状況で検出された。4・6は床面から検出された。2・7・8が床面付近～覆土下層、1・3・5は覆土上層からそれぞれ検出された。

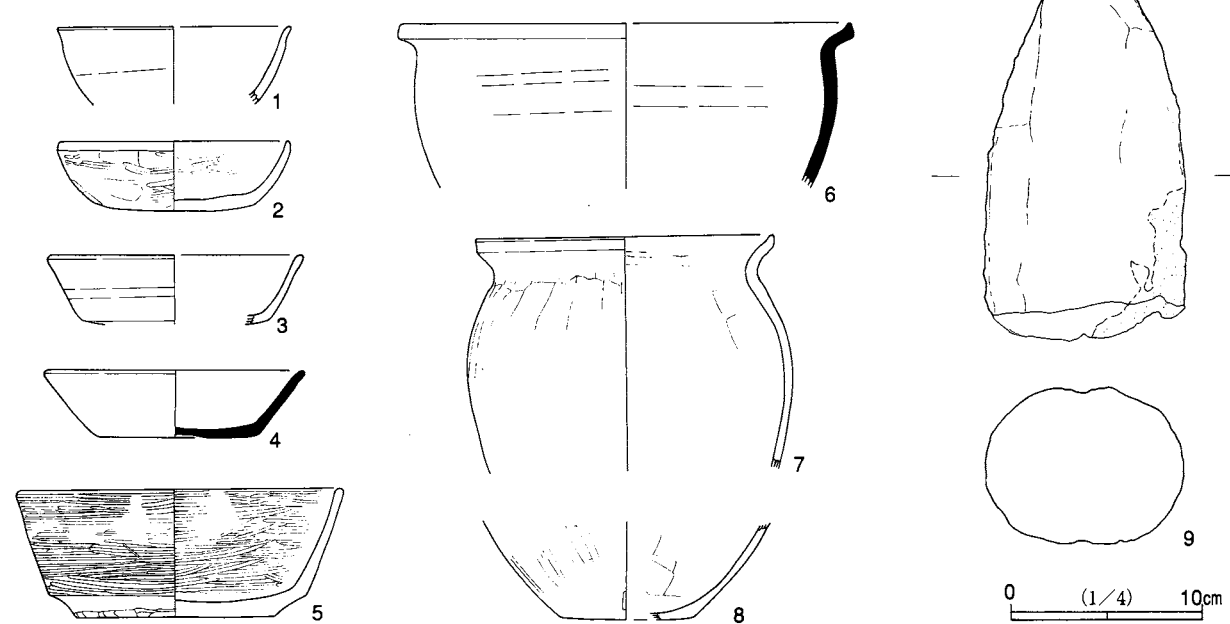
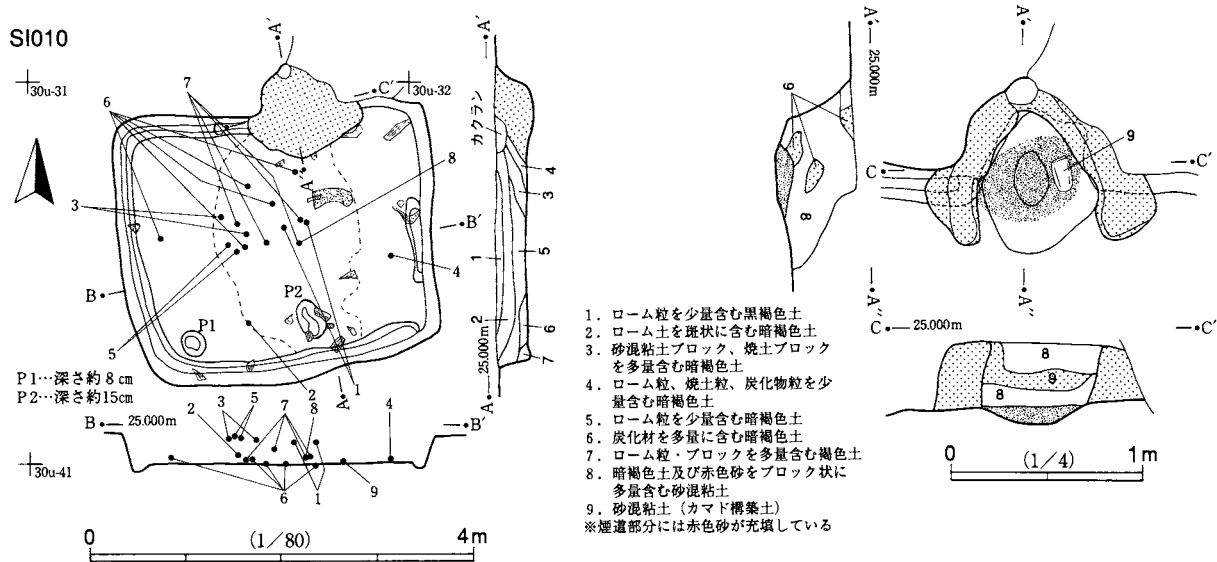
1～3は土師器杯である。1・3はロクロ土師器、2は非ロクロ土師器である。片側約1/3が欠損しているが、その破片は遺構内から検出されなかった。外面はヘラミガキによる光沢が保たれているが、内面は器表面が鱗状に風化している。本来の使用目的ではない被熱によるものとも考えられる。4は須恵器杯である。接合後も、口縁部～体部の片側約1/5を欠損しているが、2と同様に遺構内からその破片は確認されなかった。5は土師器高台付杯である。高台部は削り出されている。内外底面ともに丁寧なミガキが施され、内面にはさらに黒色処理が行われる。6は須恵器甕である。

7・8は土師器甕である。製作や胎土が類似し、同一個体の可能性がある。8は底面を中心として被熱の痕跡が認められる。8はカマド内から検出された土製支脚である。被熱が著しく、遺存状態は悪い。

SI011 (第63図, 図版6・42)

調査区中央部で検出された。主軸方向はN-12°-Wでほぼ南北方向である。カマドは北壁中央部に位置し、方位はN-10°-Wである。規模は長軸2.7m、短軸2.3mの方形である。床は長軸2.4m、短軸2.1mで面積約4.8㎡である。壁高は約39cm～43cmである。壁溝及びピットは検出されなかった。北東隅部と南西隅部の一部に攪乱が見られた。カマドは袖部の砂混り粘土が良好に残存しているが、煙道の出口は埋没していた。

SI010



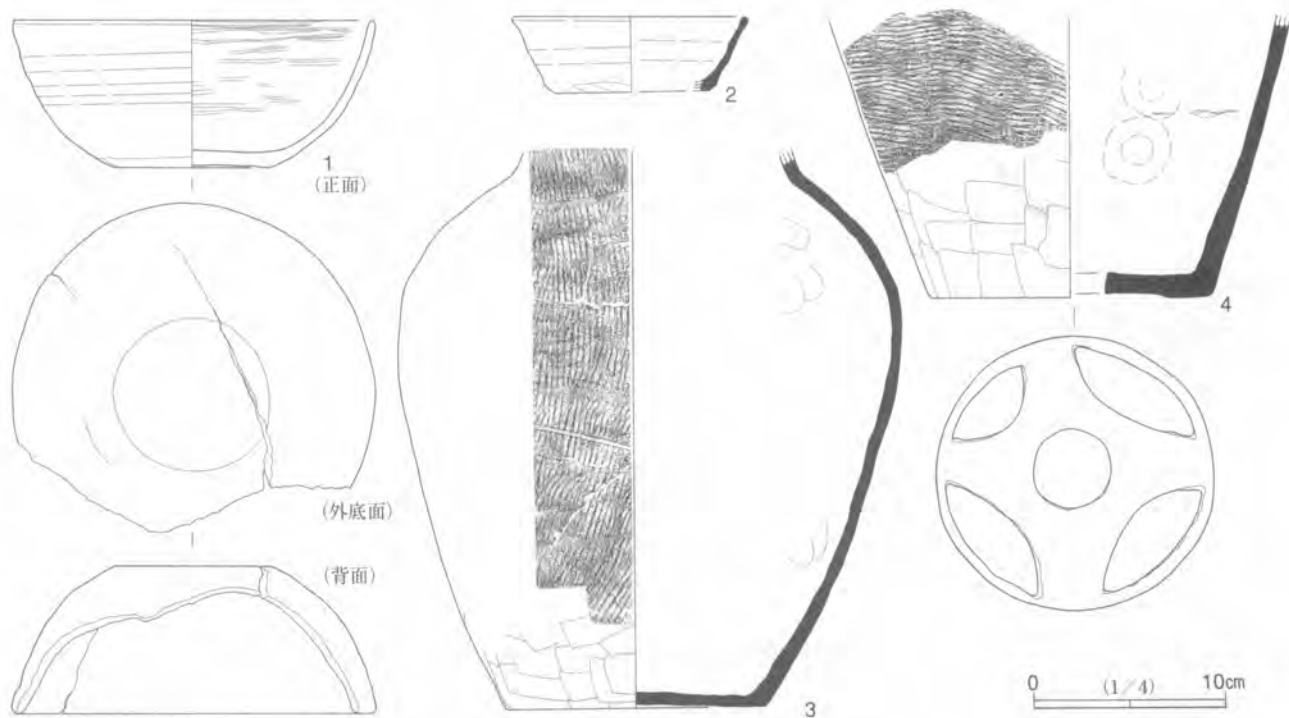
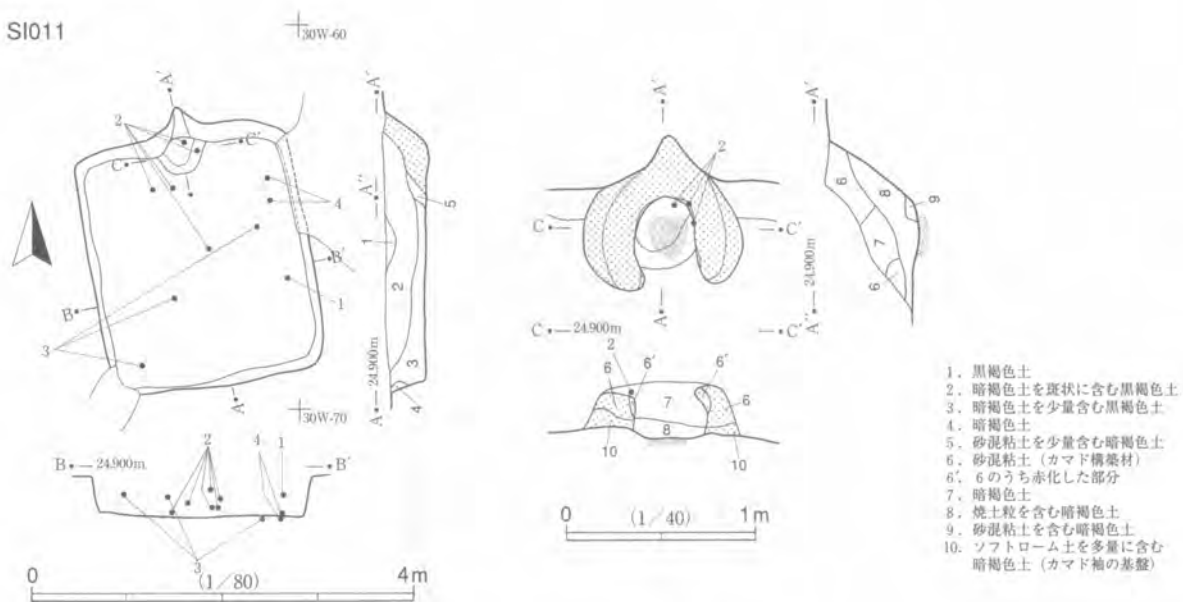
第62図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (13)

覆土中から検出された遺物について、本報告ではその全てである4点を図示した。遺物は全体的に散漫な状況で検出された。

1は土師器鉢である。口縁部～体部の片側約1/4を欠損している。本住居跡覆土内からはその破片は検出されなかった。破損部周辺を中心として、内外面に被熱のためと思われる器表面の「荒れ」が観察される。破損は意図的なものかどうか、明確ではないが、破損部の正面形状に2つの弧が見いだせることから大きく2回の打撃によって形成された破損である可能性が指摘できる。個体中央部には、被熱のためと思われる亀裂が入っている。2は須恵器杯である。カマド内及びその周辺から検出された。胎土の特徴により新治窯産と考えられる。3は須恵器甕である。色調が灰色を基調としており、還元炎焼成である。底面

には荒縄と思われる圧痕がついている。4は須恵器甕である。色調が褐灰色を基調としており、不完全な還元炎焼成である。胎土には白色粒および雲母粒が多く含まれており、新治窯産と考えられる。

SI011



第63図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (14)

第17表 奈良・平安時代土器属性表

遺構番号	挿図番号	機種	器形	依存度	法量(cm)			調整技法等			胎土	色調		焼成	備考
					口径	底形	器高	内面	外面	底部		内面	外面		
SI001	1	須恵器	甕?	5%<	-	-	[6.1]	ヘラナデ	手持ちヘラナズリの後タダキ(平行)	-	長石、石英、砂粒、スコリア(小)、白色針状物(小)、(白い小石多)	灰色	暗灰色	良好	
SI001	2	土師器	甕	10%	19.2	-	[12.1]	ココナデの後ナデ、ヘラナデ	ココナデの後ヘラナデ	-	長石、石英、砂粒、雲母粒(白多)、スコリア、白色針状物	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	常総型、内面に接合痕残る。
SI002	1	土師器	甕	50%	(19.2)	-	[32.7]	ナデ、ヘラナデ	ヘラナズリの後ナデ、ヘラミガキ	-	長石、石英(紅大)、砂粒、雲母粒(白多)、スコリア(小)、(白い小石多)	にぶい褐色、赤褐色、灰褐色	にぶい褐色、赤褐色、灰褐色	良好	常総型、内外面に接合痕残る。
SI002	2	土師器	甕	25%	18.5	-	[18.3]	ナデ、ヘラナデ	ココナデの後手持ちヘラナズリ	-	長石、石英、砂粒、スコリア(小)白色針状物	にぶい赤褐色、黒色	にぶい赤褐色、黒色	良好	
SI002	3	土師器	甕	15%	(20.2)	-	[12.1]	ナデ、ヘラナデ	ココナデの後ナデ、ヘラナデ	-	長石、石英、砂粒、雲母粒(白)、スコリア(小)、白色針状物(白い小石多)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	常総型、内外面に一部に接合痕残る。
SI002	4	土師器	鉢	25%	(22.2)	-	[13.7]	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	長石、石英、砂粒(極小)、スコリア、白色針状物(非常に胎土が細かい粒子)大針状物の物は見られない	にぶい赤褐色、赤褐色、黒褐色	にぶい赤褐色	良好	鉄線形土器、内外面黒色処理だが、蓋縁のため大半が剥けている。蓋形、器面調整ともに丁寧である。
SI002	5	土師器	杯	15%	(12.3)	(7.4)	4.1	ロクロ	ロクロの後手持ちヘラナズリ	回転糸切りの後手持ちヘラナズリ	長石、石英、砂粒、スコリア(やや多)、白色針状物	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	
SI002	6	土師器	杯	55%	(12.8)	7.0	3.5	ロクロ	ロクロの後回転ヘラナズリ	回転糸切りの後、回転ヘラナズリ	長石、石英、砂粒、雲母粒(極小)、スコリア(小)、白色針状物(小)	にぶい褐色	にぶい褐色、黒色	良好	内外面に蓋縁の痕跡あり、外面体部の一部及び内面底部の一部に蓋草の痕跡あり。
SI002	7	土師器	杯	15%	(17.4)	-	[4.8]	ヘラミガキ	ロクロの後回転ヘラナズリ?	-	長石、石英、砂粒、雲母粒、スコリア、白色針状物	黒色	黒色、にぶい黄褐色	良好	内外面黒色処理。
SI002	8	土師器	杯	60%	(11.3)	6.6	4.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切りの後、手持ちヘラナズリ	長石、石英、スコリア、砂粒	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	
SI002	9	土師器	杯	60%	15.4	7.5	5.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキの後手持ちヘラナズリ? 鋭い回転の回転ヘラナズリ	長石、石英、砂粒、雲母、(多)、スコリア、白色針状物	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	
SI002	10	土師器	杯	25%	(16.2)	(7.4)	5.7	ヘラミガキ	ロクロの後回転ヘラナズリ	回転糸切りの後、回転ヘラナズリ	長石、石英、砂粒、雲母粒、スコリア、白色針状物	黒色	にぶい褐色、黒褐色	良好	内面黒色処理、蓋縁のため、内面口縁部付近に蓋草が剥けている部分あり。
SI002	11	土師器	小型甕蓋(高台付?)	20%	(8.8)	-	[4.6]	ロクロ	ロクロ	-	長石、石英、砂粒、スコリア、白色針状物	にぶい褐色、黒褐色	にぶい褐色、黒褐色	良好	
SI002	12	土師器	杯	90%	12.2	7.9	3.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切りの後回転ヘラナズリ	長石、石英、砂粒、雲母粒、スコリア、白色針状物	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	体部外面蓋草「七万」正位。
SI002	13	土師器	杯	5%<	-	-	[1.8]	ロクロ	ロクロ	-	長石、石英、砂粒、雲母粒(金多)、スコリア、白色針状物	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	体部外面蓋草「方口」正位
SI002	14	土師器	杯	100%	11.1	5.8	3.9	ロクロ	ロクロの後回転ヘラナズリ	回転糸切りの後、回転ヘラナズリ	長石、石英、砂粒、スコリア(小)、白色針状物(やや多)	にぶい褐色	にぶい褐色、黒色	良好	体部外面蓋草「大」正位。蓋縁の痕跡あり、内外面に口縁部へ体部外面に黒草部分あり。
SI002	15	土師器	杯	95%	12.0	7.2	4.2	ロクロ	ロクロの後手持ちヘラナズリ	手持ちヘラナズリ(全面)	長石、石英、砂粒、スコリア、白色針状物	明赤褐色、にぶい赤褐色	明赤褐色	良好	体部外面蓋草「口」正位、口縁部～内面底部にかけて蓋草が剥けている部分あり、口縁部の一部を意図的に打ち欠いている。
SI002	16	土師器	高台付杯	100%	10.9	10.8	5.9	ヘラミガキ	ヘラミガキの後、回転ヘラナズリ	回転糸切りの後、外周に回転ヘラナズリを施し、全体に粗雑なヘラミガキを加える。	長石、砂粒、石英、雲母粒(少)、スコリア、白色針状物(胎土をきめ細かい)	黒色、にぶい赤褐色	にぶい赤褐色、黒褐色	良好	社部外面蓋草「口」、口縁部の一部を意図的に打ち欠いている。その後、蓋縁のため底面に亀裂が生じている。内面黒色処理。
SI002	17	土師器	杯	65%	15.0	7.1	5.1	ヘラミガキ	ロクロの後回転ヘラナズリ	回転糸切りの後回転ヘラナズリ	長石、石英、砂粒、雲母粒(金多)、スコリア、白色針状物(やや多)	黒色	にぶい赤褐色、黒色	良好	体部外面蓋草「口」、内面黒色処理、内面口縁部の一部が蓋草で著しく剥落している。
SI002	18	土師器	杯	40%	(12.5)	(7.0)	4.8	ロクロ	ロクロの後回転ヘラナズリ	回転ヘラナズリ	長石、石英、砂粒、スコリア(大きめ粒1mm、2mmもあり)、白色針状物(小)	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	底面内面に線刻のような線草多量あり、意図的に打ち欠き、蓋口を磨いている部分あり。
SI002	19	須恵器	甕	40%	(26.7)	-	[18.0]	ナデ、ヘラナデ(あて具痕あり)	タタキ(平行)の後、口縁部ココナデ	-	長石、石英、砂粒、スコリア(小)白色針状物(白い小石多)	黄灰色	灰色～灰黄褐色	良好	内面の一部に蓋草付着。
SI002	20	須恵器	甕	10%	-	(13.8)	[4.0]	ナデ、ヘラナデ	ナデ(細目及び幅目状、底蓋あり)	手持ちヘラナズリ	長石、石英、砂粒、スコリア(小)、白色針状物	黒色	黒色、底面外面のみに黄褐色	良好	底面外面を磨き、内外面ともに黄褐色が噴着。
SI002	21a	須恵器	甕(口縁部)	5%	-	-	[12.2]	ナデ、ヘラナデ	タタキ(平行)の後、口縁部ココナデ	-	長石、石英、砂粒、雲母粒(白)、スコリア、白色針状物	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	

遺構番号	棟図番号	機種	器形	依存度	法量(cm)			調整技法等			胎土	色調		焼成	備考
					口径	底形	器高	内面	外面	底部		内面	外面		
SI002	21b	須恵器	甗(底部)	5%	—	(16.8)	[10.8]	ナデ、ヘラナデ	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	5孔式。	
SI003	1	土師器	杯	15%	(12.0)	(7.4)	4.0	ロクロ	ロクロの後回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ(後存部)	灰黄褐色	灰黄褐色	良好		
SI003	2	須恵器	杯	25%	(12.6)	(7.1)	4.3	ロクロ	ロクロの後回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ(後存部)	灰色	灰色	良好	新治窯産。	
SI003	3	須恵器	杯	45%	(13.6)	(7.2)	4.4	ロクロ	ロクロの後手持ちヘラケズリ	回転ヘラケズリ(後存部)	黄灰色～褐灰色	黄灰色～褐灰色	良好	新治窯産。重ね焼きあり。	
SI003	4	土師器	高台付杯	25%	(15.1)	—	[5.5]	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	黒色	黒色	良好	内面黒色処理。肘付け重台の痕、はつきり残っている。外面のヘラミガキ、器面が磨かれていて、あまり残っていない。	
SI003	5	土師器	甗	15%	—	(9.2)	[7.8]	ナデ、ヘラナデ	手持ちヘラケズリ後、ヘラミガキ	木葉	にぶい、黄褐色	灰黄褐色、黒褐色	良好	常盤型。蓋しく被蒸している。	
SI003	6	須恵器	蓋	65%	—	14.2	3.0	ロクロ	ロクロの後回転ヘラケズリ	—	灰色	灰色	良好	新治窯産か。蓋玉形状のつまみ。	
SI003	7	土師器	皿	20%	(15.4)	(9.5)	(3.2)	ヘラミガキ	ヘラミガキ、回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	にぶい、赤褐色、褐色	にぶい、赤褐色、黒褐色	良好	内外面同箇所に黒蒸あり。	
SI003	8	土師器	高台付杯	20%	—	(8.1)	[2.2]	ヘラミガキ	ロクロ	回転ヘラケズリ(全面)	黒色	黒色	良好	内面黒色処理。	
SI003	9	土師器	甗	15%	(12.4)	—	[5.4]	ナデ、ヘラナデ	ヨコナデの後手持ちヘラケズリ	—	赤褐色	赤褐色	良好		
SI003	10	土師器	甗	15%	—	(8.6)	[5.0]	ナデ、ヘラナデ	ヘラミガキ	木葉	にぶい、赤褐色	にぶい、赤褐色	良好	常盤型。内外面黒蒸あり。	
SI003	11	須恵器	甗	5% <	(30.0)	—	[4.2]	ナデ、ヘラナデ	タタキ(平行)の後口縁部ヨコナデ	—	褐色	褐色	やや不良		
SI003	12	土師器	甗	20%	(19.6)	—	[13.6]	ナデ、ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ	—	にぶい、褐色	にぶい、褐色	良好	内面一部黒蒸あり。	
SI003	13	土師器	甗	10%	(22.4)	—	[14.8]	ナデ、ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ	—	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色、黒褐色	良好	常盤型。	
SI004	1	須恵器	杯	95%	13.0	8.3	3.4~4.0	ロクロ、ヨコナデ	ロクロ、ヨコナデ	回転ヘラ切り	褐色	褐色	良好	ゆがみが激しい。	
SI004	2	須恵器	杯	25%	(12.0)	(7.8)	(3.9)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリ(全面?)	にぶい、褐色、灰黄褐色	にぶい、褐色、灰黄褐色	良好		
SI004	3	須恵器	杯	40%	(13.0)	(9.0)	3.8	ロクロ、ヨコナデ	ロクロ、ヨコナデ	回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリ(外周)	褐色	褐色	良好	体部内面黒蒸。	
SI004	4	土師器	杯	95%	11.3	7.2	3.8	ミガキ	手持ちヘラケズリ、ヨコナデ	手持ちヘラケズリ(全面)	にぶい、赤褐色	にぶい、赤褐色	良好		
SI004	5	土師器	甗	60%	14.0	—	(13.5)	ロクロ、ナデ	ロクロ、ナデ、手持ちヘラケズリ	切り離し不明	明赤褐色、にぶい、褐色	明赤褐色	良好		
SI004	6	土師器	甗	10%	—	(8.3)	(4.2)	ナデ	手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	にぶい、褐色、明赤褐色	にぶい、褐色、明赤褐色	不良	二次焼成激しく残存状態悪い。	
SI005	1	須恵器	甗	15%	—	(18.7)	(12.4)	ナデ	手持ちヘラケズリの後タタキ	無調整	灰黄褐色	灰黄褐色	良好		
SI005	2	須恵器	杯	30%	(12.3)	(7.0)	(4.1)	ロクロの後ヨコナデ	ロクロ、ヨコナデの後ヨコナデ	切り離し不明、回転ヘラケズリ	褐色	褐色	良好		
SI005	3	支脚	—	—	—	—	—	—	—	—	にぶい、褐色	にぶい、褐色	良好	高さ(14.6)cm、幅7.75cm	
SI006	1	須恵器	杯	25%	(10.7)	(7.0)	(3.3)	ナデの後ヨコナデ	ロクロの後手持ちヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい、赤褐色	にぶい、赤褐色	良好		
SI006	2	須恵器	杯	45%	(12.6)	6.8	4.6	ロクロの後ヨコナデ	ロクロ、手持ちヘラケズリ	切り離し不明、手持ちヘラケズリ(全面)	褐色	褐色	良好		
SI006	3	須恵器	杯	95%	14.2	7.6	4.7	ロクロの後ヨコナデ	ロクロ、手持ちヘラケズリ	切り離し不明、手持ちヘラケズリ(全面)	褐色	褐色	良好		



造構番号	種図番号	機種	器形	法量(cm)			調整技法等			胎土	色調		焼成	備考
				口径	底形	器高	内面	外面	底部		内面	外面		
SI006	4	土師器	杯	11.9	6.4	4.1	ロクロ	ロクロ	手持ちヘラケズリ	長石、石英、砂粒、スコリア(小)	内面 にぶい、褐色～にぶい、黄褐色	外面 にぶい、赤褐色～にぶい、褐色、黒褐色	良好	底部および体部外面に黒藁あり
SI006	5	土師器	杯	(10.9)	7.4	3.9	ロクロの後ヨコナデ	ロクロの後ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	回転糸切り、手持ちヘラケズリ(外周)	長石、石英、砂粒	にぶい、褐色	明赤褐色	良好	
SI006	6	土師器	杯	12.6	8.1	4.0～4.6	ナデ	ナデ	手持ちヘラケズリ(全面)	長石、石英、砂粒、スコリア(小)	明赤褐色	明赤褐色	良好	底部のヘラ削りは丁寧で平滑
SI006	7	土師器	杯	(12.1)	7.1	3.6	ナデの後ヨコナデ	ヨコナデの後手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ(全面)	長石、石英、砂粒	明褐色、にぶい、赤褐色	明褐色、にぶい、赤褐色	良好	
SI006	8	土師器	杯	12.3	5.6	4.0～4.2	ヘラナデの後ヨコナデ	手持ちヘラケズリの後ヨコナデ	手持ちヘラケズリ(全面)	長石、石英、砂粒、スコリア	にぶい、褐色～にぶい、褐色	にぶい、褐色	良好	体部外面に黒藁
SI006	9	土師器	杯	11.1	5.9～6.9	3.9	ナデの後ヨコナデ	ヨコナデの後手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ(全面)	長石、石英、砂粒、雲母片(小)、スコリア、白色針状物	にぶい、褐色	にぶい、褐色	良好	底部中央付近に、外側からあげられたと思われる穿孔あり
SI006	10	土師器	杯	—	—	—	ナデ	ロクロの後手持ちヘラケズリ	回転糸切り、手持ちヘラケズリ(外周)	長石、石英、砂粒、スコリア(小)	にぶい、赤褐色	にぶい、赤褐色	良好	底部外面に黒藁
SI006	11	土師器	杯	11.2	7.6	4.2	ロクロ、ヘラナデの後ヨコナデ	ロクロの後ヨコナデ	手持ちヘラケズリ(全面)	長石、石英、砂粒、雲母片(小)、スコリア	にぶい、褐色～にぶい、赤褐色	にぶい、褐色～にぶい、赤褐色	良好	底部外面に黒藁
SI006	12	土師器	甕	20.8	—	(28.4)	ヘラナデの後ヨコナデ	ナデ、ヨコナデの後ミガキ		長石、石英、砂粒、雲母片	にぶい、黄褐色、にぶい、黄褐色	褐色、にぶい、黄褐色	良好	常総型、カメ
SI006	13	土師器	甕	18.8	7.1	31.0～31.6	ヨコナデの後ヘラナデ	ヨコナデの後ミガキ	木藁直	長石、石英、砂粒、スコリア	淡黄褐色	淡黄褐色	良好	常総型、カメ
SI006	14	須恵器	甕(上部)	22.2	—	(12.3)	ヨコナデ、当具直?	ヨコナデの後タガキ		長石、石英、砂粒、雲母片(多)	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	頸部内面に黒藁
SI006	14	須恵器	甕(下部)	—	(15.0)	—	ナデ、当具直?	タガキの後手持ちヘラケズリ	無調整	長石、石英、砂粒、雲母片(多)	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	良好	体部外面に黒藁 指頭でなぞったように浅い凹みがある。
SI007	1	須恵器	杯	(11.9)	(7.6)	4.2	ロクロの後ヨコナデ	ロクロの後ナデ	回転糸切り、回転ヘラ削り(外周)	長石、石英、砂粒	暗青灰色	暗青灰色	良好	口縁部内面の一部にターナル状の物が付着
SI007	2	須恵器	杯	11.0	6.5	3.5	ロクロの後ヘラナデ	ロクロの後ヘラナデ	切り離し不明。回転ヘラケズリ	長石、石英、砂粒、雲母片、スコリア	明赤褐色	明赤褐色	良好	
SI007	3	土師器	甕	—	11.8	(22.0)	ヘラナデ	ミガキ	無調整	長石、石英、砂粒、雲母片	淡褐色	淡赤褐色	良好	常総型
SI007	4	土師器	甕	(26.3)	—	(17.3)	ヘラナデの後ヨコナデ	ヘラナデの後ヨコナデ		長石、石英、砂粒、雲母片(多)	淡黄褐色	淡黄褐色	良好	常総型(新治窯)の胎土
SI008	1	土師器	杯	11.8	7.6	3.7	ヨコナデの後ミガキ	ヨコナデの後手持ちヘラ削り	手持ちヘラケズリ(全面)	長石、石英、砂粒	赤褐色	明赤褐色	良好	
SI008	2	土師器	杯	(11.9)	(8.4)	(4.5)	ナデ	ヨコナデの後手持ちヘラ削り	手持ちヘラ削り	長石、石英、砂粒、スコリア	淡黄褐色	淡黄褐色	良好	
SI008	3	土師器	杯	11.3	7.5	4.3～4.6	ロクロ調整	ロクロの後手持ちヘラ削り(外周)	回転糸切り、手持ちヘラ削り(外周)	捨容額、石英、砂粒、雲母片、スコリア	明褐色	淡褐色	良好	
SI008	4	土師器	杯	14.9	9.7	6.5	ナデ	ロクロの後ナデ	静止糸切り、回転ヘラ削り(外周)	長石、石英、砂粒、雲母片	淡黄褐色	淡赤褐色	良好	
SI008	5	須恵器	杯	11.2	8.0	3.7～4.0	ロクロ調整	ロクロ調整	回転ヘラ削り、ナデ?	長石、石英、砂粒、スコリア	明褐色	明褐色、明黄褐色	良好	
SI008	6	須恵器	杯	12.1	8.4	3.7	ヨコナデの後ナデ	ロクロの後ヨコナデの後ナデ	回転ヘラ削りの後ナデ、ナデ(外周)	長石、石英、砂粒、雲母片(小)、スコリア	明褐色	淡褐色	良好	
SI008	7	須恵器	杯	11.9	8.2	3.8	ナデの後ヨコナデ	ナデの後ヨコナデ	回転ヘラ削り、ナデ?	長石、石英、砂粒、雲母片、スコリア	明黄褐色	淡褐色	良好	
SI008	8	須恵器	杯	12.4	8.3	3.8	ロクロの後ヨコナデ	ロクロの後ヨコナデの後ナデ	回転ヘラ削り、ナデ?	長石、石英、砂粒、白色針状物	淡黄褐色	明褐色	良好	
SI008	9	須恵器	杯	(12.8)	(6.3)	4.3	ロクロ調整	ロクロの後回転ヘラ削り	切り離し不明。手持ちヘラケズリ(全面)	長石、石英、砂粒、雲母片(多)	淡褐色	淡褐色、暗灰褐色	良好	常総型(新治窯)
SI008	10	須恵器	蓋	14.6	—	3.6	ロクロ調整	ナデの後回転ヘラ削り		長石、石英、砂粒	灰黄色	灰黄色	良好	
SI008	11	土師器	甕	(20.3)	—	(6.0)	ナデの後ヘラナデ	ナデ		長石、石英、砂粒、スコリア	淡褐色	淡褐色	良好	
SI008	12	土師器	甕	(18.8)	—	(7.7)	ナデの後ヘラナデ	ナデの後ヘラナデ		長石、石英、砂粒、雲母片	淡褐色	黒褐色、淡褐色	良好	
SI008	13	土師器	甕	(19.7)	—	(7.7)	ナデの後ヘラナデ	ナデの後ヘラナデ		長石、石英、砂粒、雲母片	淡黄褐色	褐色	良好	
SI008	14	土師器	甕(小型)	(11.0)	—	(3.5)	ヨコナデの後ヘラナデ	ヨコナデの後ヨコナデ		長石、石英、砂粒、雲母片、スコリア	暗褐色	暗褐色	良好	
SI008	15	土師器	甕(小型)	(12.9)	—	(3.5)	ナデの後ヘラナデ	ナデ		長石、石英、砂粒	黒褐色	淡赤褐色	良好	
SI008	16	土師器	甕	(17.8)	—	(11.5)	ナデの後ヘラナデ	ナデの後ヘラナデ		長石、石英、砂粒、雲母片	褐色	褐色	良好	
SI008	17	須恵器	杯	11.5	8.6	3.6	ナデ	ロクロの後ヨコナデの後ヘラナデ?	切り離し不明。手持ちヘラ削り(全面)	長石、石英、砂粒、白色針状物	明赤褐色	明赤褐色	良好	
SI008	18	土師器	甕	(19.6)	8.0	33.8	ナデの後ヘラナデ	ナデの後ミガキ	木藁直	長石、石英、砂粒、雲母片、スコリア	褐色、黒褐色	明褐色	良好	底部 木藁直
SI008	19	土師器	甕	—	9.3	(17.0)	ヘラナデ	ミガキ	木藁直	長石、石英、砂粒、雲母片	黒褐色	淡赤褐色	良好	
SI008	20	須恵器	甕	(23.0)	—	5.6	ナデ	ナデ		長石、石英、砂粒、雲母片	灰黄色	灰黄色	良好	

遺構番号	構図番号	機龍	器形	依存度	法量(cm)			調整技法等			胎土	色調		焼成	備考
					口径	底形	器高	内面	外面	底部		内面	外面		
SI008	21	須恵器	甕	15%	—	—	18.5	ナデの後ヘラナデ	ナデの後タタキ	底面	底石、石英、砂粒、雲母片(多)	灰黄色	灰白色	良好	
SI008	22	須恵器	甕	5%	(16.2)	(7.0)	—	ヘラナデ	タタキの後ヘラナデ	ナデ	長石、石英、砂粒、雲母片	灰色	灰色	良好	
SI008	23	土師器	甕	30%	—	—	8.3	ヘラナデ	ミガキ	無調整	長石、石英、砂粒、雲母片、スコリア	淡黄褐色	黒褐色	良好	常総型
SI009	1	須恵器	杯	25%	(12.7)	(8.0)	—	ナデ	ロクロの後手持ちヘラナデ	手持ちヘラナデ(後手持ち)	長石、石英、砂粒、スコリア(粒が大きいものもあり)、白色針状物(小)	褐色	褐色～にぶい褐色	良好	外面接合痕あり
SI009	2	須恵器	杯	85%	12.8	7.6	—	ナデ	ロクロの後手持ちヘラナデ	手持ちヘラナデ(後手持ち)	長石、石英、砂粒、スコリア(粒が大きいものもあり)、白色針状物(小)	褐色	褐色	良好	重ね焼きの痕あり?
SI009	3	須恵器	杯	90%	12.4	7.8	—	ナデ	ロクロ	手持ちヘラナデ(後手持ち)	長石、石英、砂粒、スコリア、白色針状物(小)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色、灰色	良好	
SI009	4	須恵器	杯	15%	(11.7)	(8.9)	—	ナデ	ロクロ	手持ちヘラナデ(後手持ち)	長石、石英、砂粒、スコリア	灰色	灰色～褐色	良好	外面接合痕あり
SI009	5	土師器	甕(小型)	10%	(12.4)	—	—	ナデ	ロクロ	ヨコナデの後手持ちヘラナデ	長石、石英、砂粒、スコリア、白色針状物	黒褐色	にぶい赤褐色	良好	内外面接合痕あり、外面黒付着。
SI009	6	須恵器	高台付皿	45%	(19.9)	12.3	3.0	ナデ	ロクロ	手持ちヘラナデ(全面)	長石、石英、砂粒、雲母粒(白多)、スコリア、白色針状物(白、小石多)	灰黄褐色、褐色	灰黄褐色、褐色	良好	常陸産
SI009	7	土師器	甕(小型)	20%	10.7	—	—	ナデ	ナデ	—	長石、石英、砂粒、スコリア(粒が大きいものもあり)、白色針状物	にぶい褐色、褐色	にぶい褐色	良好	外面接合痕あり、明瞭に残っている。被熱
SI010	1	土師器	杯	20%	(12.0)	—	—	ナデ	ロクロ	—	長石、石英、砂粒、スコリア(小)、白色針状物	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	内面磨きあれている
SI010	2	土師器	杯	70%	11.9	8.3	3.7	ナデ	手持ちヘラナデの後ヘラナデ	手持ちヘラナデ(全面)	長石、石英、砂粒、スコリア(粒が大きいものもあり)、白色針状物(小)	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良好	内面磨きあれているため皿ヘラミガキの痕跡不明瞭
SI010	3	土師器	杯	20%	(13.0)	(9.5)	—	ナデ	ロクロ	—	長石、石英、砂粒、スコリア(小)、白色針状物	明赤褐色	にぶい褐色～にぶい褐色	良好	
SI010	4	須恵器	杯	85%	13.3	8.5	—	ナデ	ロクロ	手持ちヘラナデの後ヘラナデ	長石、石英、砂粒、スコリア(粒が大きいものもあり)、白色針状物(小)	にぶい赤褐色、褐色	にぶい赤褐色、褐色	良好	火熱を受けている
SI010	5	土師器	高台付杯	45%	16.6	10.2	6.7	ナデ	ヘラミガキ	手持ちヘラナデ(高台部)ロクロの後手持ちヘラナデ	長石、石英、砂粒、スコリア(粒が大きいものもあり)、白色針状物(小)	黒色	にぶい褐色～にぶい赤褐色、黒色	良好	内面黒色処理、作印出しの高台部を除いて、内外面底部にわたるまですべてヘラミガキ風、磨きあれている
SI010	6	須恵器	甕	5%	(23.4)	—	—	ナデ	ロクロ	—	長石、石英、砂粒、スコリア(小)、白色針状物(小)	明赤褐色	にぶい赤褐色、褐色	良好	良好
SI010	7	土師器	甕	35%	15.4	—	—	ナデ	手持ちヘラナデ	手持ちヘラナデ(高台部)ロクロの後手持ちヘラナデ	長石、石英、砂粒、スコリア(多)、白色針状物	にぶい褐色、褐色	にぶい褐色、褐色	良好	内面接合痕あり、火熱を受けている
SI010	8	土師器	甕	5% $\leq$	(7.0)	—	—	ナデ	ヘラナデ(強め)	手持ちヘラナデの後ヘラナデ	長石、石英、砂粒、スコリア(小)	灰黄褐色	にぶい赤褐色、褐色	良好	内面刺磨がすんでいる箇所あり、常総型
SI010	9	支脚	—	—	18.6	10.3	8.1	ナデ	—	—	長石、石英、砂粒	にぶい褐色	—	—	—
SI011	1	土師器	鉢	75%	18.6	8.1	7.6	ナデ	ヘラミガキ	ロクロの後ヘラナデ	長石、石英、砂粒、雲母粒(白)、スコリア、白色針状物(キヤ多)	黒色	明褐色、黒色	良好	内面黒色処理、口縁から胴部下縁近くまで1/3意識的に入っている。(皿裏も3ヶ所あり、1ヶ所は接合痕)
SI011	2	須恵器	杯	50%	(8.0)	(12.1)	4.0	ナデ	ロクロ	手持ちヘラナデ	長石、石英、砂粒、スコリア(小)	灰色	褐色	良好	新治窯産
SI011	3	須恵器	甕	75%	—	13.6	—	ナデ	手持ちヘラナデ(口縁部)ナデ	手持ちヘラナデ(口縁部)ナデ	長石、石英、砂粒、スコリア(粒が大きいものもあり)、白色針状物(白、小石多)	褐色	褐色～黄褐色	良好	体部にぐるぐる2周ほどヘラで削り、文様をつけている。底部外面黒味のような圧痕あり
SI011	4	土師器	甕	40%	14.5	—	—	ナデ	手持ちヘラナデ(口縁部)ナデ	手持ちヘラナデ(口縁部)ナデ	長石、石英、砂粒、雲母粒(白)、スコリア、白色針状物(白、小石多)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	底部外面中心部に黒目のような圧痕あり
SK003	1	須恵器	高台付杯	65%	(12.4)	8.8	5.0	ナデ	ロクロ	ロクロの後ヘラナデ	長石、石英(大粒あり)、砂粒、白色針状物(白、小石多)	褐色	褐色	良好	新治窯産
SK005	1	常滑	甕	—	—	—	—	ナデ	ナデの後タタキ	—	長石、石英、砂粒	にぶい褐色～にぶい赤褐色	にぶい褐色	良好	
SK005	2	須恵器	蓋	30%	—	—	—	ナデ	ロクロ調整	ロクロ調整	長石、石英、砂粒	灰色、褐色	灰色	良好	
SK005	3	土師器	高台付皿	30%	(13.8)	—	(2.2)	ナデ	ロクロの後ナデ	ロクロの後ナデ	長石、石英、砂粒、雲母片	にぶい褐色～にぶい赤褐色	にぶい褐色～にぶい赤褐色	良好	

※法量における数値の( )は推定値、[ ]は現存値を示している。

## 第5節 中・近世

### 1 土坑・地下式坑

#### SK003 (第64図, 図版8・42)

調査区の32X16付近で検出された。用途が判然としない土坑である。平面形はややゆがんだ円形であり、長軸4.6m、短軸4.0mほどである。断面形は基本的に播鉢状であるが、東西方向断面は最下部でくびれており、Y字状を呈している。北西側斜面には4基の小ピットが構築されている。あたかも足場施設のようでもある。

遺物は、覆土上層中に縄文土器（大半が第IV群土器）が68点（868g）包含されていたが、これは明らかに流れこみである。遺構に伴う遺物と考えられるのは図示した須恵器1点及び図示しなかった土師器及び須恵器片3点（42g）のみである。また、時期不明の陶器片1点（3g）も検出されている。1は底面から出土した須恵器高台付杯である。灰色を基調とし、白色粒を大量に、雲母粒を微量にそれぞれ含んでいることから、新治窯産と考えられる。破損状況は体部から口縁部の約6割を欠いているが、その破片は検出されていない。割れ口が弧状になっており、意図的な破損とも考えられる。しかし、割れ面が新鮮な部分も見受けられ、一概に意図的な破損とは言うことができない。年代は、箱形の器形であることから8世紀代と考えられる。

#### SK004 (第64図, 図版9)

調査区の30W70付近で検出された。中世以降の井戸と考えられる。平面形はやや歪んだ円形であり、径は約1mである。確認面から深さ約2mの地点で、作業の安全性を考慮し、それ以上の調査は行わないこととした。遺物は、覆土上層から数点の縄文土器が検出されているが、混入と考えられる。これ以外の遺物は検出されなかった。

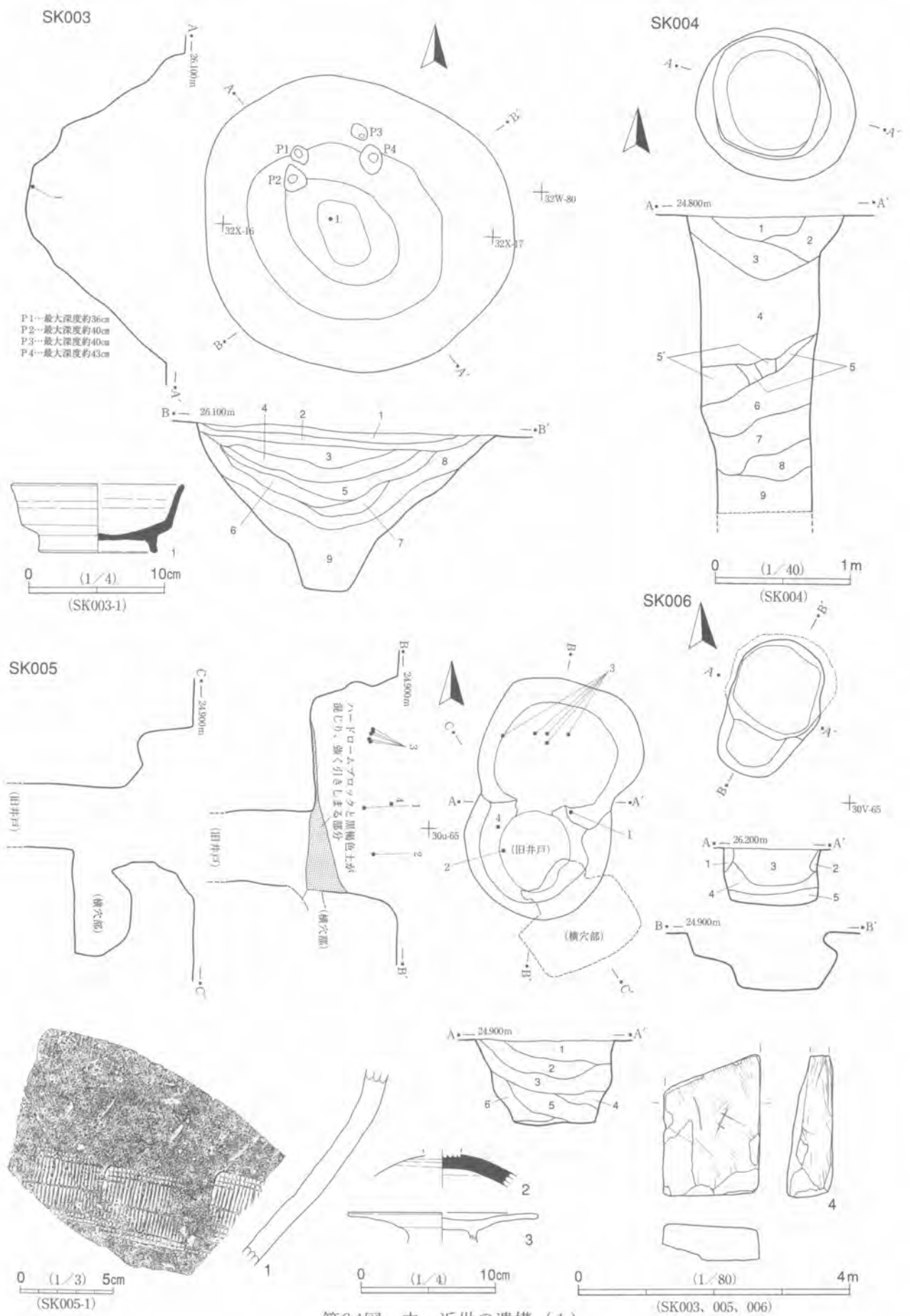
#### SK005 (第64図, 図版8・42)

調査区の30U65付近で検出された。井戸を転用した地下式坑である。確認面から約1.8mの深さまで井戸を埋め、北側を1.6mほど拡張し、南東方向に横穴を構築している。旧井戸から幅80cm、高さ60cmほどの羨道部を経て、奥行き1.0m・幅1.6mほどの横穴部がある。埋葬後（推定）、横穴部への入り口をハードロームブロックと黒褐色土を混ぜた土で塞ぎ、築き固めている。

遺物は横穴部からは検出されず、正確な年代は不明である。覆土の上層からは疎らながら遺物が検出されている。本報告では4点を図示した。図示しなかったものは、縄文土器数点のほか、常滑産甕の胴部片1点（100g）、9世紀代土師器甕細片12点（同一個体・85g）である。1は常滑産甕の胴部片である。2は須恵器蓋である。遺存は悪く、つまみ部および周縁を欠損している。灰色系の色調で、胎土は白色粒を大量に含んでいる。3は土師器皿である。激しく二次焼成を受けており、器表面などの遺存は悪い。皿部はミガキ調整の痕跡が認められる。4は砥石である。泥岩製、重量は39.8gである。本来は長方形であったと思われるが、破断している。器表面は欠損している部分が多いが、残存部分を見る限り、各面ともよく研磨した痕跡が認められる。

#### SK006 (第64図, 図版8)

調査区の30U54付近で検出された。形状を見る限り、地下式坑と判断される。だが、深さが80cmほどと地下式坑にしては浅く、横穴部も張り出し程度であることから、SK004と同じ機能とするには疑問である。遺物は検出されず、明確な時期も不明である。



第64図 中・近世の遺構 (1)

### SK007 (第65図, 図版9)

調査区の29X81付近で検出された。旧石器時代確認グリッドを調査中に焼土を検出し、本遺構の存在を認識することができた。断面から掘込み面を復元すると、IIc層から構築されていると推定され、確認した平面形は本遺構の最下部の形状である。掘込み面や形状から判断すると縄文時代早期の炉穴である可能性もあるが、遺物の出土もなく不明点が多いことから、本節に掲載した。

### SK008 (第65図, 図版9)

調査区の30U88付近で検出された。平面形は直径60cmほどの円形であり、深さ40cmほどまでは、ほぼ垂直に下がっていくが、底面の南東側だけが深くなりやや外側へ張り出している。掘込みは明確であるが、遺物は検出されず、時期など詳細は不明である。

### SK009 (第65図, 図版9)

調査区の30U14付近で検出された。平面形は直径50cmほどの円形である。断面形は、深さ65cmほどの長方形となり、掘込みも明確である。遺物は検出されず、時期などの詳細は不明である。

### SK010 (第65図, 図版9)

調査区の30U64付近で検出された。平面形は長軸120cm、短軸80cmほどの長方形である。確認面からの深さは40cmほどである。掘込みは明確であるが遺物は検出されず、時期などの詳細は不明である。

## 2 その他の遺構と遺物

### (1) 溝状遺構 (第7図, 図版10)

調査範囲の中央部付近、29Uから30Uにかけて近世の所産と思われる溝状遺構を3条検出した(SD001・SD002・SD003)。いずれも断面形は皿状であり、深さは20cm～30cm前後である。SD001は東西方向、SD002・SD003は南北方向をそれぞれ基本としている。

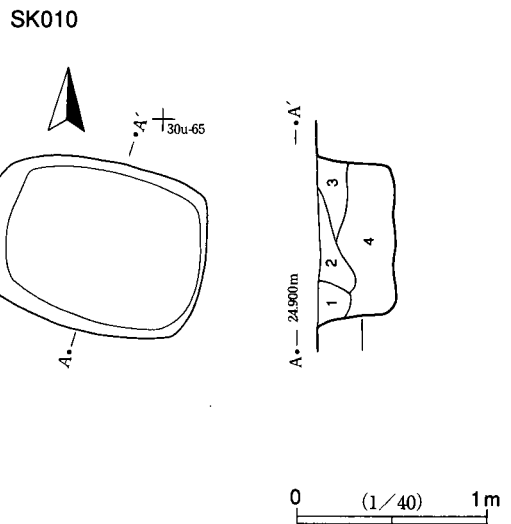
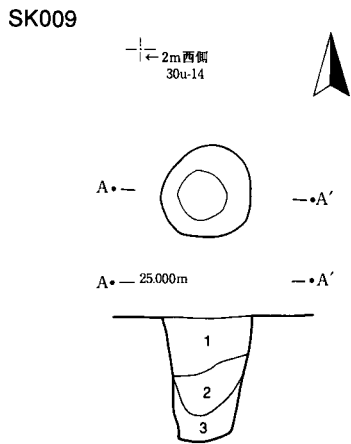
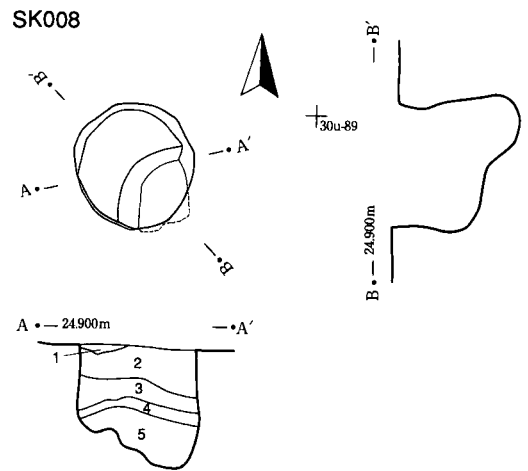
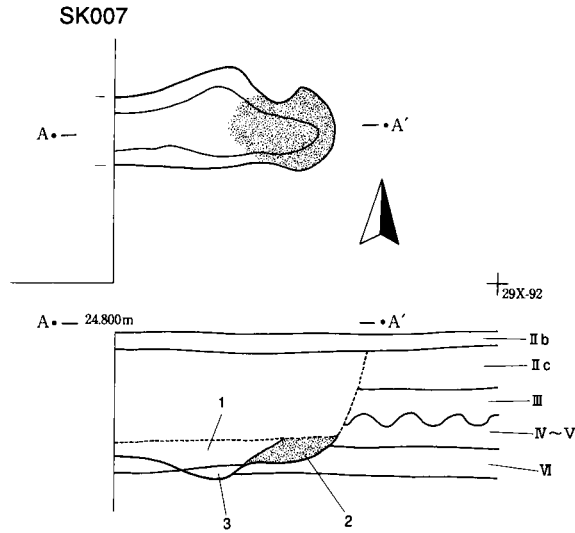
### (2) 貝ブロック (図版9)

27Uグリッドで確認された。地表下約20cmのところ、*Lutraria maxima* Jonas (オオトリガイ) が直径30cm程度の範囲内に集中していた。暗褐色の殻皮が残っている部分もあるが、全体的にチョーク化しており、やや脆弱な状態である。蝶番が回収されず、個体数が不明であるが、貝殻片を観察する限り多くても2個体程度と考えられる。

### (3) その他の遺物 (第66図, 図版35)

1・2は砥石である。1は流紋岩製の角柱状のものであり上下端部を欠損する。表裏面・側面が研ぎ面となっている。最大長6.85cm、最大幅2.55cm、最大厚2.35cm、重量は39.67gである。2は泥岩製の板状のものであり下端部は顕著な研ぎで薄くなる。表裏面・側面が研ぎ面となっている。最大長5.10cm、最大幅3.50cm、最大厚1.52cm、重量44.50gである。

3～6は銭貨である。計測値などは図中に記した通りであるが、3・6は劣化が激しく質量は現存値である。いずれも渡来銭である。3は開元通宝である。唐代以降に長期にわたって鑄造され、私鑄銭等も多く、背文もないことから時期等の特定が困難である。4は元豊通宝である。書体は篆書体であり、初鑄年は、1078年である。5は熙寧元宝である。書体は篆書体であり、初鑄年は1068年である。6は聖宋元宝である。書体は行書体であり、初鑄年は1101年である。



(土層注記)

**SK003**

1. ローム粒及びローム小ブロックを少量含む褐色土 (粒子粗く、しまり弱)
2. ローム粒及びローム小ブロックを少量含む暗褐色土
3. ローム粒及びロームブロックを少量含む極暗褐色土 (粒子密で、しまり強)
4. ロームブロックを含む黒色土 (粘性強)
5. ローム粒及びロームブロックを少量含む暗褐色土 (粒子密で、しまり強)
6. ローム粒を多量含む暗褐色土 (粒子密で、しまり強、粘性強)
7. ローム粒、ロームブロック及び炭化物を少量含む暗褐色土 (粘性強)
8. ソフトローム土を主体としロームブロックを少量含む (粘性強)
9. 第8層に似るが、ロームブロックは少なく、やや暗い色調である

**SK004**

1. ソフトローム粒を含む黒褐色土
2. ソフトローム粒を多く含む暗褐色土
3. ソフトロームを主体としハードブロック、黒褐色土を少量含む暗黄褐色土
4. ソフトローム粒を多く含む暗褐色土
5. 白色粘土ブロックを含む暗褐色土
5. 5層中で白色粘土が集中する部分
6. 黒褐色土
7. 白色粘土を含む黄褐色土 (ソフトローム土を主体とする)
8. 黒褐色土
9. 白色粘土を含む黄褐色土 (ソフトローム土を主体とする)

**SK005**

1. ローム粒及び砂粒を含む暗褐色土
2. ローム粒をわずかに含む黒褐色土 (粒密)
3. 斑紋状に暗黄褐色土を含む暗褐色土
4. ソフトローム土を主体とする黄褐色土
5. ソフトローム土を主体とする暗黄褐色土
6. ソフトローム土を主体とし、ハードロームブロックを多量に含む黄褐色土

**SK006**

1. 掘りすぎた部分
2. 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む 粘性強、肩部の崩落痕か
3. 黒褐色土 斑紋状にロームを混入する ローム粒少量含む
4. 暗褐色土 ローム粒、ローム小ブロック少量含む 粘性やや強、粒子粗い
5. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック含む 粘性強、第4層に比し明

**SK007**

1. 焼土粒とローム粒を多く含む暗黄褐色土
2. 焼土
3. 焼土粒及びローム粒を多く含む黄褐色土

**SK008**

1. ハードローム粒混黒褐色土
2. ハードロームブロック混、ハードローム粒混、ソフトローム混、黄味帯びた
3. ハードローム粒混、ソフトローム混、黒褐色土
4. ハードロームブロック混、黒褐色土混、フトローム混、黒褐色土
5. ハードロームブロック混、ハードローム粒混、ソフトローム混、黒褐色土

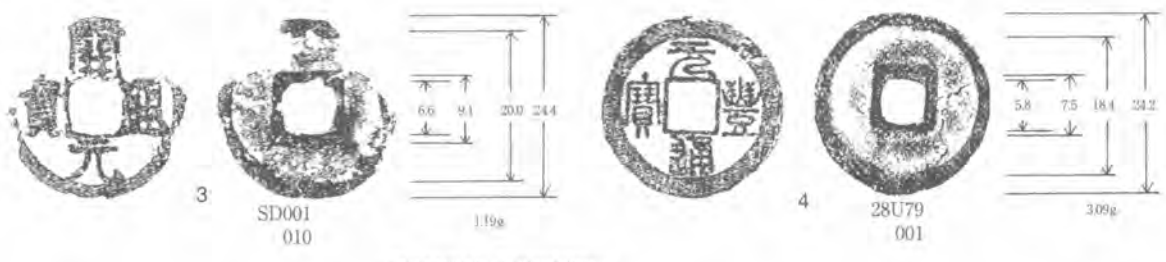
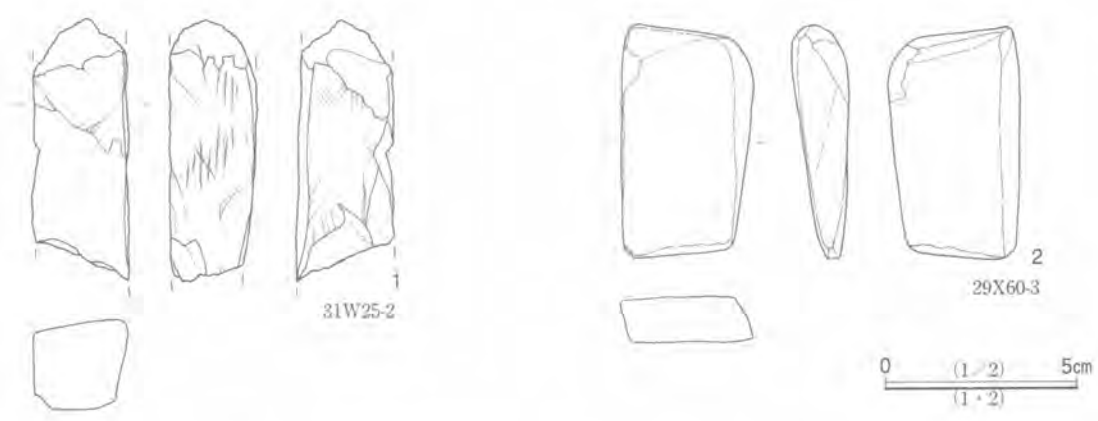
**SK009**

1. ハードロームブロック混、ソフトローム混、黒褐色土
2. ハードロームブロック混、黒褐色土混、ソフトロームの暗黄褐色土 (土の方は、しまりが弱いが底の方は、しまっている)
3. 2層と同じ内容であるが、しまっている (セクションの写真では、ここまで掘り下げていなかったで写っていない)

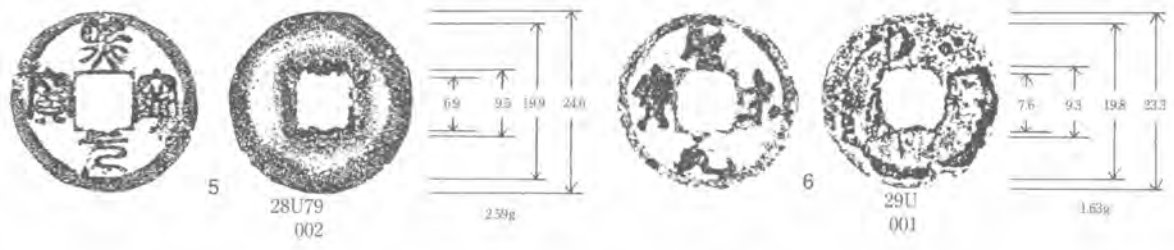
**SK0010**

1. ハードロームブロック混、褐色土混、ソフトロームの黄褐色土
2. ハードロームブロック混、黒褐色土
3. ハードロームブロック混、ソフトローム混、黄味を帯びた暗褐色土
4. ハードロームブロック混、暗褐色土混、ソフトロームの暗褐色土

第65図 中・近世の遺構 (2)

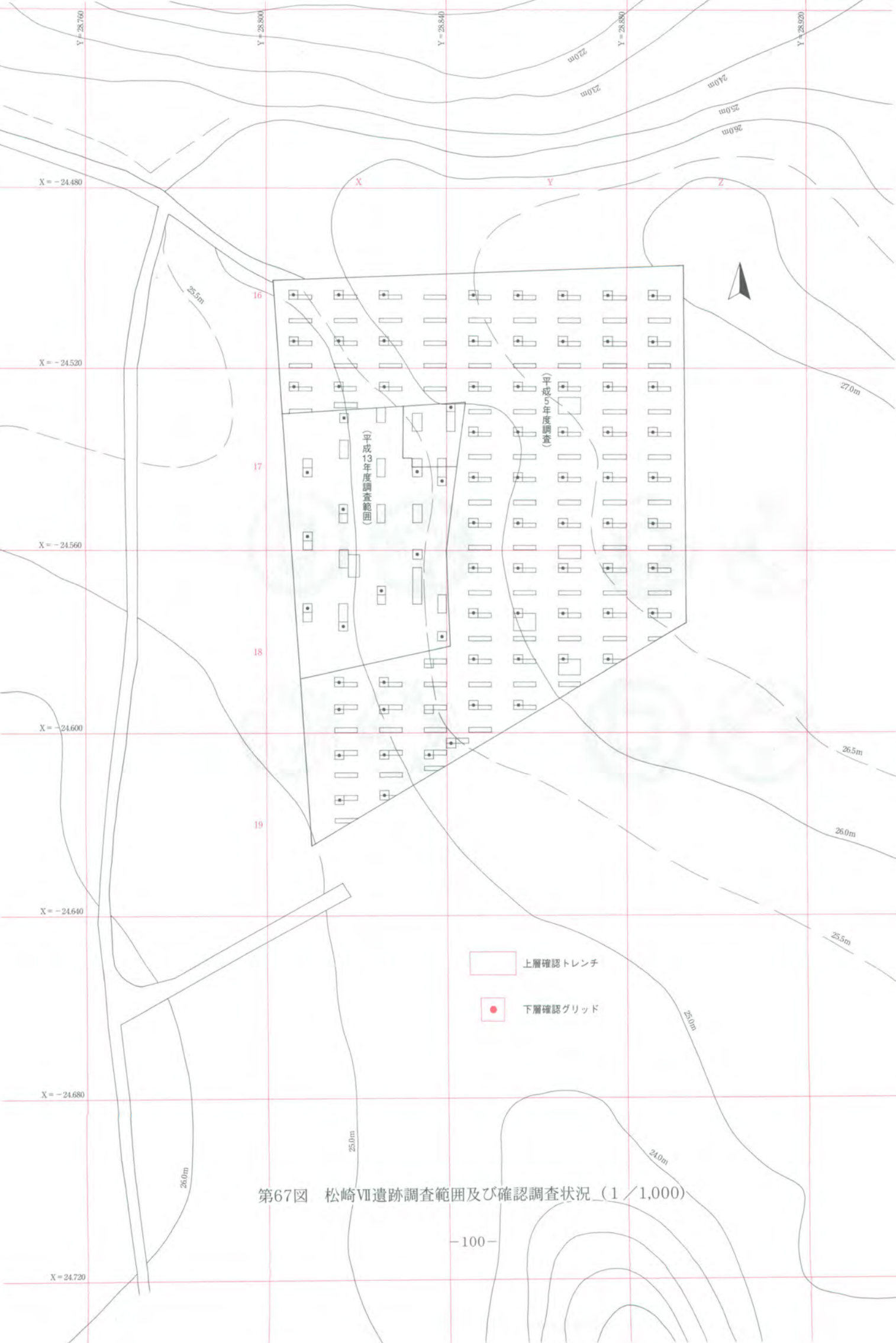


※銭貨は現寸大、計測値の単位はmm。



第66図 その他の遺物





第67図 松崎VII遺跡調査範囲及び確認調査状況 (1/1,000)



## 第3章 松崎Ⅶ遺跡

### 第1節 概要（第67・68図）

松崎Ⅶ遺跡は、印西市草深字松崎前331-2ほかに所在し、松崎遺跡群の東側中央部付近に位置している。本遺跡の北側には谷が入り込んでいるものの、遺跡自体はほぼ平坦な台地上にある。

調査の結果、平成13年度調査区において、縄文時代中期に属する土坑8基が検出された（第68図）。遺物はこれらの遺構周辺を中心として縄文時代中期の土器がやや濃密に包含されていたが、調査区全体にわたって縄文土器の包含が認められた（第18表）。奈良・平安時代の土師器・須恵器（30点・292g）及び中・近世陶磁器など（陶磁器片19点・249g、瓦片9点・177g）も検出されたが、特に集中することもなく、少量の散布を認めるにすぎなかった。なお、旧石器時代の遺物等は検出されなかった。

ちなみに、平成13年度調査区における確認トレンチの土層堆積状況（Ⅱ層以上）を観察したところ、調査範囲東半の黒色土を西半に異動した痕跡が認められた。これは本来、東側に向かって緩く傾斜していた地形を、畑の造成にともなって平坦にならしたものと考えられる。従って、後述する001号土坑付近の黒色系土の堆積は薄く、005号竪穴状遺構付近は比較的厚く堆積していた。

なお、発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当者及び作業内容は下記のとおりである。

#### 平成5年度

組織：印西調査事務所（所長 田坂 浩）

（発掘調査）

期間：平成5年7月1日～平成5年7月26日

内容：確認調査 上層 7,300㎡のうち730㎡ 下層 7,300㎡のうち292㎡

本調査 上層・下層とも0㎡

担当者：副所長 及川淳一

#### 平成13年度

組織：北部調査事務所（所長 石田廣美）

（発掘調査）

期間：平成14年3月1日～平成14年3月22日

内容：確認調査 上層1,696㎡のうち216㎡ 下層1,696㎡のうち36㎡

本調査 上層・下層とも0㎡

担当者：研究員 小笠原永隆

#### 平成15年度

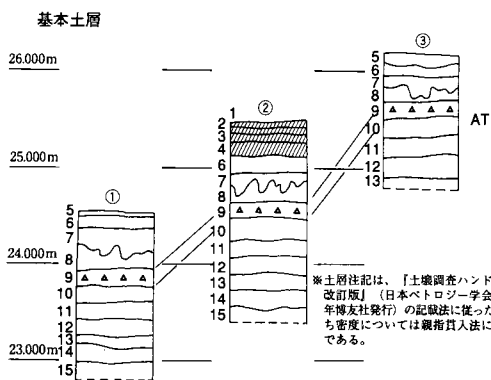
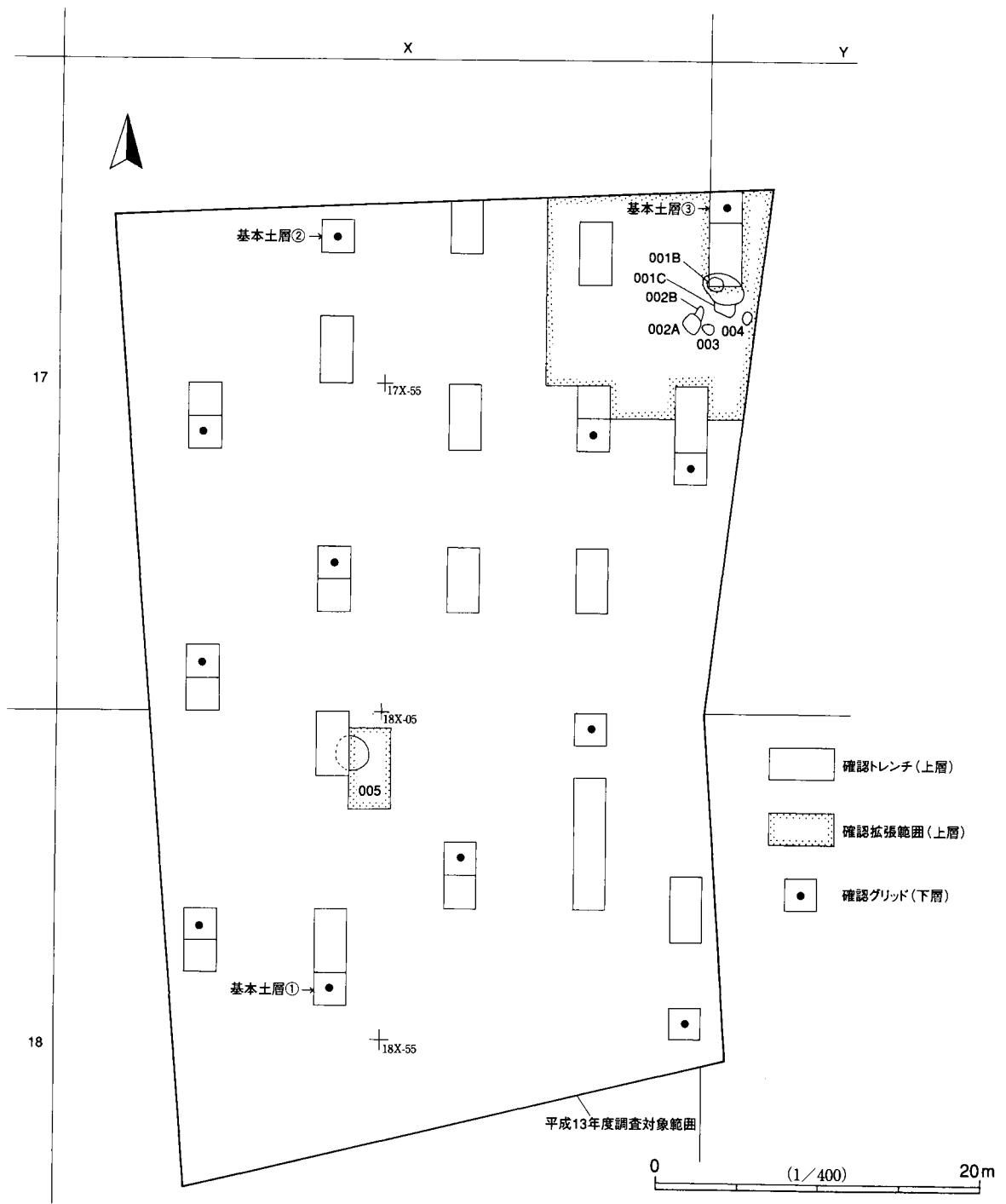
組織：北部調査事務所（所長 古内 茂）

（整理作業）

期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日

内容：水洗・注記から報告書刊行・移管整理

担当者：上席研究員 木下圭司，研究員 立和名明美・小笠原永隆



現地呼称	奇番層位	色 調	土 性	腐食・風化	構造	傾 斜	ち密建	可塑性	その他
1	I	暗褐色土 7.5YR 2/3	SIL	硬む	粒状	軟	すこぶる しよう	なし	砂の混入
2	I	暗褐色土 7.5YR 2/3	SICL	硬む	粒状	軟	しよう	弱	砂の混入
3	I	暗褐色土 7.5YR 2/3	SICL	硬む	粒状	軟	軟	弱	砂の混入
4	I	褐色土 - 暗褐色土 7.5YR 4/4 ~3/4	CL	軟む	粒状~歪角粒状	わずかに強い ~強	軟	弱~中	砂の混入
5	IIc	暗褐色土 7.5YR 2/4	CL	あり	粒状~歪角粒状	わずかに強い ~強	強	中	主眼あり・粒混む
6	IIIa	暗褐色土 7.5YR 2/4	SL-SCL		粒状~歪角粒状	わずかに強い ~強	強	弱	主眼あり・粒混む
7	IIIb	褐色土 7.5YR 4/4	L/C-SIC		粒状~歪角粒状	軟	強	中	粒混み
8	IV-Y	褐色土 7.5YR 2/4	LIC		角粒状	強い	固結	中	オレンジスコリア及び黒色スコリアあり
9	VI	褐色土 7.5YR 4/4 ~4/3	S/C-LC		角粒状	強い	固結	弱	オレンジスコリア及び黒色スコリア含む、火山ガラス(AT)含む
10	VI	暗褐色土 7.5YR 2/4 ~4/3	LIC		角粒状	強い	固結	中	オレンジスコリア及び黒色スコリアあり
11	IX上B	暗褐色土 7.5YR 2/4	LIC		角粒状~歪角粒状	強い	固結	中	オレンジスコリア及び黒色スコリアあり
12	IX下B	暗褐色土 7.5YR 2/4	LIC-HC		角粒状~歪角粒状	わずかに強い ~強	固結	中	オレンジスコリア及び黒色スコリアあり
13	X	褐色土 7.5YR 4/4	LIC		歪角粒状	強い	すこぶる 強	強	黒色スコリアあり
14	X-I	褐色土 7.5YR 4/4 ~4/6	HC		粒状~歪角粒状	わずかに強い ~強	強	強	黒色スコリアあり
15	X-II	褐色土 7.5YR 4/4	L/C-SIC		粒状~歪角粒状	わずかに強い ~強	強	強	黒色スコリアあり

第68図 平成13年度調査状況及び遺構配置

## 第2節 遺構と出土遺物

### 1 縄文時代

本遺跡における縄文時代の遺物を見ると、その大半が中期の所産である。中期以外の時期もごくわずかに後期のものが見られるのみで、それ以外の時期は全く見られない状況であった。前述したように、遺物は調査区全体に散布しているものの、遺構付近以外は濃密な集中が見られない点、土層の堆積状況に人為的な痕跡が見られる点を考慮すると、本来その大半が遺構付近にあったものとも考えられる。

#### (1) 土坑

##### SK001A・B・C (第69図, 図版46・49・50)

17Y30付近から検出された。3基の土坑が重複しており、A・B・Cの枝番をつけた。Aは本来の平面形がほぼ円形になる土坑だと思われ、Bの構築により約2/3が消失しており、断面図の5層及び6層を残すにとどまっている。確認面における推定規模は直径約1.5m、底面径0.95m、深さ約0.4mである。しかし、Bの南東側に分布する遺物は5層及び6層中から検出された遺物と接合したり同一個体と確認されており、断面図の4層もAに伴っている可能性が強い。するとAは南東側に深さ約0.3mの張り出し部を持つ土坑になるが、その形状等は明確でない。このように判断すると、Bは平面形が歪んだ楕円形であり、規模は長軸約2.6m、短軸約2.0m、深さ(最大)約0.35mである。断面形は皿状となり、断面図に見る土層は1層～3層が該当する。Cについては遺物も検出されず、新旧関係については不明点が多いが、深さは15cm程と一番浅い。平面図からは、Cの後からBが構築されていると観察されるが、C自体の性格も含めて明言は避けたい。

遺物は垂直分布や接合状況等から、1～18がAに属し、19～39がBに属すものと判断でき、すべて縄文時代中期のものである。上述したように遺物の出土状況から新旧に2分されるが、少量ながら明らかに古い個体(阿玉台式)が混入している他は、型式としての差は微妙であり、極めて近接した時期(加曽利E4式)に遺構の構築及び廃絶がなされたものと判断される。

(A出土資料: 1～18) 1～12・15～18は加曽利E4式土器である。1～4は同一個体である。緩い波状口縁のキャリパー型の器形と思われ、口縁部は無文となりその下端は波状の微隆線によって区画されている。口縁部以下、胴部にはきわめて弱い撚りの単節縄文LRが横位～斜位に施されている。胎土には細砂粒を非常に多く含み、器表面はかなりざらついている。また、胎土中には非常にわずかではあるが海綿骨針状物質が含まれている。5～12についてはいずれも地文として単節縄文LRが施文されている。5は口縁部の内傾が1～4よりも強い。無文の口縁部下には、細沈線によって区画される幅2cmほどの無文帯が曲線状に配置される。同一個体ではないが、7は同様の文様の胴部である。6は無文帯の区画が微隆線で行われている。8・9はやや薄手の個体である。9は波頂部に円形の突帯が付されている。内面には煮沸使用の結果と思われる煤の付着が著しい。11は縄文施文の前に、細沈線による区画線が浅く施されている。拓影図中央部の沈線間は縄文が磨り消されているが、ごく軽いもので完全ではない。15・16は口縁部の無文部分の破片、17・18は底部である。13・14は阿玉台式土器である。胎土に雲母粒を特徴的に含む。また、図化していないが、堆積土4層中から磨石片が1点検出されている。多孔質の安山岩を用いるもので、質量は105gである。

(B出土資料: 19～39) 19・20は阿玉台式土器であり、同一個体と思われる。細隆線による区画とそれに沿う1条ないし2条の押引文が見られる。21～36は加曽利E4式土器である。21は口縁部区画とし

て一条の細沈線が施され、胴部に向かって垂下する条線が施文されている。22～26・29はいずれも細隆線によって口縁部が区画されている。26は波頂部の口縁部片である。地文の縄文は、22・25が単節縄文RL、23・24・26単節縄文LR、29が無節縄文Lである。27・28・33・35には細隆線により区画された無文帯を見ることができる。28の地文は無節縄文Lである。35は無文帯が細沈線により区画されている。30～32・36は縄文のみが見られる胴部片である。30・31は縄文施文後、磨消を加えている。37・38は土器片錘である。加曾利E4式土器の胴部片を利用している。両方共、破損部分以外の周縁は使用による摩滅がみられる。また、明確に形を整えている痕跡は見られず、形を軽く整える目的の粗い打ち欠きのみで、使用しているものと思われる。39はミニチュア土器である。手づくねで製作され、胎土には砂粒を多く含むものの、概ね加曾利E4式の範疇で捉えることができる。

#### SK002A・B (第71図, 図版47・50)

17Y40グリッド付近に位置している。長楕円形と思われる深さ約10cmの土坑Bの廃絶後、上面形が隅丸方形の土坑Aが構築されていると思われる。土坑Bは上面が一辺約1m40cm、深さは約65cmである。底面の上面形はやや不整形であるが、床はほぼ平坦である。覆土は、ロームブロック(径2cm～3cm)を10%程度含む暗褐色土が密に堆積している。

遺物は全て縄文時代中期の土器片であり、Aからのみ検出された。本報告では8点を図示した。図示した遺物のうち、4・7は底面付近から、他は覆土中からそれぞれ検出された。なお、図示しなかった土器片は6点(89g)である。1～8は基本的に全て加曾利E4式土器に含まれるものと考えられる。口縁部が無文となり、微隆起線によって口縁部の区画、曲線状のモチーフを描出している。7は無文部の破片であるが、他に施文されている縄文は全て単節縄文LRを用いている。

#### SK003 (第71図, 図版47)

SK002の東側に隣接して検出された。上面形はゆがんだ円形であり、直径約60cm～65cm、深さ約30cmである。底面はやや楕円形に近い形となるが、中央付近に直径約15cm、深さ約20cmの窪みが検出された。遺物は、縄文時代中期土器のものと思われる細片が4gほど検出されたのみであった。

#### SK004 (第70図, 図版46・50)

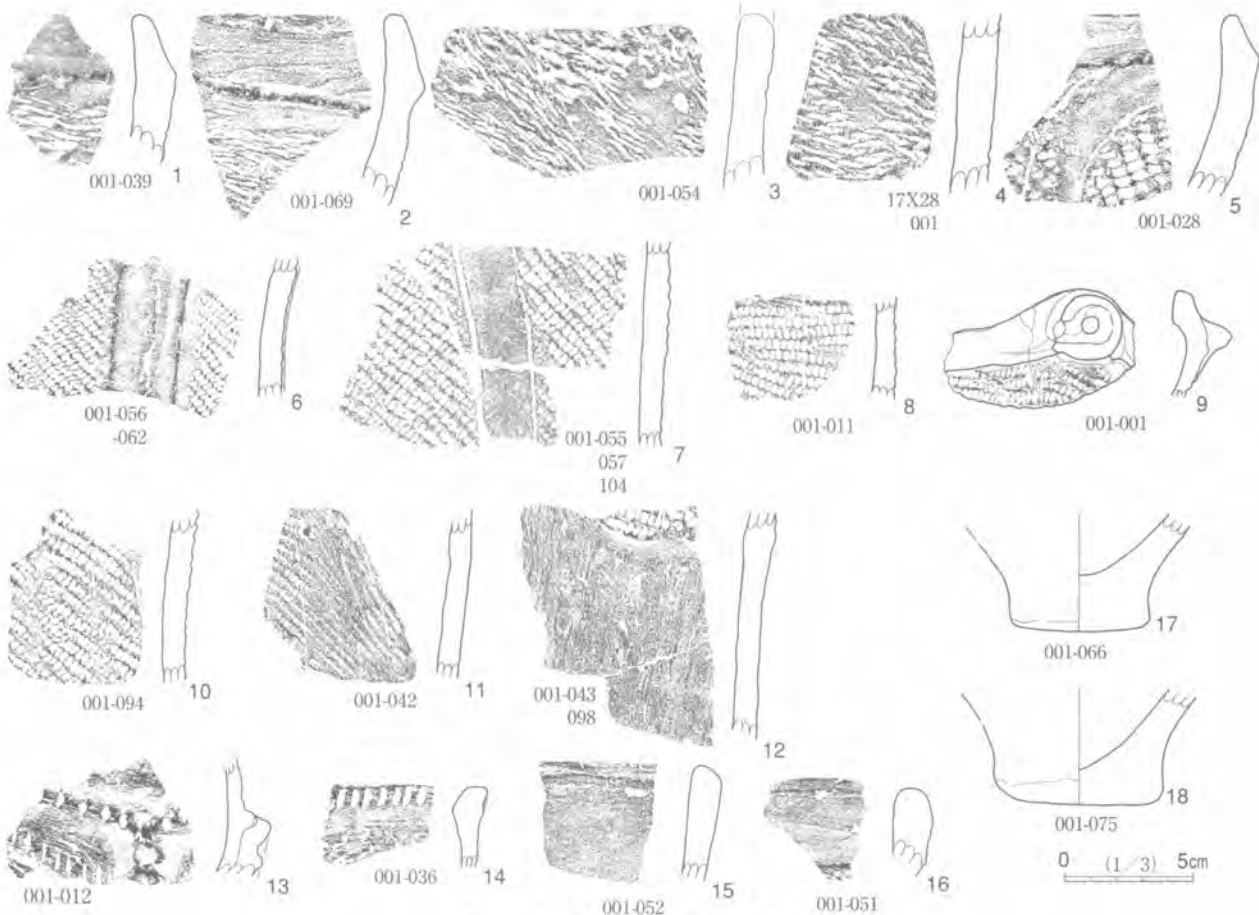
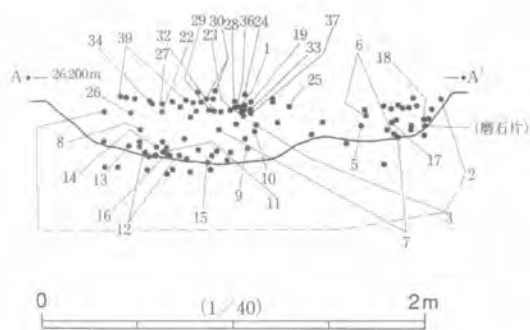
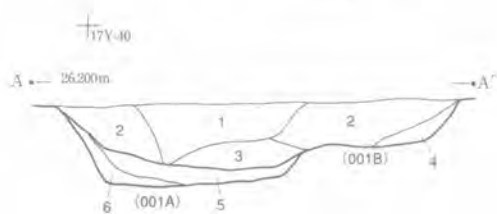
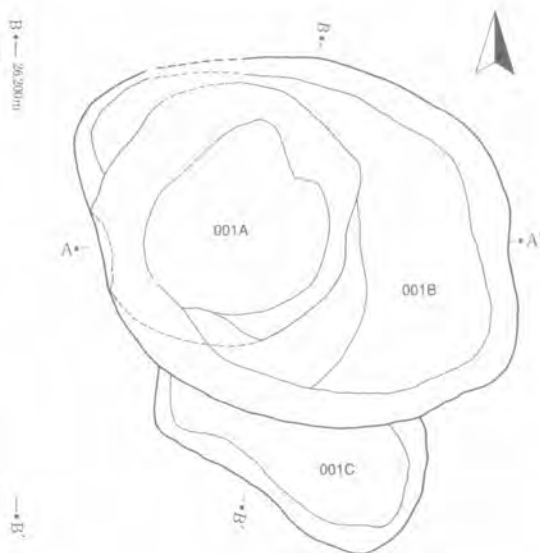
17Y30・40グリッドにまたがって位置する。上面形はやや歪んだ円形で、直径は約60cmである。断面形は緩い段をもち、すぼまるようにして底面へと向かっている。最大の深さは約45cmである。規模及び形状がSK003に類似し、組み合わせる遺構としても考えられる。

遺物は全て縄文時代の土器片であり、2点を図示した。なお、図示しなかったものは土器細片(4g)のみである。1は無文の口縁部破片である。2は微隆起線による曲線状の区画が2本確認できる。加曾利E4式土器に比定される。

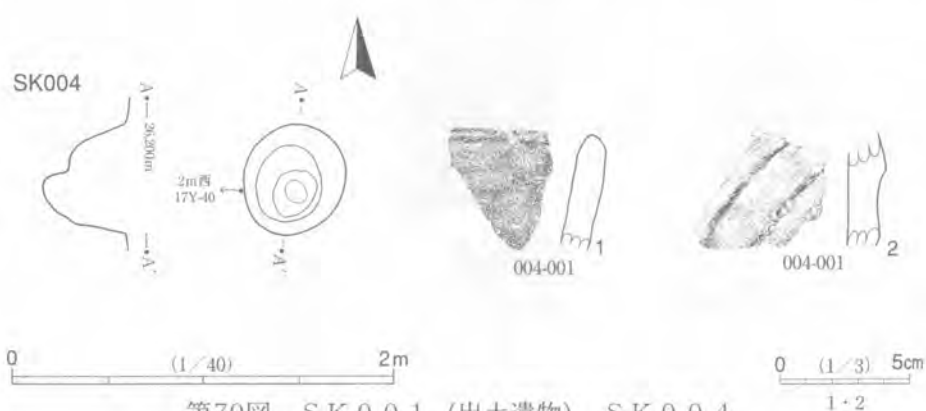
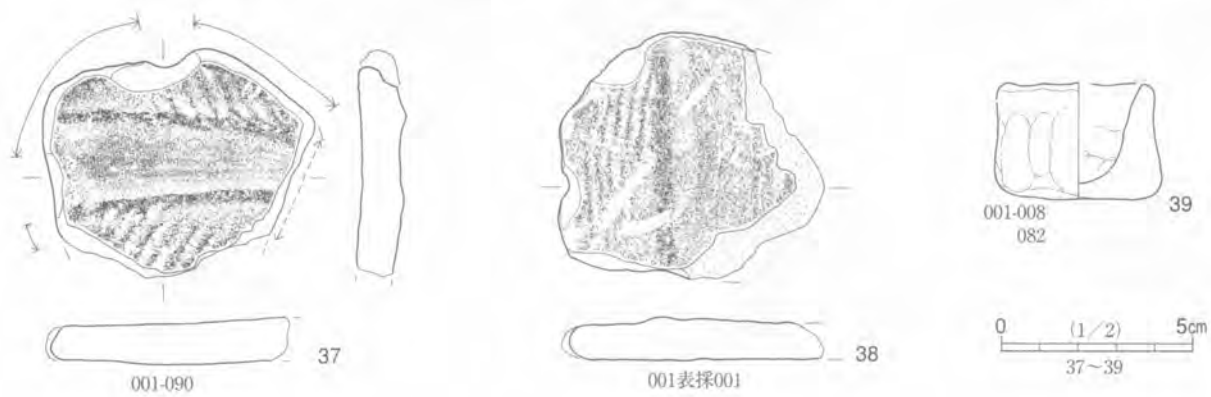
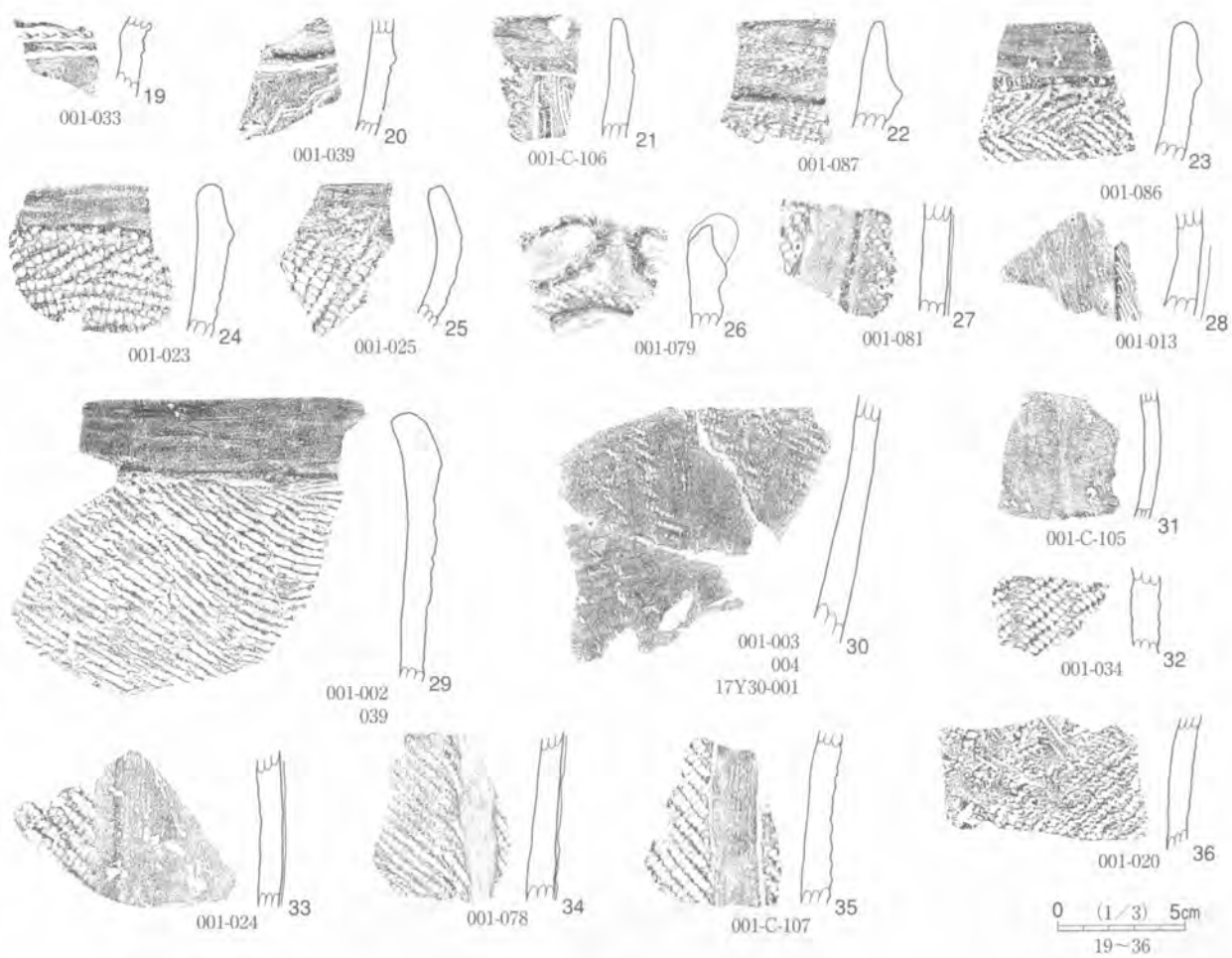
#### SK005 (第71図, 図版47・50)

19X04グリッド付近から検出された。下層確認グリッドを掘り下げた際、壁面から本遺構の存在を確認し、東側を拡張し調査を行った。従って、西側の約半分に関しては推定範囲となっている。上面形はほぼ円形となり直径は約215cmである。確認面からの深さは約30cm、底面はほぼ平坦で、内径は約190cmである。底面には被熱や硬化などの痕跡は認められなかったが、壁面の立ち上がりを含め比較的明瞭に確認することができた。さらに、底面からピットを2か所検出した(P1・P2)。P1は斜め方向から掘り込まれたやや不安定なもので、深さは約10cmである。P2は直径約20cmほどの円形の明確なピットで、深さは約

SK001  
A·B·C

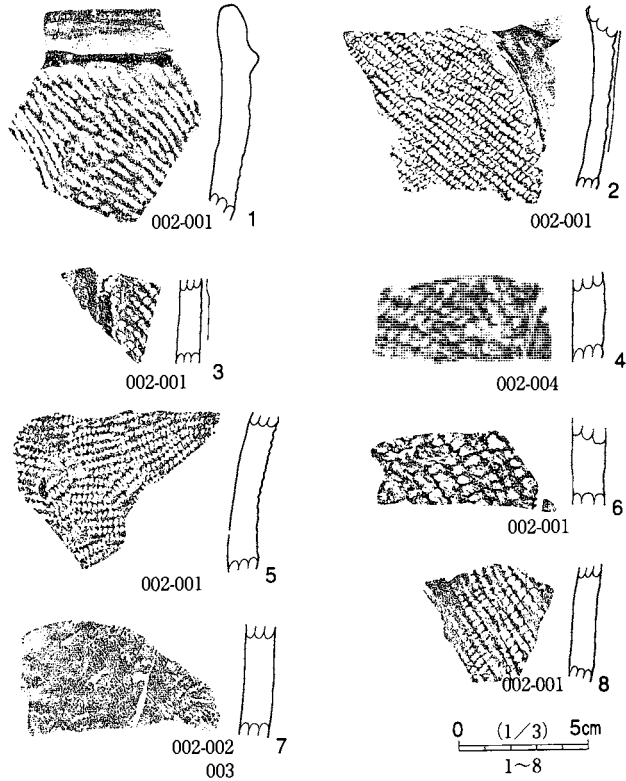
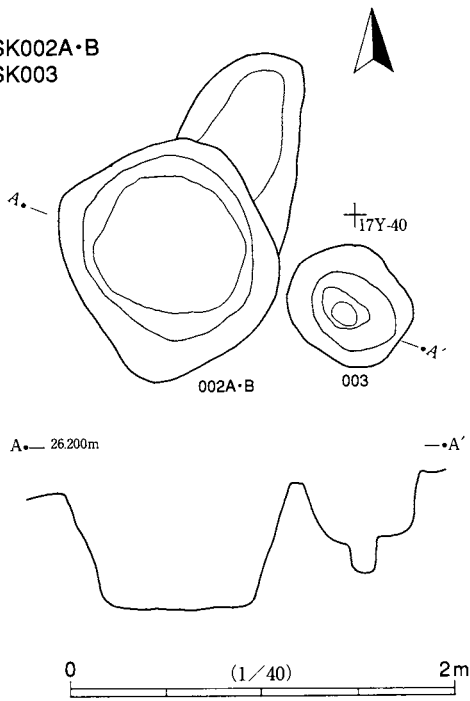


第69图 SK001 A·B·C



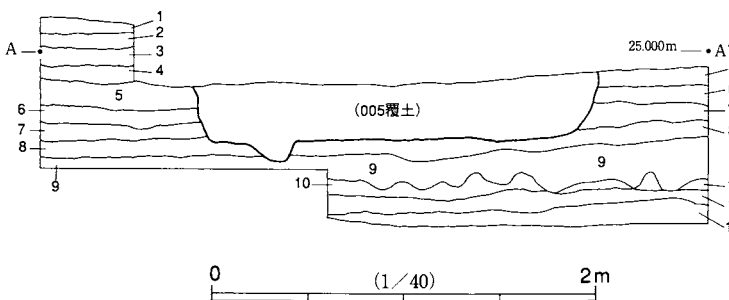
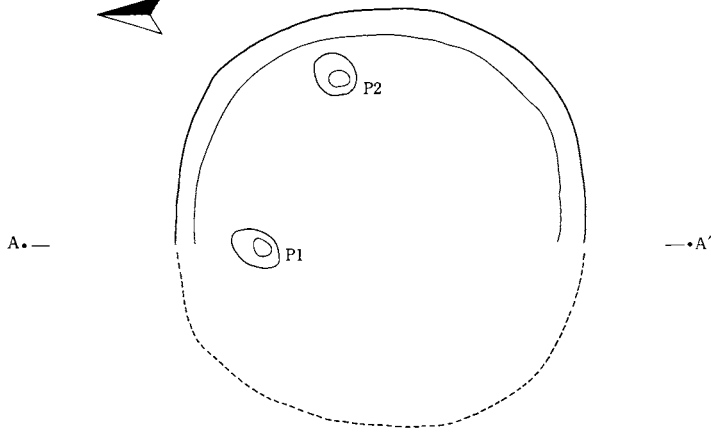
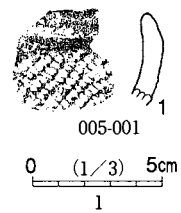
第70図 SK001 (出土遺物), SK004

SK002A・B  
SK003



18X.15

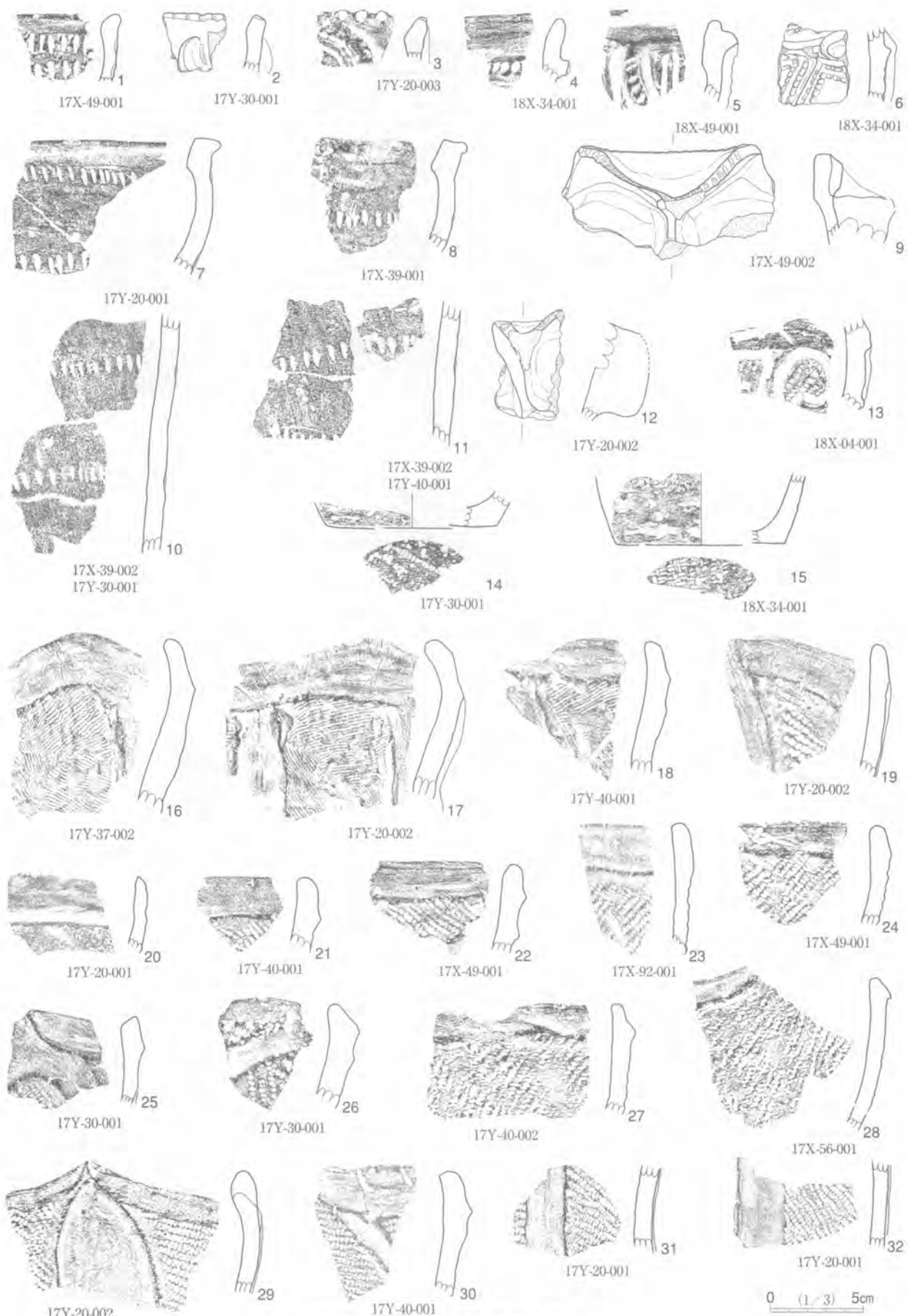
SK005



遺地 層位	名称	記号	土性	磁気 測定	構造	厚さ	密度 測定	可塑性	その他
1	黒褐色土	7SYR 2/2	SH- SCL すこぶる 重む		粒状	薄しよ 〜敷	2	しよ	磁の埋土・耕作土 総覆せむ・主観あり
2	暗緑褐色 土	7SYR 2/3	SCL- CL すこぶる 重む		粒状〜葉 角塊状	敷	16	しよ〜敷	磁の埋土・耕作土 総覆せむ
3	黒褐色土	7SYR 3/2	CL すこぶる 重む		粒状〜葉 角塊状	わずかに 敷	22	敷〜葉	磁の埋土・耕作土 総覆せむ
4	暗褐色土 〜褐色土	7SYR 3/6-4/4	CL 重む		粒状〜葉 角塊状	わずかに 敷	18	敷〜葉	磁の埋土・耕作土 総覆せむ
5	暗褐色土	7SYR 3/4	LIC 重む		粒状〜葉 角塊状	わずかに 敷	22	葉	中 総覆せむあり
6	暗褐色土	7SYR 3/4	CL-LIC 重む		葉角塊状	わずかに 敷	22	葉	強 総覆せむあり
7	褐色土 〜暗褐色土	7SYR 4/4-3/4	LIC 重む		葉角塊状	あり	23	葉	中 総覆せむあり
8	暗褐色土	7SYR 4/4	LIC 重む		葉角塊状	わずかに 敷	24	葉	強 総覆せむあり
9	暗褐色土	7SYR 4/6	LIC 重む		葉角塊状	わずかに 敷	22	葉	強 総覆せむあり
10	暗褐色土	7SYR 4/4 〜4/6	LIC 重む		葉角塊状 〜 葉角塊状	わずかに 敷	26	葉	中 総覆せむにあり
11	暗褐色土	7SYR 4/6	LIC 重む		葉角塊状 〜 葉角塊状	わずかに 敷	29	すこぶる 葉	中 赤レンガ・スクリヤ 及び 黒色スクリヤ 等 の 山 が ら し ま ら な い 総 覆 せ む に あり
12	暗褐色土	7SYR 4/4	LIC 重む		葉角塊状 〜 葉角塊状	敷	30	炭粒	中 総覆せむにあり

※土層の注記については、土壌調査の記録書に記された(日本ペトロロジー学会編(1997)土壌調査ハンドブック 改訂版(澤田社))。

第71図 SK002A・B, SK003, SK005



第72図 遺構外出土繩文土器（1）



30cmである。覆土は、極暗褐色土(7.5YR3/3)が密に堆積していたが、底面付近はソフトローム土が多く混じる傾向にあった。遺物は図示した中期加曾利E 4式土器片1点を、覆土中から検出したのみであった。

(2) 遺構外出土遺物

①土器

本遺跡における縄文時代の土器は、中期のもののみが検出された。型式を見ても阿玉台式と加曾利E 4式に限定される。従って、ここではこれ以上細分することなく、名称も既存の型式名を利用して記述することとする。

阿玉台式土器 (第72図1~12・14・15, 図版51)

概ね阿玉台Ⅱ式土器に比定できる。量の差はあるものの全ての個体の胎土に雲母粒が含まれている。1は口縁部に爪形文が複数列配置される。2は角状の口唇部に刻みが施されている。この刻みは、放射肋を持つ貝殻(アカガイなど)を利用した工具を斜め方向から押圧することによって形成されている。また、口縁部には、対になると思われる耳たぶ状の隆帯が貼付されている。3~6は刻みを持つ隆線によって口縁部が窓状に区画されるものである。7・8は口縁部区画が爪形文によってなされている。10・11は爪形文が胴部に巡っている。12は口縁部の窓枠状区画が隣接する部分で、区画の隆線が突起状に肥厚するも

第18表 未掲載縄文土器集計表

阿玉台式土器

グリッド名	数量(個)	質量(g)	備考
16 Y	4	94	大グリッド一括
16 X	14	210	大グリッド一括
17 Y	134	1,794	大グリッド一括
17 Y - 20	34	424	
17 Y - 30	3	22	
17 Y - 40	11	170	
17 X - 29	4	56	
17 X - 37	2	68	
17 X - 38	3	30	
17 X - 39	2	66	
17 X - 49	2	180	
17 X - 66	1	20	
18 Y	182	3,650	大グリッド一括
18 X	7	118	大グリッド一括
18 X - 39	1	18	
表採	32	800	

(加曾利E式土器)

グリッド名	数量(個)	質量(g)	備考
17 X - 28	12	176	
17 X - 29	24	402	
17 X - 37	10	216	
17 X - 38	23	501	
17 X - 39	43	725	
17 X - 47	6	44	
17 X - 48	9	100	
17 X - 49	61	1,016	
17 X - 55	6	140	
17 X - 56	18	425	
17 X - 58	4	54	
17 X - 66	4	90	
17 X - 74	2	28	
17 X - 76	3	140	17X-86にまたがる
17 X - 78	1	20	17X-88にまたがる
17 X - 92	5	48	
18 X - 04	1	6	
18 X - 25	4	80	
18 X - 26	5	63	
18 X - 29	5	29	
18 X - 33	2	13	
18 X - 34	6	150	
18 X - 35	4	64	
18 X - 39	26	300	
18 X - 43	2	2	
18 X - 44	7	74	
18 X - 49	8	165	
18 X - 59	4	47	
表採	9	137	

加曾利E式土器

グリッド名	数量(個)	質量(g)	備考
17 Y - 20	44	989	
17 Y - 30	119	1,920	
17 Y - 40	70	1,100	
17 Y - 50	18	180	
17 Y - 59	7	140	
18 Y - 30	3	38	
17 X - 24	1	10	
17 X - 27	1	14	

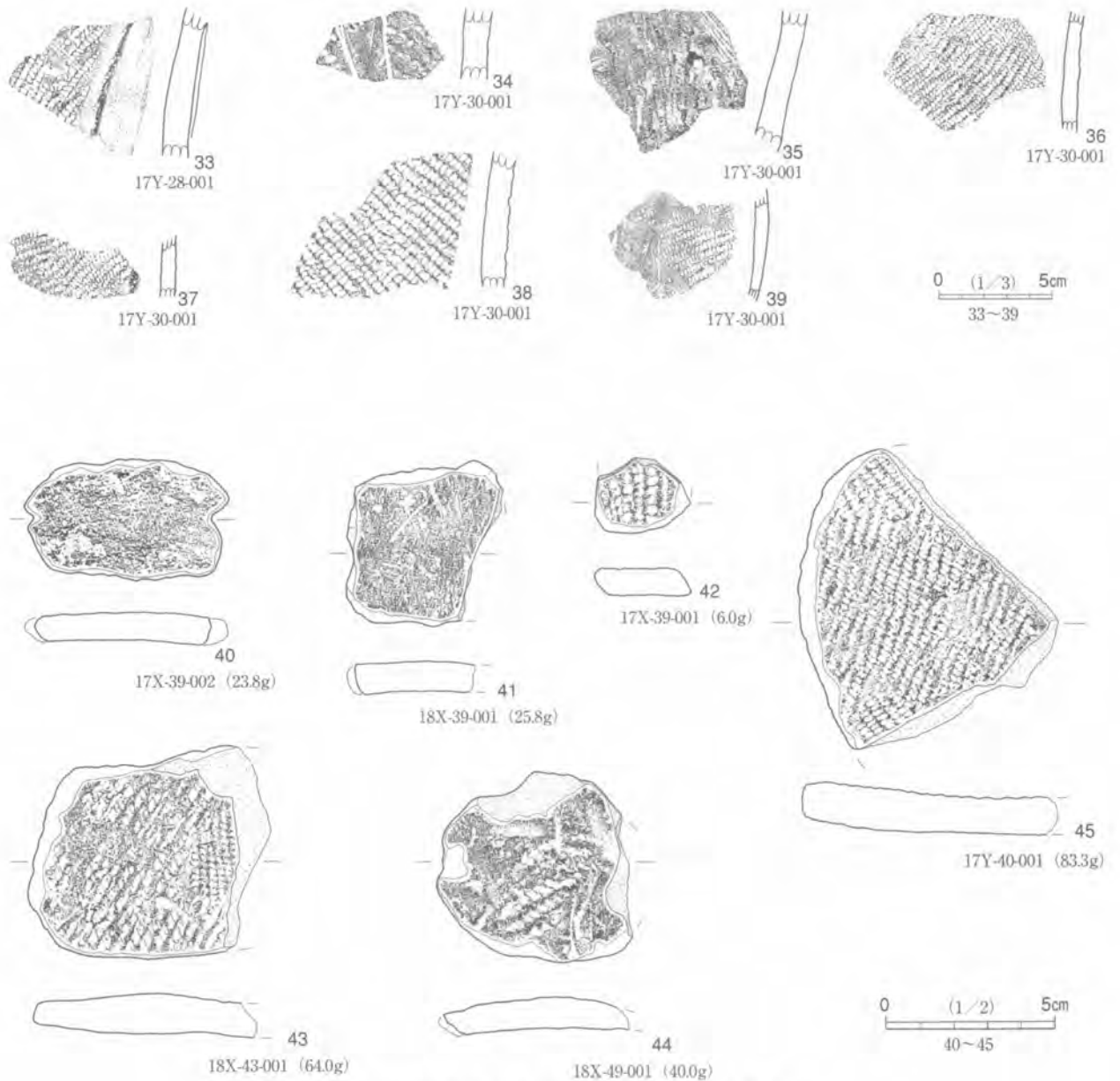
のである。14・15は底部である。14の底面には縄文の原体圧痕が、15の底面には網代痕をそれぞれ確認することができる。

**加曾利E式土器** (第72図13・16~32・第73図33~39, 図版51・52)

13のみ加曾利E 2式に、他は全て加曾利E 4式に比定される。16~18は同一個体である。微隆線による区画内に、比較的細い無節Rの原体を密に回転施文している。19~33・37は微隆線によって、34・39は細沈線によってそれぞれ無文域と縄文施文域を区画している。35・36・38は縄文施文のみが認められる胴部片である。

**②土製品** (第73図40~44, 図版52)

これらの土製品については全て加曾利E式土器の土器片を利用しているものである。40~44は土器片錘である。40のみ完形品で、他は破損品である。40は平面形が長楕円形となり、両脇に大きな切り込みを



第73図 遺構外出土縄文土器(2)・土製品

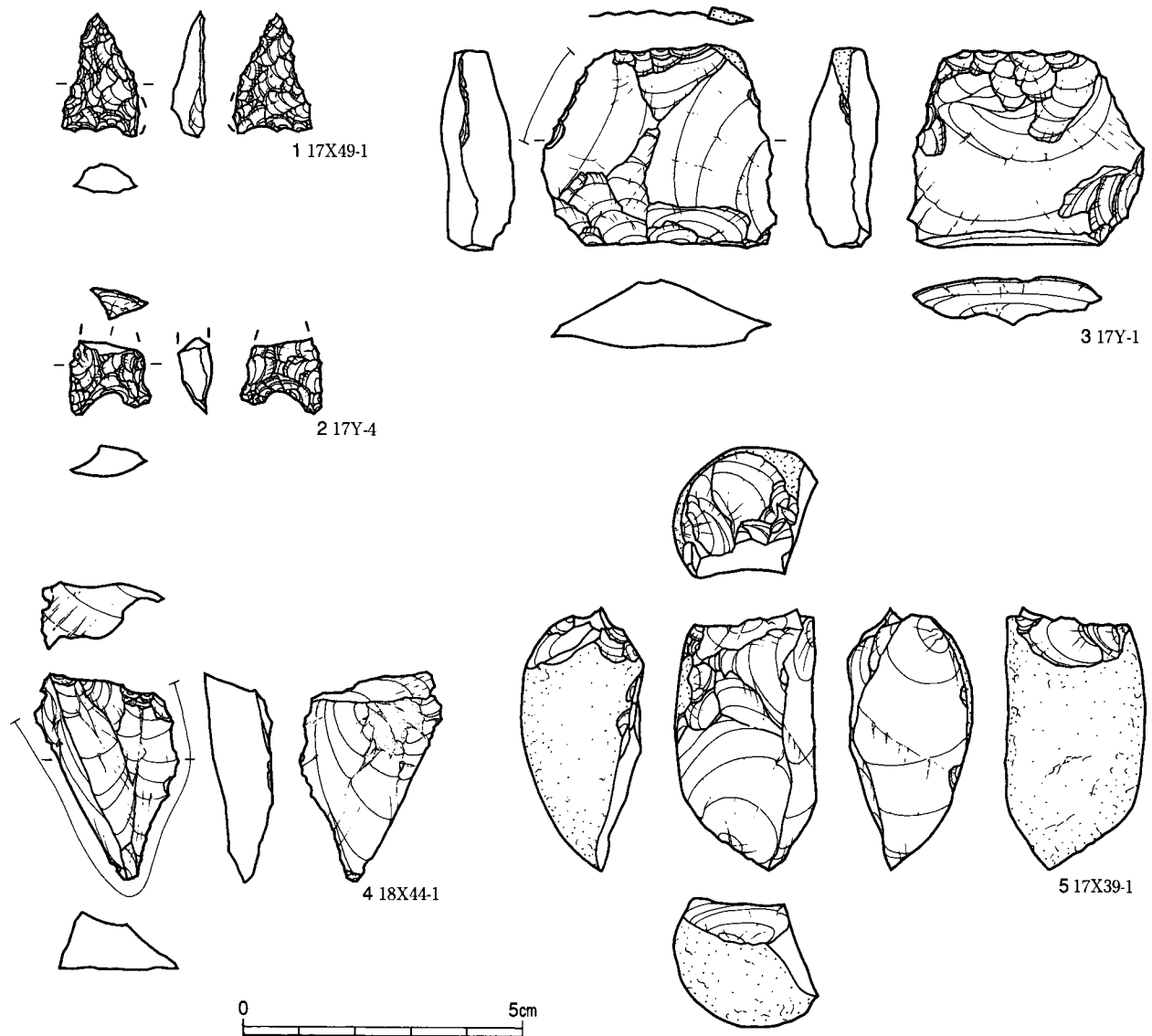
持つ。周縁調整は基本的に打ち欠きのままであるが、使用のためか多少の磨り減りが見られる。41は打ち欠きの痕跡をそのまま残している。42は打ち欠きの後、多少の研磨を加えている。全体の形状は不明であるが、比較的小型の土器片錘と思われる。43・44は40と同様に打ち欠きのままで使用され、周縁が多少磨り減っているものである。45は土製円盤と思われるが、欠損部分が多く、詳細は不明である。

③石器 (第74図1～7, 図版53)

**概要** 松崎VII遺跡ではごく少数の石器が検出されている。すべて遺構に伴わないでグリット出土石器として検出している。これらの石器は本遺跡で主体となる縄文中期の土器群に伴う蓋然性が高いが、出土点数が少ないため明確な共伴関係については不明である。便宜的にここで縄文時代の所産と考えられる石器をまとめて掲載する。

**石鏃** 1・2は石鏃である。すべて無茎石鏃の範疇にはいる。1は両側縁が非対称形のもので、片側縁が膨らみ一方が内湾する。基部は浅く抉れるが調整は荒い。2は先端部を欠損する。基部は明確な抉れがあるが、片脚は先端が尖りもう一方は鈍角になり脚部が非対称である。

**楔形石器** 3は楔形石器とした。3は凝灰岩製の台形状のものである。上端が一部に自然面の残る線状



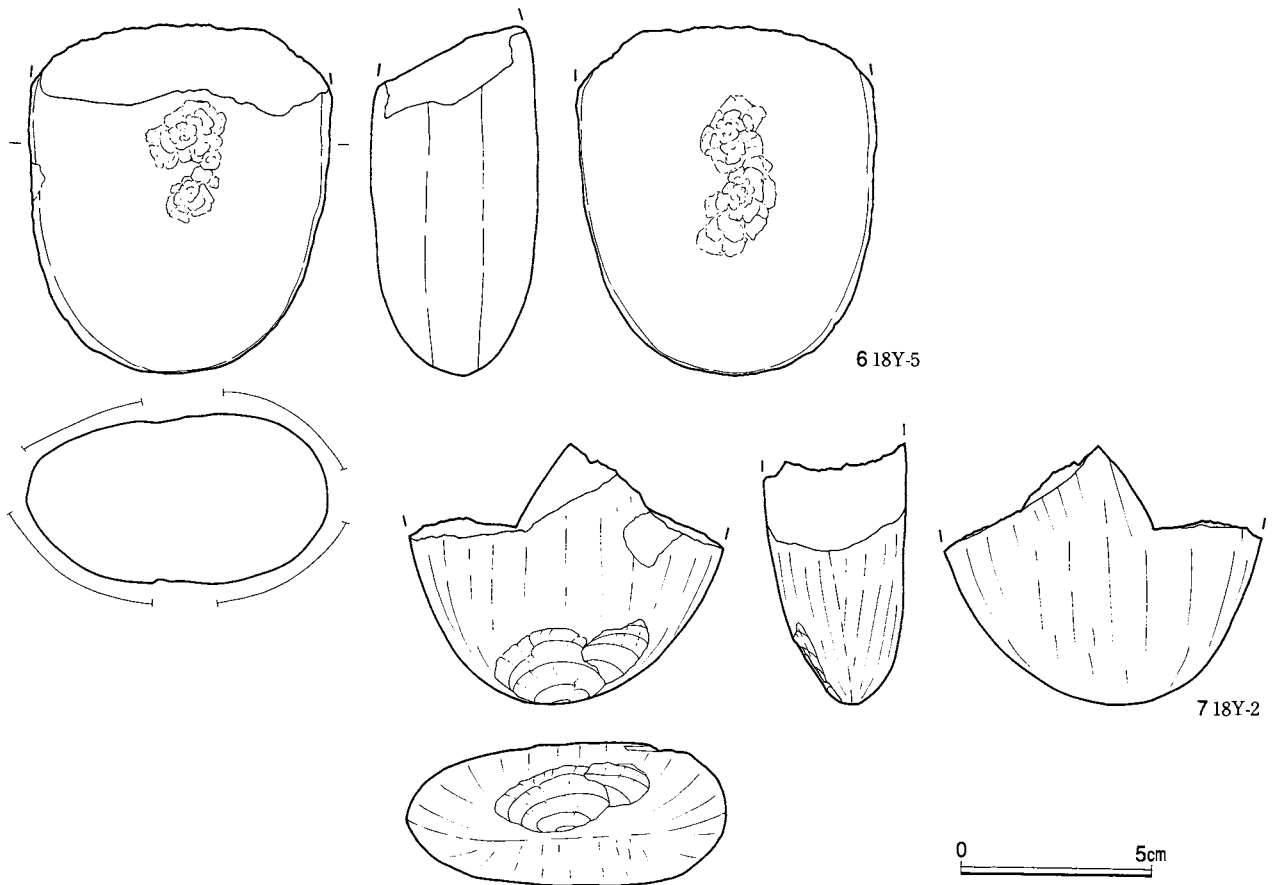
第74図 縄文時代石器 (1)

打面で下端が切断面の平坦打面となり、表面で下端からやや細長い剥離痕と裏面で上端から細長い剥離痕が見られる。その後、器体を90度展開して裏面では右側縁下半部と左側縁上半部を加撃方向として両極技法が行われている。

**U剥片** 4はU剥片である。平坦打面をもつ逆三角形の縦長剥片であり、両側縁から末端部全縁に微細な剥離痕が連続する。

**石核** 5は石核である。珪質頁岩の小礫を石核の素材にしている。礫の端部を整形し、上端からはこの面を打面として、下端からは礫面を打面として幅広い剥片を作出している。その後、右側面上端からの加撃により石核が裁断されてしまっている。

**磨石類** 擦り面の観察される石器を総括して磨石類とした。6・7が磨石である。6は表裏面の擦りが顕著なもので、横断面形は楕円形となる。表裏面に2か所ずつの窪み部が認められる。窪み部は敲打痕状に浅く窪んでいる。7は上半部が欠損するものであるが、全面が擦り面となると思われる。下端部には加撃による剥離痕が観察される。



第75図 縄文時代石器（2）

第19表 縄文時代石器属性表

挿図番号	遺物番号	器種	母岩	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	挿図番号	遺物番号	器種	母岩	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g
1	17X49-1	石鏃	黒曜石	2.22	1.39	0.59	1.1	5	17X39-0001	石核	珪質頁岩	4.67	2.59	2.29	29.7
2	17Y-4	石鏃	黒曜石	1.36	1.49	0.60	0.9	6	18Y-0005	磨石	流紋岩	9.05	8.00	4.40	449.7
3	17Y-1	楔形石器	凝灰岩	3.56	4.25	1.31	22.9	7	18Y-0002	磨石	砂岩	6.75	8.40	3.75	205.7
4	18X44-1	U剥片	チャート	3.70	2.55	1.20	6.9								

## 第4章 まとめ

### 第1節 松崎VI遺跡

#### 1 旧石器時代

松崎VI遺跡からは6か所のブロックと1か所の単独出土地点が検出され、第I・第II文化層の2つの文化層が設定された。この項では、2つの文化層の器種構成、石器製作技術、石材の特徴について検討しそれぞれの様相をまとめることとする。

**第I文化層** 第I文化層の石器群は第1ブロック～第5ブロックが帰属し、1か所の地区に集中し群を形成していた。立川ローム層のV層・IV層下部に出土層位がある文化層である。石器の総数は165点でありまとまった資料で構成される。石材構成は安山岩A（黒色緻密質安山岩）が133点（80.6%）であり圧倒的多数を占め、他に黒色頁岩、チャート、流紋岩、ホルンフェルス、黒曜石、珪質頁岩、砂岩がごく少数加わる。安山岩Aの石材に偏在した石材構成と看取され、該期の石材構成としては黒曜石の僅少さと黒色頁岩が少数ではあるが組成することが注目される。器種構成はナイフ形石器が7点、角錐状石器が3点組成しているがその他の搔削器類は少なく、その他は剥片・碎片など石器生産に関連して生産されたもので占められる。ナイフ形石器は縦長剥片素材や縦長剥片素材を斜めに切り取った素材を2側縁部分加工した幾何型の先刃ナイフが特徴であり、これらは安山岩Aの母岩により生産されたものとチャート、ホルンフェルスの単独母岩により搬入された製品の2種類が認められる。角錐状石器としたものにはツール・リダクション（製品再加工）されて先端部が鈍角になる黒曜石2単独母岩のものと横長剥片素材の大型尖頭型で基部が茎状に挿入する特徴的なものが存在している。また、礫群は存在していないがごく少数の焼成礫が伴出する。石器製作技術は安山岩A母岩を消費して各種幾何形のナイフ形石器が生産されているが、これには剥片を石核素材として横長剥片素材を生産するものと、90°打面転移を基調として縦横比が同じ剥片素材、或いは縦長剥片の素材を生産するものが存在する。素材には規格性が看取されず素材の選択に多様性が認められる。なお、母岩となる安山岩Aの分類には素材の色調・粗密、介在物の大きさ、状況等から4つの母岩に分類したが、これは同種の母岩と言う程度の分類で、実際の母岩の大きさ・形状を推測すると、それぞれがさらに数～十数母岩に分類できる。第3ブロックで安山岩A1・安山岩A3、第4ブロックで安山岩A1、第5ブロックで安山岩A2が集中的に消費されており、この安山岩A母岩の集中的消費が当文化層を特徴づけている。第I文化層はこのような様相を呈している石器群である。武蔵野編年のIV層下部・V層期の石器群に対比される石器群に該当するが、角錐状石器の存在とナイフ形石器がより幾何形化していることを考慮するとIV層下部・V層期でも新段階のものと考えられる。周辺地域のおおむね同時期の石器群としては本埜村五斗時遺跡第4文化層<sup>1)</sup>の石器群が著名であるが、五斗時遺跡では黒曜石石材を多用して刺突形のナイフ形石器が製作されており石材利用面とナイフ形石器の形態面での違いが認められる。これらの相異は同時期における石材獲得戦略上の二極的な異相なのか、あるいは細かな時期差を示すものかは安直に答えが出ないものであり、当該地域での資料の増加を待つて慎重に検討されなければならないであろう。

**第II文化層** 第II文化層の石器群は第6ブロックの1か所と単独出土石器の一部が帰属し、立川ローム層のIII層上面～IIc層下部に出土層位があると想定される文化層である。このブロックは縄文時代以降の

調査に伴って検出され、整理作業時に把握されたものであるため資料の回収が部分的である可能性が高くごく少数の資料で構成される。石材構成は、乳灰白色の色調を呈した珪化度が高い珪質頁岩と風化して黄白色の色調を呈した珪質頁岩の2種類が認められ、良質な珪質頁岩のみで構成されることが特徴的である。器種構成は、荒屋型彫器の範疇に入る長身な彫器があり、明確な細石刃石核がないものの細石刃や細石刃製作に関係した剥片や細石刃原形が検出されている。荒屋型彫器としたものは乳灰白色の珪質頁岩を用い、細石刃製作に関わる資料は黄白色の珪質頁岩が用いられている。荒屋型彫器を伴出するいわゆる「北方系」の細石器群では削片剥離により細石刃石核を整形・変形する「削片系」の細石刃石核が組成することが特徴とされる。本文化層では、資料の一括性と資料の質的な少なさから検討は不十分であるものの、珪質頁岩を用いた細石刃石核の整形技法には垂角礫や剥片を分割整形し細石刃を剥離する「野岳型」の細石刃石核技法が行われていると考えられる。荒屋型彫器が組成する北方系細石刃石器群にあって、これまでの諸例では野岳型の細石刃石核が組成する例は見られず解釈に苦慮するところである。一方、野岳型の細石刃石核で本遺跡と同様に風化した黄白色の珪質頁岩を石材に選択する石器群には、印西市向原遺跡<sup>2)</sup>、芝山町岩山中袋遺跡（空港No.2遺跡）<sup>3)</sup>など少数であるが存在する。また、この黄白色の珪質頁岩は、削片系の細石刃石核に一般的に選択される東北地方のチョコレート頁岩と違い関東北部、東北南部でも採取可能な石材と考えられる。このような状況を考えるとき次のような仮説を提示することも可能である。北方系の細石刃石器群にあって細石刃用石材の欠乏に際して、チョコレート頁岩に類似した黄白色の珪質頁岩を規制的に選択するが、その細石刃の製作にあっては石材の規制か或いは在地で行われている野岳型の細石刃石核の整形技法を採用して細石刃石核の消費が行われた。少数であるが非黒曜石（珪質頁岩）製の野岳型細石刃石核が下総台地の北方地域で存在することもこの仮説の傍証になる。今後は北方系の細石刃石器群と関東北部地域の細石刃石器群の石材、技術システムの関連と構造を追求することが必要となろう。

## 2 縄文時代

松崎VI遺跡における縄文時代の遺構としては竪穴状遺構1基、土坑2基が検出された。他には、遺構外で早期前半～後期後半にかけての遺物が検出された。具体的に主な内容を見ると、早期初頭の燃糸文土器（稲荷台式）、早期後半の条痕文土器（野島式前後）、中期前半の阿玉台式土器（I b式中心）、中期後半の加曾利E式土器（古い部分）、後期前半の堀之内1式土器である。量的には中期～後期前半のものが比較的多い。このような内容は松崎遺跡群における全体的な傾向と共通しているが、本遺跡は他の遺跡に比して遺構数が少ないことが指摘できる。これは、VI遺跡の調査範囲がI～III遺跡に比べて限定されていることに起因していると思われるが、同じ集団の活動領域で居住域とその他の活動区域の差を示している可能性もあり、今後も注意して検討する必要がある。

遺構は中期に属するものがわずかに3基ほど検出されたにすぎない。だが、竪穴状遺構としたSX001は中期中葉曾利式の影響を強く受けたと思われる小型土器を炉（焼土）の中央部に配置し、その周囲を在地の土器破片で囲っており、遺構の形状も含めて特徴的な出土状態であったと指摘できる。また、陥穴状土坑であるSK002は、この種の土坑にしては比較的多くの遺物が含まれていた例である。

土製品では、遺構内外を合計して土製円盤が4点、土器片錘が20点検出された。土器片錘については中期のものに限定され、その製作は基本的に打ち欠きのまま使用しており、周縁調整を加えた痕跡は乏しい。また、大きさや重さについても、東京湾岸の貝塚などに見られる大型の土器片錘は見られなかった。

こうした特徴は、対岸に立地する八千代市神野貝塚出土の土器片錘についても同様であり<sup>4)</sup>、本遺跡の立地する印旛沼沿岸域に通有なものとして指摘できよう。つまり、水域環境の特性に応じた漁法を行っていたことを具体的に示すものとして、土器片錘をはじめとする漁具の基礎的な分析は重要であり、今後とも各遺跡で注意する必要がある。

### 3 奈良・平安時代

本遺跡においては、竪穴住居跡11軒を検出した。遺物の形状からいずれも9世紀代のものと考えられる。遺構の形態及び個々の遺物の形状については、本時期の北総台地域において通有なものであり、新たな基礎的情報の追加資料として重要である他には特に特筆すべき点はない。だが、出土状態及び遺物の破損状況は大いに注目する必要があると思われる内容であった。なかでもS I 002・S I 006・S I 008・S I 011の各竪穴住居跡の状況には、本文中に記載したようにかなりの人為性を読み取ることができた。基本的には、住居廃絶後における、杯等の土製食具への意図的な打ち欠きと廃棄行為であるが、用いられる土器には墨書及び線刻が施されている傾向があり、祭祀的な性格の強さを示しているものと考えられる。打ち欠きについては、明らかに破片の一部を同じ場所に廃棄していない例も見られ、さらなる意図が看取される。

以上の点について、今回は基礎的な調査成果の提示にとどめるが、今後の課題として地理的及び時間的な広がり及び変化について検討する必要性を指摘しておきたい。そうして初めてこのような行為の意義付けが、民俗事例の情報を含めて検討可能になると考えられるからである。だが、遺物の破損状況については、編年研究の観点から復元された形状のみが重要視される傾向にあり、具体的に示されている例はごく一部にすぎない。さらに、出土状況の検討も省略化される例も増加しており、分析の障壁となっている。本報告書における提示及び記載も不十分な点が多いことは否めず、標準的な提示方法が急務であると同時に既出資料についても再検討を積み重ねなければならない。歴史学全体が民衆生活史の観点から再構築されている現在において、こうした作業の重要性はかなり高いと思われる。

### 4 中・近世

本遺跡においては、地下式坑など中・近世のものと思われる遺構が8基ほど検出されたが、分布も疎らで遺物の出土も少なく、当時の状況を推察するには困難である。個々の遺構を見ると、SK003は具体的な性格は不明であるが、斜面部に足場状のピットがあり、底面付近に下る必要性のある遺構であったことを示しているものとして興味深い。また、地下式坑であるSK006は、井戸から転用したものであり、当時の習俗を示す一例として注目されるものである。また、隣接する松崎Ⅲ遺跡は現在整理作業が継続されているが、この時期の台地成形区画をはじめとする遺構及び遺物が多数検出されており、その比較の中で再度本遺跡の中・近世について検討する必要があると思われる。

## 第2節 松崎Ⅶ遺跡

松崎Ⅶ遺跡の成果は、その9割以上が縄文時代のものであり、それ以外の時期については極めてわずかな遺物が採集されているにすぎない。縄文時代についてみても、遺構及び遺物の広がりには小規模なうえ、時期も中期に限定されている。特に遺構については、さらに加曽利E4式期に限定されるようであり、短期間にしか積極的な人為がなかったことを示している。それらの遺構を見ても、いわゆる竪穴住居跡のように人間行動の痕跡が顕著なものではない。ただ、SK001のように遺物が集中的に包含されていた遺構

もあり、あながち消極的な利用面のみを強調するのも誤りと思われる。

松崎遺跡群全体を見ても縄文時代の遺構は、早期の炉穴群を除き、疎らに分布しているにすぎない。しかし時期的には、上述したVI遺跡のように、長期間に及んだ土地利用の痕跡が認められている。そうした中で、限定された時期の中でも遺物の多い遺構がある状態は特殊なあり方とも考えられるが、SK005のような焼土や床面硬化の見られない竪穴状遺構があることから、一時的なキャンプサイト的な利用を推察することが可能であろう。

注1 落合章雄 1993『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－印旛郡本埜村五斗蒔遺跡・印西町宗甫遺跡－』（財）千葉県文化財センター

2 高木博彦 1973『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』（財）千葉県文化財センター

3 矢本節朗 1996『土木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書－三里塚御料牧場遺跡・岩山中袋遺跡－』（財）千葉県文化財センター

4 小笠原永隆 1997「八千代市神野貝塚採集の土器片錘について」『貝塚研究』第2号 園生貝塚研究会  
小笠原永隆 1998「土器片錘についての一考察」『貝塚研究』第3号 園生貝塚研究会



# 写 真 图 版



松崎 VII 遺跡

松崎 VI 遺跡

遺跡付近の空中写真 (1/10,000・1989年撮影)



調査前状況



下層調査状況 (30X-37付近)



旧石器時代石器出土状況



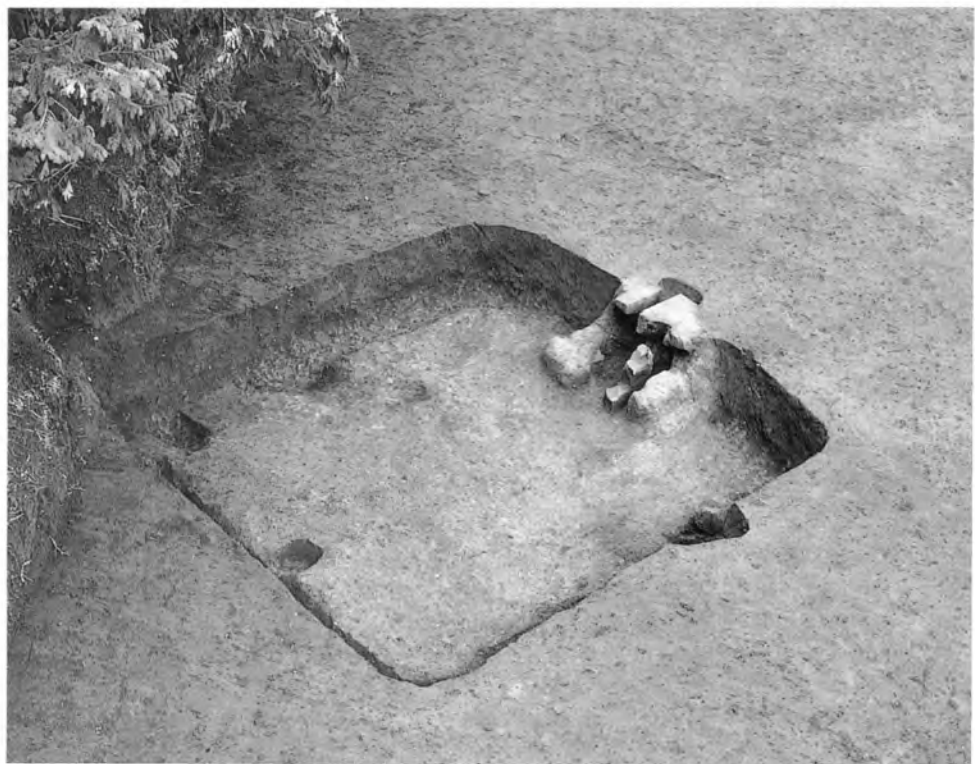
SI001



SI002



SI003





SI004



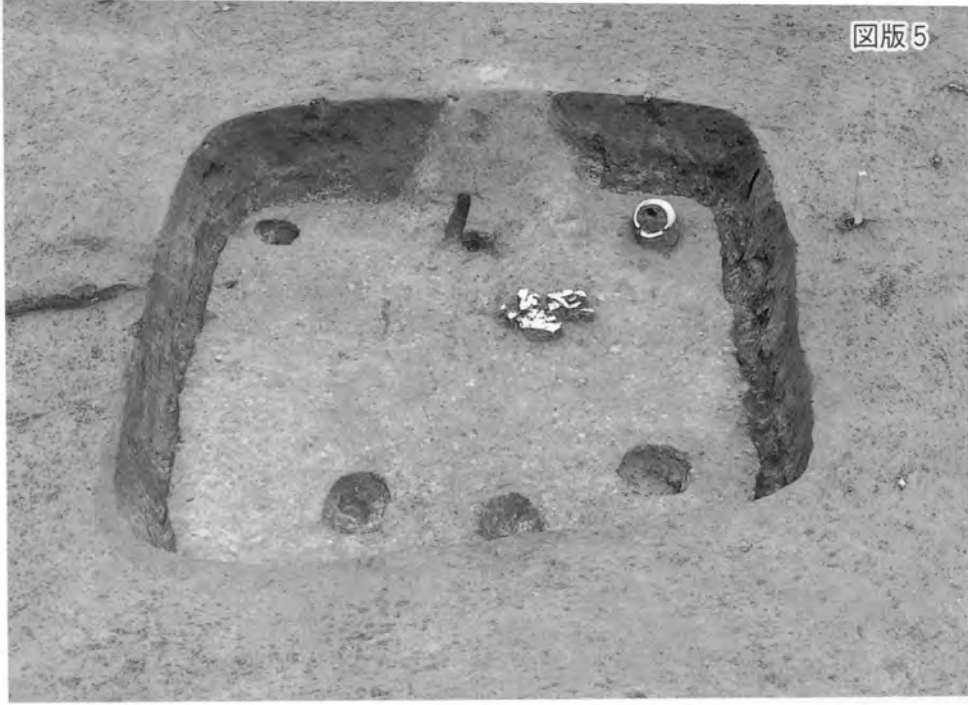
SI005



SI007



SI006①



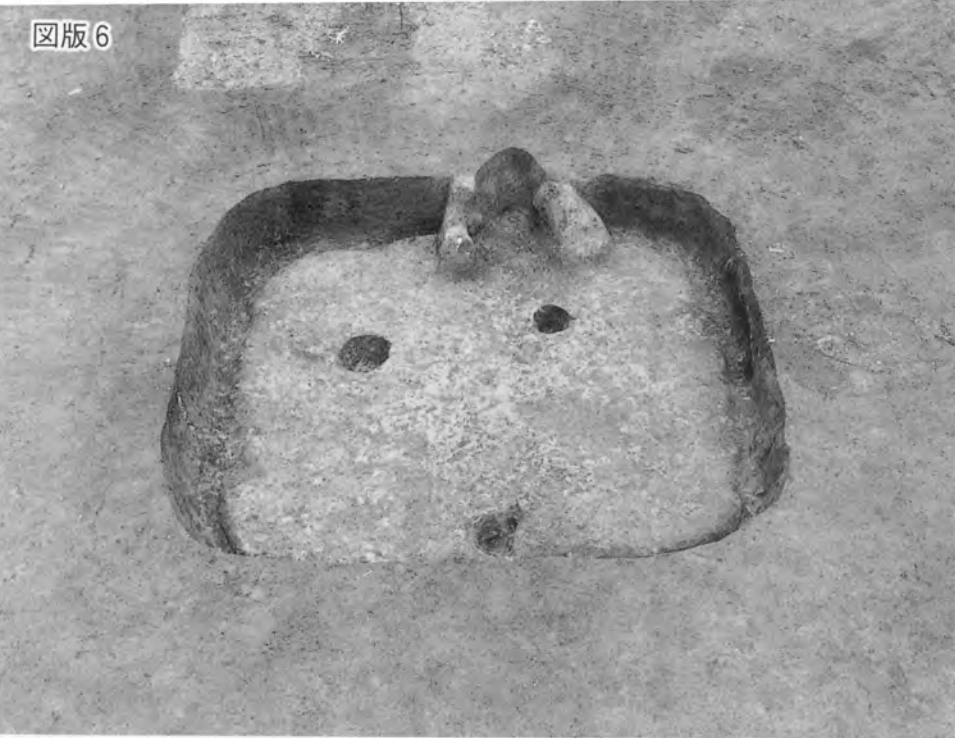
SI006②



SI008



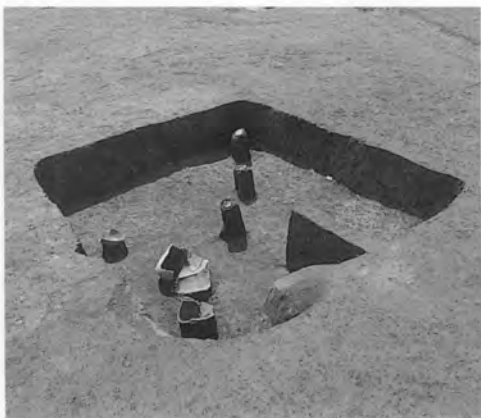
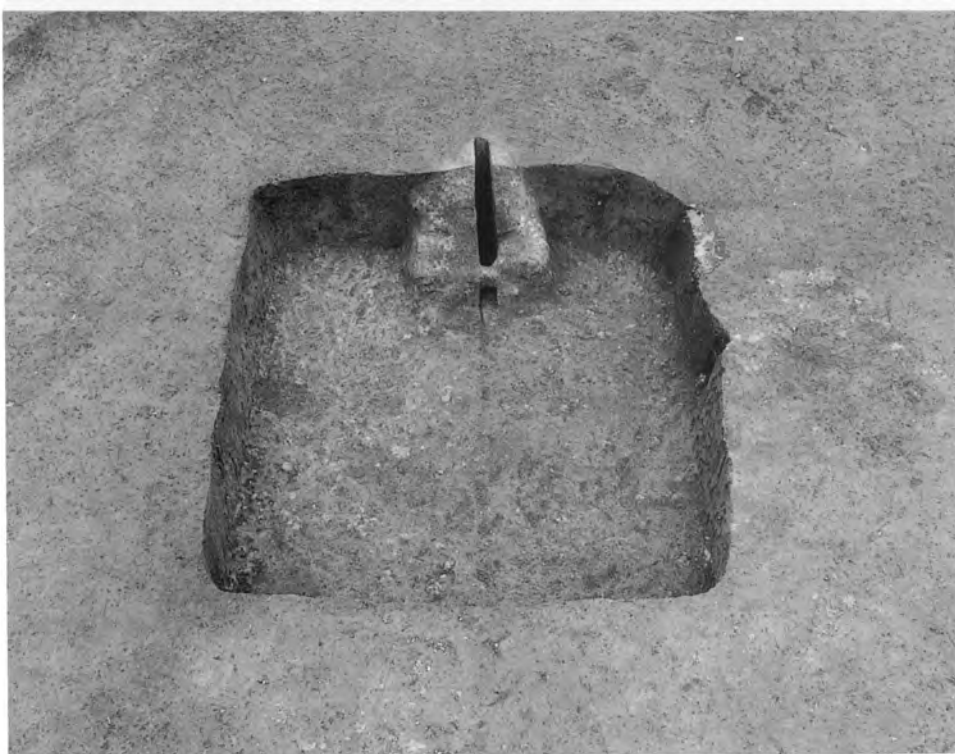




SI009



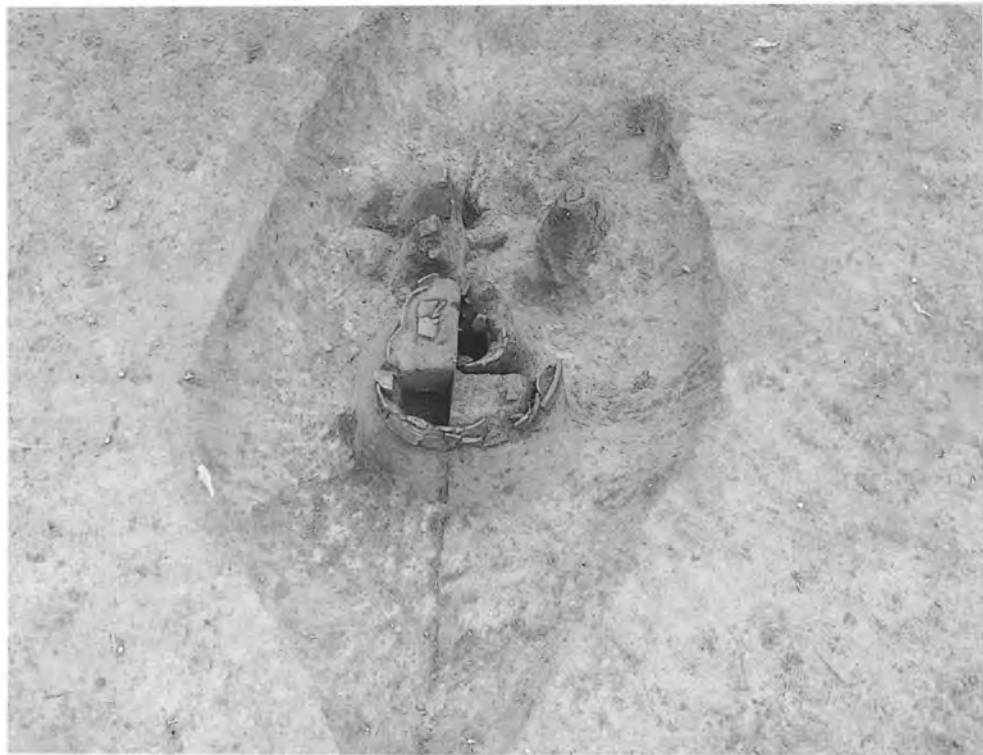
SI010



SI011



SX001  
(完掘状況)



SX001  
(遺物出土状況)



SX001  
(中央部付近遺物出土状況)





(北西壁の足場状ピットの状況)

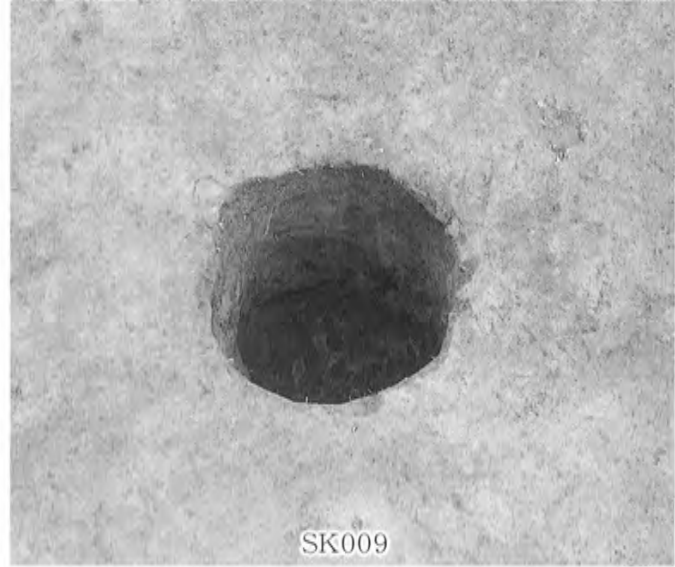
SK003



SK006



SK005





SK005 (左)  
SK010 (中上)  
SK006 (右)



近世溝 (SD001)

近世溝 (SD002・SD003)



調査風景



松崎VI遺跡



1



2

第1ブロック



1



4



2



3



7



5



9

第2ブロック1

松崎VI遺跡



10



6



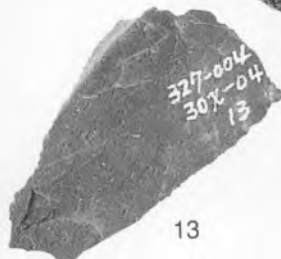
8



11



12



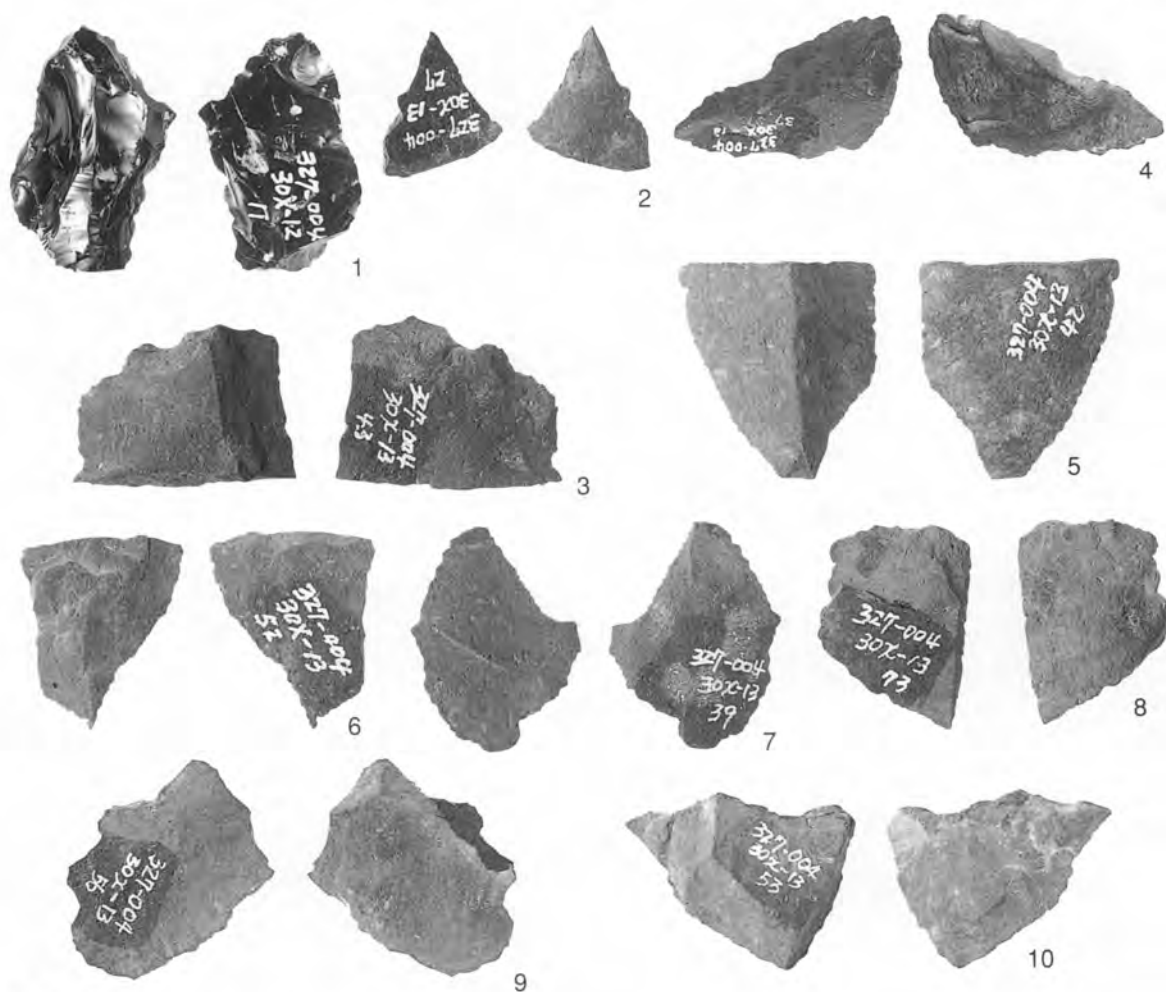
13



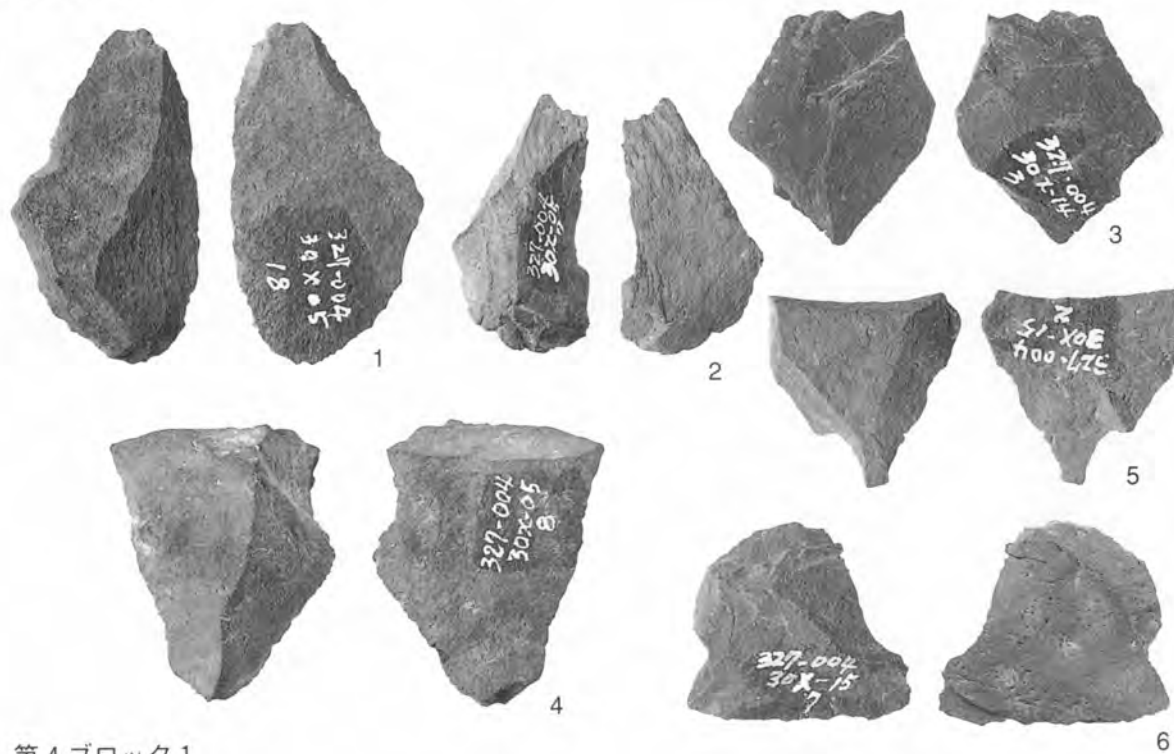
14

第2ブロック2

松崎VI遺跡

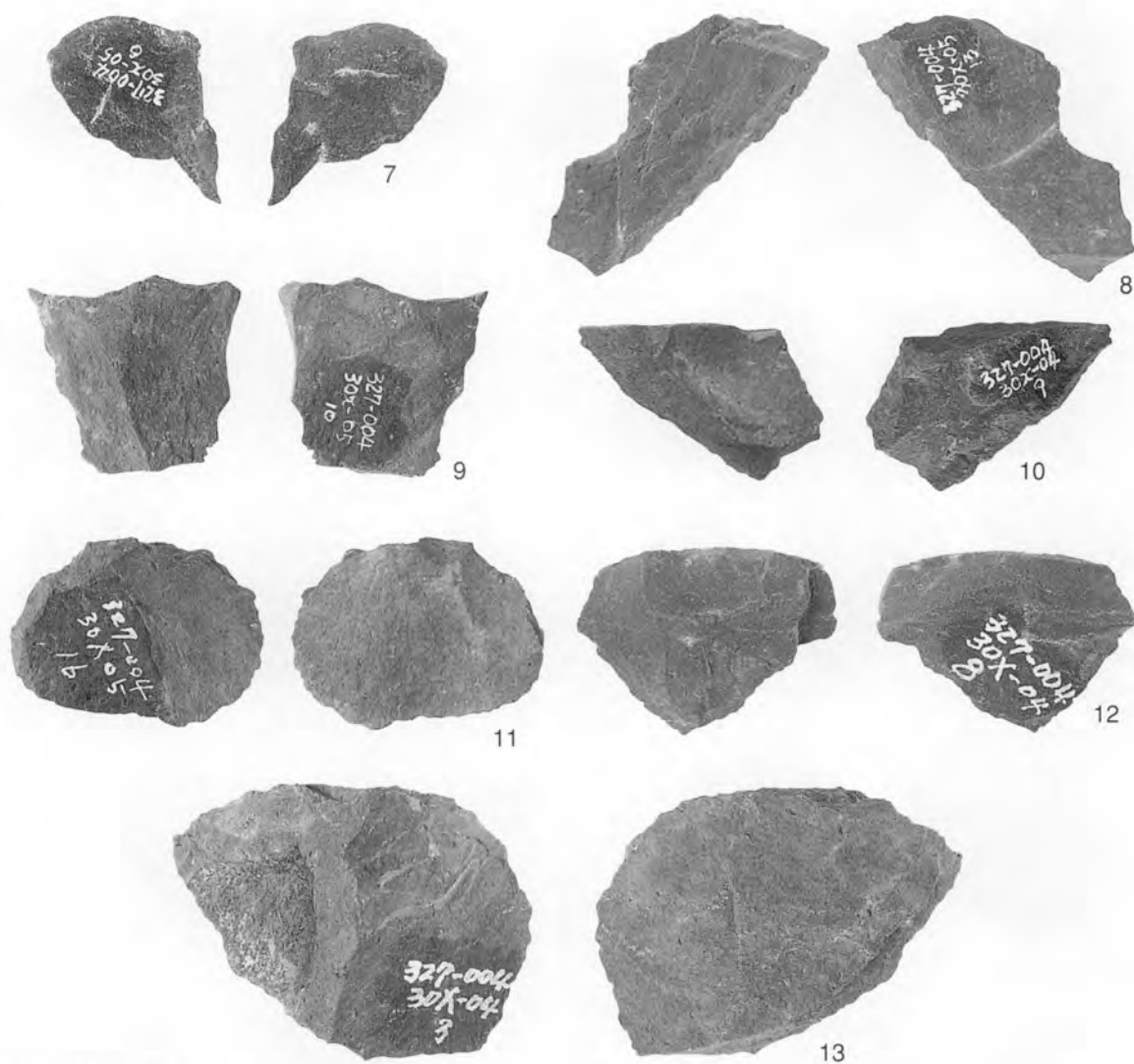


第3ブロック

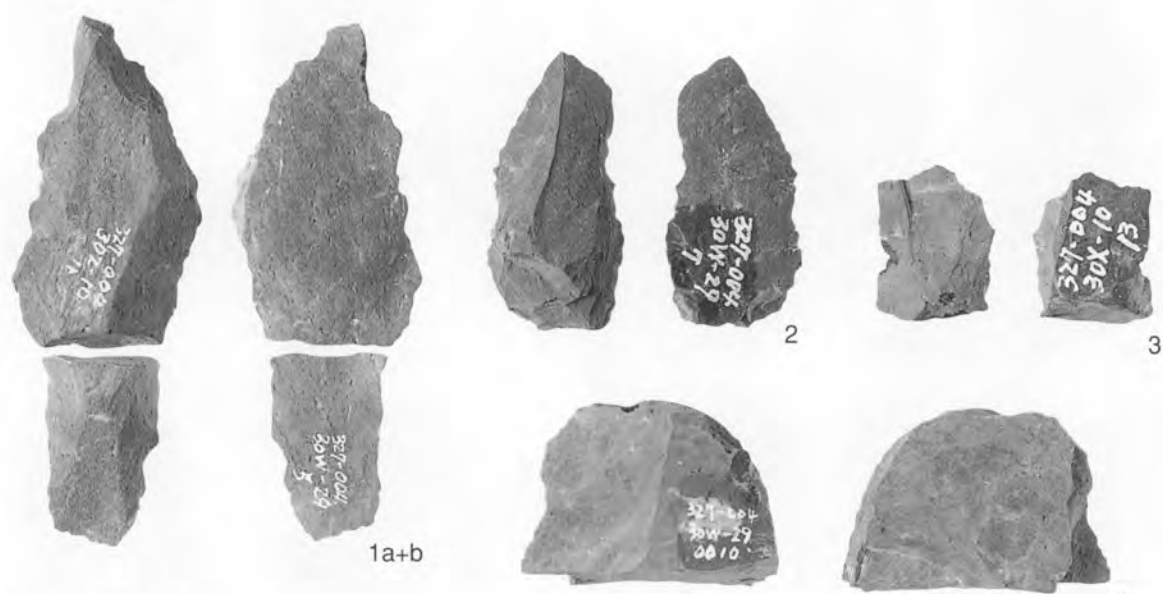


第4ブロック1

松崎VI遺跡



第4ブロック2



第5ブロック1

松崎VI遺跡



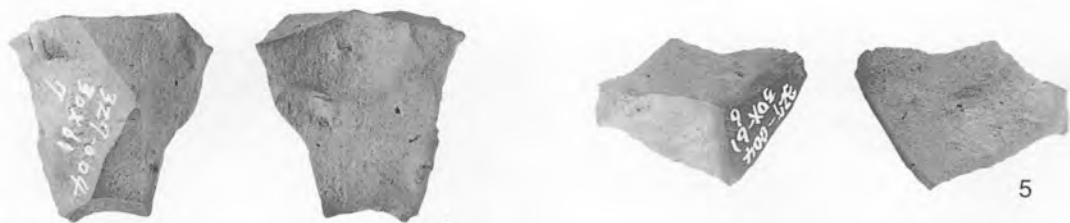
第5ブロック2



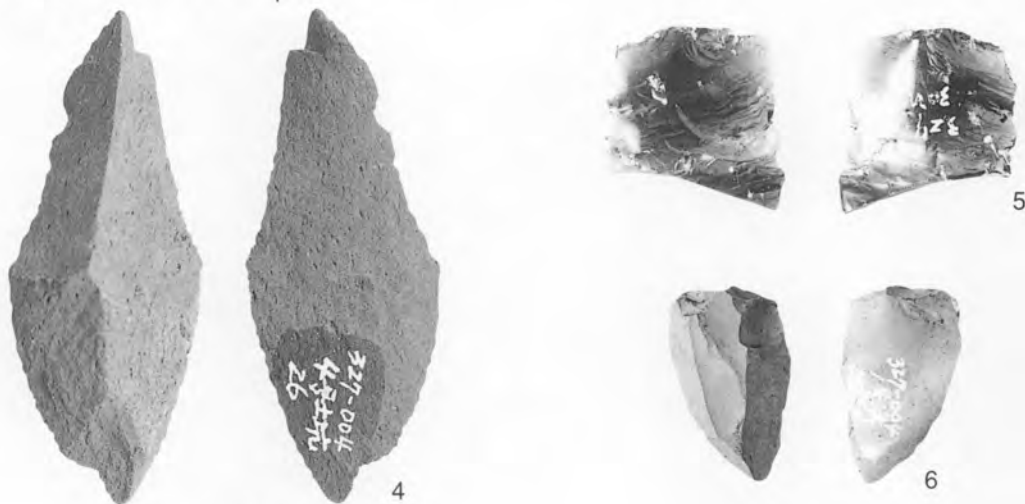
第6ブロック1



松崎VI遺跡



第6ブロック2



単独出土石器

松崎VI遺跡



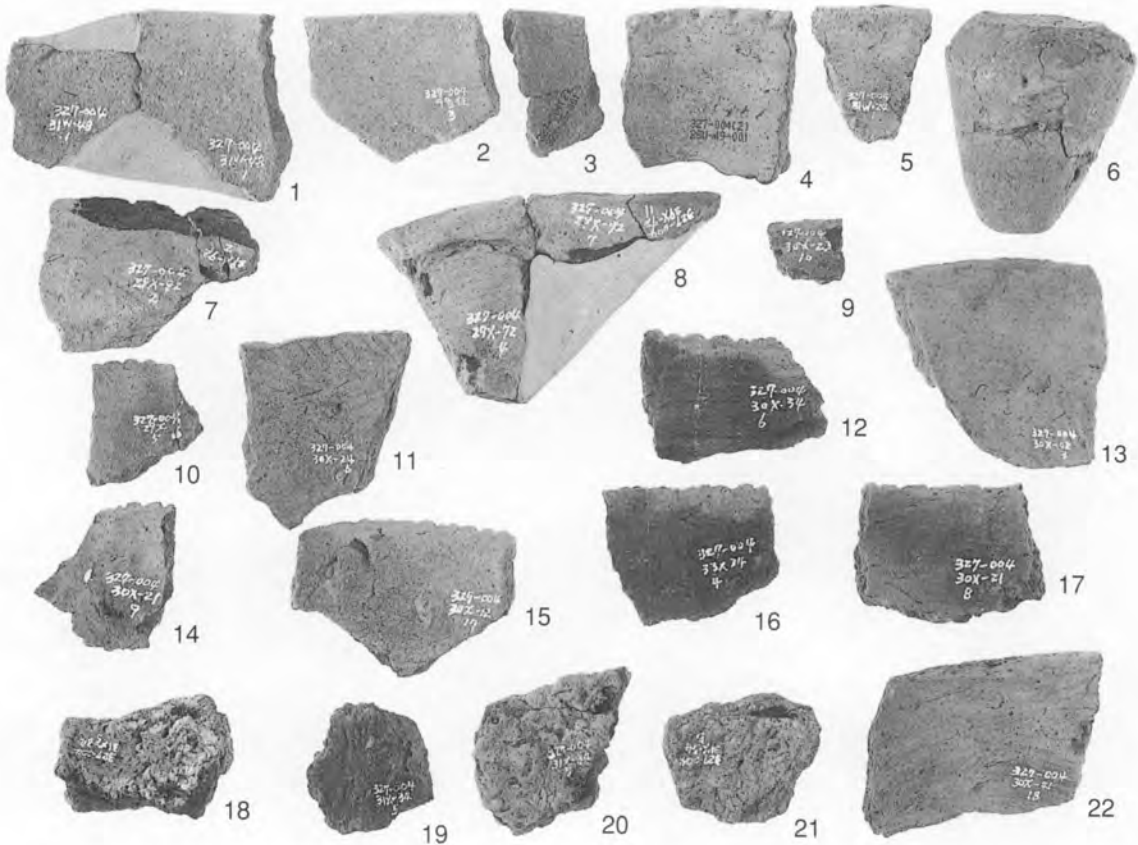
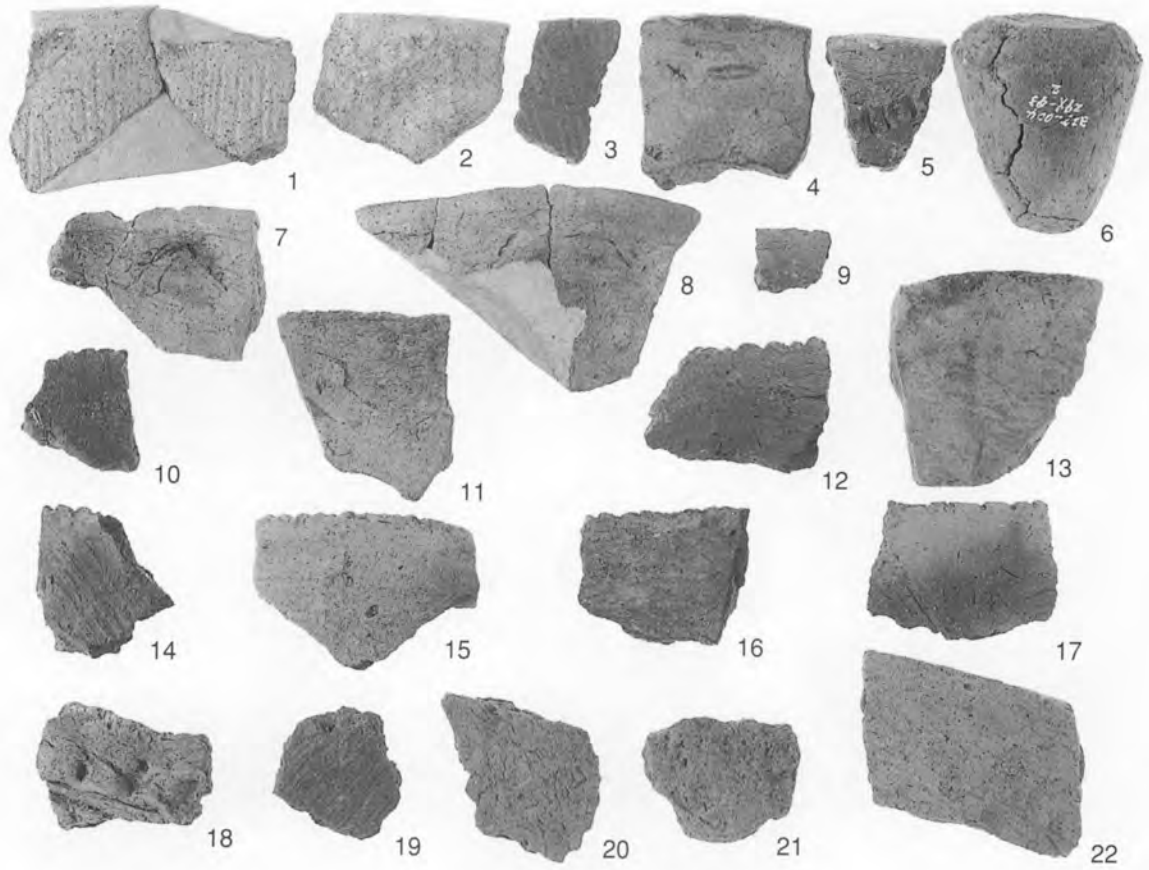
SX001



SK002

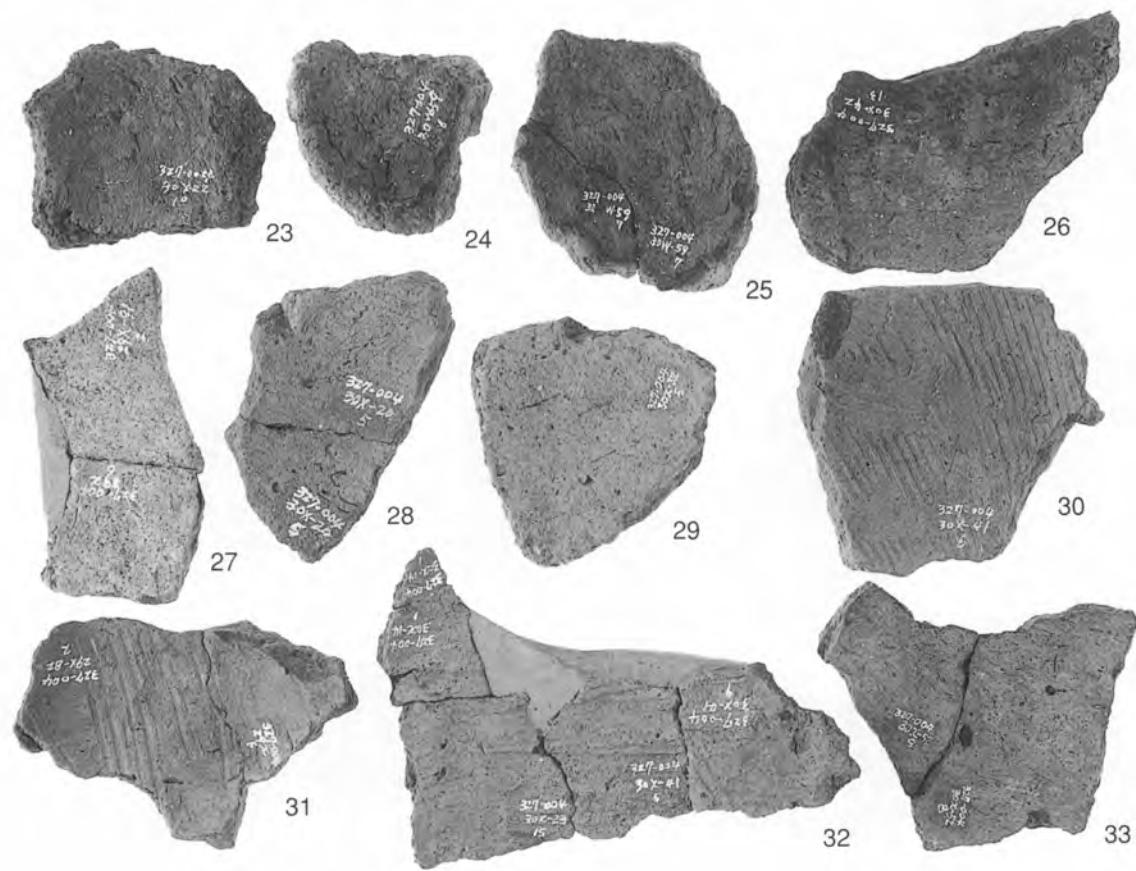
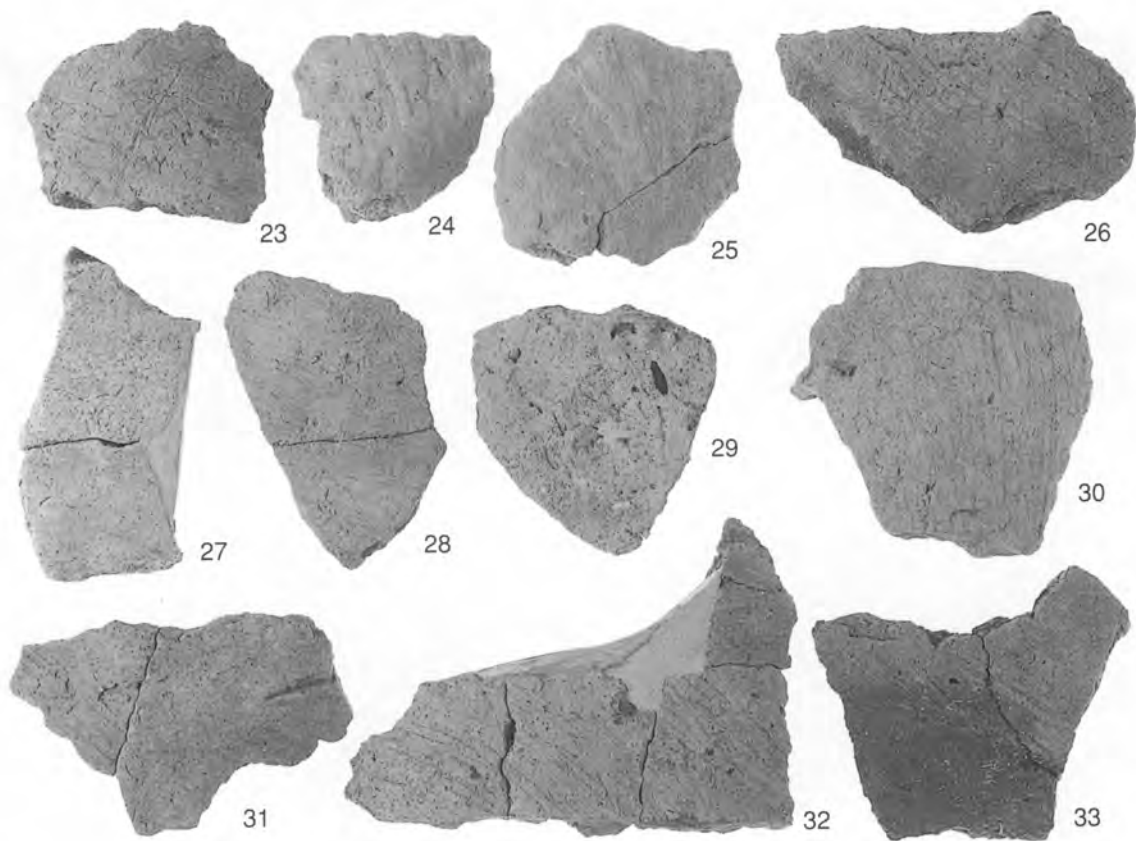
縄文時代遺構内出土遺物

松崎VI遺跡



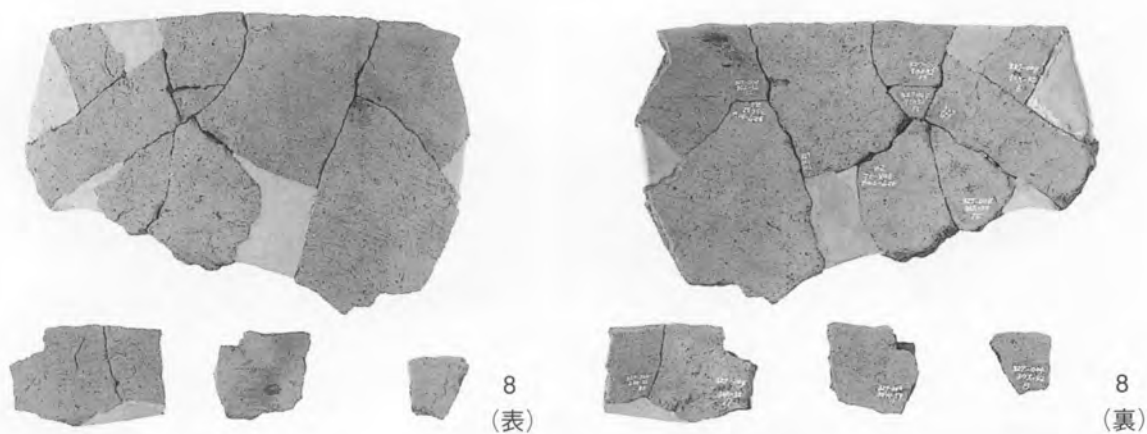
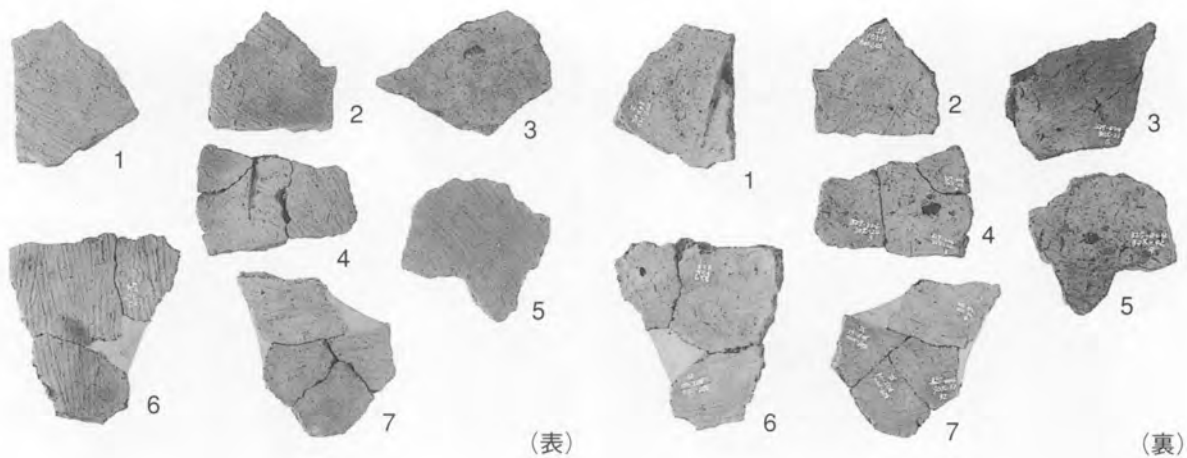
遺構外出土縄文土器 (1-1) ※上段：外面、下段：内面

松崎VI遺跡



遺構外出土縄文土器（1-2）※上段：外面、下段：内面

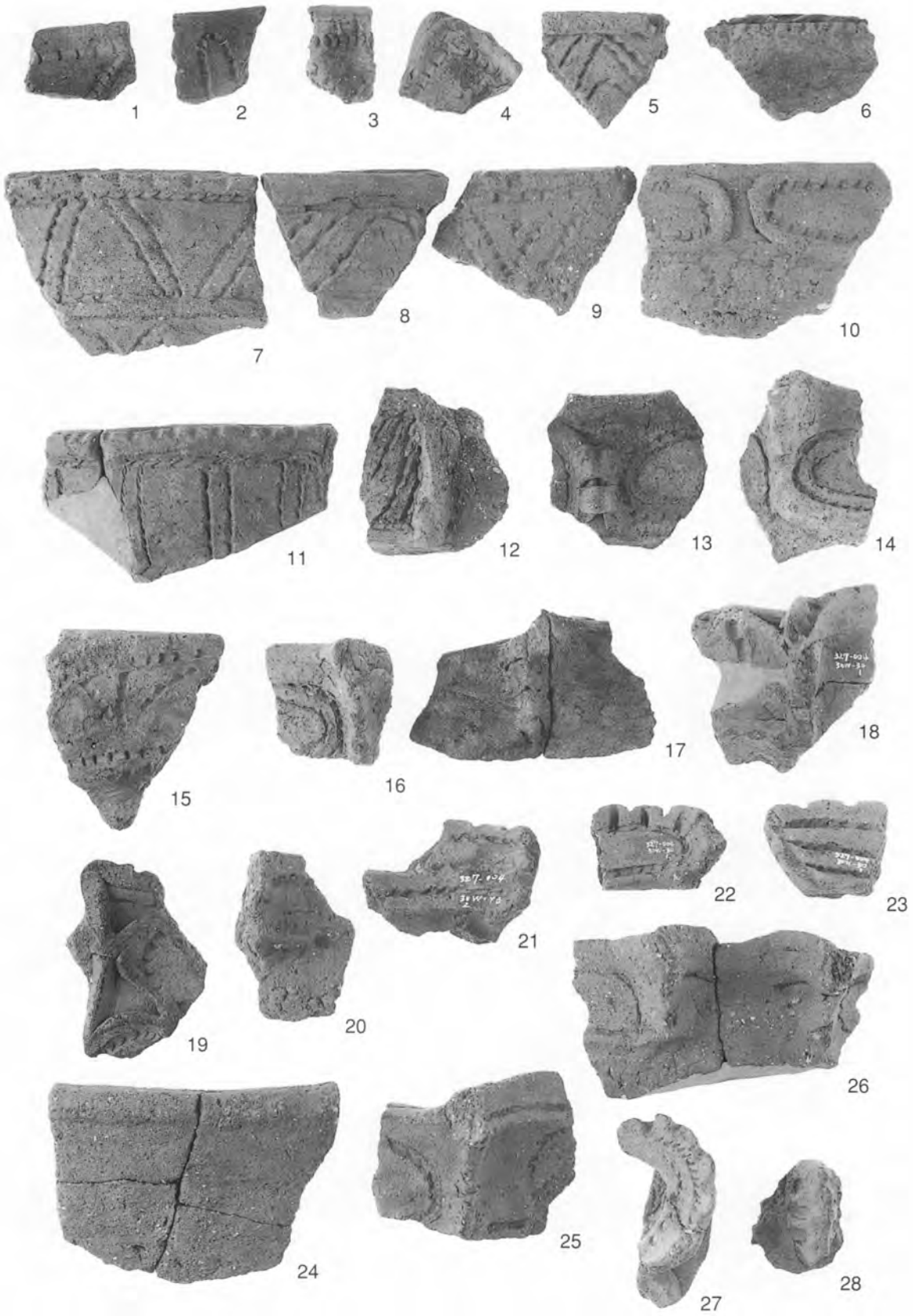
松崎VI遺跡



遺構外出土縄文土器 (2)

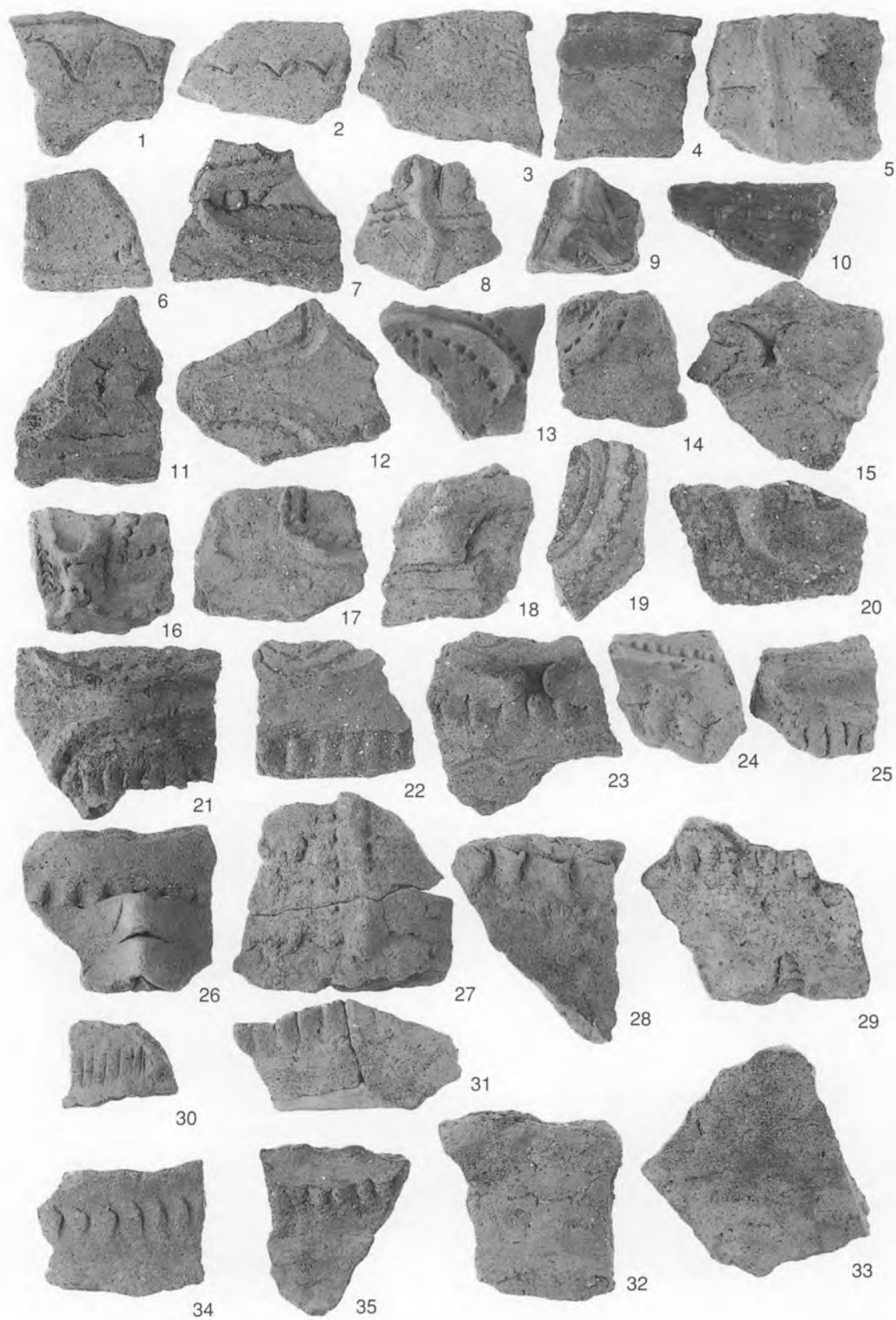


松崎VI遺跡



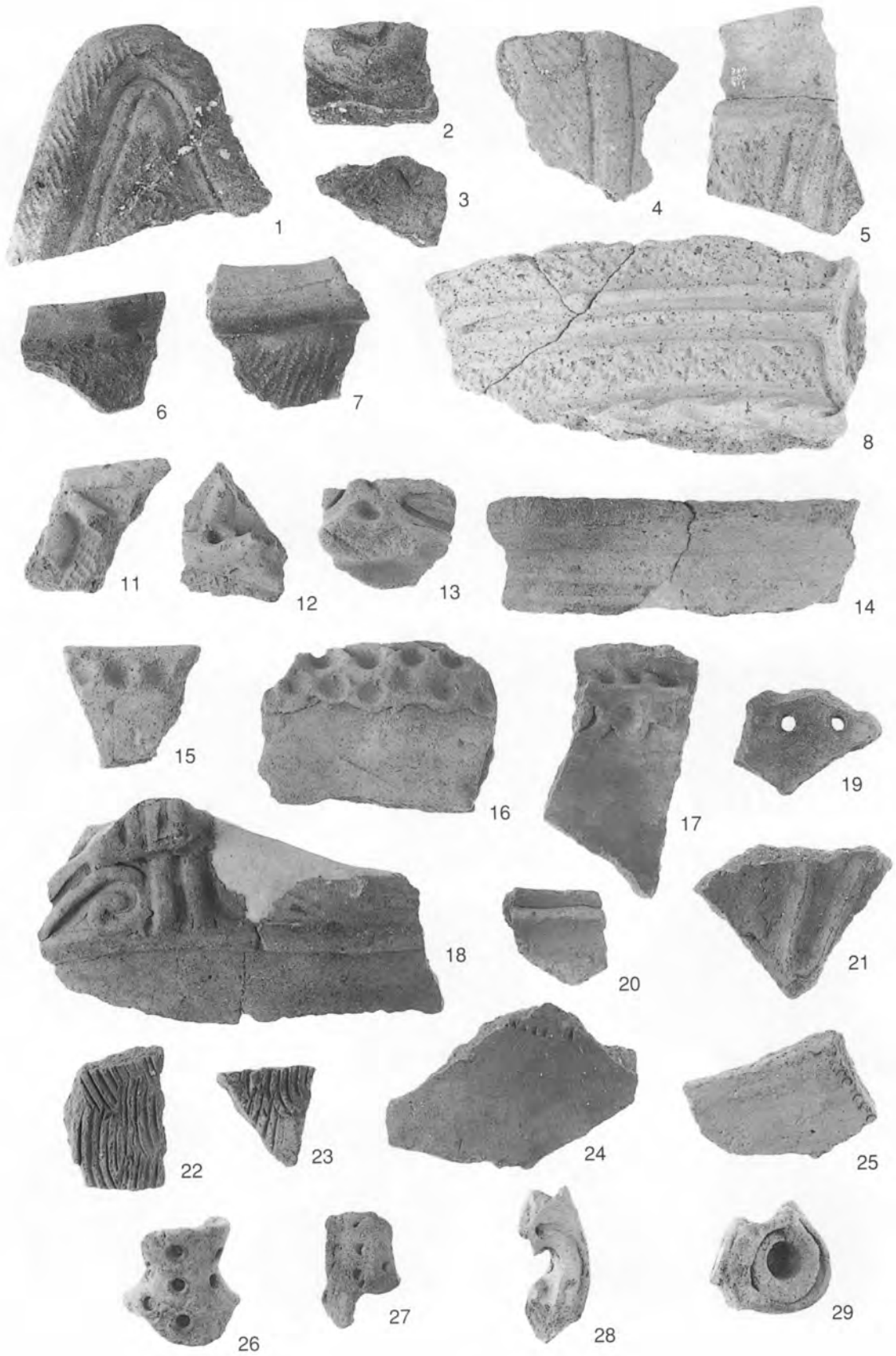
遺構外出土縄文土器 (3)

松崎VI遺跡



遺構外出土繩文土器 (4)

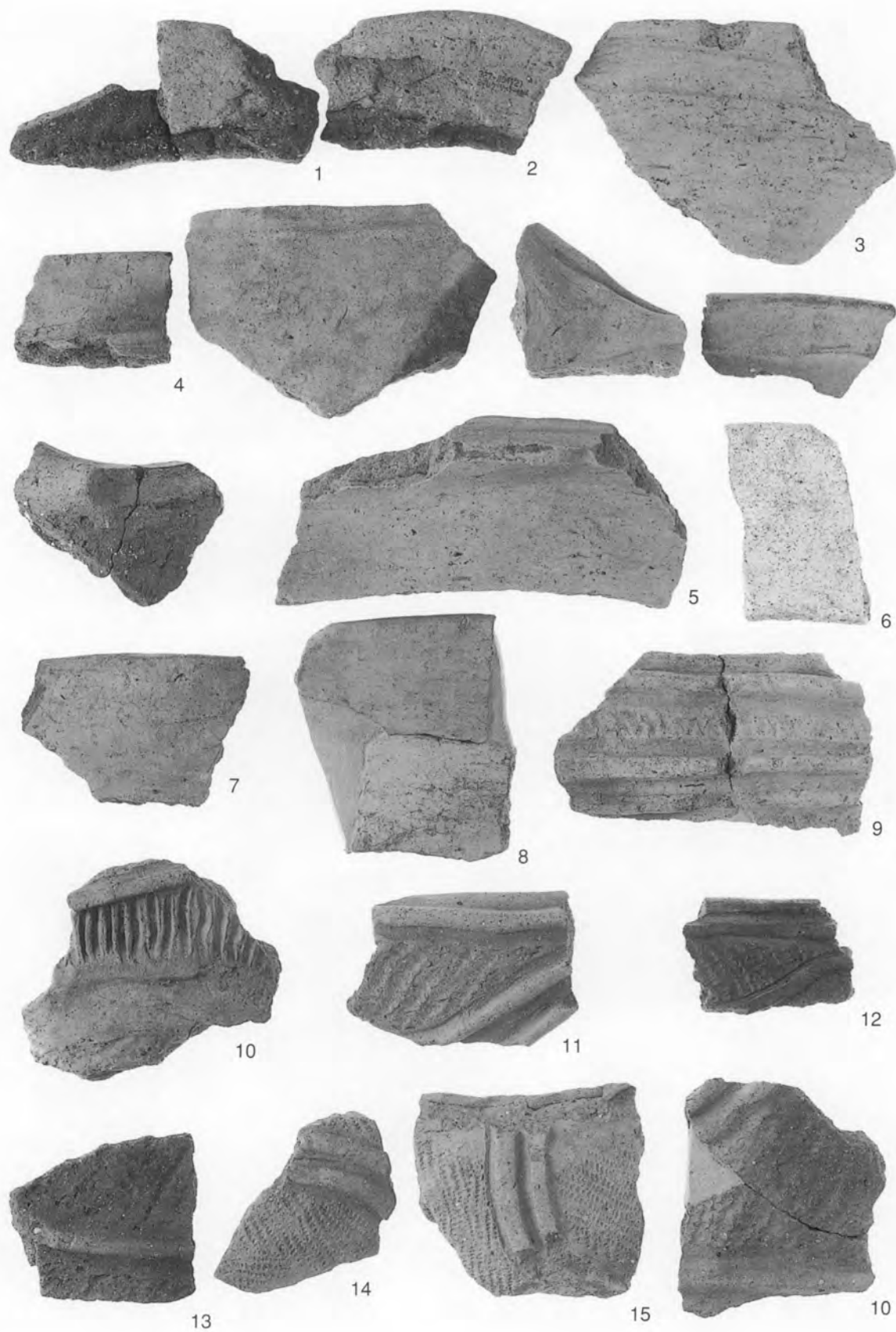
松崎VI遺跡



遺構外出土縄文土器（5）

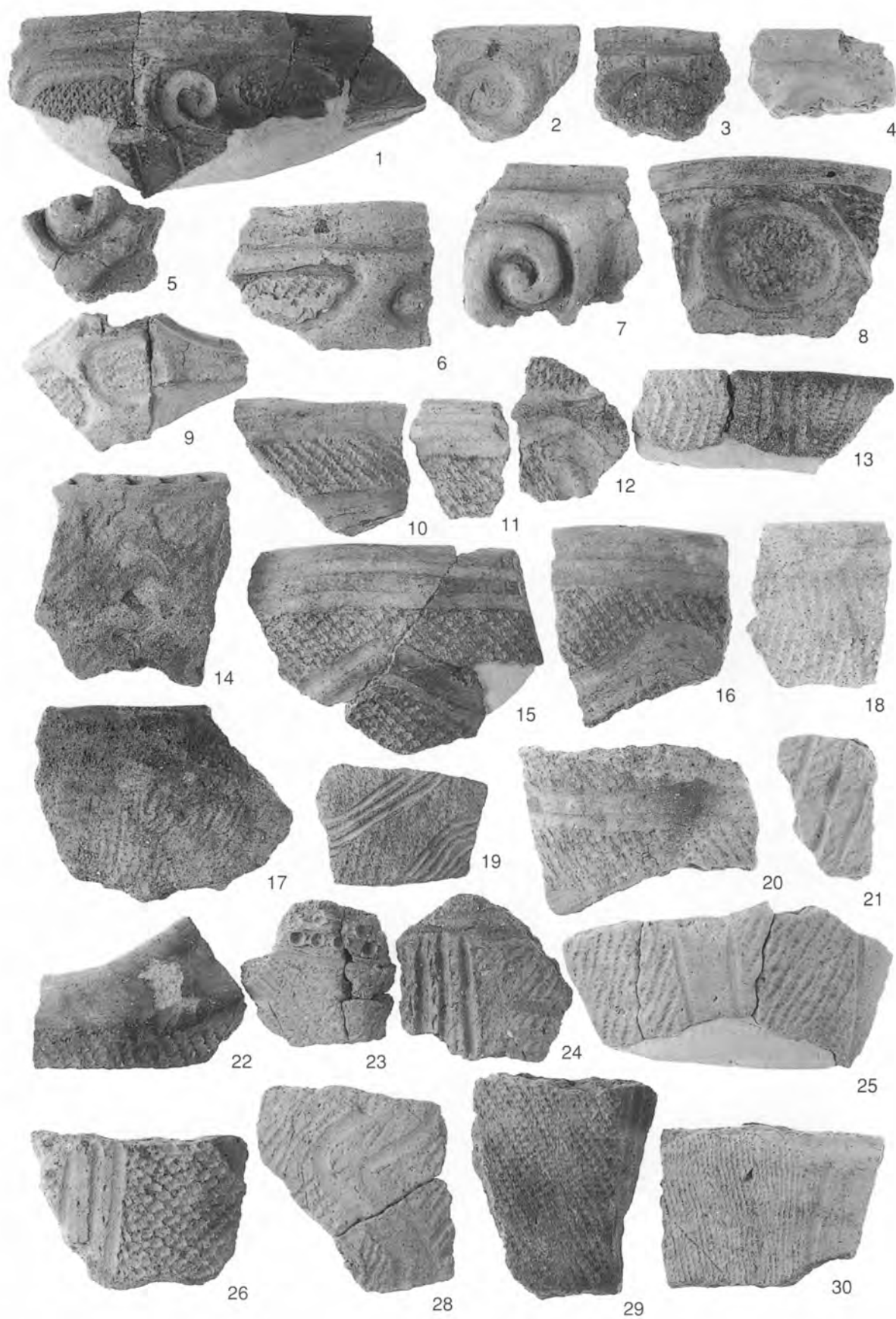


松崎VI遺跡



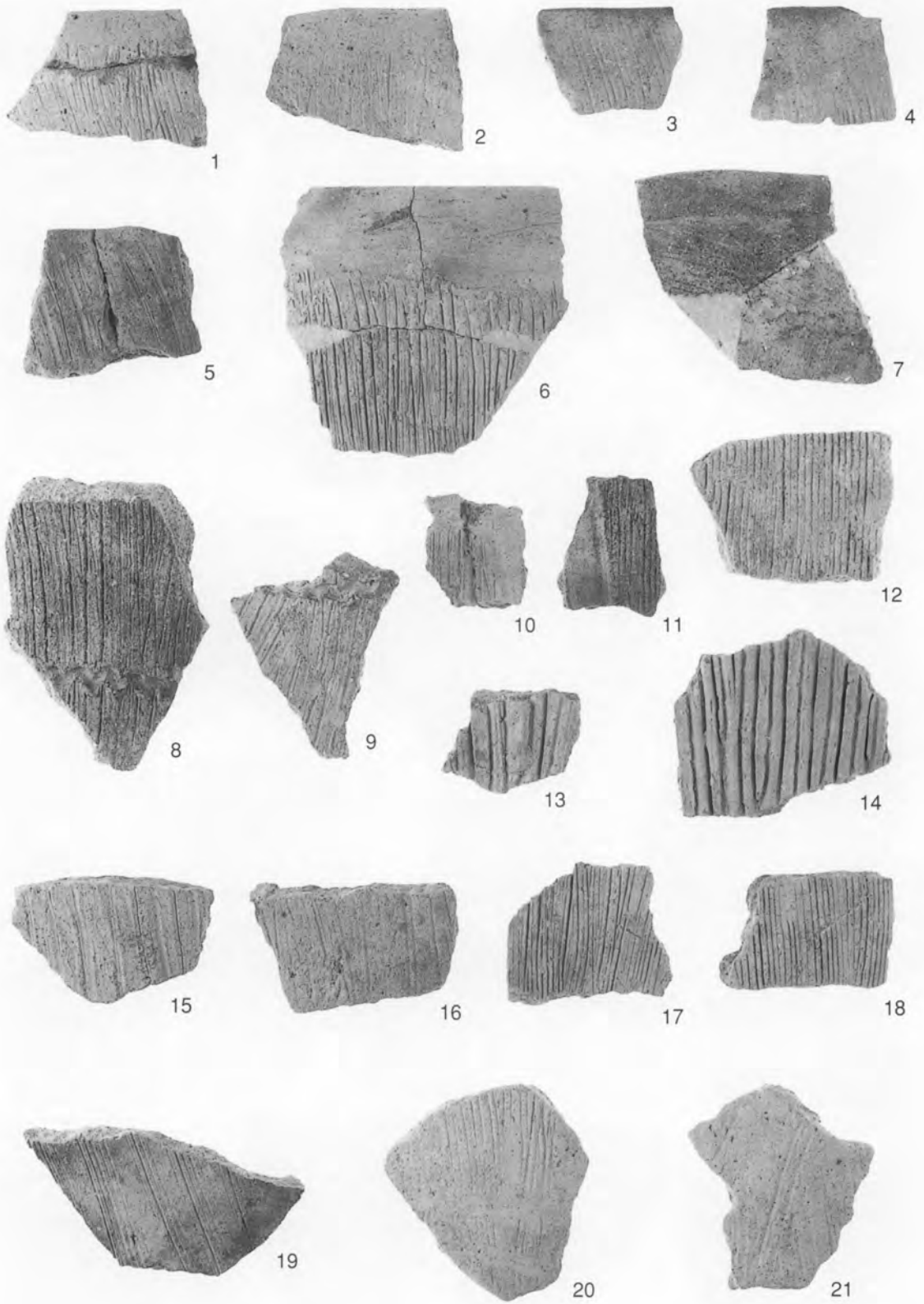
遺構外出土縄文土器 (6)

松崎Ⅶ遺跡



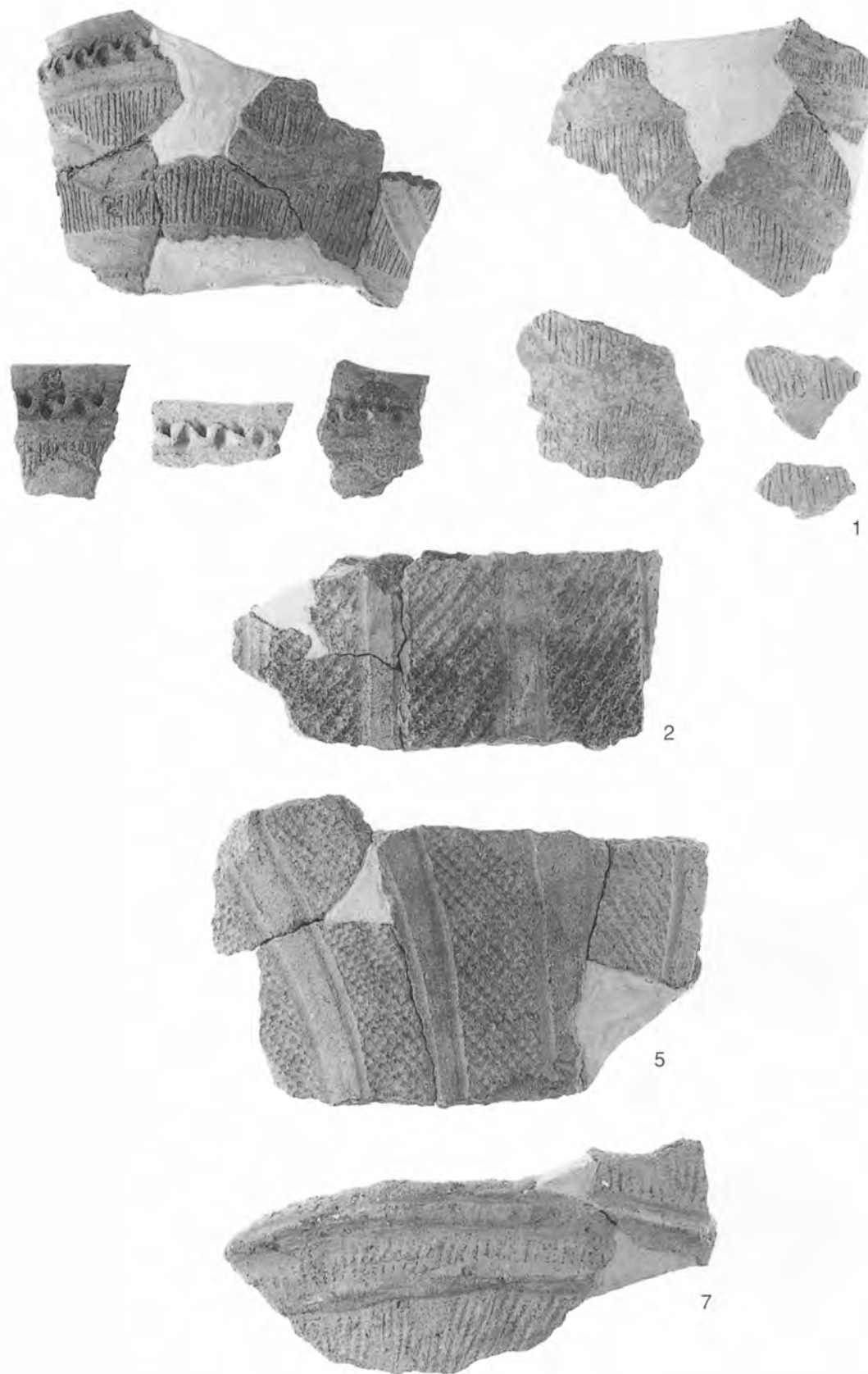
遺構外出土縄文土器（7）

松崎VI遺跡



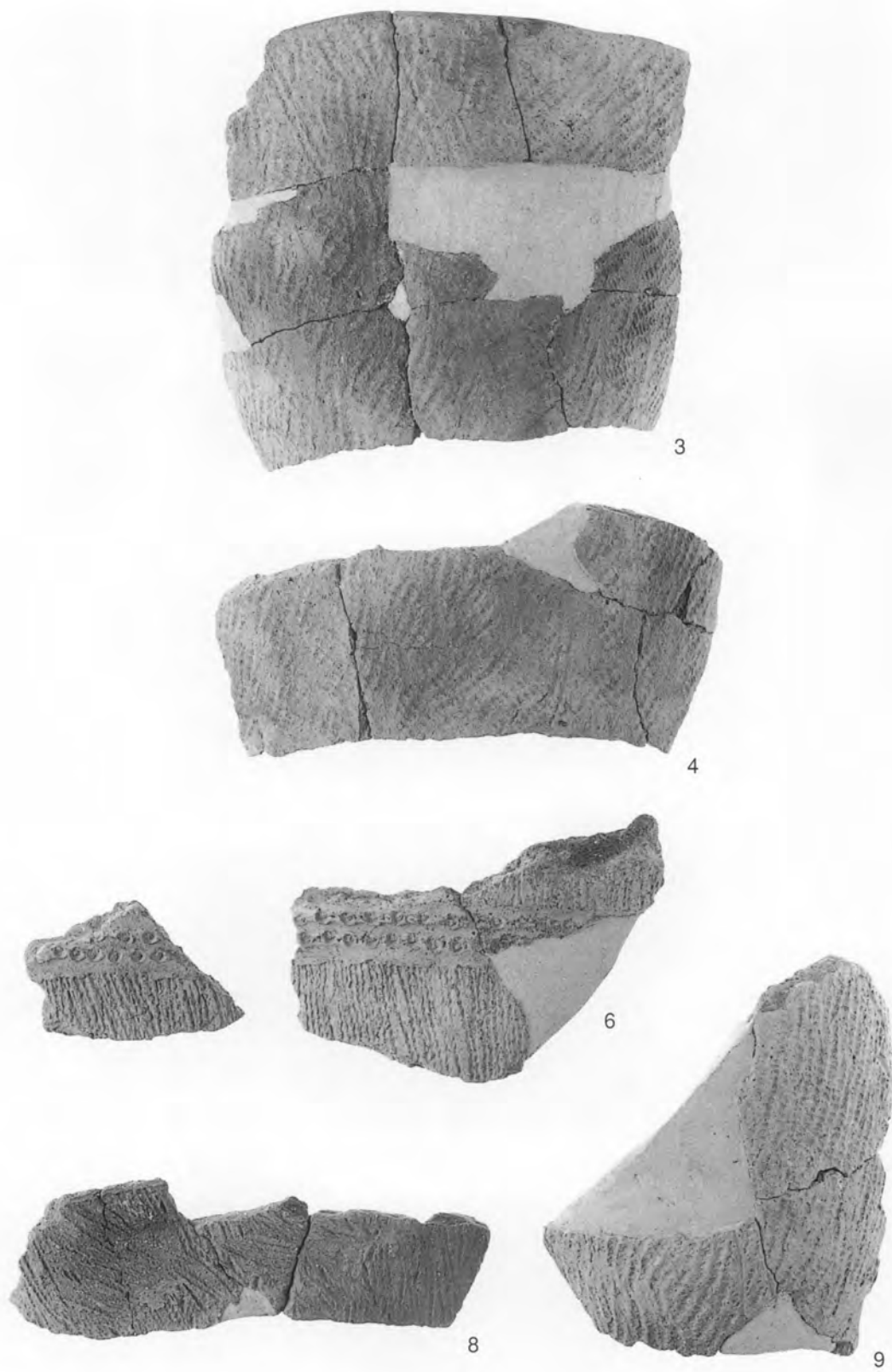
遺構外出土縄文土器 (8)

松崎VI遺跡



遺構外出土縄文土器（9-1）

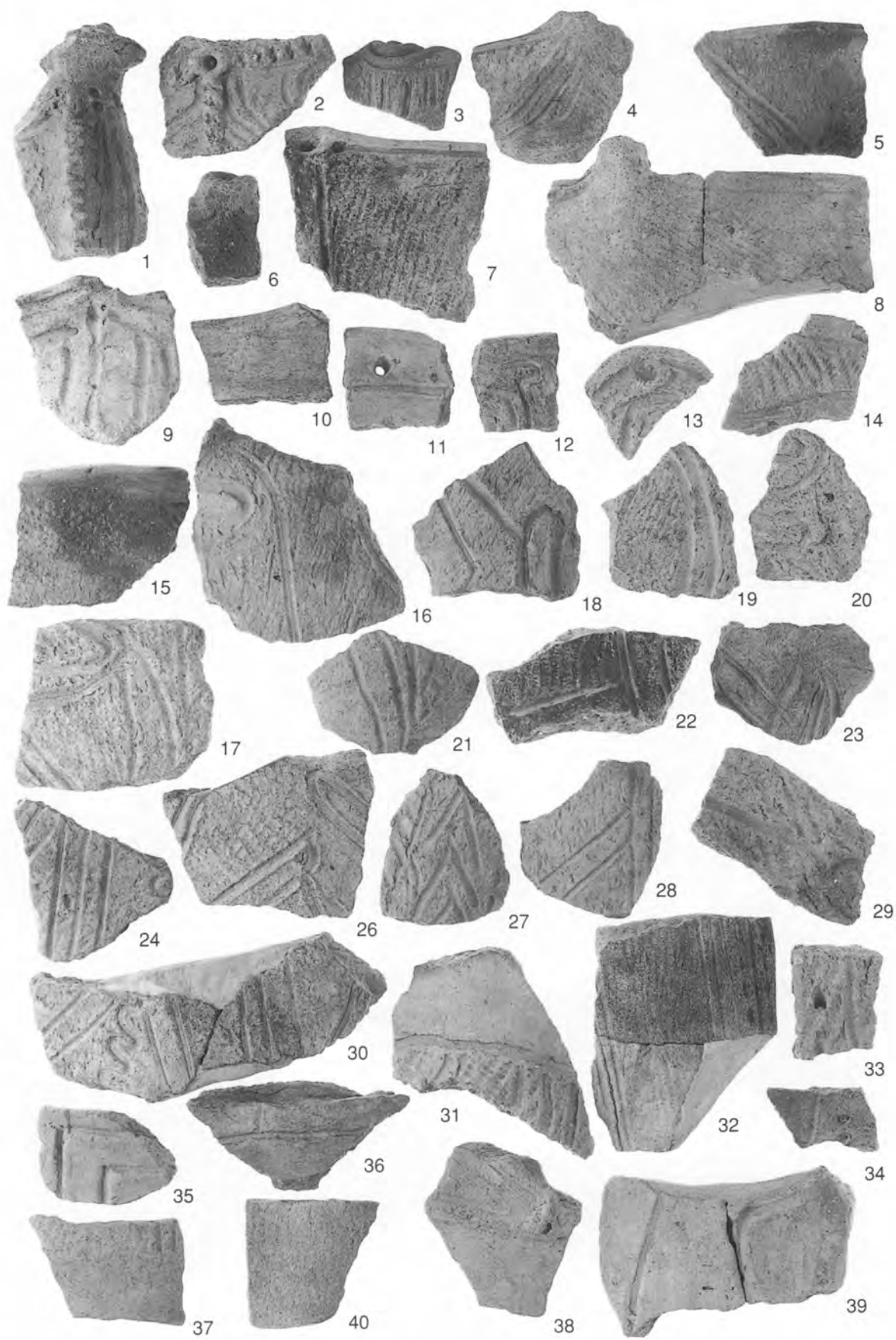
松崎VI遺跡



遺構外出土縄文土器（9-2）

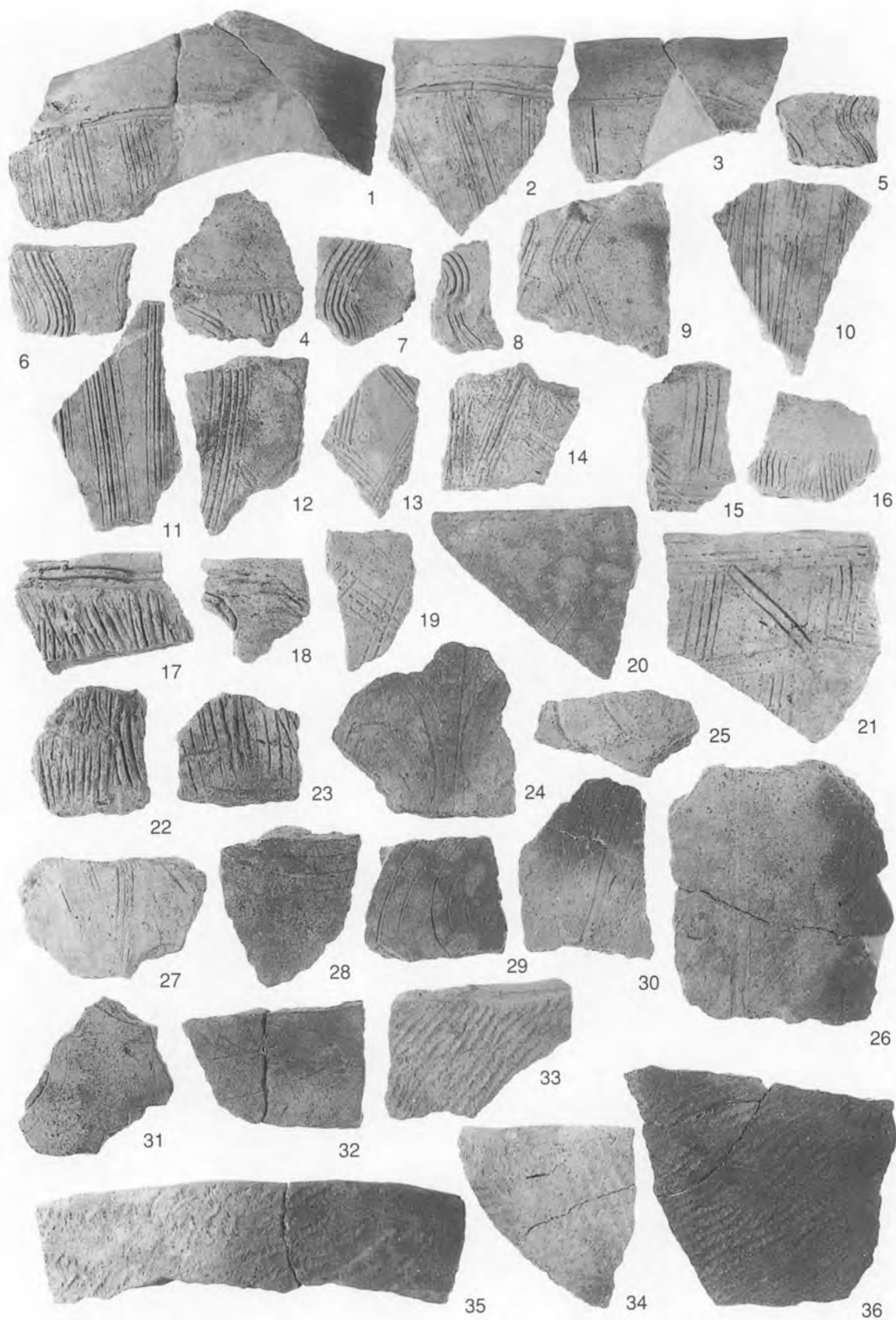


松崎VI遺跡



遺構外出土縄文土器 (10)

松崎VI遺跡



遺構外出土縄文土器 (11)



松崎VI遺跡



10-41



13-1



13-2

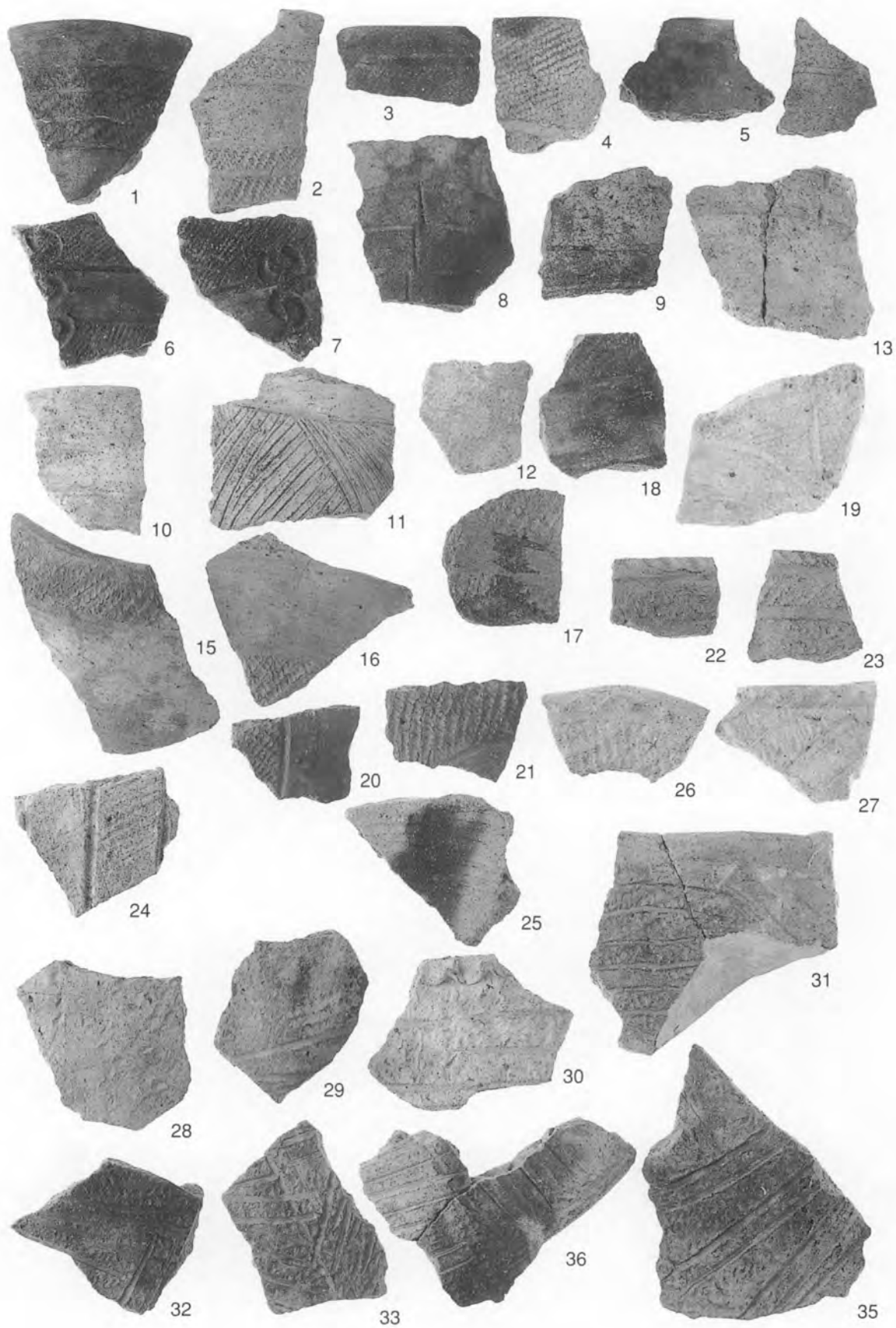


13-3



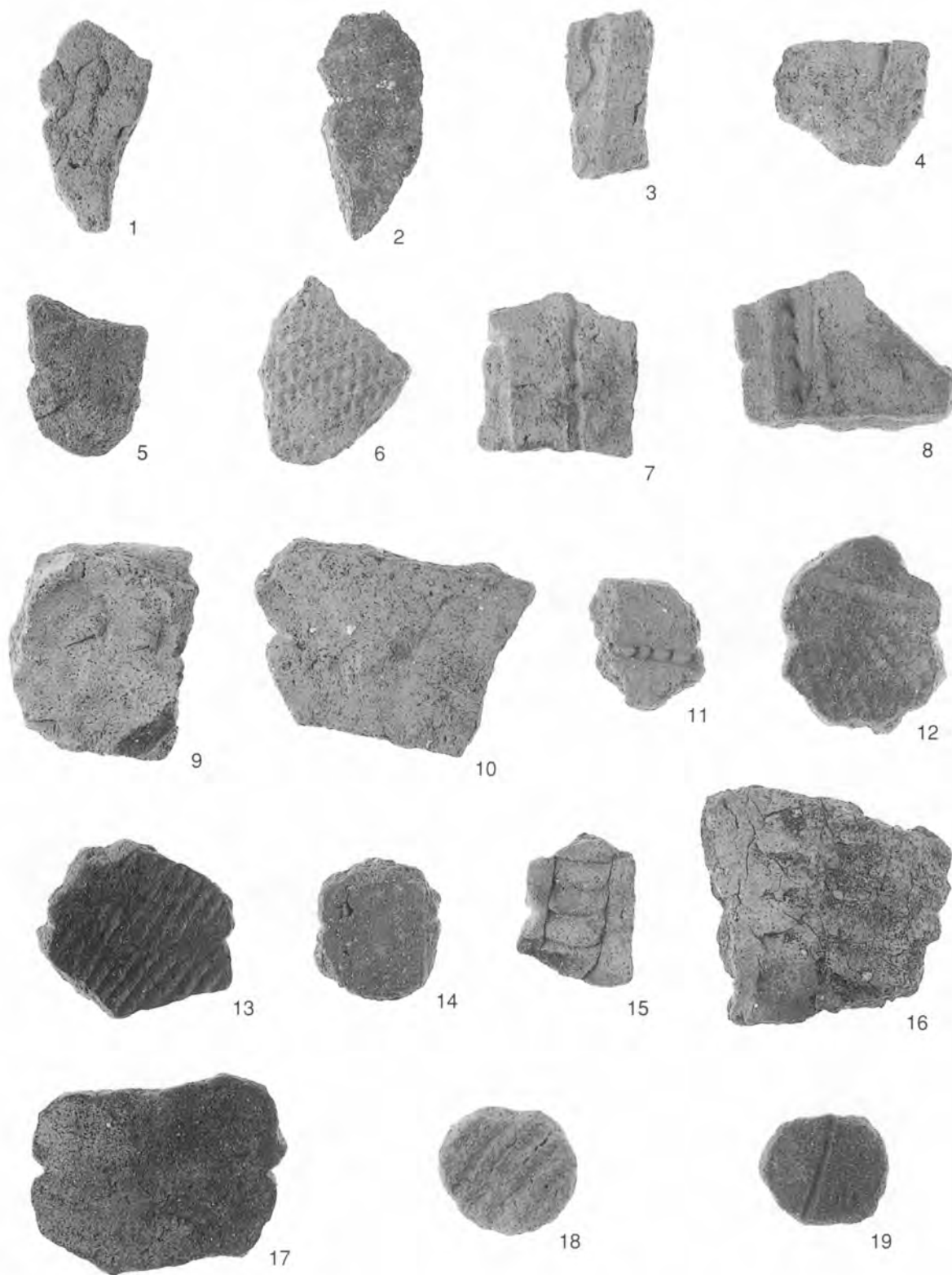
遺構外出土縄文土器 (8・10・12・13)

松崎VI遺跡



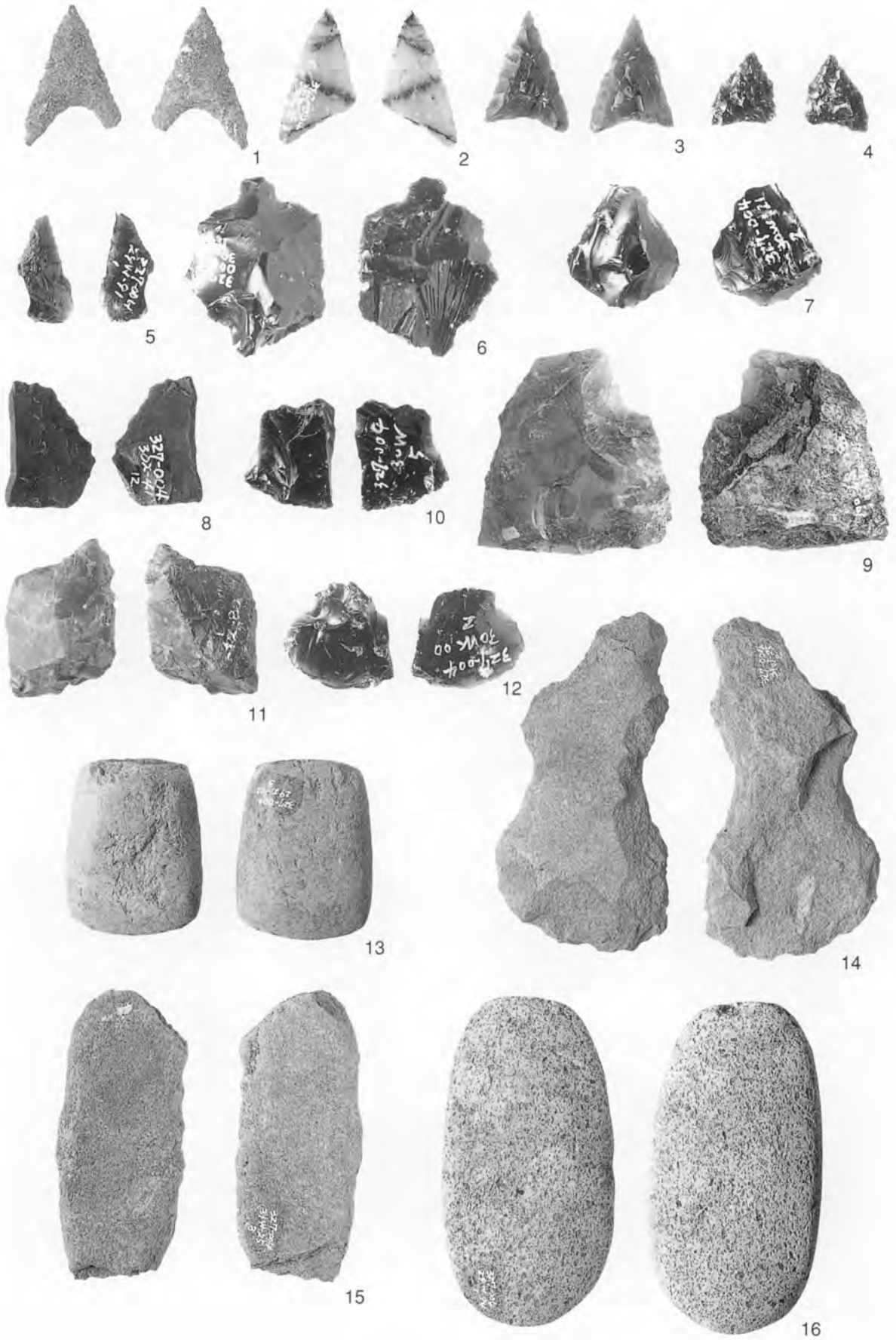
遺構外出土繩文土器 (14)

松崎VI遺跡



遺構外出土製品

松崎VI遺跡



縄文時代石器 (1)

松崎VI遺跡



17



18



19



21



22

縄文時代石器 (2)



4

SK004



1

石製品



2

(遺構外)

松崎VI遺跡



SI001-2



SI002-18



SI003-12



SI002-14



SI002-12



SI002-1



SI002-15表



SI002-15裏



SI002-9



SI002-6



松崎VI遺跡



SI002-17



SI002-8



SI002-16



SI002-10



SI002-11



SI002-5



SI002-4



SI002-3



SI002-2



SI002-19



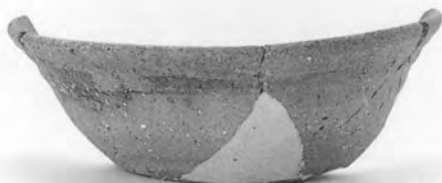
松崎VI遺跡



SI003-6



SI005-2



SI003-3



SI005-1



SI003-4



SI007-1



SI004-1



SI007-2



SI004-4



SI007-4



SI004-5



SI007-3

松崎VI遺跡



SI006-11



SI006-1



SI006-6



SI006-3



SI006-5



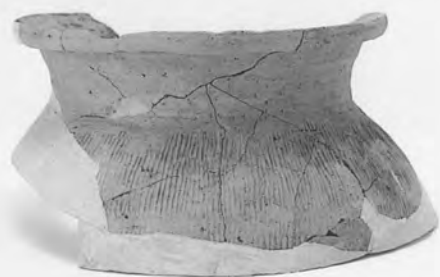
SI006-7



SI006-4



SI006-8



SI006-14



SI006-9



奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器（4）

松崎VI遺跡



SI006-13



SI006-12



SI008-18



SI008-12



SI008-13



SI008-20



SI008-21



SI008-11

松崎VI遺跡



SI008-10



SI008-6



SI008-3



SI008-2



SI008-3



SI008-8



SI008-5



SI008-9



SI008-7



SI008-1



SI008-17



SI008-4



SI008-23

松崎VI遺跡



SI009-2



SI010-5



SI009-3



SI010-2



SI009-1



SI010-3



SI009-6



SI010-4



SI009-7



SI010-7



SI009-5



SK005-3



SK003-1

松崎VI遺跡



SI011-1



SI011-2



SI011-3



SI011-4



SI004-3



SI008-19

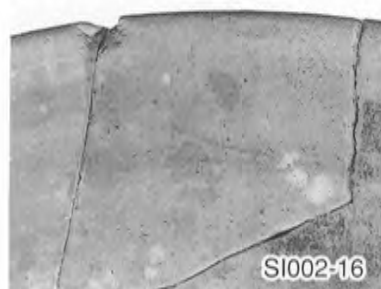


SI006-2

奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器 (8)



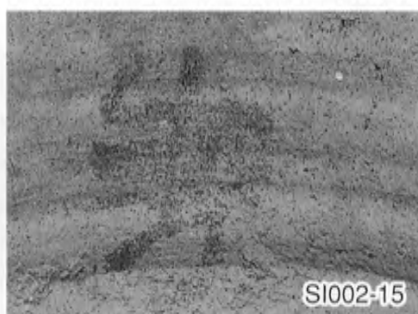
松崎VI遺跡



SI002-16



SI002-12



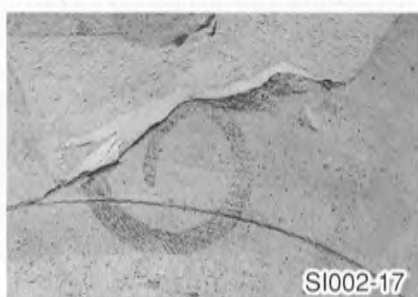
SI002-15



SI002-14



SI002-13



SI002-17



SI006-14



SI006-14



SI006-8



SI004-3



SI008-17



SI006-10



SI006-11

奈良・平安時代墨書土器



調査前状況



上層確認調査状況①



上層確認調査状況②



確認トレンチ遺物出土状況





上層拡張区（17Y付近）状況（南より）



遺構分布状況（17Y付近）（南西より）



SK001A・B（西より）



SK001C（東より）



SK002A (南西より)



SK002B (東より)



SK003 (南より)



SK005 (西より)



下層確認調査状況（南より）



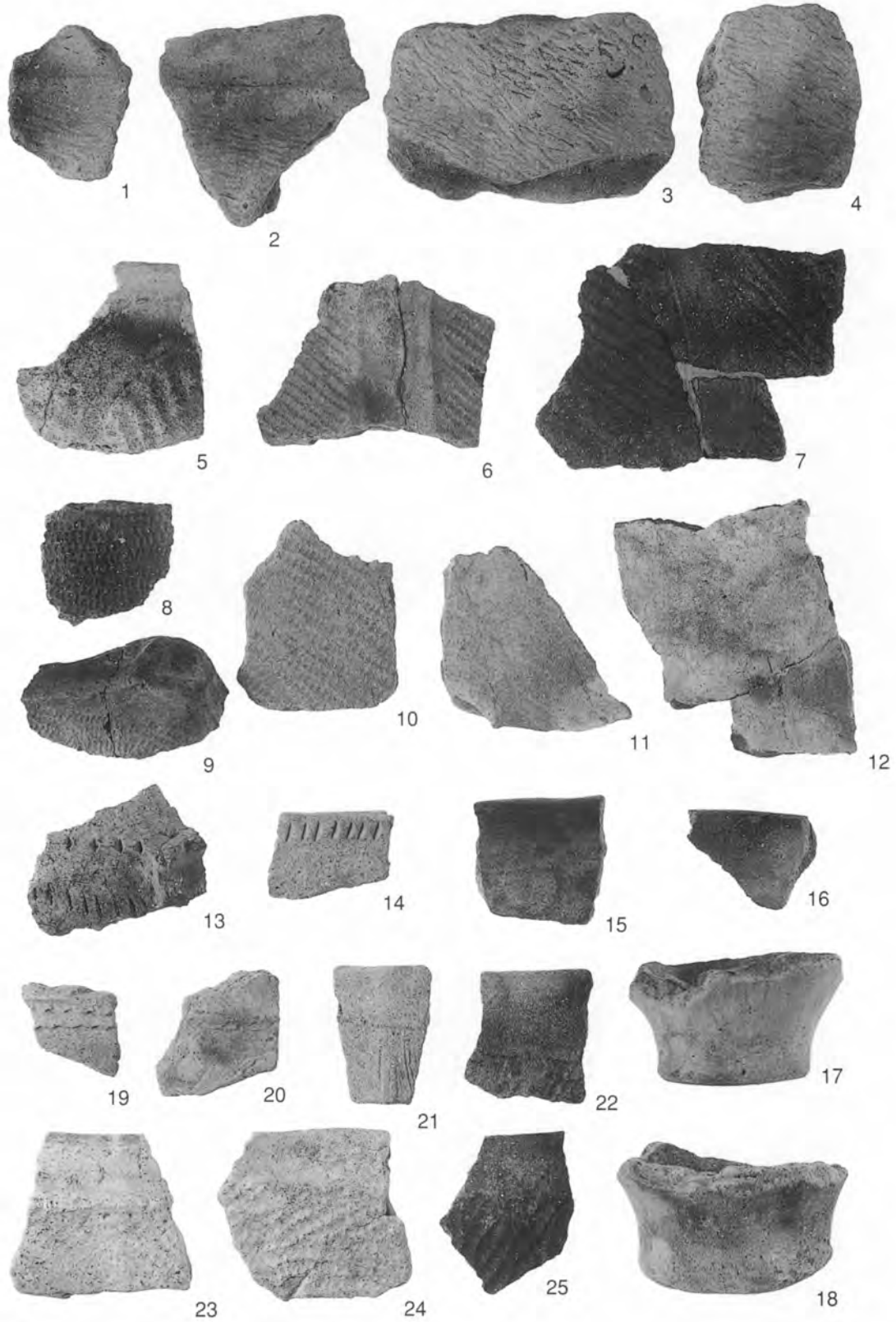
下層断面（左：17X-24東壁，右：17X-20東壁）



埋め戻し状況（南東より）



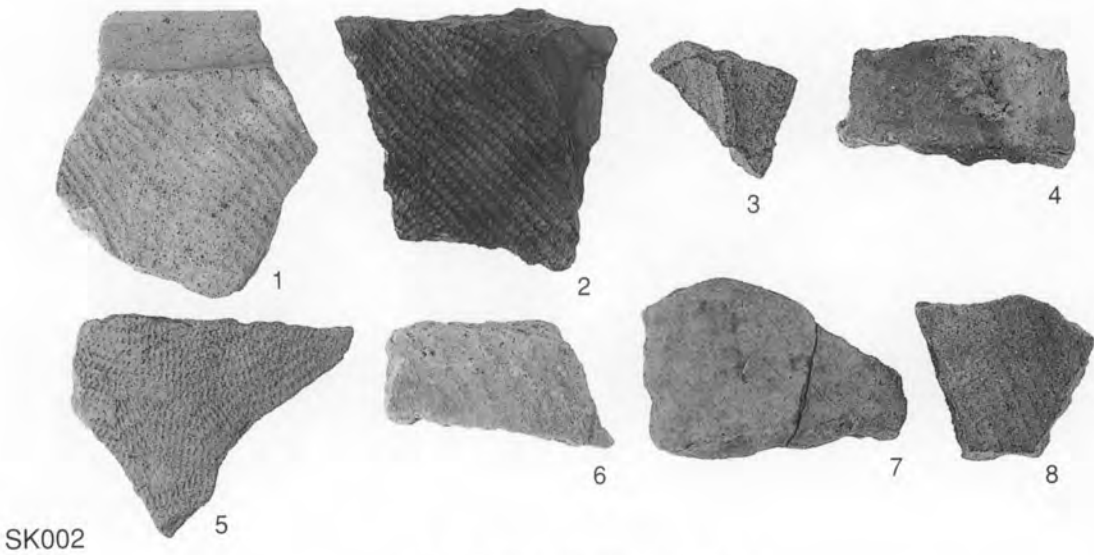
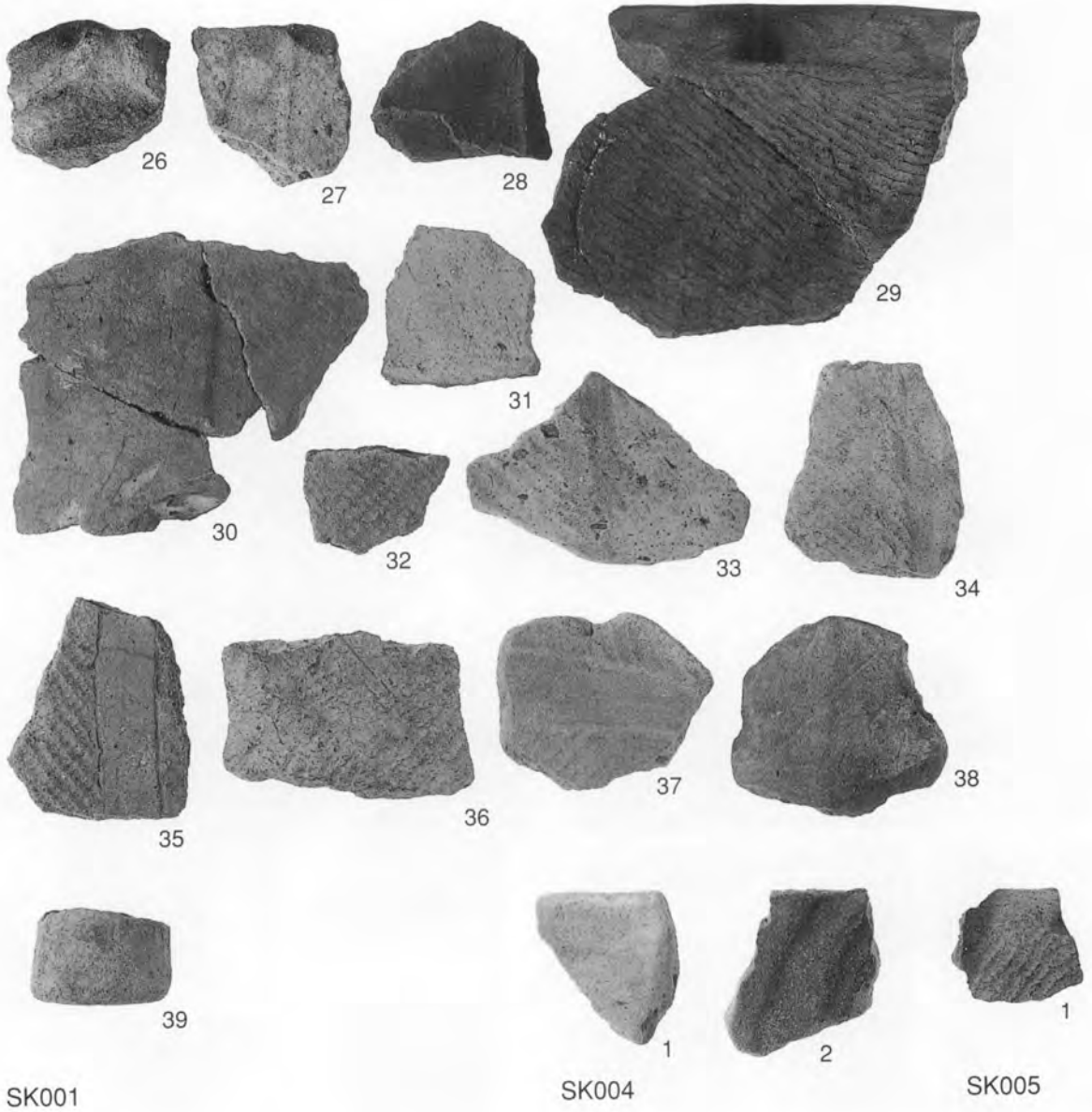
松崎VI遺跡



SK001

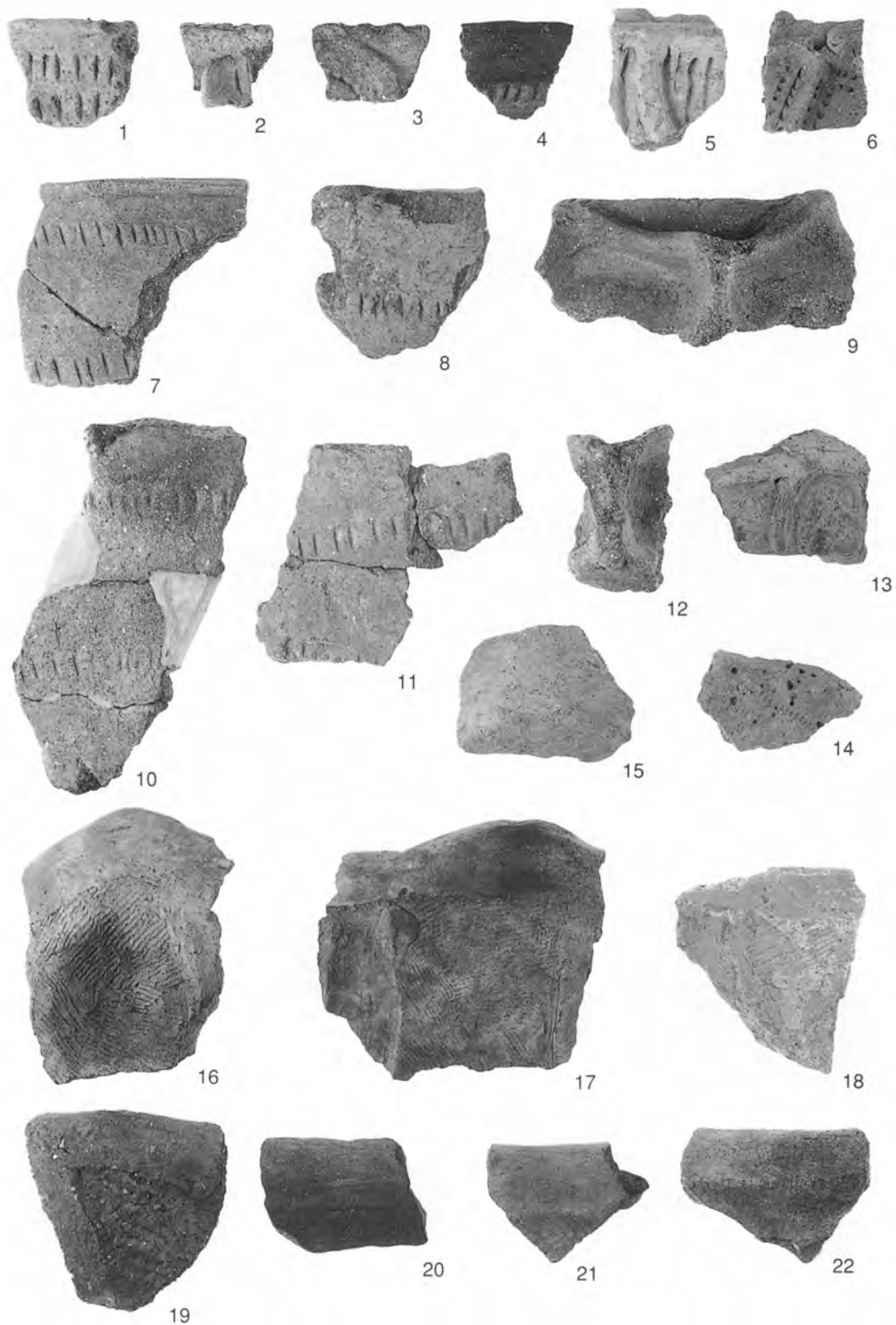
縄文時代遺構内出土遺物 (1)

松崎Ⅶ遺跡



縄文時代遺構内出土遺物(2)

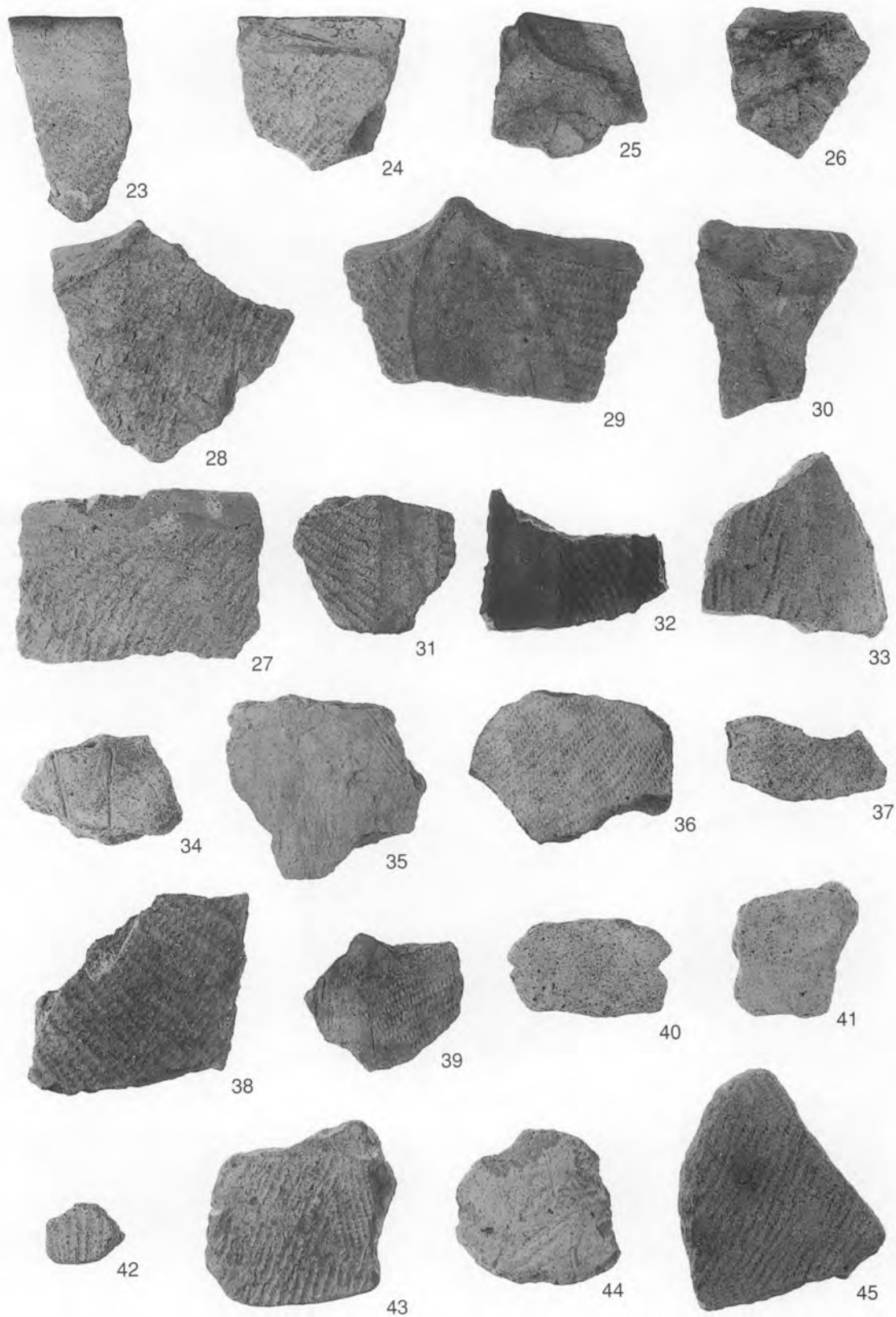
松崎Ⅶ遺跡



遺構外出土縄文土器（1）

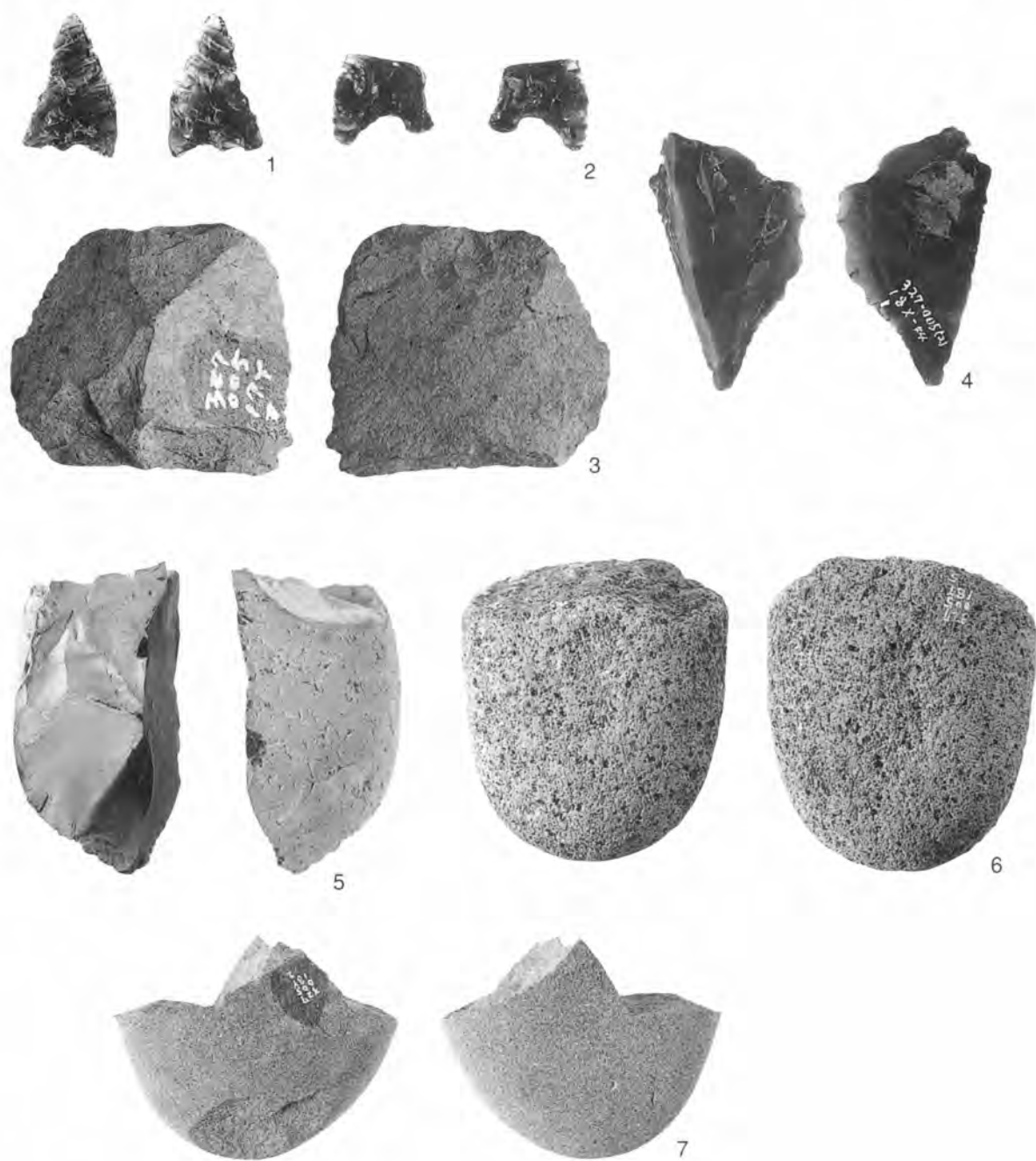


松崎Ⅶ遺跡



遺構外出土縄文土器(2)・土製品

松崎Ⅶ遺跡



縄文時代石器

報告書抄録

ふりがな	まつぎきちくないりくこうぎょうようちぞうせいせいびじぎょうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ								
書名	松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書 3								
副書名	印西市松崎VI遺跡・松崎VII遺跡								
巻次	3								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第487集								
編著者名	小笠原永隆・矢本節朗								
編集機関	財団法人千葉県文化財センター								
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811								
発行年月日	西暦 2004年 3月25日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
まつぎ 松崎VI	ちばけんいんざいし 千葉県印西市 まつぎあざごうや 松崎字高野 1189-3 ほか	12	327	004	35度 46分 20秒	140度 09分 03秒	19930719～ 19930831 19950105～ 19950329 19981001～ 19990326	17,000㎡	松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴う埋蔵文化財調査
まつぎ 松崎VII	ちばけんいんざいし 千葉県印西市 ぞうふけあざまつぎまえ 草深字松崎前 331-2 ほか	12	327	005	35度 46分 41秒	140度 09分 07秒	19930701～ 19930726 20020301～ 20020331	8,996㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
松崎VI	包蔵地 集落跡	旧石器時代	石器集中地点6か所		ナイフ形石器 荒屋型彫器		旧石器時代については2枚の文化層(IV・V層及びⅢ層上面)が確認された。縄文時代では、中期の土器が比較的まとまって出土している。奈良・平安時代竪穴住居跡は、いずれも9世紀代のものと考えられる。		
		縄文時代 (中期・後期)	竪穴状遺構	1基	縄文土器(阿玉台式・加曾利E式・堀之内1式・加曾利B式)石器(石鎌・楔形石器・磨製石斧・打製石斧・磨石類・敲石・石核・剥片)				
		奈良・平安時代	土坑	2基	土師器・須恵器				
		中・近世	地下式坑	2基	常滑産甕破片・土師器・砥石				
			土坑	5基					
			井戸跡	1基					
松崎VII	包蔵地	縄文時代 (中期)	竪穴状遺構	1基	縄文土器(阿玉台式・加曾利E式)石器(石鎌・楔形石器・石核・磨石類・剥片)		縄文時代中期の遺構及び遺物がまとまりを持って確認された。キャンプサイト的な生活痕跡と考えられる。		
			土坑	7基					

千葉県文化財センター調査報告第487集

## 松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書 3

—印西市松崎VI遺跡・松崎VII遺跡—

---

平成16年3月25日発行

編	集	財団法人	千葉県文化財センター
発	行	千 葉 県	企 業 庁
			千葉県中央区市場町1-1
		財団法人	千葉県文化財センター
			四街道市鹿渡809番地2
印	刷	株式会社	富 士 印 刷
			千葉県稲毛区轟町3-6-18

---